

博士論文

夏目漱石後期文学の展開

―「思ひ出す事など」、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』における「不定」の軌跡―

二〇一六年三月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

深町 博史

立命館大学審査博士論文

夏目漱石後期文学の展開

—「思ひ出す事など」、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』における「不定」の軌跡—

Development of Natsume Soseki's latter period literature

-Unsettled writings in *Omoidasukotonado*, *Higan sugimade*, *Kojin*, *Kokoro* and *Garasudo no naka*

2016年3月

March 2016

立命館大学大学院 文学研究科 人文学専攻 博士課程後期課程

Doctoral Program in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

深町 博史

FUKAMACHI Hiroshi

研究指導教員：瀧本 和成 教授

Supervisor : Professor TAKIMOTO Kazunari

〈目次〉

序章

.....

第一章 「思ひ出す事など」

.....

第一節 病室での語り

第一項 動機

第二項 韻文

第三項 第七章における変調

第二節 〈生〉と〈死〉

第一項 「三十分の死」

第二項 「命根」

第三節 「三十分の死」後

第一項 他者への感謝

第二項 社会への帰還

第四節 「病院の春」の「アイロニー」

第二章 『彼岸過迄』

.....

第一節 田川敬太郎

第一項 敬太郎の形象

第二項 「探偵」

第三項 消える敬太郎

第二節 須永市蔵

第一項 「退嬰主義」の形象

第二項 「最も親しい親子」関係

第三項 千代子との「結婚問題」  
第四項 松本と敬太郎  
第三節 一長編としての『彼岸過迄』

### 第三章 『行人』

第一節 長野二郎  
第一項 「友達」  
第二項 「兄」以降  
第二節 長野一郎  
第一項 一郎と直  
第二項 孤立の過程  
第三項 「塵勞」の旅  
第三節 『行人』の行方  
第一項 〈二郎説話〉と〈一郎説話〉  
第二項 『彼岸過迄』から『心』へ

### 第四章 『心』

第一節 「私」と「先生」  
第一項 恋と人間不信  
第二項 故郷と金  
第三項 時代  
第二節 「先生」の心  
第一項 故郷喪失と「御嬢さん」への恋  
第二項 三角関係  
第三項 絶望と自殺

.....

.....

第三節 「先生の遺書」から『心』へ

第五章 『硝子戸の中』

第一節 〈生〉と〈死〉をめぐって

第二節 「時」の力の諸相

第三節 「硝子戸の中」の他者

第四節 硝子戸の外へ

..... 120

結章

..... 134

註

..... 141

参考文献

..... 155

後記

..... 173

〈本論文における決定稿は『漱石全集』（全二九巻、岩波書店、一九九三年一月—一九九九年三月）である〉

## 序章

夏目漱石は一九一〇（明治四三）年八月二四日、転地療養のために滞在していた修善寺の菊屋旅館で大咯血による脳貧血を起して約三〇分間の人事不省に陥った。（修善寺の大患）と呼ばれるこの出来事を境として、以後の作品は彼の後期文学に括られる。そして、その生命的危機を生き延びた漱石が入院中の病院で執筆・発表したのが自らの修善寺体験について綴った随想「思ひ出す事など」である。その後、退院した漱石は小説執筆を再開して『彼岸過迄』、『行人』、『心』の三小説を次々と手掛けていった。そして、三小説の次に書き始められたのが随想『硝子戸の中』であり、その晩年の述懐を経て『道草』、『明暗』という晩期の創作へと向かっていく。

本論は、この漱石が一九一〇（明治四三）年から一九一五（大正四）年にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に連載した「思ひ出す事など」、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』の五作品を対象に、作品がいかにか書き進められていたのかを分析考察したものである。これは取り上げた二随想三小説が以下に挙げる共通点を有しており、それらが漱石の後期文学における最大の特質であると考えられるからである。

第一の共通点は、執筆が一日に連載一回分だけ行われていたという点である。漱石がそれを行うようになったのは「思ひ出す事など」の前に執筆された小説『門』<sup>1</sup>からであり、その理由は「胃の加減わるく気に任せて長く筆を執ると疲労する故」という健康上の理由<sup>2</sup>であった。しかし、後年には「書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来さうに思ふ」と創作上の理由<sup>3</sup>に変化しており、この方式は最終作の『明暗』<sup>4</sup>まで採られ続けていた。しかし、本論で「思ひ出す事など」から『硝子戸の中』までの五作品のみに限定しているのは、第二の共通点とそこに見出される問題を重く見るからである。

第二の共通点として挙げられるのは、対象とした作品の構成である。漱石は（後期三部作）と括り称される小説『彼岸過迄』、『行人』、『心』で短編連作方式を採用している。その方式は順次話題を移して語り進められていく随想のそれと類似している<sup>5</sup>が、この構成の他にも三小説と随想「思ひ出す事など」、『硝子戸の中』には同じ問題が見出される。

漱石は随想「思ひ出す事など」の執筆について「長さも内容も不定に候」と書いている<sup>6</sup>。作中では「自分がつい死にもせず今日に至った経過」（「思ひ出す事など」五）や「わが近況」（同）を読者に知らせるためのものであることが明示されているが、執筆が進むにつれてその範囲を超えた語りが行われるようになっていく。同じく

随想『硝子戸の中』においても、冒頭に自分の書齋を訪ねてくる人について「私に取っては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり為たりする。(中略)私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ」(一)と述べられているが、やがてその構想になかった筆者の過去語りが挿入されていく。一方で、小説三作品でも同様の傾向が確かめられる。漱石は『彼岸過迄』の予告で短編連作方式を採用することを予告し、「小説は建築家の図面と違って、いくら下手でも活動と発展を含まない訳には行かない」、「旨く行かなくつても、離れるとも即くとも片の附かない短篇が続く丈の事だらうとは予想出来る。自分は夫でも差支へなからうと思つてゐる」と述べている。この言葉は作者自身が創作過程での流動性を積極的に受け入れていくことの宣言と理解できる。『行人』執筆中には「先がどうなるやら作者にも相分らずたゞ運次第に候」と明かしており、実際に想定外の「塵勞」までが書かれることとなった。また、『心』は短編として起稿された「先生の遺書」の連載が長期化し、改題されたものである。このように、本論が取り扱う五作品は、いずれも当初の構想を越えて書き進められているのである。

無論、執筆によって作品に変化が生じることはあらゆる創作において言い得ることである。しかし、この時期において漱石が「不定」のまま作品に向かい、その「活動と発展」に任せる手法を意識的かつ積極的に実践していたという事実を重く見たい。実際に作中には大小の齟齬や矛盾も発生しているが、単行本化に際しても多くは改められていない。すなわち、少なくともこの時期の漱石にとっては作品の整合性や一貫性よりもむしろ、その「不定」の「活動と発展」を求めることが重要であったと考えられるのである。本論では、そうした短編連作的構成によって書かれた随想とも、随想的な構成によって書かれた小説ともいえるこれらの作品における漱石の試行と問題追求の過程を明らかにし、その内実を考察したい。

以上の観点から、第一章では「思ひ出す事など」を取り上げ、漱石の後期文学の出発点とされる随想の展開を分析し、病中の述懐から〈死〉の考察、そして快復後の生活へと移り変わる語りの問題意識の変化を考察する。併せて、「思ひ出す事など」の連載終了後に発表され、後にその第三三章とされた小品「病院の春」についても論じる。第二章では『彼岸過迄』を対象に、田川敬太郎と須永市蔵の二名をそれぞれに分析考察している。そのうえで、敬太郎の視点から開始された作品が須永の過去を焦点としていく展開がどのようにもたらされたのかという点にも論及する。続く第三章では『行人』に焦点をあて、第二章同様に作品の中心人物である長野二郎と長野一郎への論述を行い、作者の病気により中断された作品が再開後に長期化していった要因を明らかにする。第四においても三部作の三作目にあたる『心』について「私」と「先生」の視点に沿い、短編として書き始められた

作品が長期化していく中で深められていく作品の主題について考察を行っている。そして、第五章では『硝子戸の中』において、閉塞感と〈死〉への傾倒を抱えた語りが、構想にはなかった過去の回想を契機に「微笑」と〈生〉へと拓かれていく過程を明らかにし、その意義について論じている。以上の五章をふまえて、結章では「思ひ出す事など」から〈後記三部作〉を経て『硝子戸の中』に至るまでの過程と、作品執筆における「不定」とその「活動と発展」の意義を総括する。

## 第一章 「思ひ出す事など」

随想「思ひ出す事など」は「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載された。第一回は一九一〇（明治四三）年一〇月二十九日に両紙上で発表され、それ以降は休載日を挟みながら不定期に掲載され、「東京朝日新聞」は翌一九一一年（明治四四）年二月二〇日、「大阪朝日新聞」では三月五日に、それぞれ第三三回をもって終了した。その後、単行本『切抜帖より』に収録されて一九一一年（明治四四）八月に春陽堂より刊行された。初出時には全三二章であったが、『切抜帖より』に収録される際に一九一一年（明治四四）年四月九日の「大阪朝日新聞」の「日曜附録」に発表された。「病院の春」が第三三章として付け加えられた<sup>1)</sup>。ただし、本論における決定稿は漱石の自筆原稿を底本にしており、「病院の春」は「思ひ出す事など」とは区別されている。その執筆状況が大きく異なることから、後に第三三章とされた「病院の春」と「思ひ出す事など」全三二章とは相互に独立した作品として捉える。

漱石は胃潰瘍で入院していた長与胃腸病院を一九一〇（明治四三）年七月三十一日に退院<sup>1)</sup>した後、八月六日からは転地療養のため修善寺温泉に滞在していた。ところが病状が悪化して同二四日に大量の血を吐いて三〇分間の人事不省に陥った。やがて容態は改善に向かい、一〇月一日には寝台に寝かされたまま帰京して長与胃腸病院へ運び込まれた。そして、その九日後の一〇月二〇日より再入院中の病床で自身の修善寺体験を題材として「思ひ出す事など」の執筆を開始したのである<sup>2)</sup>。

先行研究において本作は〈修善寺の大患〉の意義を中心に論じられてきた。小宮豊隆は大患を「漱石の生活を深め、漱石の芸術を深める大転回」と捉え<sup>3)</sup>、作品は転機における漱石の「内外二面の消息」を伝えるものであると評価した<sup>4)</sup>。これに対して瀧澤克己は大病が「漱石の人と作品とを、根本的に変化させることはできなかつ



た」とし、作品は筆者が病によって得た一時的な安息の中で自然を楽しみ他者に感謝して過ごした「こよなく美しい記念」であると論じた<sup>15</sup>。やがて小宮の説が同じ漱石門下生を中心に松岡譲らの支持を受けて有力視されるようになり<sup>16</sup>、大患を機に悟りの境地へ向かう漱石像が作り上げられていった。後に江藤淳が「この概ね通俗的な人生観乃至は生死観をのべた随筆ほど、多くの意味あり気な註釈で汚されて来たものはない。生死の境にある人間から、高遠な教訓を期待したがるのは、意地汚い教師根性である」と小宮らの論を痛烈に批判し、漱石を「思わぬ閑日月を発見し得た、傷ついた生活人」と評した<sup>17</sup>。この江藤の論をきっかけに既存の漱石像<sup>18</sup>は解体に向かった。研究は長く漱石の体験を論点としてきたが、一九七〇年代になると高木文雄が作品から「強烈なモチーフと、確乎とした構成意図」を読み取り<sup>19</sup>、佐藤泰正も「すぐれて構成的な展開」に注目するなど、その作品性への論及も行われるようになった<sup>20</sup>。また、それぞれの論中で高木が「此作品と取り組んでいた四か月こそが、所謂大患其物よりも、より大きな転機を齎したと見るべきであろう」といい、佐藤も「漱石もまた書く、(表現)という行為なくしては、ついにこの生と死をめぐる危機的体験を己の文学的、血肉とはなしえなかった」(傍点原文)と結論付けているように、筆者が自らの体験を作品化したことの意義も問われるようになった。しかし、この時期に「思ひ出す事など」研究はひとつのピークを迎え、それ以降に大きな展開は見られない。

漱石は一〇月二〇日に第一章を書き終えると、原稿を森田草平に送った<sup>21</sup>。そして同日付の森田宛葉書に「毎日送る事も隔日になる事も、或は三四日抜く事も有之候はんも少しは長くつゞく事と存候。長さも内容も不定に候」と書いている。先行研究においては早くに筆者の修善寺体験の意義が問われていた。そして、佐藤泰正の言う「漱石自身がこの稀有の体験を、その『三十分の死』を、どう対象化しつつ捉えたか」(傍点ママ)ということと、「その記録(『修善寺日記』)を素材として記した『思ひ出す事など』を、どう作品として読みきるかということ」(傍点ママ)が問われるようになった<sup>22</sup>。しかしながら、この随想の「構成的」な側面が注目される一方で、断続的な執筆により「長さも内容も不定」の作品がいかに書き進められていったのかということはあまり重要視されていないように思われる。高木の言うような「作品と取り組んでいた四か月」の内実を明らかにすることこそが、修善寺体験の意味や「思ひ出す事など」執筆の意義を問ううえでは最も重要な問題ではないだろうか。そこで、本章では語り手「余」と漱石の双方の視点から「思ひ出す事など」の語りを追いたい。作品の直接の素材となった筆者の日記やその他の資料を併せてみていくことで、「思ひ出す事など」における漱石の問題意識の移り変わりやその深化の過程を明らかにすることが目的である。

## 第一節 病室での語り

### 第一項 動機

漱石は病中の「思ひ出す事など」執筆について周囲から制止を受けており、一〇月二六日には池辺三山<sup>23</sup>に、同月三一日には畔柳芥舟<sup>24</sup>に、それぞれ書簡で弁解している。特に池辺とのやりとりについては作品の第四章で言及されている<sup>25</sup>。そうした反対を受けながらも病床で「長さも内容も不定」の随想を書き続けた動機に関して漱石が作品外で直接的に言及した資料は見出されないが、作品の中では語り手の「余」が自らの語りの動機と目的を明らかにしている。

まず、第四章では日毎に移り変わる心境と薄れていく記憶について述べられている。「余」は大病によって「苦しい実生活」を離れた「閑適の境界」に過ぎしながら「旧い趣」の「陳腐な幸福と爛熟な寛裕」を得たという。しかし、「病に因つて纒かに享け得た此の長閑な心持を早くも失はんとしつゝあ」って、快復に向かう過程で長閑な心持から遠ざかり、やがて退院すれば再び『『現代的气風』に煽られ』る生活が待っている。「余」が「他日の参考に日毎の心を日毎に書いて置く事が出来たならと思ひ出し」たのも、「薄ぼけて遠きに行くわが記憶の影」を「呼び返したいやうな心持がし」たのも、「苦しい実生活」の中では得ることのできない穏やかな日々を惜しみ、それを忘却してしまうことを恐れたからである。それゆえに病室は、療養の場であると同時に、「苦しい実生活」に戻る前の「閑適の境界」に生きる自己の心と記憶とを永く留めるための語りの場となったのである。

続く第五章では「思ひ出す事など」を公表する目的として「余の如きものゝために時と心を使はれた有難い人」に「自分がつい死にもせず今日に至つた経過」や「わが近況」を報告するためであると述べられている。ここから読み取れる他者への感謝も病によって得られたものである。また、漢詩や俳句によって「当時の余が此の如き情調に支配されて生きてゐたといふ消息」が「読者の胸に伝はれば満足」であるという。詩句としての完成度ではなく、それらを作った時々的心情をそのまま表現することを重視している点に第四章と共通の目的意識が読み取れる。「余」の語りには、病によって得た安息の日々の安らかな心をありのままに書き残そうとする態度が一貫している。

そして、もう一点重要であるのが第四章末尾の、「思ひ出す事など」は平凡で低調な個人の病中に於ける述懐と叙事に過ぎないが、其中には此陳腐ながら払底な趣が、珍らしく大分這入つて来る積であるから、余は早く思

ひ出して、早く書いて、さうして今の新しい人々と今の苦しい人々と共に、此古い香を懐かしみたいと思ふ」という一節である。同章には「古風の趣が却つて一段の新意を吾等の内面生活上に放射するかもしれない」とも書かれていて、自らの語りが「苦しい実生活」を相対化させ、そこで苦しむ人々の慰めとなることが目されていたと確かめられる。そしてそれは、他者のためだけではなく、自分自身が失いかけていた「長閑な心持」を取り戻すためでもあったと言えよう。「思ひ出す事など」は以上のような「余」の強い思いによつて語り始められたのである。

先述の通り執筆動機に関する漱石自身の直接的な証言は現存していないが、修善寺滞在中の九月二六日の日記に早くも作中に見られるものと同様の問題意識が見出される。「○病正に軽快に移らんとして、今更病を慕ふの情に堪えず。本復の後はかゝる寛容ある、stressなき生涯、自己の好む儘の心の働きを尽して朝より夕に至る時間、朝夕余の周囲に奉侍して凡て世話と親切を尽す社会の人、知人朋友もしくは余を雇ふ人のインダルジェンス。――是等は悉く一朝の夢と消え去りて、残るものは鉄の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戦はねばならぬ社会文ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず」。ここに書きつけられているのは療養生活における精神的な安息と他者への感謝、そしてそれらの喪失の確信と愛惜である。いうまでもなくこれらは、「余」が語る執筆動機と同じものである。「今日の幸福」の終焉を恐れていた漱石は、長与胃腸病院への再入院によつてその日の接近を強く意識するようになり、それが失われてしまう前に書き残しておきたいと考えるようになった。それ故に「長さも内容も不定」のまま第一章の執筆を開始したのであろう。

## 第二項 韻文

作品の大きな特徴として随所に自作の漢詩や俳句が添えられている点が挙げられ、全三二章中二七章に一六首二〇句が詠み込まれている。

第四章で「余」は「人間は閑適の境界に立たなくては不幸だと思ふ」と言い、「現代的気風」に対する「古風の趣」を持つものとして池辺三山に贈った漢詩を紹介している。また、第五章では「病中に得た句と詩」について「実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天来の彩文」であり、それぞれの出来不出来に関わりなく読者に「当時の余が此の如き情調に支配されて生きてゐたといふ消息が、一瞥の迅きうちに、読者の胸に伝はれば満足」であると説明している。健康な時には「日

夜共に生存競争裏に立つ悪戦の人」として「絶えず火宅の苦を受けて、夢の中でさへ焦々」し、「何時もどこかに間隙がある様な心持がして、隈も残さず心を引き包んで、詩と句の中に放り込む事が出来な」かった「余」にとつて、そうした「実生活の圧迫」から離れて興の赴くままに詠んだ詩句は「思ひ出す事など」の「平凡で低調な個人の病中に於ける述懐と叙事」に「陳腐ながら払底な趣」を込めるために最適の表現であったといえる。しかしながら、作中における韻文の扱いにおいては重大な変化が見出される。

第一章から第八章まで、漢詩と俳句は語りの中に挿入されて「余」自身による批評や解説が加えられるなど、散文との有機的な結びつきを意識して文中に配されている。しかし、第一〇章<sup>26</sup>以後、韻文は章の末尾に付されるのみとなり、それらに対する言及は一切行われなくなる。例外として第二章が挙げられるが、それも「余」の日記からの引用の形で「そうして日記に書いた。――「人よりも空、語よりも黙。……肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」とかぎ括弧で括られている。

また、第五章では「風流を盛るべき器」としての漢詩を「詰屈な漢字」としているが、「其詰屈とを忍んで、風流を這裏に楽しんで悔いざるものである」といい、「日本に他の恰好な詩形のないのを憾みとは決して思はない」と述べている。それが第二四章になると「余は漢詩の内容を三分して、いたく其一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしてゐる。残る三分の一に対しては、好むべきか悪むべきか何れとも意見を有してゐない。」と漢詩に対する不満を明かしている。このような点から「思ひ出す事など」において散文と韻文との相関が次第に薄れ、より散文に重きが置かれるようになったことが見て取れる。「余」はこのことについて何も説明していないが、その語りの質が変化していることは確かだろう。

作中に詠まれている韻文作品は、初案を含めて多く筆者の日記に書き付けられおり、「思ひ出す事など」執筆の際にそれを参考にしたとみて間違いない。漱石は大患後、筆を執れるようになった九月八日の日記<sup>27</sup>に早くも俳句を残している。そして、胃腸病院へ戻った後も盛んに創作を続けていたが、十一月一五日の大塚楠緒子追悼の三句<sup>28</sup>を最後に連載中に再び日記に作品を書き込むことはなくなった。それ以降の新たな句作や詩の推敲<sup>29</sup>はわずかに「思ひ出す事など」で直接行っていた。漱石は「当時の余が此の如き情調に支配されて生きてゐたといふ消息」を伝えるためには漢詩と俳句を作ったが、「太平の記念」としての個人的な創作は止めてしまった。それは韻文の創作にはそぐわない新たな意識の元に置かれたからであり、そのような状況の変化が散文による語りの志向をも変えて両者の相関も薄れていったと考えられるのである。

### 第三項 第七章における変調

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

(七の下)

第七章には人間の相互関係や一喜一憂、そして生死さえもが、自然本位の立場からは取るに足らないものと思えてしまう「ヂスイリユージョン」の問題が語られている。生命の危機を生き延びたことを喜び、他者の生を願い、親切な人々に感謝する日々に「始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じ」を得た「余」は、ウオードの『力学的社会学』<sup>30</sup>の読書を契機に星雲説や進化論について考えた時に「甚だ心細くな」り、「又甚だ詰らなくなつた」という。そして「殊更に気分を易へ」て大塚楠緒子のために手向けの句を作った。

全三二章の中で唯一上下二回に分けて発表された<sup>31</sup>この章は先行研究でも重要視され、殊に章末の一句について多く論究が行われてきた。小宮豊隆は「漱石は一刻も早くさういふ寒い、『心細』い、『詰らな』い世界から抜け出して、暖かい、心丈夫な、生き甲斐のある、美しい人情の世界の中に自分の頭を浸けたかった」が故にこの句を添えたのだと解説している<sup>32</sup>。また、高木文雄は「たとい死に対して無力でも、死者を悼む事位は出来るし、それこそ人間のすべき事なのだという点に居直っている漱石」の態度を指摘している<sup>33</sup>。これらに対して丹羽章は「作者はこの時、直前に記した『ヂスイユージョン』を保留して人情にひたっているのでは決してあるまいし、ましてやそれを否定しているのではない」としたうえで、「心中の動かし難い『ヂスイリユージョン』を自らふまえ、しかも更にそこに留まる事を拒否して超えて行かんとするやみがたい願い」を読み取っている<sup>34</sup>。このように、従来の研究では「ヂスイリユージョン」を前に「殊更に気分を易へ」た漱石（「余」）の心が様々に論じられており、本項でも同じ点について論じたい。しかし、その前に長与病院長とジェームズ教授の死について語られている第二章と第三章に注目する。

「余」は修善寺から東京の長与胃腸病院に戻った翌日に病院長の死を知らされた。同時期に危篤に陥った院長が死に、自分が生き残ったことに生と死の不可思議を感じ、「生き延びた自分丈を頭に置かず、命の綱を踏み外した人の有様も思ひ浮べて、幸福な自分と照し合せて見ないと、わが難有さも分からない、人の気の毒さも分からない」と述べている。

逝く人に留まる人に来る雁

(二)

右は第二章に添えられた院長の死に手向けた一句<sup>35</sup>である。生と死とに別たれる人間に対して、それとは無関係にある渡り鳥の営みが配されている。越冬のために北方より飛来する雁は秋を告げる鳥として知られ、ここでも大自然の運行が託されている。人間の生死に関わりなくそれら包み込んで移ろう季節の、秋への変わり目が静かにとらえられている。すなわち、この句では大きな自然の流れの中での人間存在の無常が詠われているのである。

病院長の死を知らされた翌日に教授の死を知った「余」は、その当時を振り返ってみて「二人に謝すべき余はたゞ一人生き残つてゐる」と語るに留まっている。長与病院長とジェームズ教授の死を主題とするこの二つの章からは、死生の運命は人間にはどうすることもできないのだという認識が提示されている。この語り手はその中で自己の生を喜び、他者の死を悼むより他はないのである。

一方、第七章の下回冒頭では、死生を巡る喜びと哀惜、そして他者への感謝に「人間らしいあるもの」があると信じている「余」が、「始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じが漲つてゐる」と語っている。ここで重視すべきであるのは、それが「始めて」であつたと述べられている点である。なぜならば、「ヂスイリユージョン」のきっかけは『力学的社会学』の読書体験であつたが、そうさせた最大の要因が病中に「始めて」見出した「生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じ」に他ならないからである。「余」はウオードの著書を読む以前から既に星雲説と進化論の知識を有しており、また、長与病院長に向けた句にも見られるような認識も抱いていた。大患という生命の危機から生き延びたことを喜び、周囲の親切な人々に感謝するようになったからこそ進化論を考えて「甚だ心細くな」り「又甚だ詰らなくなつ」たのである。

その「ヂスイリユージョン」から「殊更に気分を易へ」て作つたという大塚楠緒子追悼の句には、棺に有らんと限りの菊を投げ入れよという主体の激情が込められている。この故人喪失の深く激しい悲しみは菊の花とともに棺の中に吸い込まれるばかりであり、生者と死者とを別つ決定的な断絶が見出される。小室善弘は「自分を含めた人間存在の卑小に対する達観への道を、もう一度卑小な喜怒哀楽の側にひきもどして詠まれたのがこの句である」としている<sup>36</sup>。が、そこには氏が指摘するような「達観」も、「逝く人に留まる人に来る雁」の句に見られるような無常観もなく、理性で割り切ることのできない情動こそが詠み込まれている。

仮に章末に置かれたこの句を第七章の結論とするならば、この時の「余」の心情は小宮と高木の指摘通りとい

えるだろう。また、同章のそれまでの語りが「ヂスイリユージョン」を否定していないことを踏まえれば、より丹羽の説に理を認めるべきであろう。しかしながら、本論では「余」がこの時点での自らの限界を認め、その問題を保留にして句作を行ったと捉えたい。繰り返しとなるが、この語り手が人間本位の立場に喜びを感じるようになったのは病後である。それが死生観に組み込まれるまでには至っていないために自然本位との相克に結論が出せず、「甚だ心細くな」り「又甚だ詰らなくなつ」た心の求めるままに「殊更に気分を易へ」て句作を行ったとみるべきであろう。そのまま第七章は閉じられ、この問題が未解決のまま作品の語りは病室での述懐から修善寺の回想へと向かうのであるが、そのことが、「余」が新しい目的をもって語り始めたことを端的に示している。

そもそも第七章は漱石が執筆を予定していたものではなかった。日記によると第一章を執筆した一〇月二〇日の夜に『力学的社会学』を読み始め<sup>37</sup>、十一月一三日に大塚楠緒子の死を知ってその二日後に手向けの句を作っている。そして、第六章の新聞掲載日が一月二〇日であることから句作が行われたのは第六章の執筆後と推測される。すなわち、筆者は自らが直面した「ヂスイリユージョン」をすぐに第七章に作品化したのである。それに対する解答が示されるべくもないだろう。ただ、漱石が連載開始時には想定すらしていなかったであろう現時点の問題を語った意味は大きく、その後の語りにも少なからず影響していることは疑えない。

第八章以降、「余」が転地療養のために修善寺に移り、大患を経てそこを発つまでの回想がほぼ時系列に沿った形で進められる。それはいうまでもなく、「日毎の心」や「薄ぼけて遠きに行くわが記憶の影」を書き留めるためであり、「自分がつい死にもせず今日に至った経過」を読者に伝えるためである。しかし、一度「ヂスイリユージョン」に陥った筆者は、その修善寺体験を振り返ることに新たな目的を加えたと考えられる。すなわち、自らが直面した（死）の考察と、生還後に有難く感じられた人間社会が真に「生き甲斐」のあるものであるのかという問いかけである。「ヂスイリユージョン」そのものがいつまで意識されていたのかは明らかではない。しかし、その時の「心細」さと「詰らな」さが、「生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じ」への確かな根拠を自らの回想の中に求めさせたと考えられる。その手始めとして第八章から「余」に「忘るべからざる八月二十四日」に向けた語りを開始させたのである。ここで作品執筆開始時点では「長さも内容も不定」であった作品に明確な方向性が与えられたと言えよう。丹羽は楠緒子に手向けた一句に「心中の動かし難い『ヂスイリユージョン』を自らふまえ、しかも更にそこに留まる事を拒否して超えて行かんとするやみがたい願い」を読み取っているが、漱石にはそれを願う前に自己の修善寺体験を総括しなくてはならなかった。

前項で述べたとおり、漱石は十一月一六日以降、作品内では「当時の余が此の如き情調に支配されて生きてゐたといふ消息」を伝えるための韻文の作と推敲をわずかに行つたものの、日記上での個人的な創作は止めている。その理由も「ヂスイリユージョン」にあり、「太平の記念」として漢詩や俳句を作る心境にはなかつたからであると解される。また、その頃より日記そのものも短く簡素になり、一二月になるとほとんどが天気や来訪者の氏名、体重の羅列になつていて、筆者の意識が「思ひ出す事など」の執筆に集中していったことが窺えるのである。それでは、それ以降に執筆された作品の語りにおいて何が問題とされ、それがどのように追求されていったのか。次節より具体的に読み取っていきたい。

## 第二節 〈生〉と〈死〉

### 第一項 「三十分の死」

第八章から第一六章まで、語りは「忘るべからざる八月二十四日」を中心に展開されている。「東京を立つときから」(九)、「余の病が次第々々に危険のほうへ進んで行つた時であつた」(十一)、「忘るべからざる二十四日の来るのを無意識に待つてゐた」(十二)、「其日は」(十三)、「三人とも無言のうちに天明に達した」(十四)、「安らかな夜は次第に明けた」(十六)と、体調の変化を辿りながら八月二十四日前後の記憶を振り返っている。しかし、「八月二十四日の来る二週間程前」の病状と当時の苦痛の回想から始まる第八章で、「此煩悶に比べると、忘るべからざる二十四日の出来事以後に生きた余は、如何に安住の地を得て静穩に生を営んだか分らない。其静穩の日が即ち余の生涯にあつて最も恐るべき危険の日であつたのだと云ふ事を後から知つた」と明かされている。「余」は病の「煩悶」から「静穩」に至る契機、すなわち「三十分の死」(十五)の記憶を有していない。奥野政元は『思ひ出す事など』という表題自体が、実はアイロニカルな表現でもあつて、三十分の死の体験の核心にあつたのは、ついに「思ひ出せない事」でなければならなかつた」と指摘している<sup>33</sup>が、それはここで作品の語りに新しい志向が与えられたということなのである。

「余」は第九章で「記憶を逆まに向け直して、後戻り」をし、修善寺に向けて出発した日<sup>34</sup>に遡ってから時系列に沿って回顧している。人事不省に陥っていた八月二四日の空白の三〇分間については妻から伝え聞いた話を挿入し、意識を取り戻して「苦痛なき生」を実感したと語る第一六章に至って「忘るべからざる八月二十四日」をめぐる一連の語りを終える。それが「自分がつい死にもせず今日に至つた経過」の報告のためであることは明



らかであるが、同時に、自身の肉体と精神の両面に大きな変化をもたらした、しかし記憶のない「三十分の死」(十五)を捉えようとしている。

第七章までの「余」は「閑適」な〈生〉の喜びを伝えるばかりであった。長与病院長の死に言及した直後にも「生き延びた自分丈を頭に置かず、命の綱を踏み外した人の有様も思ひ浮べて、幸福な自分と照し合せて見ないと、わが難有さも分らない、人の気の毒さも分らない」と述べている。ここでは自己の安息に満ちた〈生〉から他者の〈死〉を惜しんでいたものであって、自らがぐり抜けてきたものも含めて〈死〉そのものに対する考察を行ってはいなかった。しかし、第八章からは前後の記憶や伝聞をもとに「三十分の死」を焦点化しており、その中で大患直前の身体的苦痛に満ちた〈生〉を振り返り、以後の「静穏」な〈生〉とを画した「三十分の死」の考察を試みている。「ヂスイリユニジョン」の後に「余」が第一に語り取り組んだのは、〈死〉とは何かという問題であった。

第一三章では八月二四日の意識不明に陥るまでの記憶とその直後の出来事の伝聞が伝えられている。夕暮れ時に突然胸の苦しみに襲われた「余」は、不快の余りに傍にいた妻に「暑苦しくて不可ないから、もう少し其方に退いて呉れと邪慳に命令」し、「安静に身を横たふべき医師からの注意に背いて、仰向の位地から右を下に寐返らうと試みた」ときに「脳貧血」を起こして意識を失った。「其時さつと逆する血潮を、驚ろいて余に寄り添はうとした妻の浴衣に、べつとり吐き懸けた」ことは後から知ったという。続く第一四章の回想は「眼を開けて見ると、右向きになつた儘、瀬戸引きの金盥の中に、べつとり血を吐いてゐた」という光景から始まり、「つい今しがた傍にゐる妻に、少し其方に退いてくれと云つた程の煩悶が忽然何処かへ消えてなくなつた事を自覚」し、「日頃から苦痛の塊を一度にどさりと打ち遣り切つたといふ落付をもつて、枕元の人がざわ／＼する様子を殆ど余所事の様に見てゐ」て、自分の死を予想する二人の医師の言葉にも「決して死ぬ必要のない程、楽な気持でゐ」たことを確かめている。「余」が意識を取り戻した後に気づいたのは身体的苦痛の消失であり、一時的にでも生命的危機に瀕していたとは思ひもよらずに周囲の言葉に耳を傾けていたという。

第一五章からは回想と同時に死生に対する考察が行われているが、「余」は「三十分の死」について「時間から云つても、空間から云つても経験の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である」と断絶の認識を示し、第一七章でも「余は一度死んだ。さうして死んだ事実を、平生からの想像通りに経験した。果して時間と空間を超越した。然し其超越した事が何の能力をも意味しなかつた。余は余の個性を失つた。余の意識を失つた。

たゞ失つた事丈が明白な許である」と結論づけている。第一五章の書き出しに「強いて寐返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続してゐるとのみ信じてゐた」とあるように、「余」には三〇分間の記憶がなく、そこには〈死〉の認識もなかった。そのため、後に妻から「あの時三十分許は死んで入らしたのです」と聞いて驚いている。「対照の連想からして、日常一束に使用される言葉」である「生死」が「如何にも急劇でかつ没交渉」な「懸隔つた二つの現象」として捉えられているが、それは「余」が一貫して「個性」や「意識」を〈生〉の本質と考えていたからである。

ここでは〈死〉についての語りにおいて身体性が殆ど考慮されていないという点に留意すべきであろう。「余」は多量の食塩水を注射されている時に「多少危険な容体に逼つてゐるのだらうとは思つたが、それも殆ど心配にはならなかつた」といい、「死ぬ必要のない程、楽な気持であつた」という。後に妻から喀血時の様子を聞き、自分が「夜明迄行きやうとは、誰も期待して居なかつた」と聞かされた後にも「余は是程無理な工面をして生き延びたのだとは思へなかつた」としている。このように、「余」が〈生〉と〈死〉を「懸隔つた二つの現象」と考えたのは、その意識や記憶といった精神面を重視する一方で身体の衰弱を考慮していないからだといえる。また、第一七章においても「余は常に幽霊を信じた」としながらも、「自分に経験の出来ない限り、如何な綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい」と言い切っている。咽喉と胃の病状を振り返りながら回想を進めてきたが、〈死〉は「個性」や「意識」の喪失であり、記憶にはない自己の「三十分の死」もそれらの断絶と結論づけられている。それ故、「余」にとつて〈死〉とはごく不条理なものであり、「俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かざるゝものは、たゞ寒くなる許」なのである。

## 第二項 「命根」

それでは、筆者である漱石の視点からは「三十分の死」をめぐる死生考察がどのように位置づけられるのであろうか。

縹緲玄黄外。死生交謝時。寄託冥然去。我心何所之。归来覓命根。

杳窅竟難知。孤愁空遶夢。宛動簫瑟悲。江山秋已老。粥藜髯将衰。

廓寥天尚在。高樹独余技。晚懷如此澹。風露入詩遲。

40

(十五。圈点省略)

この漢詩は第一五章の末尾に添えられた一首である。第一句から第六句にかけては生死の狭間から帰還した思いと生命の謎が、それ以降は生還後の孤独や老いの実感が秋の自然への共感のうちに詠み込まれている<sup>41</sup>。この漢詩は漱石が長与胃腸病院への再入院中に作り上げていた作に推敲が加えられたものである。元となった詩は一九一〇（明治四三）年一〇月一六日から一八日にかけての三日の間に日記中で創作されている。連日に及んだ推敲過程には論じるべき点多いように思われるが、ここでは特に第一句から第六句までに注目したい。以下に「思ひ出す事など」での定稿に至るまでの三稿の第六句までを筆者の日記より引用する。

天地有無裏 死生交謝時

人間失寄託 如踞一藕糸

命根何処来 靈台不可知

（初稿。一〇月十六日）

縹緲天地外 生死交謝時

杳然無寄託 懸命一藕糸

命根何処在 窈窕不可知

（第二稿。一〇月十七日）

縹緲玄黄外 死生交謝時

杳然無寄託 懸命一藕糸

命根何処是 窈窕不可知

（第三稿。一〇月十八日）

吉川幸次郎<sup>42</sup>は第四句について初稿の「如踞一藕糸」及び第二、三稿の「懸命一藕糸」について、「三十分の死のあいだ、一本の蓮糸さえも、そこにはなかったのであり、定稿の決然たるに及ばない」としている。日記によると、漱石が「三十分の死」の詳細を知ったのは九月二六日であった<sup>43</sup>。そして、その四日前の日記に既に「嬉しい。生を九切に失つて命を一簣につなぎ得たるは嬉しい」と書いて「生き返るわれ嬉しいさよ菊の秋」の句作も行っており、自身が生命の危機から生き延びた実感があつたことは間違いない。しかし、吉川が指摘しているよ

うに、第三稿までの推敲過程においては「思ひ出す事など」の第一五章で示されているほど明瞭に〈生〉と〈死〉の断絶は意識されていない。「三十分の死」をめぐる語りの中でそれが明確なものとなり、第四句が「我心何所之」に改められたと推測されるのである。

また、吉川は第五句の「帰来覓命根」について、「時空のない世界から帰って来て」という思想は、定稿以前には示されていない（傍点原文）と述べている。この点も第四句と同じ理由によると考えられ、「三十分の死」を断絶として意識したことによる変更であるといえる。ただ、この句についてさらに指摘しておかなくてはならないのは、「命根」を「覓」めているという点である。初稿以下、第五句は「命根何処来」、「命根何处在」、「命根何処是」と、不明な「命根」の所在への問いかけであったが、定稿では自ら「覓」めている。それに加えて第六句「杳杳竟難知」の中の「竟」という一字も、第三稿までの姿勢からは導き出されない言葉といえよう。一〇月一八日の日記には「今朝昨日の古詩を作り了へ帳面の末尾に書く」と書き付けられており、その時点で完成とされた第三稿は「思ひ出す事など」執筆開始直前の漱石の心情を映したものと考えられる。そして、これを第一五章で更に推敲が加えられた定稿と比較すると、死生の認識やその問題に対する態度に重大な変化が見出されるのである。しかし、そこから読み取ることができるのは、断絶した〈生〉と〈死〉の問題を前に「命根」の所在を「覓」めても「竟」に答えを得ることができなかった漱石の姿である。

漱石は「思ひ出す事など」の連載当初は「閑適」な〈生〉ばかりを描き、個人的にも「太平の記念」としての韻文創作を続けており、他者の〈死〉や自らが瀕した〈死〉を深刻な問題として捉えていたとは考え難い。作中で「忘るべからざる八月二十四日」を中心に据えた回想が始まるのは第八章である。そして、その直前には作品で唯一上下回を持つ長大な第七章を執筆している。以上を踏まえると、漱石に「自分がつい死にもせず今日に至った経過」報告から「命根」の所在を「覓」めさせるようになったのは、他ならぬ「ヂスイリユージョン」であったといえる。

しかし、死生に関する一連の語りはその問題を不可解なものとしたまま閉じられている。矢本貞幹は「自分の経験の出来ない限り、如何な綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい」と書いた筆者について「経験せられないものは理解の範囲を超えるものとして望み見るにすぎない。経験主義の限界がここに生ずるのも已むを得ない」と指摘している<sup>4</sup>。また、第七章末に置かれた「有る程の菊抛げ入れよ棺の中」の一句について、先に漱石が「ヂスイリユージョン」を保留にしているのだと指摘したが、作品内では遂にそれに対する解答も示されて

いない。それでは第一七章までの語りによどのような意義があったのか。

自然本位と人間本位のいずれの立場に立つのかという命題が第七章の「ヂスイリユージョン」問題の本質であった。これに対して経験を重視する漱石は、八月二四日前後の回想を通して記憶不可能な〈死〉を自己の喪失と結論していて、矢本の指摘するような意味での「限界」も見出される。しかし、一方でそれは自らの〈死〉の不可解さであって、依然として他者のそれは憐れむべき気の毒なものとして否定し得ないのである。すなわち、この語りが行きつく課題とは、単に〈生〉と〈死〉の接続ではなく、如何に主客両面から広く人間の死生を捉えるのかということに他ならない。

第一八章からは「三十分の死」後の心身の変化が焦点化され、回想と同時に他者への感謝や快復後の復帰に向けた心境などを通じて自己の〈生〉を新たな視点から語り出している。そして第二章では修善寺まで見舞いやって来た子供たちが「余り小さ過ぎ」て「父が死んだあとで自分等の運命に何んな結果が来るか、彼等には無論考へられなかった」といい、同じ章の末尾では「彼等が大きくなつたとき父の此文を読む機会が若しあつたら、彼等は果して何んな感じがするだらう」と遠い将来に思いを馳せている。それは自分の〈生〉と〈死〉が他者にどのように受け止められていくのだろうかという思いである。「思ひ出す事など」で再び死生や「ヂスイリユージョン」が前景化されることはなかったが、それらはこれ以降の漱石文学に通底する問題意識となっている。

後に漱石は一九一四（大正三）年一月一日付の書簡の中で「意識が生の全てであると考へるが、同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分「は」ある、しかも本来の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる」と、〈生〉と〈死〉の断絶を乗り越えたと解される死生観を提示している<sup>45</sup>。同年の四月から八月にかけて連載された小説『心』では、自死を決意した「先生」が「私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です」（五十六）と、自らの暗い過去を綴った遺書を「私」の元に送っており、その自殺と告白によって「本来の自分」を青年に託させている。また、漱石は「思ひ出す事など」の次に手がける小説『彼岸過迄』の中に五女雛子の急逝を題材にした「雨の降る日」を描き、それを「亡女の為好い供養をしたと喜び居候」としている<sup>46</sup>。一九一五年（大正四）年に発表された随想『硝子戸の中』でも多くの故人について言及し、殊に自身の母の回想に際しては「母の記念の為に此所で何か書いて置きたいと思ふ」（三十七）と前置きするなど、「ヂイリユージョン」を越えて語る姿勢が確かめられる。各々については後の章で改めて述べることにして、これらの事実からも、「思ひ出す事など」における死生考察とそれによって得られた課題を、晩年の認識や創作に向かう契

機としてひとまず位置づけることができるだろう。

### 第三節 「三十分の死」後

#### 第一項 他者への感謝

三〇分間の人事不省から回復した「余」は、意識を失っていたことには気づかず、身体的な苦しみが消えていたことを自覚した。第一六章には「苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも与へなかつた」とあるが、第一八章では身体の衰弱からくる不便が「相応の苦しみ」であつたことが伝えられている。そして、第一九章では弱つた自分に対して「手間と時間と親切とを惜まざる人々」への感謝が綴られている。

この章では大患前後の劇的な変化について、「余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ」と語り出されている。「余」にとつて「自活の計に迫はれる動物として、生を営む一点から見た人間」は家族の衣食のために働き続け、「日々自己と世間との間に互殺の平和を見出さうと力めつゝあ」る存在であつた。「自活自営の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵」であり、「疲れても已め得ぬ戦ひ」を続けながら、「独り其間に老ゆるものは見慘と評するより外評しやうがない」と「しみくさう感じ」ていたという。しかし、「さう感じた心持を、急に病気が来て顛覆した」のである。病により日常生活から切り離され、多くの人からの親切を受けたことで「住み悪いとのみ観じた世界に忽ち暖かな風」を感じ、「病に生き還ると共に、心に生き還つた」という。そして、自らも「善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壊す者を永久の敵とすべく心に誓つた」と、当時を振り返っている。他者に触発されての重大な心境の変化といえるが、一方で、それを回想する現在の心境はどうか。

大病は社会生活の苦しきに対する「しみくさう感じた心持」を覆した。しかし、「余」は病をきっかけに得た感謝の心や「善良な人間になりたい」という「幸福な考へ」を抱いて元の辛い生活へ戻らなくてはならないのである。第一七章で「余の心は遂に余の心である。自分に経験の出来ない限り、如何な綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい」と明言しているように、この語り手は経験主義的な思考の持ち主である。例え世の中の人々が親切であっても、これまで自活に迫られてきた人間の一人として、社会復帰を果した後はまた苦しい生活の中で「互殺の和」を求めなくてはならないという点も否定しがたいもののはずである。「善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壊す者を永久の敵とすべく心に誓つた」というが、病中という限定的な条件下で得られた気持ちをごここまで保ち続けられるのかは不明である。何よりもこの作品自体が「病に因つて

纒かに享け得た此の長閑な心持を早くも失はんとしつゝある」という意識の下に書き出されていた。「余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ」の一文には、暗い考えを覆された喜びとともに、それだけでは拭い切れない不安も込められている。そして、「余は好意の干乾びた社会に存在する自分を甚だぎごちなく感じた」と語り始められる第二三章では、そうした不安を背景に他者の言動をどのように受けとめるべきかが考察されている。

まず「余」は他者が自分に尽くしてくれる「義務」を有難いとしつつも「感謝の念を起し悪い」と述べている。これに対して「好意」は「其所に互を繋ぐ暖い糸があつて、器械的な世を頼母しく思はせる」としている。「好意の干乾びた社会」において他人に「ぎごちなく振舞ひつゝある」自分自身を「ぎごちなく」感じていたが、病の間はぎごちなさを忘れていたという。それは、「義務の中に、半分の好意を溶き込んでそれを病人の眼から透かして見た」ときに医師や看護師の仕事が「尊とく」感じられ、病人が「一点の好意によって、急に生きて来る」からであり、「さう解釈された医師や看護婦も嬉しからうと思ふ」からでもある。「余の心は遂に余の心である」と宣言したときに、他者の心が他者の心でしかないことも認めなくてはならない。相手の行為を「義務」として受け取るのも、あるいは「好意」と解釈するのも自分次第である。第二二章では自分の看護をしていた白い着物の女性の「心持が少しも分らず、相手ばかりが自分の思い通りに動くことに「恐ろしいもの」を感じたとある。それはその時点で女性の行為を「義務」とも「好意」とも判断出来なかつたからであろう。「好意の干乾びた社会」においては自らそれを見出さなくてはならないのである。

無論「余」は大人であつて、「一つの物を十筋二十筋の文から出来た様に見窮める力」を有している。「義務さへ素直には尽して呉れる人のない世の中」で他者の「好意」ばかりが得られるとは考えていない。そうであるからこそ、苦しい社会生活をより幸福に生き抜くために「自分に活力を添へた当時の此感情を、余は其儘長く余の心臓の真中に保存したい」と願わずにはいられない。「思ひ出す事など」の語りは、病中の心地よい記憶を留めるためだけでなく、遠からず「好意の干乾びた社会」に戻る日を見据えて自己の変化を対象化し始めたのだといえる。「三十分の死」を乗り越えた直後の「苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも与へなかつた」時とは異なり、体力が回復するにつれてその心も社会復帰後の〈生〉に向けて動き出しているのである。

## 第二項 社会への帰還

「余」は大病中に受けた多くの人からの心遣いや看病に心を打たれたという。しかし、人々の「親切」や「好

意を」が有難いのは、自活のために「疲れても已め得ぬ戦ひ」を強いる「好意の干乾びた社会」に生きていたという思いがあつたからである。これを踏まえて第二章末尾の「此感情が遠からず単に一片の記憶と変化して仕舞さうなのを切に恐れてゐる。——好意の干乾びた社会に存在する自分を甚だぎごちなく感ずるからである」という言葉を見てみると、「余」が社会生活に戻る」ことが強く意識されていることが分かる。第四章の時点で「余」は「病に因つて纔かに享け得た此の閑な心持を早くも失はんとしつゝある」と、修善寺以来の「閑適」な気分が薄れていることを明かしていた。この時にも社会復帰が意識されていたと考えられるが、その語りは「閑適」な日々を伝えるばかりであつた。それが第二章では社会生活を近い将来における現実として受け止めたうえで不安や恐れを独白になつている。閑な気持ちが日毎に薄れていくことの実感は一貫しつつも、それに対する感傷は強まっていることが読み取れる。

〈死〉の考察を終えてその後の〈生〉を語り始めた「余」であるが、「互殺の平和」や「好意の干乾びた社会」といった自己の帰るべき日常を視野に捉えた語りからは作品冒頭で掲げた「古風の趣」は薄れている。第二章では幼少期以来の南画趣味を振り返り、修善寺の自然を楽しんだことが伝えられている。しかし、「其位病中の余は自然を懐かしく思つてゐた」、「東京へ帰つたあとも暫らくは、絶えず美しい自然の画が、子供の時と同じ様に、余を支配してゐたのである」とあるように、その時々や喜びが今では薄れていることが示唆されている。また、修善寺で聞いた太鼓の音を取り上げた第二章では当時の様子を伝える前に「今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん——どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病気を憶ひ出す」という断りを置いている。一見して穏やかな療養生活が回想されているかに見えて、語り手は思い出に浸り続けるのではなく、快復した現在の視点からその隔たりを提示している。「ヂスイリユージョン」から「三十分の死」を経て、それ以降も「余」は「今の新しい人々と今の苦しい人々と共に、此古い香を懐かし」むことを主眼には語つてはいないのである。むしろ「今の新しい人々と今の苦しい人々」がそれぞれに苦闘を続けている社会への帰還こそが切実な問題となつていたのでなかつたか。

第二章にはオイケンの提唱した「精神生活」に対する批評が行われている。「余」は「束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に営む生活」であるそれを理想論としては否定していない。しかし、人はそれぞれに職業を持つが故に自由と束縛との調和をとつて「自己に便宜な様に又世間に都合の好い様に(中略)生活すべく天から余儀なくされてゐる」のだと、現実的な側面から批判を加えている。「たまく文芸を好んで文芸を職業としながら、



同時に職業としての文芸を忌んでゐる」という言葉には、自ら職業人として自由と束縛の葛藤を抱えていることが明瞭に示されている。また、大患によつて「子供の時以来久振で始めて此精神生活の光に浴した」ものは、それはわずか一、二ヶ月間のことであつた。章末に置かれた「病が癒るに伴れ、自己が次第に実生活に押し出されるに伴れ、斯う云ふ議論を公けにして得意なオイツケンを羨やまずにはゐられなくなつて来た」の一節はオイケンに対する皮肉であり、元の生活への回帰を目前にした「余」は社会人としての立場に立っている。

大病はそれまでの生活に疲れていた「余」の心に、生き返つた「嬉しさ」と他者への「感謝」をもたらせた。しかし、それらの思いは病に倒れたことで得られたものであり、快復後の実生活がどのように変わるのかは予想さえできない問題であつた。その答えは語りではなく自らの「経験」から得る以外に方法はないと、「余」はそのことに思い至つたのではないだろうか。第三章では「病の癒えた今日の余」が自己を「白髪と人生の間に迷ふもの」としている。今の自分の心がいかなるもので、これから先どのように生きていくのであろうかと自問している。「余」の関心は既に「思ひ出す事など」の先に向けられているのである。

そして、作品は第三章、修善寺を發つた日の回想によつて閉じられる。「初めはたゞ漠然と空を見て寐てゐた。それから暫くして何時帰れるのだらうと思ひ出した。或時はすぐにも帰りたい様な心持がした」。二週間後の帰京が決まつた時には惜しい気もしたが遂に「尋常の二週間の如くに去つた」とあり、宿を出た馬車の中では「わが帰るべき所には、如何なる新しい天地が、寐ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構へてゐるだらうかと想像して独り楽しんだ」といふ。修善寺を出發した当時の「余」は「閑適」の日々を喜んでゐた。その記憶が薄れていくことの実感はそのほどなかつたと考えられ、「思ひ出す事など」の執筆に向かう前でもあり、当然「ヂスイリユージョン」にも行き当たつていないのである。病前とは全く異なる心境にあつて、帰り行く東京でさえ「新しい天地」として楽しみにしてゐた。その一方で、最終章を語る時点では病が癒えて元の生活に帰り行く人である。修善寺以来の病中に得た「心持」を失う不安や恐れを抱えていながらも、家族の生活のために「互殺の平和」を求めて働く社会人としての自覚と覚悟を持つてゐる。この最終章からは、帰京する先に待ち受けるものを知らず楽しみにしてゐた過去の「余」と、帰還する社会に待ち受けるものを知つたうえでそこに向かいつつある現在の「余」との対照が読み取れる。「余」は「思ひ出す事など」での過去の回想と現在の述懐とを通じて、病後の生活に向けた指針を見出してゐたのである。

以上のように解される作品終盤であるが、先に述べた通り、一九一〇（明治四三）年一二月以降の漱石の日記

はほとんどが天気や来訪者の氏名、体重の羅列であり、この時期の「思ひ出す事など」執筆と並行して何を考えていたのかを直接的に伝える資料は少ない。体調に関しては、同年一月三十一日付の笹川臨風宛絵葉書に「漸く本復に近付き申候」との一節が見受けられる。日記によると十一月一二日の体重が「四十六キロ七百」<sup>47</sup>、一月二〇日は「十二貫九百四十也」<sup>48</sup>、一月二〇日は「五十一キロ」、一月二四日は「五二キロ百」、翌年一月七日は「五三キロ三百」であった。一度目の退院前日の七月三〇日が「四十九キロ四百」、再入院後間もなくの一月三〇日が「四十四キロ五百」であったことから、大晦日の「本復に近付き申候」の言葉は相応の実感を伴ったものであったといえる。第十九章の執筆時期は不明であるが、掲載は一月二十九日である。「思ひ出す事など」の語りが実社会での生活を意識したものへと転じていった理由として、作品内の主題の展開だけではなく、筆者自身の関心が体調の回復と共に退院後の生活に向かっていたという点も挙げられるだろう。

大患は漱石を社会から隔離し、平穏な生活と多くの人々の親切を経験させた。しかし、病が癒えれば再び「日夜共に生存競争裏に立つ悪戦の人」としての生活に帰らなくてはならない。漱石は修善寺滞在中の九月二六日に「病正に軽快に移らんとして、今更病を慕ふの情に堪えず。本復の後ばかり寛容ある、*stress* なき生涯、自己の好む儘の心の働きを尽して朝より夕に至る時間、朝夕余の周囲に奉侍して凡て世話と親切を尽す社会の人、知人朋友もしくは余を雇ふ人のインダルジェンス。――是等は悉く一朝の夢と消え去りて、残るものは鉄の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戦はねばならぬ社会文ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず」と日記に書き込んでいた。長与胃腸病院への再入院後、日々移ろう心と薄れていく記憶とを書き残すために、周囲の制止を振り切って「思ひ出す事など」を書き始めた。しかし、予期せぬ「ヂスイリユージョン」に陥った。その後の回想では「命根」の所在を「覓」めたが「竟」にその答えを得ることはできなかった。他者の親切、喜ぶべき〈生〉の実感は病氣中だからこそ得られたものであった。「好意の干乾びた社会」に帰ってどれだけそれらを感じ、活力を享けられるのかは不明である。

「思ひ出す事など」の語りにおける主題は以上のように発展・変遷している。最終的には生き返った〈生〉をいかに「生き甲斐」のあるものとし得るのかということは復帰後の生活の中で自ら確かめなくてはならないという認識に至った漱石の姿が読み取れるのではないだろうか。未解決のまま語り残された課題の解答もその先に見据えていたはずである。

これまでに述べてきたように、「思ひ出す事など」は筆者の「ヂスイリユージョン」を転機として変化している。

「三十分の死」をめぐっては一見して第五章で示された「自分がつい死にもせず今日に至った経過」の報告とも取れる回想を行いながら、〈死〉そのものを捉えようようとしていた。また、第四章では「今の新しい人々と今の苦しい人々」とともに「古い香を懐かしみたい」と述べ、作中には漢詩や俳句が多く詠まれているが、作品の終盤における現在時点からの語りには「苦しい」社会に意識が向けられていた。第八章以降、漱石は回想という一貫した形式のもとでその語りの質を変えながら作品を書き進めていった。「ヂスイリユージョン」という想定外の問題に直面したが、そこから自身の過去に取り組むべき課題を見出して作品の中で問うていったのである。

#### 第四節 「病院の春」の「アイロニー」

「病院の春」は漱石が「思ひ出す事など」を脱稿し、長与胃腸病院を退院した後<sup>4</sup>に執筆された作品である。本章の冒頭に言及したように、本作は「思ひ出す事など」が単行本『切抜帖より』<sup>5</sup>に収録される際にその第三章とされた。しかし、変更に至った経緯や意図は明らかにされないまま、初刊以降の出版においてはこの形式が通例となっている。

「思ひ出す事など」研究では「病院の春」で言及されている「アイロニー」が一つの論点とされてきた。伊豆利彦<sup>5.1</sup>は退院後の漱石が「早くも入院中『思ひ出す事など』を書いていた自分を遠い過去として、現在との対照に〈アイロニー〉を見出している」と指摘した。また、奥野政元<sup>5.2</sup>は漱石が『「思ひ出す事など」を書く今の状態が、以前の自分を一まとめにしたものとは、自己の意図や意識や感情や更には思想をも含めて、逆転するようなものであることに突き当たっていた」と述べ、「思ひ出す事など」全体に「アイロニー」が構図化して示されている」として作品内の「アイロニカルな表現手法」について考察している。漱石が語った「アイロニー」の捉え方は各論者によって大きく見解が異なっているが、「思ひ出す事など」の読みにも関わる問題といえる。「病院の春」も短い随想でありその内容も胃腸病院再入院中の回想となっているが、執筆の時期や環境に隔たりのある「思ひ出す事など」からの連続性については慎重に見極める必要がある。そこで、本節では「病院の春」を独立した作品と捉えてその中で二度言及されている「アイロニー」について考察する。

作品は「生涯にたつた一遍しかない」という病院内の年越しの様子から語り始められている。入院生活に慣れ親しんだせいで「感慨と云ふ程のものは浮かばなかつた」というが、病院で新年を迎えることを思うと「アイロニー」のローマ字が頭に浮かんだという。しかし、それでも「感に堪えぬ趣は少しも胸を刺さずに」正月を迎

えている。その後、二月末に退院するまでに見てきた様々な入院患者について回想し、「退院後一ヶ月余の今日になつて、過去を一攫にして、眼の前に並べて見ると、アイロニーの一語は益鮮やかに頭の中に拈出される。さうして何時の間にか此アイロニーに一種の実感が伴つて、両つのもが互に纏綿して来た」と現在の心境を述べている。そして、それは「あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、たゞ当時の自分と今の自分との対照がはつきりと残る為だらうか」と締めくくっている。このように、筆者は「アイロニー」を異なる状況下で二度感じており、それぞれについて見ていく必要がある。

大晦日の漱石について、一二月三一日付の笹川臨風宛絵葉書に「漸く本復に近付き申候」と書くなど、体力の回復を感じていたことは前節で既に示している。「病院の春」で回想されているのはまさにその時期であり、病院での越年に際して「アイロニー」が頭に浮かんだ理由もここにあるといえよう。しかし、それでも「感に堪えぬ趣」がなかったのは、一方で「親しく患者の生活に根を卸したから」である。そして、この時にはまだ「思ひ出す事など」は連載中で第一章までしか発表されておらず、筆者自身も終盤の語りに見られるような意識にまで至っていないからでもあると推測される。一度目の「アイロニー」とは、長期入院患者としての立場と回復の実感との齟齬によつてもたらされたものであった。

それでは「病院の春」を執筆する現在における「アイロニー」はどうか。漱石は「退院後の一ヶ月余の今日になつて、過去を一攫にして、眼の前に並べて」みた時に「益鮮やかに頭の中に拈出」されたというが、その「過去」とは決して無制限なものではない。直前に書かれている「余は是等の人と、一つ屋根の下に寐て、一つ賄ひの給仕を受けて、同じく一つの春を迎へたのである」という内容から想起される、主に入院生活のことを指していると考えられる。そこで重要なのが「是等の人」、すなわち他の入院患者たちである。

筆者が回想している患者は、いずれも死んだか、治る見込みのない人たちである。ある者は病状が改善しないことを心配した息子と共に帰郷したことがきっかけで死に、別の患者は死を受け入れて「気の毒な程大人しい往生を遂げた」とあり、また別の一人はいつの間にか衰弱して亡くなっていた。その他にもある癌患者は治療の見込みがなくても空景気をつけて医師に向かい、付き添いの妻には暴力を振るっていた。不治の食道狭窄の患者は灸点師を呼び、海草を煎じて飲むなど、必死に病気を治そうとしていたという。末尾に「……」とあるのは、同様の患者を他にも多く見てきたからであろう。

以上を踏まえると、これらの人々と、無事に退院を果たした自分との対照が、筆者の感じた二度目の「アイロ

ニー」であったと考えられる。そこには、重い病や（死）と向き合いながら新年を迎えたであろう患者達と、「感に堪えぬ趣」もなかった自分との対照も含まれている。そして、「アイロニー」を感じながらも平凡に正月を迎えた過去の自分と、その自分と同じ日に生きていた患者達を思いながら、過去と現在との差に感じ入っているとも解される。漱石は自他の過去と現在をそれぞれに見比べながら「アイロニー」の実感を深めていたのである。

伊豆利彦<sup>53</sup>は先掲の論中において、漱石が入院中の患者達について「彼等が懸命に求め得て<sup>マ</sup>られなかつた生を享受しながら、その生に傷つき、かえって狭い閉じ込められた病院の生活をなつかしみさえしている」と「アイロニー」の説明をしている。そのうえで「生と死、明と暗、知と無知、過去と現在——（アイロニーの一語）は『思ひ出す事など』一篇をつらぬいているばかりでなく、『彼岸過迄』『行人』『ころろ』と経て『硝子戸の中』となり『道草』『明暗』の世界に展開する」とまで論じている。「アイロニー」の一語は様々な解釈が可能な言葉であり、その意味をどこまでも拡大して捉えることは可能である。しかしながら、「病院の春」の語りからそれほど大きな意味を認めることができるのであろうか。

「病院の春」において、「アイロニー」を語る現在と比較されている過去は歳末から新年にかけての数日間である。そこには伊豆のいう「生と死、明と暗、知と無知、過去と現在」の対照を見出せるが、極めて限定的なものでしかない。「思ひ出す事など」において問題とされた他者への感謝や社会生活については触れておらず、「ヂスイリュージョン」の解決となり得る認識も見られない。何よりも、漱石が「思ひ出す事など」執筆を通じて得た意識や課題を退院後の僅かの期間で「アイロニー」の語で結論したとは考え難い。この作品が「思ひ出す事など」からの主題を引き継いでいるとは言えず、筆者は現在時点から病院での越年の記憶のみを呼び起こしているのである。「アイロニー」はその範囲内で読み取るべきだろう。

「病院の春」は一九一一（明治四四）年四月九日の「大阪朝日新聞」の「日曜附録」<sup>54</sup>に発表された。その日のテーマは「春」<sup>55</sup>であり、漱石への執筆依頼も春をモチーフにした一編であったことは間違いない。その結果として陽暦と陰暦のそれぞれの春が題材とされているが、そこに「思ひ出す事など」で問うてきた問題意識が反映されていないのは必然的なことであつたように思われる。それゆえにこの二作品は相互に独立した作品として区別しなくてはならず、「思ひ出す事など」の主題も「病院の春」の「アイロニー」に回収されることなく、それ以降の漱石文学の中で問われていったものとして捉えるべきだろう。

## 第二章 『彼岸過迄』

夏目漱石は「思ひ出す事など」を脱稿後、一九一一年（明治四四）年二月二六日に長与胃腸病院を退院し、同年一二月二八日頃から『彼岸過迄』の執筆を開始した<sup>56</sup>。この小説は〈修善寺の大患〉からの本格的な復帰作として一九一二年（明治四五）年一月二日から四月二九日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載され、元号が大正と改められた後の同年九月に春陽堂より単行本として刊行された。

作品は「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」の六編とごく短い「結末」から成る。「風呂の後」から「報告」までは田川敬太郎の言行が中心に描かれ、「雨の降る日」から「松本の話」では敬太郎の友人である須永市蔵の過去が焦点化され、「結末」で「敬太郎の冒険」（「結末」）として全体が総括されている。連載に先だって発表された「彼岸過迄に就て」<sup>57</sup>で作者は「久し振だから成るべく面白いものを書かなければ済まないといふ気もちがいくらかある」として「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやう」な構想を示す一方で、「小説は建築家の図面と違って、いくら下手でも活動と発展を含まない訳には行かない」、「旨く行かなくつても、離れるとも即くとも片の附かない短篇が続く丈の事だらうとは予想出来る。自分は夫でも差支へなからうと思つてゐる」と自らの考えを述べていた。

先行研究では、敬太郎から須永へと中心を移す作品の転調が長編小説としての「構成上の破綻」<sup>58</sup>として指摘されるなど、作品としての評価は高くない。早期の論考では須永が作品の主題を負う人物として重要視されて主として後半部ばかりが論じられ<sup>59</sup>、後に越智治雄によって「われわれを人間存在の深所に導く一つの方途」としての敬太郎の意義が見出されてからは前半部への論及も行われるようになり<sup>60</sup>、作品の細部にわたって分析が行われるようになった。現在では全体を貫く視点や主題の有無が重大な研究課題のひとつとされ、短編連作形式で執筆された本作品を長編小説としていかに読み、評価するのかが問題となっている。

『彼岸過迄』を長編小説として評価する際に問題となるのは、何よりも敬太郎中心の前半から須永中心の後半への移行をどのように捉えるのかという点であり、従来の研究でも様々に論じられてきた。越智治雄は先の論中で娘の死をモチーフにした「雨の降る日」を契機に「稿をつぐ漱石の内面に一つの変化がおそらく起っている」ためであるとし、秋山公男は作者の執筆姿勢の「読者本位から読者本位への移行」と指摘している<sup>61</sup>。あるいは

作品全体を貫く主題や視点の有無という観点から、工藤京子は〈聴き手〉である敬太郎の成長から捉え<sup>62</sup>、佐藤泉は「ひとつの全体をつくろうとしないこの小説の特質」として「物語の統一的全体性なるものに対する積極的な批評」と評価している<sup>63</sup>。このように多様な観点から論じられてきた問題であるが、本論考では敬太郎と須永の二人にそれぞれ焦点をあてて作品主題の展開を明らかにすることで、どのような「活動と発展」により物語の中心が敬太郎から須永へと移行したのか、その内実を探りたい。

## 第一節 田川敬太郎

敬太郎の冒険は物語に始つて物語に終つた。彼の知ろうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂に其中に這入つて何事も演じ得ない門外漢に似てゐた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪に過ぎなかつた。(「結末」)

第一節では主に作品前半を対象に田川敬太郎について論じる。

「結末」でその役割が様々な人物の「物語」の〈聴き手〉であつたと総括されることになる敬太郎は、視点人物でありながらも「人形遣い」や「狂言廻し」などと評され、早期の『彼岸過迄』研究では自らの苦悩を語る須永市蔵に比して軽視されていた。その後、本章の冒頭で触れたように、越智治雄の指摘以降に敬太郎の積極的な評価が行われるようになった。玉井敬之は「敬太郎は「冒険」が終つたいま、ともかくも「世の中」を「眼の前」に見ることだけは出来るようになった」と一定の成長を読み取り<sup>64</sup>、山田有策は「読者」は敬太郎の視点に立ち、彼の行動にそつて〈冒険〉を体験していくわけで、彼の「異常に対する嗜欲」は〈読者〉のそれを引き出すためにこそ設定されているとも考えられよう。言いかえれば敬太郎は〈読者〉を眼に映る人間世界から不可視の内面の迷宮へと誘つていく装置として機能している」とその位置と役割の意義を指摘している<sup>65</sup>。現在の敬太郎に対する評も概ねこの両氏の論の延長上にある。確かに長い休養を経て「久し振だから成るべく面白いものを書かなければ済まないといふ気もちがいくらかある」と語る漱石が、読者を楽しませながらその興味関心を引き出す方法として敬太郎を形象したとは考えられる。そして、その見立てからは読者とともに「不可視の内面の迷宮」に触れて成長する姿も把握できる。

しかし、それでは、〈聴き手〉である敬太郎が後半から後景へと退いていくのは何故なのだろうか。単に彼が読

者を「不可視の内面の迷宮」へと誘うという役割を果たしたから、あるいは予告に示された作者の意識が変わったからなのか。この問題を小説の「活動と発展」の結果と断じるのは容易であるが、その本質を作品の展開に沿って見極めていく必要があると考える。

〈聴き手〉としての視点人物という設定は、『彼岸過迄』の後に執筆された『行人』の長野二郎と『心』の青年「私」という二人の語り手に引き継がれている。無論それぞれに敬太郎と異なる形象を与えられているが、いずれも作品後半では長野一郎や「先生」の苦悩の前景化にともない全面的な〈聴き手〉になるという共通点を持つ。〈後期三部作〉と称される短編連作形式の三小説で採用され続けたこの設定の意味と意義を考えるためにも田川敬太郎を中心とする前半の展開を詳細に分析考察し、それが小説の「活動と発展」にいかに関わっているのかを明らかにする。

### 第一項 敬太郎の形象

敬太郎は夫程験の見えない此間からの運動と奔走に少し厭気が注して来た。元々頑丈に出来た身体だから単に駆け歩くとはいふ労力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知してゐるが、思ふ事が引つ懸つたなり居据つて動かなかつたり、又は引つ懸らうとして手を出す途端にすぼりと外れたりする反問が度重なるに連れて、頭の方が段々云ふ事を聞かなくなつて来た。(『風呂の後』一)

『彼岸過迄』の「風呂の後」から「報告」にかけての三編では、大学を卒業したばかりの田川敬太郎は職業を求めて活動している。作品は、この「卒業して以来足を播木のやうにして世の中への出口を探して歩いてゐる敬太郎」(『風呂の後』四)が、同じ下宿に住む森本の話に耳を傾ける「風呂の後」より始められる。

その視点人物である敬太郎の人物像を端的に表しているのは、作中の「敬太郎は遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年であつた」(同)という語り手の言葉と、「自分はたゞ人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい」(『停留所』一)という敬太郎自身による説明であろう。従来の研究でもこれらから「冒険」や「探偵」行為に惹かれる敬太郎の基本的な性向が読み取られてきた。その捉え方については概ね異論ない。問題としたいのは、後者が作品冒頭の「風呂の後」ではなく、次編「停留所」で発せられた希望であるという点である。「探偵」という言葉がそこで初めて用いられていることから、「風呂の後」において敬太郎の



形象を深める展開があったはずである。そうした観点から敬太郎の意識の動きに着目し、『彼岸過迄』第一編を対象に分析と考察を行う。

「風呂の後」冒頭には「世の中が動き出してゐるなと気が付くや否や敬太郎は、休養々々と云つて又眼を眠つてしまつた」（「風呂の後」一）とある。自己の就職活動に思うような成果を得られない敬太郎は、玉井敬之の指摘するように「彼をとりまいてゐる「世の中」は動いていても、その「世の中」にかかわっていく契機を見出すことができない」状況に置かれており<sup>66</sup>、そこに明治末期の高等教育を受けた若者達が直面していた所謂（高等遊民）問題<sup>67</sup>の状況が意識されていることは諸家の指摘するところである<sup>68</sup>。しかし、ここで考えたいのは、「世の中への出口」を求めていながらも「平凡を忌む浪漫趣味」ゆえに同じ下宿に住む森本に好奇心を向けていて、さらにその対象が「現在の彼にあると云ふよりも、寧ろ過去の彼」（同三）にあるという敬太郎の関心のあり方である。

敬太郎にとって「凡て森本の過去には一種のロマンスの臭が、箒星の尻尾の様にぼうつと掩被さつて怪しい光を放つてゐる」（同）る。多彩な経験を語り聞かせる森本は「様々な冒険譚の主人公」（同）であり、「大抵な世間の関門を潜つて来たとしか思はれない男の経験談は、此夏学校を出た許の敬太郎に取つては、多大の興味があるのではない、聞き様次第で随分利益も受けられた」（同四）とも説明されている。また、敬太郎の「浪漫趣味」からくる「異常に対する嗜欲」（同五）は高等学校時代に発現し、現在では「都の真中に居て、遠くの人や国を想像の夢に上して楽しんでゐる許でなく、毎日電車の中で乗り合わせる普通の女だの、又は散歩の道すがら行き逢ふ實際の男だのを見てさへ、悉く尋常以上に奇なるものを、マントの裏かコートの袖に忍ばして居はしないだらうかと考へる」（同）だけでなく、自らも「神経にはつと響かせ得るやうな事件に、一度位は出会へるべき筈だといふ考へ」（同）を抱くようになってゐる。だからこそ「非凡の経験に富んだ平凡人とても評しやうのない森本の顔を見るのは、敬太郎に取つてすでに一種の興奮」（同）であつたという。

このように、「風呂の後」時点での敬太郎は卒業して「世の中」に出るべく職を求め一方で、それとは大きく志向が異なる「冒険」も望んでゐる。米田利昭に「社会に地位を得ることと浪漫趣味とはもともと矛盾する」という指摘がある<sup>69</sup>が、敬太郎自身にその認識は見られない。むしろこの「矛盾」の一因である「浪漫趣味」は、他ならぬ「様々な冒険譚の主人公」である森本によって「変わった事を仕了したうえで、考へて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事なら為らない方が余程増しだと思ふ丈でさあ。貴方なんぞ、是からの身体だ。大人しくさへし

て居りや何んな発展でも出来やうつてもんだから、肝心な所で山気だの謀叛気だのつて低気圧を起しちや親不孝に当らあね」(同六)、「貴方なんざあ其面白い事に打つからうくと苦勞して御出でなさる御様子だが、大学を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思ひますからね」(同九)などたしなめられてしまふ。敬太郎は、学士である敬太郎と「無学」(同七)な自己との違いを訴える森本の言葉を解しかね、やがて現在の仕事を「厭になつたから近々罷めやうと思ふんです」(同九)と言う言葉を聞いて「たゞ話が理に落ちて面白くないといふ自覚」(同)が残ることになる。

「世の中」に自己の位置を定めることのできていない敬太郎にとつて、森本は「大抵な世間の関門を潜つて来たとしか思はれない男」であると同時に「様々な冒険譚の主人公」であつた。それ故に森本の過去の経験を聞くことを「世の中」への接近と「異常に対する嗜欲」の充足を果たす手段と見ていたと考えられる。だからこそ「僕のような世間見ずは、御話を伺ふたんびに利益を得ると思つて感謝してゐる」(同八)とまで語るのであり、職を探しながら自らも「非凡の経験」を求める敬太郎は、自身と森本との相違を経験量の差から捉えていたといえる。彼は自身の将来に森本が語るような「冒険」を期待していたのである。しかしながら、敬太郎の認識は教育の有無によつて互いを区別する森本の言葉によつて相対化され、「理に落ちて面白くないといふ自覚」が森本を別の側面から評価させることになる。それらのことは「風呂の後」終盤の下宿の主人とのやり取りを通じて確かめることができる。

森本が下宿から姿を消した頃に求職を再開した敬太郎は「森本の予言通り、衣食の計のために、好奇家の権利を放棄したのである」(同十)と説明される。そして、下宿の主人から友人として森本の手紙を尋ねられると「未だを有つ青年として大いなる不面目」(同)を感じ、「少しは教育を受けた事のある男」(同十一)として「森本のやうな浮浪の徒と一所に見られちや、少し体面に係はる」(同)と言ひ返す。ここで敬太郎は「法科大学卒業生にふさわしい意識を森本に向け」ており、自らは学士として相応の位置を求めて活動し、森本とは異なる道を求め始めているのである。そして、次編「停留所」で再び自己の希望を語り出すとき、その内容は「風呂の後」でのそれと重なる部分がありながら決定的に異なつてもいる。

「糊口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆に価する事件に会ひたいと思つてるが、いくら電車に乗つて方々歩いてても全く駄目だね。攫徒にさへ会はない」などと云ふかと思ふと、「君、教育は一種の権利かと思つ

てみたら全く一種の束縛だね。いくら学校を卒業したつて食ふに困るやうぢや何の権利かこれ有らんやだ。夫ぢや位地は何うでも可いから思ふ存分勝手な真似をして構はないかといふと、矢つ張り構ふからね。厭に人を束縛するよ教育が」と忌々しさうに嘆息する事がある。(中略)敬太郎は警視庁の探偵見たやうな事が見たいと答へた。(中略)

自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念を以て眺めてみた。——斯ういふのが敬太郎の主意であつた。(「停留所」一)

まず、驚くべき非凡な出来事に遭遇したいという希望は前編から継続して語られているものと解される。ただし、「教育」を「一種の束縛」と受け止めていることは重大な変化である。敬太郎は高等教育を受けた学士として就くにふさわしい職業を求め、本項の冒頭に触れたように、「冒険」ではなく「探偵」への関心を示すようになった。森本が「様々な冒険譚の主人公」から「浮浪の徒」へと評価を変えたのも、その諫言にあつたやうな意味での「浪漫趣味」への「一種の束縛」の表れである。加えて、「探偵」行為そのものについては「予じめ人を陥れやうとする成心の上に打ち立てられた職業」(「停留所」一)と批判を加えつつも「ただ他の暗黒面を觀察する丈で、自分と墮落して懸る危険性を帯びる必要がない」(同)という点を評価している。森本が語るやうな「冒険」志向と決別して「自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい」と語る敬太郎は自らの「浪漫趣味」の変質を自覚し、「未来を有つ青年」としてそれまでとは異なる関心から「世の中」を眺めようとしている。「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運轉する有様」とは何か。先行研究で「不可視の内面の迷宮」とも呼ばれたそれは、端的に言えば「理」に落ちることのない人間の心の働きである。敬太郎は学士でありながら、決して説明のつかない人間の内面世界に触れようとしている。それでは、その目的や意義とは何であつたのか。「結末」で「何事も演じ得ない門外漢に似てゐた」と評される敬太郎であるが、「停留所」以降の内面の軌跡を辿る必要がある。

本項では「風呂の後」において敬太郎が森本との対話によって受けた変化を明らかにしてきた。当初の「浪漫趣味」の変質を示すそれらは、大学を卒業して「世の中」へと向かいつつある敬太郎の意識の移ろいと自己認識の明確化の過程を映し出すものであつて、彼の人物形象の深まりとしても位置付けることができる。次項では「停留所」と「報告」の二編から、そうした敬太郎の内面の動きをさらに追求し、「世の中に接触する経験の第一着手」

（「停留所」二十一）として行った「探偵」について論じる。

## 第二項 「探偵」

「停留所」は敬太郎の法科以来の友人である須永市蔵の説明から始められる。須永の人物像等の詳細については第二節に譲り、本項は二人の關係性を敬太郎の視点から見ていくことから始める。

敬太郎は「人間の研究者否人間の異常なる機関」を眺めていたいという希望を伝えても特に反応を返さない須永の態度を「老成と見えながら其実平凡なのだ」としか受取れなかつた。しかも自分を相手にしないやうな落付払つた風のあるのを悪く（「停留所」一）思っている。また、「法律を修めながら役人にも会社員にもなる氣のない」（同）点では「斯う小じんまり片付いて暮してゐる須永を軽蔑すると同時に、閑静ながら余裕のある此友の生活を羨やみ」（同二）ながら、この「二つの矛盾から出来上つた斑な矯味」（同）を抱いて頻繁に須永家を訪ねている。そこで明らかになるのは、特に「下宿代に窮する身分ではな」（同三）い敬太郎が「郷党だの朋友だの又は自分だのに対する虚栄心に煽られ」（同）て奔走しているということである。須永に対する反感や羨望からは、自己の求職活動に内的な動機を見いだせていない敬太郎の姿が浮かび上がってくる。

次に敬太郎の本質が「浪漫家」（同）であるということを変更して確認しておきたい。ただ、ここで重要なのは「冒險」を志向しなくなった敬太郎の「浪漫趣味」の対象が男女の關係に向かつているということである。それは敬太郎が須永の家で見た「女」（千代子）のことが氣になるあまりに「位地とか衣食とかいふ苦しい問題を自分と進んで持ち出して置きながら、矢張先刻見た後姿の女の事が氣に掛つて、肝心の世渡りの方には口先程真面目になれなかつた」（同四）ということから容易に確かめられる。「風呂の後」の時点でもそうした関心があつたことは確かであるが、その時点ではむしろ森本の「女氣どころか、第一人間の氣がない」（「風呂の後」七）に興味を抱いている。それが「停留所」以降は常に男女關係が敬太郎の興味の対象となつていく。

敬太郎はこの時点ではまだ名前さえ知らない千代子が須永の家へと入るのを見かけ、須永との關係に思いを巡らす。この日、須永は「敬太郎の好奇心に媚びるやうな話題」（「停留所」四）を持ち出すが、敬太郎はそれらに対する感想を語るよりも「実地小説のはびこる中に年来住み慣れて来た須永も亦人の見ないやうな芝居をこつそり遣つて、口を拭つて済ましてゐるのかも知れないといふ氣が強くなつて来」（同）る。敬太郎の「浪漫趣味」の変質が彼の須永に対する新たな興味を喚起し、後の「須永の話」へとつながっていく契機ともなっている。その

後、下宿へ帰りながら「本郷台町の三階から遠眼鏡で世の中を覗いてみて、浪漫的探険なんて気の利いた真似が出来るものか」と須永から冷笑かされた様な心持がし出した（同）という。敬太郎は須永とは異なり「下町生活に昵懇も趣味も持ち得ない男」（同五）で、「もう少し調子外れの自由なものが欲しかった」（同）とされている。しかし、この日は普段とは違い、「習慣に縛られた、且習慣を飛び超えた艶めかしい葛藤でも其所に見出したかった」（同）と江戸時代の空気を残した生活を想像する。ところが、森本の名前を考えた途端にその「空中に編み上げる勝手な浪漫が急に温味を失つて、醜くい想像から出来上つた雲の峰同様に、意味もなく崩れて仕舞」（同）う。学士ではあっても「虚栄心」に煽られて活動している敬太郎がどれだけ「昵懇も趣味も持ち得ない」下町生活を夢想しても、それは森本の語る「冒険譚」への憧れと大差のない「勝手な浪漫」に過ぎない。敬太郎はこの日の須永との対話から、「遠眼鏡」を通すことなく「世の中」を見据えてそこに自己の生き方を定めなくてはならないことを突きつけられたのである。

彼は今日迄何一つ自分の力で、先へ突き抜けたといふ自覚を有つてゐなかつた。勉強だらうが、運動だらうが、其他何事に限らず本気に遣り掛けて、貫徹し終せた試がなかつた。生れてから只た一つ行ける所迄行つたのは、大学を卒業した位なものである。それすら精を出さずにとぐる許巻きたがつてゐるのを、向で引き摺り出して呉れたのだから、途中で動けなくなつた間怠さのない代りには、漸の思ひで井戸を掘り抜いた時の晴々した心持も知らなかつた。（「停留所」十四）

その後、敬太郎は何事にも本気で力を尽くすことのなかつた自己を省みて、自分だけが「硝子張の箱の中」（同）に閉じ込められているようだと語つた宗教家の話を思い出す。「有楽座へ行つたり、落語を聞いたり、友達と話したり、往來を歩いたり、色々遣つたが、何れも薬缶頭を攫むと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかつた」（同）という実感は、やがて「突き抜けた心持を確かり捕まへる為には馬鹿と云はれる迄も、其所迄突つ懸けて行く必要があるだらう」（同）という考えに行き着く。しかし、これら「敬太郎の思案には屈託の裏に、何処か呑気なものがふわ／＼してゐた」（同十五）といい、自らの進退を辻占いに託そうとする。それでも「占なひには陰陽の理で大きな形が現はれる丈だから、実地は各自が其場に臨んだ時、其大きな形に合はして考へる外ありません」（同十九）と、工藤京子の指摘するように「没主体的な行為として選ばれた占ないが、結果的には、行為は主

体的に選びとるほかないことを教えた」のである<sup>71</sup>。そして、敬太郎は職の斡旋を期待して面会を求めた田口要作に「何でも遣ります」（同二十）と伝え、森本の「洋杖」を携えて「世の中に接触する経験の第一着手」（同二十一）として「探偵」に赴く。それは確かに「現実の世界にむかつて歩いていくこと」<sup>72</sup>に他ならないが、果たして敬太郎は何を見出したのだろうか。

「尋常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたもの」（同）を期待していた敬太郎にとって、田口からの依頼は「待ち設けた空想よりも猶浪漫的であつた」（同）という。しかし、その「探偵」で「敬太郎が収集した情報はきれぎれな印象の集積にすぎず、全体の脈絡をとおすことはほとんど不可能」<sup>73</sup>であつた。敬太郎はかつて「辻待の馬車を見てさへ、其所に一種のロマンスを見出す」（「風呂の後」五）というステイブンスンのように「平凡極まる東京の何所にでもごろ／＼して、最も平凡を極めてゐる辻町の人力車」（「風呂の後」五）にも様々な想像を巡らして「一人で怖がるやら、面白がるやら頻りに喜こんでゐた」（同）という。その後、彼の「異常に対する嗜欲」は「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念を以て眺め」ることを希望するようになった。しかし、小川町停留所で千代子と松本に対して行つた想像や観察はいかなる「ロマンス」や「知識」（「停留所」三十）にも結実しなかつた。先の工藤論ではそもそも「依頼者が与えておくべき探偵の目的」の欠如が指摘され、「目的が与えられていたならば、小川町での出来事は恐らく「本当」になつていたはず」だと論じられている。しかし、停留所で「四十恰好の男」（同二十一）を探れという田口の指示を超えて千代子に関心を持つて「探偵」をした敬太郎である。「こんな窮屈な思ひをして、入らざる材料を集めるよりも、いつそ露骨に此方から話し掛けて、当人の許諾を得た事実丈を田口に報告した方が、今更遅蒔の様でも、まだ気が利いてゐやしないか」（「停留所」三十六）と考えたとき、それは田口の依頼上の問題としてよりもむしろ敬太郎自身が目的と方法との乖離を認識した場面として捉える場面なのではないだろうか。敬太郎は想像では充足できずに確かな「知識」を求めようになつていたのであつて、そうでなくは「人間の異常なる機関」を目の当たりにすることにもならない。「世の中と接触する」ためには対象と直接関わることが必要不可欠なのであり、「停留所」の終局ではその希望が「探偵」行為によつては達せられないものだといふことが自覚されているのである。

語り手は敬太郎について「年の若い彼の眼には、人間といふ大きな世界があまり判切分らない代りに、男女といふ小さな宇宙は斯く鮮やかに映つた。従つて彼は大抵の社会的關係を、出来る丈此一点迄切落して楽しんでゐた」（「報告」五）と説明する。これは敬太郎が「改めて自分の心を解剖して見た」（同）場面での描写であり、彼自

身の気づきであつたと解される。また、田口に対して「あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に会つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手数が省けて、さうして動かない確かな所が分りやしないかと思ふので」（同六）と伝え、それが「最も簡便な又最も正当な方法」（同）だと評価される。松本から千代子との関係や小川町での待ち合わせの内実を「世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものゝ一つの様に」（同十三）聞き、「それを込み入つた文でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追掛て歩いたのが、さもく馬鹿くしくなつて来た」（同）とある。この後に田口から職業の斡旋を受けるのであるが、「報告」以降、「雨の降る日」からは「探偵」という言葉が発せられなくなる。敬太郎は田口の依頼を通じて自己の「浪漫趣味」の実態を知り、再度「世の中」に対する関わり方を改めていったと考えられる。

松本は敬太郎との面会で「志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。夫から彼の未だ嘗てかつて考へた事もない、社会観とか人生観とかいふ小六づかしい方面の問題を、時々持ち出して彼を苦しめ」（「報告」九）る。「男対女の問題」（同十）を持ち出しても、敬太郎には「肝心の肉を抜いた骨組丈を並べて見せる様」（同十一）なものとされている。また、その説明は「田口といふ男が自分にも判切呑み込めた様な氣」（同十四）にさせる一方で「自分は頭腦の悪い、直覚の鈍い、世間並以下の人物ぢやあるまいか」（同）と疑わせもする。これに対して、田口の計画した「悪戯」（同十三）の「遣方は悪辣でも、結末に温かい情の籠つた人間らしい点」（同十三）を聞いた敬太郎は「自分の馬鹿な振舞を顧みる後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨むよりも、寧ろ悪戯をした田口を頼もしいと思う心」（同）を自覚する。実業家の田口と「高等遊民」（同九）の松本はごく対照的な人物と言える。「世の中への出口」を求めている敬太郎が前者に親近感を抱くのは自然なこととして、「何物にか縛られて自由に動けない窮屈な感じ」（同七）を与えていた「批評に上らない前の田口でさへ、此男よりは却つて活きた人間らしい氣がした」（同十四）のはなぜか。

敬太郎は「探偵」に関する事実を「世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものゝ一つ」として受け取っている。それは話が「理に落ちて面白くない」からである。松本の取り上げる「小六づかしい方面の問題」に頭を悩ませ、その話を「妙な理窟」（同九）として「肝心の肉を抜いた骨組丈」のように聞いていることから、「浪漫家」の敬太郎にとって「理」によつて語る松本は「人間らしい氣」がしないものと考えらえられる。このことは後の「彼は理窟が大嫌であつた。右か左へ自分の身体を動かす得ない唯の理窟は、いくら旨く出来ても彼には用のない贗造紙幣と同じ物であつた」（「須永の話」十三）という言葉からも確認できる。その一方で、松本の批評

により田口に頼もしさを感じたのは、「笹棒」(同十三)な「悪戯」をする田口に「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」を見たからではなかったか。「悪戯」にどれだけの説明がついても、それを計画・実行した田口の動機や目的といった内面には決して「理」が与えられない。すなわち有力な実業家である田口の「異常なる機関」である。このように、従来須永にばかり読み取られてきたそれは、田口にも見出される。そして、敬太郎の希望は「探偵」ではなく、対話によって叶えられたのである。

以上、「停留所」と「報告」について、その展開に沿って考察を進めてきた。密接な繋がりを持つこの二編からは、「探偵」をモチーフに、敬太郎が新たに登場した須永、田口、松本の三人との対話を通じて内面を変化させて「世の中」と接触していく過程が読み取れる。確かに「探偵」行為そのものは敬太郎にとって有意な結果をもたらせるものではなかったが、その前後における三者との面会には重大な意義が認められるのである。

次編「雨の降る日」は敬太郎が職に就いた後の時点から語り始められる。これ以降、敬太郎が〈聴き手〉となって表舞台から消えていく点はどのように理解されるのであろうか。項を改めて考察する。

### 第三項 消える敬太郎

雨の降る日に面会を謝絶した松本の理由は、遂に当人の口から聞く機会を得ずに久しく過ぎた。敬太郎も其内に取り紛れて忘れて仕舞った。不図それを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家へ出入の出来る身になつてからの事である。(「雨の降る日」一)

松本が雨の降る日に面会を断る理由が明かされる「雨の降る日」は、作品研究において『彼岸過迄』のなかでも他の編との連なりの薄い、独立的なものと思なされてきた。なかでも、娘の死をモチーフにした「雨の降る日」執筆を契機として敬太郎を「押しつけて、存在の根を追わずにはいられぬ須永が、漱石の内部に大きな姿を現わす」とした越智治雄の論考<sup>74</sup>の影響は大きく、須永の内面描写に重点を移していく作品の転換点として注目されてきた。確かに「雨の降る日」での松本宵子の死と葬儀には、作者の経験が色濃く反映されている。冒頭で「風呂の後」以来求職中であった敬太郎の活動は終わり、語り手も千代子に寄り添い、次の「須永の話」からは殆ど須永自身が語ることになる。この一編に独立性や作品の転機を見ることは易しい。しかし、それでも敬太郎は〈聴き手〉として存在し続けている。果たして前三編から何が引き継がれているのだろうか。



「雨の降る日」では須永と千代子の確執の一端が語られており、それが「須永の話」で焦点化されることは改めて確認するまでもない。「千代子の自意識」が顕在化された語りが、「雨の降る日」になぜ松本が面会を拒絶するのかというテーマを逸脱して、須永の態度を語っている」とした安藤恭子の指摘<sup>75</sup>は卓見である。しかし、宵子の死が描かれているこの短編で最も重要なのはやはり、雨の日の来客対応中に娘が急死を遂げたことで雨日に客を断るようになった松本の心であったと考える。敬太郎は千代子からその顛末を聞くことになるのだが、作品は自体は千代子の視点に寄り添う語り手によって語られている。両者の話には差異があると考えられるが、そのことについては後に検討することとして、まずは「雨の降る日」の内容を考察する。

松本夫妻には五人の子があり、千代子は「真珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちた」（「雨の降る日」二）という末娘の宵子を一番可愛がっていた。食事の世話をしている途中に宵子が突如として倒れ、その死が確かめられると松本夫妻に謝罪し、「途切れ／＼の言葉で、先刻自分が夕飯の世話をした時の、平生と異なる元気な様子を、何遍も繰り返して聞かし」（「雨の降る日」四）た。問題は、松本がこの時には「何うも矢つ張り不思議だよ」（同）と言うのみで、「己は雨の降る日に紹介状を持つて会ひに来る男が厭になつた」（同八）という発言が宵子の火葬・骨上げを終えた後であるという点にある。なぜ後になって雨の日の来客が「厭になつた」のか。ここでは勝田和學の「人間の死という厳粛な場面においてさえ、その状況に応じて人の感情は変化するということを千代子という人物を描出し、人間存在の多元性を印象づけようとしたのが「雨の降る日」である」<sup>76</sup>という指摘を参考にしたい。

千代子は涙も流さない須永の「不人情」（同七）、「まだ子供を持った事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」（同）という言葉を批判的に捉えている。また、須永が火葬場の竹藪を見て「死人の膏が肥料になつて、あゝ生々延びる様な気がするぢやないか。此所にできる筈は屹度旨いよ」（同八）と話した際にも「おゝ厭だ」（同）と返答している。その一方で、千代子自身は「切なさの少し減つた今よりも、苦しい位悲しかった昨日一昨日の気分の方が、清くて美しい物を多量に含んでゐたらしく考へて、其時味はつた痛烈な悲哀を却つて恋しく」（同六）感じていた。須永と千代子は、ともに勝田の言葉通りのことを示しているといえよう。松本は宵子の骨上げには参加しておらず、少なくともそれを終えた時点ではここに引用した二人のやり取りや千代子の内心を知っていたとは考え難い。彼が居合わせたのは、宵子の遺骨とともに一同が松本宅に会した次の場面である。

やがて家内中同じ室で昼飯の膳に向つた。「斯うして見ると、まだ子供が沢山あるやうだが、是で一人もう欠けたんだね」と須永が云ひ出した。

「生きてる内は夫程にも思はないが、逝かれて見ると一番惜しい様だね。此所にゐる連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ」と松本が云つた。

「非道いわね」と重子が咲子に耳語いだ。

「叔母さん又奮発して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵えて頂戴。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる訳にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介状を持つて会ひに来る男が厭になつた」(「雨の降る日」八)

宵子を「沢山」の中の「一人」として数える須永の言葉に対して松本は喪つた娘のかけがえのなさに感傷を深め、「瓜二つの様な子拵へて頂戴」と言う千代子に対して松本の妻である多代は代替不可能な命の唯一性を説く。明らかなのは、松本夫妻の「親子の情愛」の深さに他ならない。それ故に松本は、千代子と須永の言葉により自らの末娘に対する愛情を確かめ、その喪失の痛みを永久に忘れないために雨の日の来客を断ることを決心したのだと考えられる。なお、先に引用した安藤の論にはこの松本の「親子の情愛」の物語が、「血のつながらない須永を育て、自分の血を分けた娘を失い、血のつながった千代子を嫁にすることに執着し続ける―すなわち、須永では埋められない(むしろ、傷となっている)ものの代わりを求め続ける須永の継母の物語とは裏表の関係をなしている」という指摘もあり、これもまた正鵠を射ぬいている。ただ、本論では敬太郎に視点を戻して考察を続ける。

以上のことが明らかになる作品の語りに対して、千代子が敬太郎に対して何をどのように伝えたのかということとは無論不明である。そして、敬太郎がその話をいかに受け止めたのかも「雨の降る日」には言及されていない。ただ、「結末」では次のようにまとめられている。

彼は千代子といふ女性の口を通して幼児の死を聞いた。千代子によつて叙せられた「死」は、彼が世間並に想像したものと違つて、美しい画を見る様な所に、彼の快感を惹いた。けれども其快感のうちには涙が

交つてゐた。苦痛を逃れるために已を得ず流れるよりも、悲哀を出来る丈長く抱いてゐたい意味から出る涙が交つてゐた。彼は独身ものであつた。小児に対する同情は極めて乏しかつた。それでも美しく美しいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐れであつた。彼は雛祭の宵に生れた女の子の運命を、恰かも御雛様のその如く可憐に聞いた。(「結末」)

「結末」では敬太郎が心惹かれた千代子の「涙」や宵子の「死」の「運命」が主題であつたかのように説明されている。しかしながら、「雨の降る日」で明らかにされているのは、誰よりも「悲哀を出来る丈長く抱いてゐたい」と願い、「小児に対する同情」を強く抱いているのが、雨の降る日に來客を断り続けている松本だということである。それは、「親子の情愛」という「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運轉する有様」ではなかつたか。「あの叔父さんも随分變つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を断つた事があつてよ。今でも左うかしら」(同一)という千代子の言は、松本に対する無理解を端的に表している。同様に、「結末」を見る限りでは、敬太郎が千代子の話から松本の内面深く「人間の異常なる機関」に触れることができたように思われぬ。ここに敬太郎の認識の限界が読み取れる。ただ、それでも「雨の降る日」の語りは敬太郎に「変な男が有つたものだといふ觀念を数度繰り返」(「報告」八)させた松本の内面を確実に照らし出しているのである。

「結末」は千代子と須永の関係性が焦点となる「須永の話」と「松本の話」の後に執筆されたものであり、語りはその二編を終えた時点から全体を振り返っている。先に「敬太郎の限界」と指摘したものが千代子の語りと「雨の降る日」の語りの差異によるものであるのか、作者自身の意識の変化によるものであるのかは判別できない。しかし、ここで確かなことは、「雨の降る日」の主題と「結末」のまとめが齟齬をきたしているということである。先行研究において「雨の降る日」の独立性が強く作品の転換点と位置付けられてきたのは、そのことが省みられずに読まれてきたことに一つの原因があつたのだろう。実際に「雨の降る日」の語りが「風呂の後」から「報告」までの主題を受け、その延長上に展開されていることはこれまでの考察によって明らかにしている。

一九一一(明治四四)一月二十九日に五女雛子が夭折した漱石は、その日より娘について連日にわたり日記に記している。その詳細な書き込みや、一月三日の「自分の胃にひびが入つた。自分の精神にもひびが入つた様な気がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである」、「また子供を作れば同じぢやないかと云ふ人がある。ひな子と同じ様な子が生れても遺恨は同じ事であらう。愛はパーソナルなものである」とい

う言葉からは悲痛な思いが生々しく読み取れる。同じ三日の日記には葬式や骨上げ、納骨、待夜等の儀式が続く。「多忙」を記したうえで、「凡ての努力をした後で考へると凡て努力が無益の努力である。死を生に変化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺憾なことはない」と書いている。また、この年に使用していた手帳には作品の構想と思しきメモが記されている<sup>77</sup>。そして、翌年三月二一日付中村古峽宛書簡には「雨の降る日」につき小生一人感慨深き事あり、あれは三月二日（雛子の誕生日）に筆を起し同七日（同女の百ヶ日）に脱稿、小生亡女の為好い供養をしたと喜び居候」と書いている。「雨の降る日」に込められた作者の悲しみと亡児追悼の念を否定することはできないが、「死を生に変化させる努力」の観点から見ること不可欠であろう。

漱石は前年の「思ひ出す事など」において「ヂスイリユージョン」の問題と大塚楠緒子の死に際して「殊更に気分を易へ」て俳句を作ったことを明かしている。そして、不可知な（死）に対する結論は遂に出されないままであった。『彼岸過迄』でも宵子の死は「不思議」なものとして扱っているが、漱石は「この中で松本の『superstitious』<sup>78</sup>に自ら「そんな我儘な断り方が世間にあると思ひますか」（「報告」九）と自覚しながらも幼子を喪った痛みを忘れることなく続けようとする「理」を超えた「親子の情愛」を表している。そして、それと同時に、宵子喪失の悲しみを薄れさせ、松本を「随分変つてのね」と評する千代子の視点も用意している。漱石は「雨の降る日」の松本を描くことで五女雛子の（死）への思いを永遠に書き留める一方で、千代子の視点に沿って語らせることで作品をそこにとどめることを拒否しているのである。敬太郎が松本の内心に触れられなかった理由の一端がここにもあるのではないだろうか。いずれにしても、この小編の執筆こそ、「思ひ出す事など」の執筆時点には見出されていなかった「死を生に変化させる努力」なのである。

作品冒頭から視点人物であった敬太郎であるが、語り手が明らかにしたような松本の「親子の愛情」に触れることはできなかつたと考えられる。そうではあっても、実業家の「悪戯」も「高等遊民」の「親子の情愛」も、いずれも「理」に落ちることのない「人間の異常なる機関」であった。そして『彼岸過迄』にはもう一つ、敬太郎の友人須永の「退嬰主義」が語り残されていたのである。しかし、作品が人間の心の内深くに秘められたものを追求しはじめたとき、視点人物である敬太郎の理解は語り手の語りに追従し切れなくなっていた。それ故に全面的な（聴き手）として作品の表舞台から姿を消していかざるを得ず、語り手もまた寄り添うべき視点人物とともに消失しその役割を須永と松本に託さなくてはならなかつたのだと考えられる。ただし、間違えてならないのはそれが作品の主題的転換でもその断絶でもないということであり、敬太郎は自らの友人の「人間の異常なる機

関が暗い闇夜に運転する有様」を聞くべく耳を澄ましているのである。

以上、本節では『彼岸過迄』冒頭の「風呂の後」から「雨の降る日」までを敬太郎の視点に沿って分析考察し、「須永の話」に至るまでの各編の展開を明らかにしてきた。従来、「構成上の破綻」などの言葉で一長編作品としては低く評価されてきたが、そこからは主題を進展させながら語り進められる本作の軌跡が確かめられた。次節からは敬太郎が姿を消していく「須永の話」と「松本の話」はどのように読み取れるのか、須永市蔵に焦点を移して考察を続ける。

## 第二節 須永市蔵

「停留所」から登場し、「須永の話」では自らが語り手となって語り出す須永市蔵については多くの論者が「自我にのみ真実を見出そうとする明治末の近代的知識人の内面の問題性」<sup>79</sup>が託された人物として捉え、その苦しみから「明治末期インテリゲンチヤの消極的個人主義」<sup>80</sup>や「孤独地獄の苦しみや我執（罪）の問題」<sup>81</sup>といった主題を読み取ってきた。また、先行研究では主として「世の中」と接触する度に、「内へとぐるを捲き込む性質」（「松本の話」一）、「自我より外に当初から何物も有つてゐない男」（同二）という作中の人物評を前提に須永を論じてきたが、平岡敏夫の言うように「たんに須永の先天的な性格とすることはできず、運命的な出生の秘密によって形成されたところが大きい」<sup>82</sup>のである。しかし、平岡は同論中に「出生にかかわる暗い疑惑が、須永のそういう性格形成の根本原因」と指摘しながらもそれを単に彼の「運命」として片付けてしまっている。

『彼岸過迄』研究において比較的早期に人物像が確立され、近年ではあまり顧みられなくなった須永であるが、いずれの評も抽象的な近代知識人としての姿や苦悩に収斂している観がある。敬太郎が須永の中に見出すべき「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」がそうしたものであったとは考え難いのではないか。本節では須永の人物形象を詳細に検討し、作品後半部の主題を具体的なものとして捉えたい。

### 第一項 「退嬰主義」の形象

敬太郎に須永といふ友達があつた。是は軍人の子でありながら軍人が大嫌で、法律を修めながら役人にも会社員にもなる気のない、至つて退嬰主義の男であつた。少なくとも敬太郎にはさう見えた。（「停留所」一）

「停留所」の冒頭で初めて作中に語られる須永は、父の遺産により「衣食の上に不安の憂を知らない好い身分」（「停留所」一）であり、大学卒業後も職を求めずに母と「淋しいやうな、又床しいやうな生活」（同）を送っている。母からは「引つ込思案の男」（同十一）と語られ、自らも「信念の欠乏から来た引込み思案」（「須永の話」五）を認めている。また、叔父の松本は「世の中と接触する度に、内へとぐるを捲き込む性質」を指摘し、「高等学校時代から既に老成してゐた」（「松本の話」二）と証言している。いずれからも現在の消極的な性向を確かめることができるが、まずは「須永の話」で須永自身によって明かされる過去を参照しながら「退嬰主義」の内実に迫る。

「天に上る雲雀の如く自由に生長した」（「須永の話」六）という須永は、幼少期に生前の父から「今の様に腕白ぢや、御母さんも構つて呉れないぞ。もう少し大人しくしないと」（同三）と注意されても「父の小言を丸で必要のない余計な事の様」に考へ」（同）るなど、活発な少年であった。また、「実扶的里亜と云ふ名前さへ知らなかつた」（同四）頃の、「松本に、御前も実扶的里亜かと調戯はれて、うん左うぢやないよ僕軍人だよと答へた」（同四）という挿話は、当時の須永の軍人に対する肯定的な感情を端的に示している。確かに現在の須永は軍人であった父の「親しみの薄い、厳格な表情に充ちた」（同三）姿を伝えているが、進んで「僕軍人だよ」と語っていた少年時代には最も身近な軍人であったと思われる厳格な父を憧憬してもいたのではないか。少なくとも「軍人が大嫌」ではなかつたのである。

次に、須永が法学士であるという点に着目する。明治期の法科は「国家官僚の養成機関」<sup>33</sup>としての側面を持ち、そこから〈立身出世〉を志す場であつた。それ故に「友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機会」（同五）をやり過ぎし、親類の「出世の世話」（「停留所」一）も固辞し続ける姿勢が「退嬰主義」と評価されるのである。彼は「僕は時めくために生れた男ではないと思ふ。法律などを修めないで、植物学か天文学でも遣つたらまだ性に合つた仕事为天から授かるかも知れないと思ふ」（「須永の話」五）と、学科選択の後悔を語っている。しかし、法科へ進んだという事実は極めて重要である。すなわち、須永の母は「昔堅気の教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるもの、第一の務だといふ様な考へを、何より先に抱いてゐる」（同）というが、彼自身も〈立身出世〉や母の「考へ」に沿つた希望から法科に進み、後に「退嬰主義」に陥つたと考えられるのである。

「停留所」の冒頭で「軍人の子でありながら軍人が大嫌で、法律を修めながら役人にも会社員にもなる気のない、至つて退嬰主義の男」と紹介される須永であるが、「須永の話」での自己語りからはそれとは対照的な過去の

姿を読み取れる。活発な少年期には「僕軍人だよ」と話し、後に法学を志した彼は自らの〈家〉を自己の立脚点としていたと考えられるが、現在はそれを喪失しているのである。

須永は「高等遊民」（「報告」九）を自称する松本を「敬愛」（「須永の話」三十三）している。「朝から晩迄気骨を折つて、世の中に持て囃された所で、何処が何うしたんだ」（同五）、「植物学か天文学でも遣つたらまだ性に合った仕事为天から授かるかも知れない」という考えには、「銀行へ這入つて算盤なんかパチ／＼云はすなんて馬鹿があるもんか」（「停留所」十一）と言う松本の影響が認められる。作者である漱石は『彼岸過迄』の執筆に先立って一九一一年（明治四四）年に行なつた講演「道楽と職業」<sup>84</sup>の中で文明の開化に伴う職業の細分化・専門化が人々に「恰も自ら好んで不具になると同じ結果」をもたらすと指摘するとともに、「昔の道徳観や昔堅気の親の意見や又は一般世間の信用」が「家業に精を出す感心な人」と評価することが「自ら進んで不具になるやうな人間を世の中では賞めて居る」のだと説いている。また、「自己本位」の「道楽的職業」として「科学者哲学者もしくは芸術家の様なもの」を挙げている。この講演で示された職業観を踏まえると、「退嬰主義の男」として形象されている須永の言葉も、人々を狭い専門領域に押し込めて孤立させて行く文明社会とその中で無批判に「家業に精を出す」ことを良しとする「昔の道徳観や昔堅気の親の意見や又は一般世間の信用」に対する反発や批判と解する事ができ、「自己本位」の志向も読み取れる。しかしながら、問題は彼自身が「信念の欠乏から来た引込み思案」を認めている点であり、「退嬰主義」が積極的に獲得された態度ではないということに他ならない。

そもそも「須永の話」は千代子との関係について深く聞き出そうとする敬太郎に対して打ち明けられたものである。須永は長い語りの冒頭で現在とは異なる過去の自分を伝えており、その変化が彼自身にとって重大な意味を持つものとして意識されている事は確かである。そしてその変化には、須永は敬太郎に明かす事はなかったが、彼が父と「小間使」（「松本の話」五）であつた弓との子であるという、〈出生の秘密〉が深く関わっている。

須永がその出自に関する事実を知るのには大学を「卒業する二三ヶ月前」（同三）に松本を訪れた際である。それにも関わらず、「おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ」（「須永の話」三）という父の言葉と、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上るから安心なさいよ」（同）という母の言葉を挙げて「両親に対する僕の記憶を、生長した今に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人の此時の言葉であるといふ感じが其後々次第々に強く明らかになつて来た」（同）と言ひ、「厚い疑惑の裏打ち」（同）をするようになったと明かしている。また、母が「父を語る毎に、世間の夫のうちで最も完全に近いものゝ様に説明して已

まない」(同四)ことや、夭折した妹の妙が「兄さんとは決して呼ばなかった」(同)ことなど、出生に関わる事実を避けながら、幼い頃より家族関係に違和感のあった事を窺わせる語りを繰り返している。高等学校入学前後を振り返って「僕の情操は其頃から学校を卒業する迄の間に(中略)丸で荒み果てたのだらう」(同)と話しているように、須永は両親に対する「疑惑」の深まりとともに「腕白」さや「立身出世」の希望を失って「信念の欠乏から来た引込み思案」となり、やがて「退嬰主義」に至ったのである。「神経質に生れた僕の頭」(同三)を自称してはいるが、「物を誇大に考へ過したり、要らぬ僻みを起して見たりする弊」(同七)や「世の中と接触する度に、内へとぐるを捲き込む性質」と評される消極的な性格は疑いの過程で発現したものと見え、「自我より外に当初から何物も有つてゐない男」という松本の言葉も正鵠を射抜いていない。前項に引用した平岡敏夫の指摘通りである。それでは、「疑惑」の中で変質し自己の立脚点を喪失していく過程で彼がいかに葛藤し苦悩を深めていったのであろうか。母や千代子との関係に焦点をあてて考察する。

## 第二項 「最も親しい親子」関係

須永母子は自他ともに認める「親しい母子」(「須永の話」三)である。しかし、「小さいうちから能く母に逆らつた。大きくなつて、女親だけに猶更優しくして遣りたいといふ分別が出来た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた(中略)心配を掛ける事が多い」(同)と話しているように、須永は母の希望を知りつつそれに逆らっている。作中においては「家名を揚げるのが子たるもの、第一の務だといふ様な考へ」に反して職に就かないでいる点と、高等学校入学以後に勧められるようになった千代子との結婚に向かわないでいる点にそれが確かめられる。

親類からの斡旋も断つて就職を忌避し続ける須永は「僕は何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではない」(同五)と語っている。そして、千代子との結婚については大学二年の春に母に「何心なく従妹は血属だから厭だ」(同六)と伝えている。その時に須永が「疑惑」をどのように強めていたのかは明らかではないものの、幼い頃より家族関係に違和感を抱いていたことは確かである。「御母さんが是非千代ちゃんを貰へといふのも、矢つ張り血統上の考へから、身縁のものを僕の嫁にしたいといふ意味なんぞでせうね」(「松本の話」六)とは松本から「出生の秘密」を聞かされた後の言葉であるが、無意識的であったにせよそれまでに「血属」や「血統」への疑いがある程度抱いていたと考えられる。須永は、「家」や「血」と密接に結び付いている母の意向に逆らっているので



ある。

父と「小間使」の弓との子である須永は、その事実を知らされないまま育てられてきた。松本によると、須永の母は妊娠した弓に「相当の金を遣つて彼女に暇を取ら」（同五）せ、「男の子を生んだといふ報知を待つて、又子供丈を引き取つて表向自分の子として養育した」（同）という。赤羽学はその真意を「自分の地位を守るためであった。市蔵を生れた時から実子としておけば、その謀がばれない限り、自分の老後は安泰である」と利己的なものと捉え、須永と千代子の結婚に拘る意図についても「自分と血の繋がった姪の千代子と市蔵を妻あわせておけば、血統も財産も確保できると考えた」ためと述べている<sup>85</sup>。須永は母本人から千代子との結婚を勧める理由を「実は御前の為ではない、全く自分の為に頼むのだ」（「須永の話」六）と説明されている。その「疑念」の深まりと「退嬰主義」に至る過程には、赤羽の指摘するような母の利己性を疑うことも含まれていたのではないか。いずれにしても現在の須永のあり方は〈家〉や〈血〉を重視する母に反しており、これらの問題が関わらない限りにおいて親しい母子関係を保っている。

松本のお話を聞いた須永は、「凡てが明白になったら、却つて安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事もあります。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」（「松本の話」六）と話している。この「淋し」さは無論、産みの親である弓が亡くなっていったこと、現在の須永家に血の繋がりを持つ家族のいないこと、母と親戚によりそれらの事実が自分にだけ隠されていたことなど、幾重にもわたるものである。「始めは淋しくて仕方がなかつたのが、段々々々気の変に變化」（同八）し、やがて「母の顔を朝夕見るのが苦痛」（同）になつたという。ここには、同じ家に住んでいながら自分と同様に孤独であつた母に対する同情と、事実を隠したまま「家名を揚げる」働きや千代子との結婚を一方的に望み続ける事への反感とが混在している。その後、就職をしない事について「母も心細いだらう。僕も淋しい」（「須永の話」五）と敬太郎に話す現在の須永の「淋し」さには、「退嬰主義」の中で母に対する内心の葛藤を一人で抱える苦しみが加わっている。松本は「最も親しい親子」（「松本の話」五）と評価しているが、須永自身は母への親愛や同情、反発に引き裂かれながら様々な「淋し」さを噛みしめているのである。

次に「須永の話」の中心であり、須永の心情がより複雑に働いている千代子との「結婚問題」（「須永の話」五）を中心に考察を行う。

### 第三項 千代子との「結婚問題」

須永の母の妹と実業家の田口要作との娘である千代子について、須永は「子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆んど同じ家に生長したと違はない親しみ」(「須永の話」六)のある人物であると説明している。母による千代子との結婚の勧めに対して高等学校入学時分には「未来の妻といふ観念は丸で頭に無かつた」(同)といひ、大学二年時にも「何心なく従妹は血属だから厭だ」と拒否している。但し、「厭でも何でもないと答へた。然し当人も僕の所へ来る気はなし、田口の叔父も叔母も僕に呉れたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑する丈だからと教へた」(同)とあり、この時点までは「結婚問題」に否定的というよりもむしろ無関心であつたと言える。やがて「一頃は思ひ直して出来得るならば母の希望通り千代子を貰つて遣りたいとも考へ」(同七)るようになり、それと意識して田口家を訪れた結果、この後に語られる一連の煩悶に陥っている。

須永は田口夫妻の「観察」(同)から「彼等の社会に占め得た地位と、彼等とは脊中合せに進んで行く僕の性格」(同)を問題と認め、有力な実業家である田口家にとつて消極的な自分が千代子の結婚相手として相応しくないと見られていると判断している。田口の妻の言葉からは「形式を具へない断り」(同)を読み取り、田口の態度が「何方の眼で見ても可いのか、僕には今以て解らない」(同)にも関わらず「其時以来千代子を貰はない方へ愈傾いた」(同八)という。この時点で既に(立身出世)に消極的であつたことが確かめられる。しかし、再び田口家を訪れた須永は、千代子から結婚が決まつたという嘘を聞かされて動揺し、「千代子の嫁に行く行かないが、僕に何う影響するかを、此時始めて実際に自覚する事の出来た(中略)僕は今迄気が付かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた」(同)と、無意識に惹かれていた事を認識する。ここで千代子をめぐる須永の内面は愛情と「退嬰主義」的傾向からくる抑圧の二極に分裂する。

次に須永は「田口夫婦の意向や僕の母の希望」(同十一)を置き、「単に彼女と僕を裸にした生れ付丈を比較すると、僕等は到底も一所になる見込のないものと僕は平生から信じてゐた」(同)と振り返る。千代子を「あらゆる女のうちに尤も女らしい女」(同)と評価し、同時にその「純粹な感情」(同十二)を恐れてもいるという。彼は千代子が「頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る権力か財力を攫まなくつては男子でない」と考へてゐる(同)で、夫に対しても相応の働きを要求するであらうと思つてゐる。しかし、須永が想定した千代子の考へとは、田口夫妻の「観察」から二人の要求として感じたものと同質であり、母の「家名を揚げるのが

子たるものゝ第一の務だといふ様な考へ」とも軌を一にしている。「二人の間に横たはる根本的の不幸」(同)として語られるも、その本質はこれまでに見てきた「退嬰主義」と(家)の問題と同じである。彼は「如何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではな」く、千代子の結婚相手としてその期待や要求に応えることのできない不適合者として自己を抑圧する。但し、それは本心を押し止め得るものではなく必然的に内面の葛藤を生みだし、やがて大学三年から四年にかけての夏休みの鎌倉で高木の登場により「嫉妬」(同十六)に至るのである。

須永は高木を「適当な配偶を求めつゝある」(同)男として認識し、「初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をする所を聞いて、すぐ及ばないと思」(同)い、程なく「嫉妬」を自覚する。「自分の所有でもない、又所有する気もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑へ付けなければ自分の人格に対して申訳がない様な気がした」(同十七)とあり、千代子への想いと抑圧との激しい相克が窺える。そして、「わざと近寄つたり、わざと遠退いたりする」(同二十五)かのように見える千代子について、「鎌倉へ行く迄千代子を天下の女性のうちで、最も純粹な一人と信じてゐた僕は、鎌倉で暮した僅か二日の間に、始めて彼女の技巧を疑ひ出」(同三十一)したという。確かに千代子は、「看護婦見た様な嫁はないかつて探しても、誰も来手はあるまいな」(同八)と言う須永に対して「妾行つて上げませうか」(同)と発言し、結婚が決まったという嘘を吐くなど、「技巧」とも取れる言動を繰り返している。ただ、ここでは「技巧」の有無ではなく、須永がそれまでに千代子の「純粹」さを信じていたことと、鎌倉での「嫉妬」を契機としてその受け止め方が「疑ひ」へと変化したという点を問題としたい。

「僕の頭は僕の胸を抑える為に出来てゐた」(同二十八)、あるいは「僕は高等教育を受けた証拠として、今日迄自分の頭が他より複雑に働らくのを自慢にしてゐた。所が何時か其働らきに疲れてゐた」(同二十九)とは、須永が自らの過敏な思考について言い表した言葉であり、「僕の思ひ切つた事の出来ずに愚図々々してゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦勞をするからである」(同十二)も同様である。「恐れる男」(同)を自称する須永の思考を過剰に働かせるのは不安や恐れ、疑いの念であり、彼はそれらをもたらす要因との対峙を避けるために理屈をつけて自己を抑圧したり対象と距離を置こうとする。しかし、「世の中と接触する度に、内へとぐるを捲き込む性質」とも言い換えられる傾向によってその内面に新たな葛藤や疑いが生じ、更に苦しみを深める悪循環を成す。千代子への想いを自覚しながら高木にも千代子にも向き合う事なく「嫉妬」を強め、遂に「愛してゐたのか

も知れなかつた」はずの「純粹」な千代子の「技巧を疑ひ出」すことになつたのもそのためである。

須永は鎌倉から戻つた後に他ならぬ千代子から「嫉妬」に駆られた言動について「貴方は卑怯だ」(同三十四)と責められたといい、この時の口論を最後に「須永の話」の語りは閉じられる。松本は「二人の関係は昔から今日に至る迄全く変らない様だ」(「松本の話」一)と見ているが、現在も須永家に入りする千代子との関係の実際は不明である。須永は敬太郎から千代子の縁談の噂を話題にすると「何時もより沈んだ調子」(「須永の話」一二)で「又何か縁談が起り掛けてゐるやうだね。今度は旨く纏まれば可いが」(同)と話している。その言葉の内容とは裏腹な「調子」は、須永の心に今も残る内心の葛藤を示している。

大学二年の春から急転した「結婚問題」の語りは、須永が千代子への愛情をめぐつて自ら苦しみを深めて行く過程を伝えている。前項までに論じた「家」や「血」の問題とも密接に関わつてこの「結婚問題」は、当時はまだ大学生であつた須永を一層の「退嬰主義」に向かわせるものであつたと考えられ、現在も彼が「益偏窟に傾く」(同)要因のひとつなのではないだろうか。

#### 第四項 松本と敬太郎

僕がこんな煩瑣しい事を物珍らしさうに報道したら、叔父さんは物数奇だと云つて定めし苦笑なさるでせう。然し是は旅行の御蔭で僕が改良した証拠なのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんな詰らない話を一々書く面倒を厭はなくなつたのも、つまりは考へずに観るからではないでせうか。考へずに観るのが、今の僕には一番楽だと思ひます。(「松本の話」十二)

自身の「出生の秘密」を知つた須永は、大学卒業試験直後に出た旅先で認めた松本宛の長い手紙の中で「考へずに観る」ことによる自己の「改良」を伝えている。しかし、この旅行は作品冒頭の「風呂の後」以前の出来事であり、帰京しても「退嬰主義」と評され、敬太郎には「益偏窟に傾く」と言われている。彼の言う「改良」が一時的なものであることは既に先行研究によって確かめられているが、ここでは次の引用部に注目する。

千代子は其中から僕の描いた画を五六枚出して見せた。それは赤い椿だの、紫の東菊だの、色変りのダリヤだの、孰れも単純な花卉の写生に過ぎなかつたが、要らない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭は

ずに、細かく綺麗に塗り上げた手際は、今の僕から見ると殆んど驚ろくべきものであった。僕は自分の綿密であつた昔に感服した。

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より余程親切だつたわね」（「須永の話」十）

須永が、「十二三」（「須永の話」九）であつた頃の千代子<sup>87</sup>に頼まれて描いた画を見せられる場面である。これを先の手紙と比較すると、かつて「要らない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭はずに、細かく綺麗に塗り上げ」ていたという態度と、「改良」により「詰らない話を一々書く面倒を厭はなくなつた」という態度との間に共通点を見出せる。即ち、いずれにおいても須永は時間や労力を惜しむことなく対象を描く・書くことに没頭していたのである。「今より余程親切だつた」とされる過去において彼は「考へずに観る」に通じる姿勢を備えていたと言える。それらを「詰らない話を一々書く面倒」、「時間の浪費」と捉えてしまう現在の須永は、不安や恐れ、疑いに喚起される自己の過剰な思考に疲れ切っており、「一筆がきの朝貌」（同二十九）のように感じられた「小間使」の作に「尊い感じ」（同）を覚え、「考へる事が無いのが一番だ」（同）と伝えている。しかし、東京を離れた旅行中に束の間得られた「改良」が他ならぬ過去の姿勢と重なり合うという事実は、彼が真に求めている自己の在り方を端的に表している。須永はある老婆との交流について別の手紙に「百年も昔の人に生れたやうな暢氣した心持がしました。僕は斯ういふ心持を御土産に東京へ持つて帰りたいと思ひます」（「松本の話」十）と綴っている。「昔」を感じて「暢氣した心持」を「御土産」にするというこの旅行から読み取るべきは一時的な「改良」とその徒勞ではなく、決して戻ることのない過去を思う須永の悲しみである。そしてそれは、自身の生い立ちの回想から始められる「須永の話」での彼の語り全体に通底しているものであるだろう。

では、これまでに見てきた作品後半部の主題とも言える須永の苦悩が松本と敬太郎によってどのように受け取られているのか、作品前半部からの接続とも併せて考察を続ける。

「高等遊民」である松本は「市蔵を仕立上げた責任者として親類のものから暗に恨まれてゐる」（「松本の話」二）と話す。自分と須永を「同じ型から出来上つた偏窟人」（同）と見なす須永の母と田口の妻の考えを誤りと断じている。彼は「自分の好尚を移せる丈市蔵の上に移せば夫で充分だといふ無分別から、勝手次第に若いものゝ柔らかい精神を動かして来たのが、凡ての禍の本になつたらしい」（同二）と、「性格に応じて人を導く術を心得なかつた」（同）事に責任を感じている。「世の中と接触する度に、内へとぐるを捲き込む性質」を「市蔵の命根

に横はる一大不幸」(同一)と語る松本は、どれだけ須永を理解しているのか。

「一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事が出来るという主義」(同五)を持つ松本は、須永に(出生の秘密)を明かすことで「母子の間柄が悪くならうとは夢にも想像し得な」(同)いと言う。須永母子を「血を分けて始めて成立する通俗な親子関係を軽蔑しても差支ない位、情愛の糸で離れられないやうに、自然から確かり括り付けられてゐる」(同)と評価しており、事実を「何でもない事の様に話し」(同)ているが、須永は「命がけの報知として、必死の緊張の下に受け」ている。繰り返しとなるが、須永にとつては自分の「血統」を疑わせる両親への「疑惑」こそが長く続く苦悩の根源なのであり、(出生の秘密)をめぐる両者の認識の差は決定的と言える。

しかしながら、松本は回想を語り聞かせている敬太郎には「最も親しい親子として今日迄発展して来たのだから、御互に事情を明し合つた所で毫も差支の起る訳がない」(同)と持論を述べているが、事実を知って「淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」と訴えた須永には「御母さんには黙つてゐる方が可からう」(同六)と伝えてゐる。松本は「双方で腹藏なく凡てを打ち明け合ふ事が出来た」(同七)というこの時に須永の苦しみの内実の一端を垣間見て「性格に応じて人を導く」ことができたのである。

一方、前節でみてきたように、敬太郎は須永の同窓の友人であり、多くの点で対照的な人物である。「報告」終了時点までは求職運動中で、故郷に田地があり「下宿代に窮する身分ではなかつた」が、「郷党だの朋友だの又は自分だのに対する虚栄心に煽られてゐ」た。こうした職業観故に須永を「法律を修めながら役人にも会社員にもなる気のない、至つて退嬰主義の男」と評している。また、「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい」という希望にも「是といふ批判の言葉」(「停留所」一)を発しない須永を「老成と見えながら其实平凡なのだとして受取れなかつた」という。性格の大きく異なる敬太郎の須永評は批判的できえあつたのだが、敬太郎が田口からの周旋で職を得てからは須永に「君も此頃は大分落ち付いて来た様だ」(「須永の話」二)と言われても「少し真面目になつたかね」と大人しく受ける」(同)だけの余裕を身につけ、「君は益偏窟に傾くぢやないか」と調戯」(同)うようにもなつてゐる。第一節で明らかにしてきた敬太郎の内面の変化があつたからこそ、須永が「快く己れの弱点を承認する」(同)ようになり、「斯ういふ打ち解けた心持で、二人が差し向いに互の眼の奥を見透して恥づかしがらない時」(同)を得てその過去が語り出されたのである。

そして、「須永の話」で語りが一時中断した際には須永を「平生の紋切形を離れた怪しい一種の人物」(同十三)

として眺めている。先より度々引用してきた工藤京子の論考では須永を「退嬰主義」と見ていた敬太郎について『紋切型』であったのは須永ではなく、むしろ須永をそう捉えていた敬太郎の感性や思考の方だった」と指摘している<sup>33</sup>。「風呂の後」で森本の話が「理に落ちて面白くないといふ自覚」を得て以来、「停留所」より敬太郎の「浪漫趣味」が求め始めた「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」とは「理」によって理解も了解もされ得ないものであった。敬太郎自身はその志向に自覚的ではなかったが、「報告」では田口の「悪戯」、「雨の降る日」では松本の「親子の情愛」の中にそれぞれ見出される。須永の語りが中断した際に語られる敬太郎の様子は、彼が「退嬰主義」の友人に初めて「人間の異常なる機関」を認めたことを伝えており、その後も「須永の話」と「松本の話」において鋭敏な知性によって苦しむ須永の中に「理」に落ちることのない感情と思考との絶え間のない相克を聞くのである。作中には「松本の話」の後に敬太郎が須永をどう評価し直すのかは語られていない。「結末」には敬太郎にとって「世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える」とあり、玉井敬之が「意味が深い」と評価する敬太郎の成長<sup>34</sup>が読み取れるが、この点は次節で改めて考えることとする。

以上のように、「須永の話」と「松本の話」からは須永の苦しみを知った敬太郎と松本が各々に変化していることが確かめられる。それらは直ちに須永を救済するものではないものの、やがて孤独に沈む彼の理解者となり得る可能性を示していると言えよう。

本節では須永市蔵の内面を、彼の過去や母・千代子との関係から考察して来た。そこで明らかとなったのは、両親への「疑惑」とともに成長し、望まぬままにかつての自分とは対照的な「退嬰主義」に陥った須永の姿である。母や千代子への愛情は、不安や疑いなどに喚起される過剰な思考の働きによって抑圧され、自ら傷つき苦しみを深めるだけではなくそうしたあり方が他者からの誤解を生み出している。そのように悪循環を重ねて何にも立脚点を見出せない須永は孤独の裡に葛藤し続けるより他はないだろう。彼は千代子との関係について明かすべき「須永の話」で自身の生い立ちから語り始めており、その決して戻ることのない過去を思う悲しみを基調として自らの苦悩の内実を伝えようとしているのである。「松本の話」の時点でも依然として「退嬰主義」で「偏窟に傾」いていることが決定づけられている須永はいかに救済されるのか。それは須永の「人間の異常なる機関」の本質を掴むことから始まるはずである。敬太郎は森本、田口、松本、千代子の話を通じて「浪漫趣味」を変質させ、須永に相対し得る者となってその機会を得たのである。

第三節では「結末」を中心に、これまで明らかにしてきたことをふまえながら『彼岸過迄』の主題を探りたい。

### 第三節 一長編としての『彼岸過迄』

要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情は悉く鼓膜の働らきから来てゐる。森本に始まつて松本に終る幾席かの長話は、最初広く薄く彼を動かさしつゝ漸々深く狭く彼を動かすに至つて突如として已んだ。けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所である。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪ひ、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。さうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如として已んだ様に見える此劇が、是から先何う永久に流転して行くだらうかを考へた。(結末)

「結末」では敬太郎が〈聴き手〉として後景に退いていた「須永の話」と「松本の話」の二編を含めた全体が「敬太郎の冒険」として総括されている。第一節でも触れたように、敬太郎は「世の中」に「這入つて何事も演じ得ない門外漢に似てゐた」とされており、これが先行研究での低評価にも少なからず影響していると考えられる。一方で、その耳にした物語が「最初広く薄く彼を動かさしつゝ漸々深く狭く彼を動かすに至る過程での成長や「内面的深化」<sup>90</sup>については積極的に読み取られているようになってゐる。敬太郎が各編で「浪漫趣味」を特徴とする自己のあり方への認識を深め、修正していったことは第一節で論じてきた通りであるし、また、その先で彼が知ることになった須永の過去や苦悩についても第二節で明らかにした。以上より「世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える」という敬太郎を「客体の位置から動かぬ〈聴き手〉から、話す主体と関わりうる〈聴き手〉というもう一方の主体へと変化した」<sup>91</sup>とみることもできるが、視点人物としても登場人物としても今少し詳細な評価が必要ではないだろうか。

第一節第三項でも指摘したように、三人称語りにより示される「雨の降る日」の主題と、千代子から直接話を聞いた敬太郎目線で語られる「結末」のそれには齟齬がある。前者は松本の「親子の情愛」、後者は千代子の「涙」と宵子の「運命」である。そして、「結末」における「須永の話」と「松本の話」の該当箇所でも敬太郎の関心について、「一調子の狂つた母子の関係を聞かされて驚ろいた」(「結末」)、須永と千代子が「必竟夫婦として作られたものか、朋友として存在すべきものか、もしくは敵として睨み合ふべきものか疑つた」、「其疑ひの結果は半分の好奇と半分の好意」という言葉で示されており、須永の苦悩については特に触れられていない。これらの事実は敬太郎の登場人物としてのあり方と、視点人物としての限界を示している。



敬太郎は「平凡を忌む浪漫趣味の青年」であり「未来を有つ青年」でもあった。そして、「冒険」から「人間の異常なる機関」へと関心を移しながら「世の中に接触する経験」を求めていったのである。しかし、松本が雨の日の来客を断るようになった原因について、松本を「変つてる」と評する千代子から直接話を聞いた敬太郎の内面に「親子の情愛」が深く響いたとは考え難い。また、「男女といふ小さな宇宙」から「大抵の社会的関係」を見ようとしていた敬太郎が、〈出生の秘密〉を起源とする須永の苦しみの全容を理解し得たのかは疑わしい。「雨の降る日」での語り敬太郎を離れ、「須永の話」と「松本の話」でそれぞれ須永と松本が自ら語っているのも、そうした敬太郎に寄り添う語り手の視点からは松本の心や須永母子の関係、須永と千代子の「結婚問題」の実相を深く対象化して語り得ないからであろう。登場人物としては成長しながらも、視点人物としては作品主題の展開に追い付けなくなったと評価するのが妥当であると考える。

漱石は「彼岸過迄に就て」の中で、作品は執筆による「活動と発展を含まない訳に行かない」とし、それが上手いかなかった場合には「離れるともつとも片のつかない短篇が続くだけの事」と述べていた。本章の冒頭で示したように、先行研究では長編として完成度の評価は決して高くはない<sup>92</sup>。しかし、本稿では作者自身にも不確かであった作品がいかに書き進められたのかという観点から敬太郎を視点とする作品の展開を明らかにしてきた。これまで問題とされてきた「雨の降る日」以降の語りの変化は形式の転換であって、作品の主題は「風呂の後」から途切れることなく漸次連鎖的に深化しているのである。一見して作品の不調和と目されるものも漱石の言う作品の「活動と発展」の結果に他ならない。殊に「須永の話」と「松本の話」の語りは須永の感情と思考との矛盾や葛藤、松本の須永に関する認識の誤り等を語り手を介して相対化することなく伝えており、複数の一人称視点から各登場人物の内面をありのままに深く描出する手法であったといえる。

そもそも「世の中」の〈聴き手〉としての敬太郎は、耳にしたいずれの「物語」においても当事者性を有していない。「冒険」志向を捨てて「探偵」のように「人間の異常なる機関」を眺めたいと思うようになっており、自ら〈聴き手〉となる事を選択している。しかし、作品後半部では敬太郎の視点から各登場人物を語り出すのではなく、彼ら自身に直接語らせるという方法へと切り替えられている。そして、次作『行人』では語り手である長野二郎が一郎・直夫妻の不和に巻き込まれ、悩める兄一郎を語り出す。それは、敬太郎に「物足りない所」であった「世の中」の実感を伴い、「門外漢」であることが「仕合せな所」と思える程の「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」を、一人称形式により物語の内側から照射するためであったと考えられる。それでは敬太

郎という視点人物の設定が失敗であったのかというところ、そうではないと考える。

「思ひ出す事など」を脱稿して長与胃腸病院を退院した漱石は『彼岸過迄』に取り掛かる前の一九一一年（明治四四）年八月に近畿で四回講演を行っており、それぞれ一三日の明石公会堂での「道楽と職業」、一五日の和歌山県会議事堂での「現代日本の開化」、一七日の堺市立高等女学校講堂での「中味と形式」、一八日の大阪中之島公会堂での「文芸と道徳」である。それらは「何れの講演も其主意を抽象して引き括れば、要するに皆自分対社会の關係を研究したもの」<sup>93</sup>であり、それに関する持論が展開されている。〈修善寺の大患〉以降、病中に人々から受けた「親切」により「住み悪いとのみ観じた世界に忽ち暖かな風」を感じ、「病に生き還ると共に、心に生き還」った漱石は、個人と社会について改めて考える必要を感じていたものと推測される。四講演に共通に見出されるのは、前節でも一部触れたが、日本の開化が職業の細分化・専門化と生存競争をもたらせて人々を孤立させているのだという社会認識である。前者については「各自の職業が細く深くなつて知識や興味の面積が日に日に狭められて行くなれば、吾人は表面上社会的共同生活を営んでゐるとは申しながら、其実めい／＼孤立して山の中に立て籠つてゐると一般で（中略）相互を理解する知識も同情も起りやうがなく、折角かたまつて生きて居ても内部の生活は寧ろバラ／＼で何の連鎖もない」（「道楽と職業」）<sup>94</sup>、後者は「生存競争から生ずる不安や努力に至つては決して昔より楽になつてゐない、否昔より却つて苦しくなつてゐるかも知れない（中略）是が開化の産んだ一大パラドックスだ」（「現代日本の開化」）という言葉からも明らかである。

そのような社会状況の中で、「教育を受けるものが皆第一に自活の手段を目的とするならば天下国家はあまり遠過ぎて直接に我々の眸には映りにく／＼なる、（中略）上下挙つて奔走に衣食するやうになれば経世利民仁義慈悲の念は次第に自家活計の工夫と両立しがたくなる」（「文芸と道徳」）と述べられている。この言葉を参照すると、敬太郎の形象の独創が浮かび上がってくる。すなわち、作品冒頭の敬太郎は職のために奔走し「世の中」を遠く見てもいるが、それ以上に自らの「浪漫趣味」を優先して行動しているのである。一定の地位を得た後も他者に興味を持ち続けた彼は、漱石の「今後の日本人にはどう云ふ資格が最も望ましいかと判じて見ると、実現の出来る程度の理想を懐いて、こゝに未来の隣人同胞との調和を求め、又従来の弱点を寛容する同情心を持して現在の個人に対する接触面の融合剤とするやうな心掛——是が大切だらうと思はれるのです」（同）という言葉の体現者である。確かに明確な「理想」を抱いていないものの、そのような敬太郎が視点人物であったからこそ、田口、松本、須永の「人間の異常なる機関」が語り出されたのであって、彼等にはその役割は務まらなかつただろう。

しかしながら、同時に、「観察者である以上は相手と同化する事は殆んど望めない、相手を研究し相手を知るといふのは離れて知るの意で其物になりすまして之を体得するのとは全く趣が違ふ」（「中味と形式」という漱石の言葉を見ると、終始「聴き手」であった敬太郎が「何事も演じ得ない門外漢」となることがあらかじめ想定されていたであろうことも事実である。それでも、敬太郎の存在は「実家」（「結末」）や「高等遊民」、「退嬰主義」者という、各々に「世の中」に位置を占めて自己の生活に埋没している人々の内面に光を当てることになった。その過程で松本や須永の「人間の異常なる機関」を追求するために敬太郎視点の語りが転換することは作者の構想にもなかったのではないか。敬太郎こそが漱石自身を「人間存在の深所に導く一つの方途」となっていたのであって、それを可能にした形象には重大な意義が認められるのである。近代知識人であるなしに関わらず同時代を生きる人々に共通の「孤立」的状况、それが多元的に描き出されたのが『彼岸過迄』であった。

『彼岸過迄』の語りは一長編として不調和に見られるが、それは作品の「活動と発展」が要請した形式の変化であり、編を継ぐ毎に深化・明確化されていく主題の軌跡は途切れることなく一定の方向を指し示している。その中でも田川敬太郎の存在によって須永市蔵自身の口から語り出されることになった過去と現在の苦悩は「理」によって解決され得ない人間の心の問題であり、自己をどこにも据えることのできない苦しみと孤独の在りかたは形を変えて『行人』や『心』の中に描かれていく。そこでは敬太郎のようにその苦悩を聞く者が登場するのであるが、個々人が否応なく断絶されてしまう社会においてそもそも「隣人同胞との調和」は可能であるのか。「世の中」に閉塞して生きる個々人の姿に光をあてた『彼岸過迄』の問題意識は次作にも引き継がれ、一家族の問題として深く掘り下げられていく。

### 第三章 『行人』

小説『行人』は、一九一二（大正元）年一月二日から翌年一月一七日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上で連載された<sup>55</sup>。「友達」、「兄」、「帰つてから」、「塵勞」の四章からなるが、「帰つてから」と「塵勞」との間には作者の胃潰瘍悪化による執筆中断があり、両新聞ともに一九一三（大正二）年四月八日から九月一七日まで休載されている。その後、一九一四（大正三）年一月に大倉書店より単行本が刊行された。作品は、前作『彼岸過迄』と同様に短編連作方式が採られていると考えられ<sup>56</sup>、「友達」、「兄」、「帰つてから」、「塵

「労」の四編の中で章ごとに緊張を増していく長野家の内実が作中人物の長野二郎とHによって語られている。

先行研究では約五カ月間の中断をはさんで執筆された前三章と「塵労」との接続をいかに捉えるのかということが作品全体を捉える上での重大な問題とされてきた。江藤淳は、妻への不信を語っていた長野一郎が「塵労」でにわかには抽象的な苦悩を語ることを「唐突」と評し、「強烈に作者の観念を露呈」した「支離滅裂な構成」になっていると指摘した<sup>97</sup>。また、伊豆利彦は作品の主題を「二郎とお直の秘められた愛」と捉え、「作品全体の中に十分有機的にくみこまれていない」一郎の苦悩は休載期間中に作者の問題意識が移行したことによる作品の「裂け目」であるとした<sup>98</sup>。その後、重松泰雄は作品前半の〈二郎説話〉と後半の〈一郎説話〉を挙げて「今後の『行人』論の最大のポイント」は、まさしくこれら両説話の意義を統一的に見通す、そのような〈融合点〉の発見にあると述べている<sup>99</sup>。が、作品研究において比較的早期に提出されたこの問題は今日においても大きな課題として残されている<sup>100</sup>。

漱石は連載再開の前に発表した広告「行人続稿に就て」で「左して長いものではないから単行本として出版の時に書き添へる積でゐました」と述べている<sup>101</sup>。しかしながら、完結までに連載五二回を費やした「塵労」は、結果的に『行人』（全一六七回）の約三分の一を占める最長の編となった。作者自身が再開直前まで「左して長いものでない」と考えていたことを鑑みるならば、この連載の長期化を「作者の問題意識が移行した」と捉えるよりは、むしろ執筆継続による主題の展開とみるべきであろう。漱石自身は直接的な言及をしていないが、やはり『行人』の執筆もまた「不定」の中で行われていたのである。

以上を踏まえ、本章においても二郎とHの語りを追いながら二郎自身と一郎の二人を中心に考察し、作品の展開を明らかにしたい。『行人』は『彼岸過迄』と同年に執筆が開始されており、その構想と思しきものが『彼岸過迄』のそれと思われるものと混在する形で「断片」に書きこまれている<sup>102</sup>。二郎、一郎、直の形象や関係性は『彼岸過迄』における敬太郎、須永、千代子におけるそれらを発展的にしたものと解され、作品後半においてにわかには前景化される一郎の苦悩やそれに伴う語り手の変更など、前後作の『彼岸過迄』や『心』とも共通点が多い。(後期三部作)の第二作と位置付けられてきた本作の特質とは何か。冒頭の「友達」の意義、「兄」から「帰つてから」にかけて夫婦関係に悩みを抱えた一郎が家族から孤立していく過程、そして「塵労」での語りの意味等を考察しながら、各編において何が追求され、それが全体としてどのような意味をもつのかということをそれぞれ考究する。

## 第一節 長野二郎

早期の作品研究では「近代知識人の典型としての漱石の不安と絶望と孤独」<sup>103</sup>が継承された存在として作品主題を負う人物と目されてきた一郎に対して、二郎は「母や兄の使い走りとなって動くことによって事件が動き、筋が運ばれて、結局は一郎の性情と容体が浮彫りにされて行く仕組み」<sup>104</sup>を担う人物とされていた。後に橋本佳が二郎中心の読みを提示し<sup>105</sup>、それを受けた伊豆利彦が「二郎とお直の秘められた愛」の主題を読み取ると評価は一変した。しかし、二郎主体の作品読解の可能性の発見は、同時に一郎中心の読みとの接合や作品全体の主題把握、「塵勞」における語り手交代の内実などの問題を提起するものでもあった。

依然として論究すべき課題の多い『行人』であるが、これらの問題を考えるためにも、本節では語り手である二郎の分析を行うこととする。彼が登場人物としていかに行動し、それらを語り手としてどのように語っているのか。作品の展開に沿って移り変わる彼自身の内面を明らかにしながら、考察を行う。そうすることで『行人』全体における二郎の位置付けも自ずと定まってくるはずである。

### 第一項 「友達」

「友達」に関しては片岡良一が「最初の章である「友達」を読むことによって、作者が何を書こうと予定しているのかを、おおよそには推定することが出来るようになっていく」と指摘した<sup>106</sup>。ような、「兄」以降の展開の暗示ないし予告や伏線的なものと位置づけられてきた。確かに岡田と兼の仲睦まじい様子は「兄」より登場する一郎と直の姿とは対照的であり、佐野と貞の縁談や「性の争ひ」（「友達」二十七）、三沢が見た「娘さん」（同三十二）の悲壮な姿といったものもそれぞれ一郎と直の結婚生活の暗部に通じるモチーフになっているともいえる。しかし、そのように後の展開を前提に捉えようとする観点からは見過ごされてしまうものも多いのではないか。そもそも「二郎」という名前そのものが兄「一郎」の存在を予感させるものであるにしても、「兄」以降が未だ執筆されていない時点において、まさに「友達」一編の中で何が問われていたのかということ考察する必要があると考える。

梅田の停車場を下りるや否や自分は母から云ひ付けられた通り、すぐ俵を雇って岡田の家に駆けさせた。

岡田は母方の遠縁に当る男であつた。自分は彼が果して母の何に当るかを知らずに唯疎い親類とばかり覚えてゐた。

大阪へ下りるとすぐ彼を訪ふたのには理由があつた。自分は此処へ来る一週間前或友達と約束をして、今から十日以内に阪地で落ち合はう、さうして一所に高野登りを遣らう、若し時日が許すなら、伊勢から名古屋へ廻らう、と取り極めた時、何方も指定すべき場所を有たないので、自分はつい岡田の氏名と住所を自分の友達に告げたのである。「友達」

冒頭で大阪に降り立つた二郎は、「母の云付」「友達」(一)と旅の約束をした友人三沢からの便りを求めるといふ「私の都合」(同)から岡田の元を訪れる。その母から与えられた任務とは、長野家で働き「厄介ものといふ名がある丈」(同人)とされる貞<sup>107</sup>の結婚相手として岡田と同じ大阪の保険会社に勤める佐野を評価することであつた。しかし、それが「一番何うでも好かつた」(同五)という二郎は、第一に岡田と兼との仲に興味を惹かれてゐる。二郎の母方の遠縁にあたる岡田は、かつて長野家の「食客」(同二)であつた頃に家に入り込んでいた兼と出会つてゐる。二郎は当時の二人の仲がどのように進展したのかを知らないが、大阪では「大變仲が好い」(同四)夫婦として見出している。ここで注目したいのは、「友達」での語りが最初に岡田と兼を対象としてゐるということであり、殊に兼に対する二郎の関心のあり方である。

二郎によると兼は「器量は夫程でもないが、色の白い、皮膚の滑らかな、遠見の大變好い女」(同二)とされ、「態度は明瞭で落付いて、(中略)眼の縁に愛嬌を漂よはせる所などは、自分の妹よりも品の良い許でなく、様子も幾分か立優つて見えた。自分はしばらくお兼さんと話してゐるうちに、是なら岡田がわざ／＼東京迄出て来て連れて行つても然るべきだといふ氣になつた」(同三)という。「好い奥さんになつたね。あれなら僕が貰やよかつた」(同)という言葉も岡田への世辞ではありながら、兼をその妻としてのみ評価したものにはなつていない。また、「子供を生ます為に女房を貰ふ人は、天下に一人もある筈がない」(同四)という考えを持つ二郎は、子供ができないことを悩みとして話す岡田を「単にわが女房を世間並にする為に子供を欲するのであつた。」(同)と批判的に見ている。夕食の席では薄化粧をした兼の白粉の匂いを感じて「夫が麦酒や山葵の香よりも人間らしい好ひ匂の様に思はれた」(同)と、酒を呑む岡田よりも兼に関心を向けている。総じて兼を岡田の妻としてというよりも一人の女性として眼差しているのである。

そのような二郎に対して、兼は自らが岡田の妻であることを示すかのように振る舞っている。岡田の家に滞在することになった翌日、岡田に二郎の案内をするように言われると「何時もの様子に似ず、此時丈は夫にも自分にも何とも答へなかつた」(同五)といい、髪も廂髪から丸髷へと変えている。そして、兼が二郎に水を運んでくる場面では「此時黙つてお兼さんの白い手ばかり見てゐた。其手には昨夕気が付かなかつた指環が一つ光つてゐた」(同六)とあり、自宅に逗留することになった若い男性に対して一定の距離を取ろうとする姿勢が垣間見える。しかし、二郎は兼が既婚者であることを再認識しながらも「自分はお兼さんをもつと笑はせたかつた」(同)、  
「自分は岡田が何を着るか、左程気にも留めなかつたが、お兼さんの着せ具合や、帯の取つて遣り具合には、知らず／＼注意を払つてゐた」(同八)と、兼への関心を隠さない。

勝田和學は「二郎が人妻となつたお兼の魅力に強く惹かれてゐる」として、後に兼が「不意の訪問」(同二十七)で岡田が内密にしていた母と兄夫婦の大阪行を二郎に告げる展開に「兄」以前の「人妻との秘密の共有という経験」を指摘している<sup>108</sup>。更に勝田は「帰つてから」での岡田の言動<sup>109</sup>も含めて「二郎と岡田夫婦の関係は、二郎と一郎夫婦との関係に見合うものとして浮かび上がってくる」と、「性の争ひ」のモチーフを読み取つてゐる。しかしながら、少なくとも「友達」においては勝田の指摘するような意味での関係性や「性の争ひ」があつたようには思われない。兼の二郎に対する姿勢は先に指摘した通りであり、「性の争ひ」と呼べるものは二郎の一方的な視線の中に見出されないのである。やがて「母の云付」である佐野との面会を果たし、その報告の手紙を書いた二郎は「大阪を立退きたかつた」(同十一)という。「夫婦の好意は自分によく解つてゐた。同時に彼等の迷惑も亦よく想像された」(同)とあるように、二郎の兼への関心は三者の関係性を揺るがすほどのものではなく、彼自身もそれを望んではいないのである。このような異性に対する緩やかな関心のあり方は、三沢との対話が中心となる「友達」後半においても「あの女」に対するものとして描かれている。以下、場面を移して考察を続けたい。

「気の短い」(同十二)性格の二郎は、三沢からの便りを待ちきれなくなつて「強いてもこれから一人で立とうと決心」(同)したがその計画が立たず、「すると三沢といつしよに歩く時の愉快がいろいろに想像された」(同十三)という。「友達」における二郎と三沢の関係性に関しては「性の争ひ」の構図ばかりが注目される傾向にあるが、そもそも前提として二人が友人関係にあるということ踏まえなくてはならないのではないか。以下、そのような問題意識から分析を始めたい。

一人で出発しようと考えていた矢先に入院中の三沢から連絡を受けた二郎はその病室を訪れる。これまでも三沢は病気になるかと二郎を呼び出し、二郎も必ずそれに応じていたという。三沢から「病気は短くて二三日長くて一二週間で大抵は癒つた」(同)とあり、この時も「これなら大した心配もないだらう」(同)と判断している。二人のこの関係からは互いに対する信頼と気遣いが端的に読み取れるが、二郎は翌日の見舞いでは「奈良へでも遊びに行つて来やうかといふ気にな」(同十五)る。「強情の男」(同)と評される三沢は旅行の約束を果たすために養生しているのだと言い、二郎はそこに「彼の強情のみならず、彼の我儘な点を能く見て取つた。同時に一日も早く病人を見捨てゝ行かうとする自分の我儘も亦能く自分の眼に映つた」(同)と語っている。後に三沢との「性の争ひ」の中で自己の「卑怯」(同二十七)を自覚したように、二郎にとつて三沢は自らを映す鏡のような存在であつたと考えられる。

自身の「我儘」を感じた二郎は二、三日を三沢の病気の経過を見守ることにする。その間、病室で三沢が質素な食事に向かう姿を「変に痛ましく」(同十六)感じ、自分の食事について聞く「彼の顔を見て、益気の毒」(同)になり、「彼がもう少し健康を回復する迄彼の傍に居てやりたい気」(同)になる。その一方で宿に帰ると「早く涼しい田舎へ行きたいと思ふことが多かつた」(同)ともいう。ここからは二郎の目の前の対象に感情移入乃至同情しやすいという性質が読み取れるが、より重要であるのは、彼の言動は最終的に自らの感情よりも相手との関係性を保つことを優先した物になつていゝという点である。先に見てきた兼の件からそのことが裏付けられるうえ、後述の三沢との「性の争ひ」を見ても同様の指摘ができる。話を三沢との関係に戻すと、友情と「我儘」との間で揺れる二郎に対して三沢は「君もう大阪は厭になつたらう。僕のためにもて貰ふ必要はないから、何処かへ行くなら遠慮なく行つて呉れ」(同十七)と告げている。「強情の男」である三沢も彼なりに友人の二郎を気遣つており、この二人の関係性はごく良好なものであつたといえる。そして、そのような友情関係においても二郎に「性の争ひ」を思い知らせる「あの女」が登場する。

其時あの女は忍耐の像の様に丸くなつて凝としてゐた。けれども血色にも表情にも苦悶の迹は殆んど見えなかつた。自分は最初其横顔を見た時、是が病人の顔だらうかと疑つた。たゞ胸が腹に着く程脊中を曲げてゐる所に、恐ろしい何物かゝ潜んでゐる様に思はれて、それが甚だ不快であつた。自分は階段を上りつゝ、「あの女」の忍耐と、美しい容貌の下に包んでゐる病苦とを想像した。(「友達」十八)



見舞いを続けていた二郎はある朝に廊下の腰掛の隅に「あの女」を見出し、その「脊中を折つて重なり合つてゐるやうな憐れな姿勢丈がありありと眼に映つた」(同十九)と振り返っている。三沢の知る芸者であつた「あの女」に対する二郎の「特別の興味」(同十九)は「不快」を超えて強まり、聞き知つたその境遇に「自分は情ない気がした。あゝ云ふ浮いた家業をする女の平生は羨ましい派出所でも、いざ病氣となると、普通の人よりも悲酸の程度が一層甚だしいのではないかと考へ」(同二十四)ていることから「あの女」に強い同情を寄せていたことがわかる。その「興味」から「美しい看護婦」(同二十二)とも話をするようになる二郎であつたが、「僕はあの女の病氣に対しては責任があるんだから……」(同二十)と言う三沢の話を聞いた時点で「主客の別」(同二十五)が付いてしまい「それほど長く興味の高潮を保ち得なかつた」(同)と明かしている。少なくとも二郎の意識の上では「あの女」への興味を巡つて三沢と競う意志はなかつたと考えられる。しかし、「何うだもう好い加減に退院したら」(同二十六)、「一体君はいつ大阪を立つ積だ」(二十七)という互いのやり取りの中に「不愉快さ」(同二十七)を認めたとはいふ。

自分の「あの女」に対する興味は衰へたけれども自分は何うしても三沢と「あの女」とをさう懇意にすくなかつた。三沢も又、あの美しい看護婦を何うする見もない癖に、自分丈が段々彼女に近づいて行くのを見て、平氣である訳には行かなかつたのである。其処に自分達の心付かない暗闘があつた。其処に持つて生れた人間の我儘と嫉妬があつた。其処に調和にも衝突にも発展し得ない、中心を欠いた興味があつた。要するに其処には性の争ひがあつたのである。さうして両方共それを露骨に云ふ事が出来なかつたのである。自分は歩きながら自分の卑怯を恥た。同時に三沢の卑怯を悪んだ。けれども浅間しい人間である以上、是から先何年交際を重ねても、此卑怯を抜く事は到底出来ないんだといふ自覚があつた。自分は其時非常に心細くなつた。かつ悲しくなつた。(「友達」二十七)

その日、「快く三沢に別れて宿に帰つた」(同)のは、三沢の眼に「あの女」も「あの女」の看護婦もなく、たゞ自分といふ友達がある丈のやうに見えた」(同)からである。しかし、その帰路で二郎は互いのやり取りの中に「自分達の心付かない暗闘」があつたことに思い至つたのである。これが二郎の語りである以上、三沢がどのやうに

感じていたのかは明らかではない。ただ、この時も二郎は三沢を鏡として自己の「主客の別」の意識下で働いていた。「卑怯」に気づき、それを「恥じ」て「悪んだ」のである。二郎は翌日に「手を突いて彼の前に自分の罪を詫びる心持」(同)で三沢に「もう退院は勧めない」(同)と宣言する。それは二郎が「是から先何年交際を重ねても、此卑怯を抜く事は到底出来ないんだといふ自覚」以上に三沢との友情を重く見ていたからに他ならず、「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」や無意識に行われる「性の争ひ」への抵抗の表明でもあった。この後に二郎が退院と帰京を決めた三沢から「あの女」に似ていたという「その娘さん」(同三十二)の話聞き、固い握手を交わしたところで「友達」の語りは閉じられる。無意識の「性の争ひ」と「卑怯」を認め、それら乗り越えようとした二郎の成長ともいふべき変化がこの一編の主題であったと言えよう。

確かに二郎は「友達」冒頭では既婚の兼を一女性として眼差しており、「あの女」にも興味を持っていた。しかし、それらは「性の争ひ」の構図を形作りながらも決して既存の関係を揺るがすほどに高まることはなかった。そして、「あの女」をめぐる三沢との一件で「自分達の心付かない暗闘」と「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」に「卑怯」を感じたとき、二郎は「性の争ひ」を相対的に捉える視点を獲得したのである。「友達」の終局では「此卑怯を抜く事は到底出来ないんだといふ自覚」を抱えながら、それでもその外にあるべく自己を律することを求めた二郎の姿が彼自身によって語られている。

以上の展開を見たときに、「友達」は『行人』において「兄」以降の展開の暗示ないし予告や伏線的なものである。以上を、それ以上にそこに向かう二郎の立ち位置を示すものと位置づけられる。すなわち、実兄である一郎が仕掛ける「性の争ひ」の「卑怯」を相対的に捉える視点人物としてのそれである。語り手としての二郎は、まずそのことを定位しているのである。無論、それがこの後の展開においてどこまで保たれていたのかは注意深く見ていく必要がある。二郎自身の内に否定しがたい「卑怯」の自覚があったことも確かだからである。果して二郎が「嫂」である直にどのような視線を向けていたのか。次項ではこれらの点を踏まえながら、二郎が一郎と直にどのような接していったのかという観点から考察を続けたい。

## 第二項 「兄」以降

本項では「兄」以降の二郎に対する他者からの評価にも着目する。「友達」において二郎は、兼を「好い奥さん」、岡田は「多数の妻帯者と変った所も何もないやう」(「友達」十)、三沢は「強情の男」など、主として各登場人物

を眺め評価する人物（語り手）であった。自分自身についても「おツ猪口ちよい」（同）と「気の短い」（同十二）点を挙げている。しかし、その後半部では三沢から「何うも強情な男だな」（同十九）と言われている。それは「三沢こそ強情な男」（同）と考えていた二郎が「あの女」の話をせず「三沢を少し焦らして遣らうといふ下心」（同）を出す場面であり、やがて「性の争ひ」と自己の「卑怯」の認識に向かう契機として重い意味を持つと考える。このように語り手でもある二郎の死角が他者からの批評により逆照射されているということにも注意を払いながら考察を進めたい。

兄は学者であつた。又見識家であつた。其上詩人らしい純粹な氣質を持つて生れた好い男であつた。けれども長男丈に何処か我儘な所を具へてゐた。自分から云ふと、普通の長男よりは、大分甘やかされて育つた。としか見えなかつた。（中略）それで他人の前へ出ると、また全く人間が變つた様に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない、円満な好伴侶であつた。（「兄」六）

二郎は一郎と「懸隔のある言葉」（「兄」二）で対話する。それは「年が少し違ふのと、父が昔堅気で、長男に最上の権力を塗り付けるやうにして育て上た結果」（同）であると説明している。次男として「子供同様の待遇を母から受けてゐた」（同七）が、「兄以上に可愛がられました」（同）という。越智治雄は「一郎と明らかに異なる世代の人物」であるとし<sup>110</sup>、飯田祐子は「その存在の根本に「家」の劣位者（次男）のレッテルを貼られている」と指摘している<sup>111</sup>。現家長で学者の兄を「見識家」の「好い男」と言いながらも「我儘」な側面を指摘する二郎は、石原千秋が「〔家〕制度に支えられている文化にあつては、次男坊は、姉妹とはもちろん、他の兄弟とも異なる不安定な境界上の存在、すぐれて魅力的で、しかも「危険」（「それから」十七）な文化記号となる」と述べている<sup>112</sup>。のような意味においても一郎に相對し得る可能性を持つ人物として形象されると考えられる。

「そりやあの人の事だから何とも云へないがね。けれども夫婦となつた以上は、お前、いくら旦那が素ツ気なくしてゐたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか。あれを御覽な、あれぢや丸であかの他人が同なじ方角へ歩いて行くのと違やしないやね。なんぼ

一郎だつて直に傍へ寄つて呉れるなど頼みやしまいし」

母は無言の儘離れて歩いてゐる夫婦のうちで、唯嫂の方にばかり罪を着せたがつた。是には多少自分にも同感な所もあつた。さうして此同感は平生から兄夫婦の關係を傍で見えてゐるものゝ胸には屹度起る自然のものであつた。(「兄」十三)

また、右に引用したように、二郎は母である綱の直に対する批判に一定の同調を示している。直の性質を「持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女」(「兄」十四)と見ているにも関わらずその振る舞いへの批判に共感できる二郎の人物像は、全体として藤澤るりの「(長野家)の家族的空間と言語の世界で生き、その要請する役割のみを果たして、(長野家)に拮抗するだけの(私)を持たない存在」というまとめ<sup>113</sup>に集約されるだろう<sup>114</sup>。先行研究では長野家の直に対する抑圧が注目されてきた<sup>115</sup>が、ここでは二郎もまた一郎を頂点とする長野家にあつては副次的な存在として被抑圧的な立場にあつたということを確認しておきたい。このような二郎が、一郎から直の「節操」(同二十四)の試験を依頼されるのである。

一郎が「お直は御前に惚れてるんぢやないか」(同十八)という言葉投げかけたとき、それは二郎にとって兄の「性の争ひ」に巻き込まれてしまったということに他ならない。しかし、「友達」との違いはそれが「自分達の心付かない暗闘」ではなく当の一郎から直接伝えられていて、更には「正直な御父さんの遺伝を受けてゐる。それに近頃の、何事も隠さないといふ主義を最高のものとして信じてゐる」(同)る弟として見なされている点である。

この時、二郎は兄の「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」に直面しているのであるが、自身は「腹の奥底にある感じ」(同十九)など無いと伝えている。その言葉への疑いを謝罪する一郎について「彼を尊敬しつゝも、何処か馬鹿にし易い所のある男の様に考へない訳に行かなかつた」(同十九)というのは、そもそも一郎の疑うようなことがあり得ないと考えていたからだろう。しかし、兄の疑いを否定し、「二郎、何うか己を信じられる様にして呉れ」(同二十一)と不信にあえぐその様を「彼の態度は殆んど十八九の子供に近かつた。自分がかゝる兄を自分の前を見るのが悲しかつた。其時の彼はほとんど砂の中で狂う泥鰯の様」(同)だと見た以上、二郎は自らが仕掛けられた「性の争ひ」に無関係であることを示さなくてはならない。直の「節操」試験という「倫理上の大問題」(同二十五)は断りながら、「和歌山見物で直の心を探ることだけは引き受けざるを得ないのである。

直への疑いを打ち明けられた後、宿に戻った二郎は一郎の前で直に話しかけられると「兄の眼から見れば、彼

女が故意に自分に丈親しみを表はしてゐるとしか解釈が出来まいと考へて誰にも打ち明けられない苦痛」(同二十二)を感じている。二郎はこの時になつて直を兄の妻である「嫂」として捉えたといえ、それまではそのような関係性に無頓着であつたことが窺える。また、直との和歌山行を止める綱に「珍らしく猜疑の影」(同二十六)を捉え、「自分を信じ切り、又愛し切つてゐると許考へていた母の表情を見て忽ち臆し」(同二十七)ていて、出発に際して直に「貴方何だか今日は勇氣がないやうね」(同)と言われた時も実際に「自分は全く勇氣がなかつた」(同)という。ここで二郎は長野家における自らの存在の危うさに思い至り、その関係性の破綻を恐れているのである。

二郎は直に「兄さんに丈はもう少し氣を付けて親切にして上げて下さい」(同三十一)と言う。詳しくは次節で述べるが、直が妻として夫の一郎に「親切」に見えないことこそが一郎の不信の根源であり、他の長野家の人々にも問題視される原因となつている。「魂の抜殻」(同)となつたことを訴える直の涙に「若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪へないやうな氣がした。外の場合なら彼女の手を執つて共に泣いて遣りたかつた」(同三十二)という二郎は、同情を寄せつつも長野家の次男としての立場を選択しているのである。

自分は此時始めて女といふものをまだ研究してゐない事に氣が付いた。嫂は何処から何う押しても押しやうのない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の様に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引き込むと、突然変な所へ強い力を見せた。其力の中には到底も寄り付けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出来るから進まうかと思つて、まだ進みかねてゐる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持がした。不思議な事に、其翻弄される心持が、自分に取て不愉快であるべき筈なのに、却て愉快でならなかつた。(「兄」三十八)

豪雨により一晩をともに過ごすことになつた二郎は、その夜直の「猛烈で一息な死」への思いを聞く。そして、「大抵の男は意気地なしね、いざとなると」(同三十七)という言葉聞いて右のように思いを巡らせているのである。戸田善次は、一郎に「他の心なんて、いくら学問をしたつて、研究をしたつて、解りつこないだらうと僕は思ふんです」(同二十一)と言つていた二郎が「いつの間にか一郎同様に、他人を「研究」することで理解しようとしているのであり、また、その結果として、「塵勞」に至つては、嫂の訪問の意図に「疑惑」を抱く」ように

なっていると指摘している<sup>116</sup>。しかし、ここで二郎は直の「研究」をしようとしていくのではなく、むしろその可能性を予感しているのであって、そのことに「愉快」を感じているのではないか。翌日、直に関する兄への報告について「最後の一句は正体が知れないといふ簡単な事実に戻する丈」(同三十九)であることを思い、「或は兄自身も自分と同じく、此正体を見届やうと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか」(同)、そして自分ならば「兄以上に神経を悩ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持」(同)になつていくのだが、実際にはそうならず「愉快」を感じていた。つまり、彼は兄に寄り添う視点を捨て、却つてそれを脅かし得る直の視点に依ろうとしていたのである。ただ、それが「二郎とお直の秘められた愛」の志向でなかつたことは強調しておきたい。

和歌の浦に戻り一郎に呼び出された二郎は、「自分と嫂の眼を他から見たら、何処かに得意の光を帯びてゐたのではあるまいか」(同四十二)と語っている。その時の一郎に対する態度については「恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだらう」(同)と分析し、「今日迄たゞ兄の正面ばかり見て、遠慮したり気兼したり、時によつては恐れ入つたりしてゐた。然し昨日一日一晚嫂と暮した経験は凶らずも此苦々しい兄を裏から甘く見る結果になつて眼前に現はれて来た」(同四十三)と振り返っている。また、「自分は普通より余程を見縊つてゐたに違なかつた。其上自分はいざとなれば腕力に訴へても嫂を弁護する気概を十分具へてゐた。是は嫂が潔白だからといふよりも嫂に新たな同情が加はつたからと云ふ方が適切かも知れなかつた。云ひ換へると、自分は兄を夫丈軽蔑し始めたのである。席を立つ時などは多少彼に対する敵愾心さえ起つた」(同四十四)とも述べている。共通しているのは一郎への対抗心であり、直に個人的な「愛」を向けているのではない。その「同情」とは、「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」により直を苦しめる一郎の「卑怯」への「軽蔑」によるものであった。そして、なによりも旧来的な長野家の抑圧構造に屈することなく「大抵の男は意気地なし」と言い切るそのあり方は、二郎にとつて絶対的な上位者としてあり続けた一郎との関係性を逆転させ得るものであった。それまで兄に相對する言葉を持ち得なかつた二郎は、直の悲壮なまでの「決心」(同三十八)の中にその手がかりを得たのである。しかし、「今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ」(同四十二)とあるように、長野家の論理に背いたそれはやがて「家」そのものを脅かす危険因子に他ならない。須田喜代次の言う「明治期の「古い歴史を有つた家」崩壊のドラマ」<sup>117</sup>は「兄」の終局で運命づけられたと言つて良いだろう。同時に、一郎に寄り添う者でなくなつた二郎は、その代償として一郎の心に触れられなくなつていくのである。

和歌山では直の掴みどころのなさが「愉快でならなかつた」という二郎は、東京へ戻る車中ではそれが「愉快であつた。同時に不愉快であつた」(「帰つてから」一)と明かしている。例え一郎を「軽蔑」し得たからといって、二郎にとつても直が変わらず「正体」のわからない女性であることに変わりはないのである。和歌山での出来事が再び兄弟の話題に上ることのないままに季節が秋に移り、それでも悩みを語る一郎の「言葉の裏に、彼の周囲を呪ふやうに苦々しい或者」(同五)を認めた二郎は、「問題が例の嫂事件を再発させては大変だと考へた。それで卑怯の様ではあるが、問答が其処へ流れ入る事を故意に防いだ」(同)という。それは、彼自身にも直がよく解らないからであり、そのことを秘することで兄に対する優位を失わないようにするためでもあつたと考えられる。

家庭内でも言葉少なく、孤立を深めていく一郎について二郎は「学者で且思索家」(同二十)であるとして、自身の父親を「上滑りの御上手もの」(同二十一)として語る一郎の言葉を聞きながら、「学問をして、高尚になり、かつ迂濶になり過ぎた兄が、家中から変人扱ひにされるのみならず、親身の親からさへも、日に日に離れて行くのを眼前に見て、思はず顔を下げて自分の膝頭を見詰めた」(同二十一)といい、既に「見識家」としては評価できなくなっているのである。それでも、「苦い兄の心機を斯う一転させる自分の手際に重きを置いて、恰も己れの虚栄心を満足させる為の手段らしい態度」(同二十)で他の家族よりも頻りに一郎の部屋へ行つていたことを伝えている。

「そりや御約束した事ですから、嫂さんに就いて、あの時の一部始終を今此処で御話しても一向差支ありません。固より僕はあまり下らない事だから、機会が来なければ口を開く考へもなし、又口を開いたつて、只一言で済んでしまふ事だから、兄さんが気に掛けない以上、何も云ふ必要を認めないので、今日迄控へてみたんですから。——然し是非何とか報告をしろと、官命で出張した属官流に逼られ、仕方がない。今即刻でも僕の見え通りをお話します。けれども予め断つて置きますが、僕の報告から、貴方の予期してゐるやうな変な幻は決して出て来ませんよ。元々貴方の頭にある幻なんで、客観的には何処にも存在してゐないんだから」(「帰つてから」二十二)

和歌山での一件を報告しないことを詰問された二郎は、右のように返答している。その内容に偽りは無いと言

えるが、「正直」なものでもなかった。問題は、二郎自身にも直の「正体」が解らなかつたにも関わらずそのことが伏せられ、兄を詰るためだけに発せられたものだという点である。一郎に「軽薄児め」(同二十二)と罵倒されたとき、そこには「持つて生まれた人間の我儘と嫉妬」ではなく、「性の争ひ」を利用して兄弟間での自己の優位を図ろうとした二郎の別様の「卑怯」が立ち現われてくる。長野家において次男でありながら長男を脅かそうとした二郎のあり方は突如として無効化され、その〈家〉での居場所は失われていく。

やがて家を出ることを考えた二郎は三沢の元に相談に訪れ、「君がお直さん杯の傍に長く喰付いてゐるから悪いんだ」(同二十三)と断じられてしまう。しかし、東京へ戻ってから直と「滅多に口を聞かなかつた」(同二十五)という二郎は、兄に対して優位に立つために和歌山での出来事を利用したのであつて、直個人に対する志向はなかつたといえる。大阪で三沢との「性の争ひ」を乗り越えて握手を交わした時とは違い、一郎との和解は見込めない。自らの内に「性の争ひ」さえ利己的に用いてしまう「卑怯」を見出したとき、三沢に「真面目にせよ、冗談にせよ、自分は彼に向つて何事をも説明したり、弁明したりする気は起らなかつた」(同二十三)ではなく、そうすることができなかつたと理解するべきであろう。独立を決意した二郎は、帰宅後に直を巡つて言い争つた妹の重に「お重、お前とは好く喧嘩ばかりしたが、もう今迄通り居嚙みあふ機会も滅多にあるまい。さあ仲直りだ。握手しやう」(同二十四)と話しかける。それでも一郎の「書斎の扉を叩いて、快く詫まる丈の度胸は、何処からも出て来なかつた」(同二十五)のは、二人の関係性が既に「取り返す事も償ふ事も出来ない」段階にまで来ていたからだろう。家を見渡して「自分の背後には既に是丈無邪気な過去がずっと続いてゐる事を発見した時、今昔の比較が自から胸に溢れた」(同)と振り返る二郎は、自身の過ちを深く悔いることしかできないのである。家を離れた二郎が再び一郎を語るとき、それは「兄は学者であつた。かつ感情家であつた」(同三十六)という言葉へと変化している。一郎の思考さえ読み取れなくなつた二郎にはその内面をどのようにも説明できなくなつてゐるのである。このように、直同様に兄の一郎も理解し得なくなつたところで「歸つてから」は閉じられるのである。

ここまで「友達」から「歸つてから」にかけて二郎を中心に作品を考察してきたが、そこで立ち現われてくる二郎像とは、単に一郎を語るための語り部でもなければ直との「秘められた愛」を求める義弟でもなかつた。語られているのは、友人や兄、嫂たちとの関わりの中で「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」や他者の「正体」に惑いながら、自らの「卑怯」に気付いてく青年の姿であつた。「歸つてから」までの回想は、平凡に見える関係や無



意識の行動の中にも潜むそれらの不可避的な恐ろしさを伝えているのである。そこには取り返しのつかない過去を語る現在時点の二郎の後悔と悲しみが刻み込まれている。そして、次に考えるべき問題はその後には語られ始める「塵労」である。

病による連載中断の後、漱石は再開の予告に「左して長いものでないから単行本として出版の時に書き添へる積でみました」と書いていた。この時点でのどのような結末が構想されていたのかは不明である。ただ、二郎が長野家を離れて一郎や直と隔たれた位置に立った状況にあつてはそれほど劇的な展開が用意されていたようにも思われない。しかし、「塵労」の連載は長期化し、語り手をHに変えて継続されている。それこそが作品の「活動と発展」であり、二郎による語りでは追求し得ない問題が展開しているはずである。本節では長野二郎に着眼して論じてきたが、次節ではもう一人の重要人物である一郎に中心を移して改めて作品分析を行う。そのうえで「塵労」の考察を試みたい。

## 第二節 長野一郎

長野一郎は妻の直、母の綱とともに「兄」の冒頭に登場し、大阪で二郎と合流する。その後、和歌の浦見物を提案し、旅先で二郎に妻への不信を打ち明ける。「噫々女も氣狂にして見なくつちや、本体は到底解らないのかな」（「兄」十二）との嘆息は「直は御前に惚れてゐるんぢやないか」（同十八）という問いかけになり、ついには「直の節操を御前に試して貰ひたいのだ」（同二十四）との依頼になる。それは「自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要」（同二十）に駆られた一郎が、それでも直の本心を知れずにいるからである。

しかし、「塵労」においては同僚のHに対して「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。（中略）実に恐ろしい」（「塵労」三十二）と語り出している。「塵労」前後でにわかには苦悩の原因が変化したかに見える点が先行研究において問題とされてきたことは初めに述べた。それではこの接続はどのように捉えられるのか。作者の問題意識の変化であるのか、それとも作品主題の展開の結果であるのか。そうした点を考えるべく、作品の流れに沿って考察を行いたい。まず焦点とするのは、実弟に妻の「節操」を試させようとした一郎の苦悩の根源である夫婦関係である。

## 第一項 一郎と直

兄は寐転びながら話をした。さうして口では大阪を知つてゐる様な事を云つた。けれども能く聞いて見ると、知つてゐるのは天王寺だの中の島だの千日前だのといふ名前許で地理上の知識になると、丸で夢のやうに散漫極まるものであつた。

(中略)

「一体それは大阪の何処なの」と嫂が聞いたが、兄は全く知らなかつた。方角さへ分らないと答へた。是が兄の特色であつた。彼は事件の断面を驚く許り鮮かに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。夫で彼は平氣であつた。

「何処だか解らなくつちや詰らないわね」と嫂が又云つた。兄と嫂とはこんな所でよく喰ひ違つた。

(「兄」三)

登場してすぐにすれ違いを指摘される一郎と直は旅先でも「彼是一間の距離」(「兄」十三)を置いて「無言の儘離れて歩いてゐる夫婦」(同)である。二人の姿を見た綱は二郎に「いくら旦那が素ツ気なくしてゐたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか」と直への不満を述べ、二郎はそれに一定の共感を示し、「この同感はず生から兄夫婦の關係を傍で見てもものゝ胸には屹度起る自然のもの」と説明している。程度の差はあるが二人の言葉には直への批判意識があり、その背景には、夫婦關係においては妻の方が率先して夫の機嫌をとるべきであるとの考えが窺える。

無言のまま離れて歩く一郎と直とは対照的に、岡田と兼は自他共に認めるほど仲の良い夫婦である。この二組にあつて、それぞれの妻も「嫂は無口な性質であつた。お兼さんは愛嬌のある方であつた」(同四)と対比的に語られている。自ら進んで一郎の機嫌をとらない直への不評の一方で、兼については二郎が「好い奥さんになつたね。あれなら僕が貰やよかつた」、一郎は「お兼さんは本当に奥さんらしくなつたね」(同二)、綱は「宅へ仕立物を持つて来た時分を考へると、丸で見違へる様だよ」(同)と、三様に称賛している。三人は兼を岡田の妻として評価している点で共通しており、「愛嬌」があり、良好な夫婦關係を築きあげている兼こそが「好い奥さん」なのである。彼らにとつて、結婚した女性はよりよい夫婦關係構築のために「愛嬌」をもつて「奥さんらしく」振舞うようにならなくてはならない。長野家に嫁いできた直に求められているのは、まさに一郎の妻としてそのよう

になることであつた。

長野家の長男の一郎は「昔堅氣」な父によつて「最上の権力を塗り付けるやうにして育て」られた。「長男丈に何処か我儘な所を具へ」ており、二郎だけでなく綱や直に対して「機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を聞かずに居」(同六)るが、「他人の前へ出ると、また全く人間が変つた様に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない、円満な好侶伴」であるという。自身は学者でありながら、現家長としての一郎の家族意識は両親から多くを継承している。そこに以後の一郎が懊悩するに至る要因があるのではないだろうか。

一郎は二郎に「自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要」に迫られていると語り、メレディスの書簡の「自分は何うあつても女の霊といふか魂といふか、所謂スピリットを攫まなければ満足が出来ない。それだから何うしても自分には恋愛事件が起らない」(同二十)という一節を語り聞かせる。先行研究では、一郎と直の結婚が見合い結婚であるという点から一郎の態度が問題とされている。山田晃は「初手からスピリットを素通りした一郎が、今更靈魂の要求に出るのは身勝手」と批判し<sup>118</sup>、松下浩幸も「一郎は見合いの後で恋愛を求めるといふ、同時代においてはいささか特異な男として語られる」と述べている<sup>119</sup>。同様の指摘は多いが、はたして一郎は直の「心」を知り、「恋愛事件」の起こることを求めていたのであるうか。

一郎は直を「最も親しかるべき筈の人」と表現しているが、それは、彼が妻に「奥さんらしく」あること望みながら、現実にはそうなっていないことを端的に示している。一郎にとっては、直が妻として当然果すべき役割を果たさないからこそ、その「心を研究」しなくてはならない。夫として受けるべき妻の「愛嬌」を得られないがゆえの不信である。「何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」(同二十)とは、直が「最も親し」い人と感じられれば「馬鹿」でいることができ、その心を疑うこともないということである。実際に一郎は直が「靈妙な手腕」(「帰つてから」<sup>120</sup>)を發揮して「十分か十五分話し」(同)ただけで満足してしまふ。その言葉とは裏腹に、一郎が真に直に求めていたのは妻としての「愛嬌」や立ち振る舞いに他ならない。それは母の考えとも共通しており、一郎が「古い歴史を有つた家」(同二十九)の旧来的な夫婦観を引き継いでいることがわかる。

松下浩幸は前掲の論中で『行人』には、個別性を一般性に置き換えることによつて、ある対象を説明しようとする言説パターンがよく見られる」と指摘している。一郎が「噫々女も氣狂にして見なくつちや、本体は到底解

らないのかな」と言う時、「女」として意識されているのはいうまでもなく直であろう。そして、この言葉の前提にあるのは「人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云ひ度つても云へない事が沢山あるだらう」（「兄」十二）という考えである。一郎はこうした一般性をあてはめた結果として、求めてもいない直の「本体」に悩まされることになる。同様に、彼は学問や文芸等の知識を用いて自らの夫婦関係をとらえようとすることも多い。だが、一郎の知見からくる論理には自らの家族意識や夫婦観が反映されていない。一郎とメレデイスの要求は根本的に異なっており、どれだけメレデイスの書簡を引いてみせたとしても、本来求めていたものはその中にはない。「最も親しかるべき筈の人」である直に自ら向き合わない一郎は、他の言説を参照する度に事態の本質を見失って迷走し、その目指す所から遠ざかっていく。

次に直についてみていきたい。結婚前からの知り合いである二郎によって語られる直は「持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女」である。二郎は、直のその氣質が一郎にも共通しており、「同じ型に出来上つた此夫婦は、己れの要するものを、要する事の出来ないお互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反が合はずに居るのではあるまいか」（同十四）という。二郎の分析は少なくとも一郎側の問題点を射抜いているといえるが、直は自身の夫婦生活についてどのように考えていたのだろうか。

直の「節操」を試すことを断つた二郎は、その本心を探ることだけは引き受け和歌山の料理屋で話を切り出す。「兄さんに丈はもう少し気を付けて親切にして上げて下さい」と言う二郎に、直は「是でも出来る丈の事は兄さんに為て上げて積よ。兄さん許ぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」（同三十一）と答える。一郎と直の夫婦関係を問題にする二郎に對して、直は自分個人の問題として返答している。夫だけでなく義弟のためにも「出来る丈の事」をしながら、それでも「妾馬鹿で気が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れない」（同）と感じる直は、そもそも自分が長野家に合っていないということ述べているのである。「貴方にだつて左右でせう」と話す直は、長野家の妻としての夫に對する振舞いこそが問題となつていことに気付いていない。

二郎は「もう少し積極的にしたら何うです」（「兄」三十一）と提案する。直は「積極的に何うするの。御世辞を使うの。妾御世辞は大嫌いよ。兄さんも御嫌いよ」（同）と答えるが、先に述べたように、一郎も二郎も綱も、まさにそのようにしない直に不満を抱いているのである。直の「妾のやうな魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入

らないでせう」(同)という考えや「兄さんの性質位妾だつて承知してゐる積です」(「兄」三十二)という思いは、いずれも当を得ていない。

直は家の者に「冷淡」に映るであらう自己を「腑抜け」(同三十一)と称するが、「時々他から親切だつて賞められる事もあ」(同三十二)という。三浦雅士が「お直が根本的には活発な女性」であり「家では抑圧されている」と指摘している通り<sup>120</sup>、彼女は自分なりの「親切」や「出来る丈の事」が一郎の妻として求められるものとは違つていることに気付かないまま傷つき、「魂の抜殻」(同三十一)になつてしまつたのではないだろうか。「然し私は是で満足です。是で沢山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です」(同)という言葉に秘められた悲壮な覚悟は、後に「忍耐の権化」(「塵勞」六)として確かめられる。その夜、「死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ」(「兄」三十八)と口にする直の絶望は相当に深いと思われるが、この決意は、辛い長野家にあつても自らの心性に従つて生きるのだという強い意志からくるものでもある。直は結婚によつて自身の方を変へることを望んではいない。

一郎の悩みの根源は、「好い奥さん」を求める長野家と、自分らしくあるうとする直の夫婦観の相違にある。しかし、一郎は求めてもない妻の「本体」を疑い出し、二郎はこの問題が好きか嫌いかという次元にはないことさえ気付かない。あらゆる齟齬は誰によつても指摘されることなく、一郎は疑いを深めているのである。

## 第二項 孤立の過程

旅行後の一郎は多忙な生活に追われ、二郎に「己は講義を作るため許に生れた人間ぢやない。然し講義を作つたり書物を読んだりする必要があるので肝心の人間らしい心持を人間らしく満足させる事が出来なくなつてしまつたのだ」(「帰つてから」五)と語る。その直前に「己は自分の子供を綾成す事が出来ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄学問をした御蔭で、そんな技巧は覚える余暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする為に、何うしても必要と見えるね」(同)と述べていることから、一郎が「人間らしい心持」の満足や「幸福」を、家族、とりわけ妻に求めていることがわかる。しかしながら、かつて二郎に「本式に学問をした真面目に考へを纏めたりしたつて、社会ではちつとも重宝がらない。唯軽蔑される丈だ」(同十六)と漏らしたという一郎は、今も昔も学問によつて自らが望む「幸福」な家庭生活から遠ざかつている。

「帰つてから」では、父と妹の重と一郎と直の娘の芳江と同居人の貞の四名が新たに登場し、長野家の複雑な人間関係が語られる。芳江は父である一郎を「怖い」(同三)と言つて近寄らず、直や重に懐いている。直と重には「若い女同士の葛藤」(同七)があり、二郎は「兄夫婦の間から自分といふ厄介ものを抜き去りた」(同)という母の思惑を感じている。一郎はいずれに対しても意見せず、部屋に籠つて「額には学者らしい皺が段々深く刻まれて来た。彼は益書物と思索の中に沈んで行つた」(同)という。誰を「綾成す技巧」もなく妻に対しても何も言えない一郎は、家長ではあつても家族に対して受動的でしかありえない。「訳の解つた人」(同十)であり「感情的」(同三)と評されながら、現実に対処できないのである。そして、その思索が家族との距離を更に広げてしまふ。

謡の席で、かつて契つた女性との婚約を一方的に破棄した後輩の話を父から聞いた一郎は、「男は情慾を満足させる迄は、女よりも烈しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下り坂になるに反して、女の方は関係が付くと夫から其男を益慕ふ様になる。是が進化論から見ても、世間の事実から見ても、実際」(同十九)であろうと持論を述べる。一郎はここでも松下のいう「個別性を一般性に置き換えることによつて、ある対象を説明しようとする言説パターン」を用いているが、直は「六づかしい理窟は知らない」(同)と一蹴し、父も「学理から云へば色々解釈が付くかも知れないけれども」(同)とはぐらかす。直の反応に対して、他人の前では「滅多に紳士の態度を崩さな」い一郎が「厭な表情」(同十九)を浮かべてしまうことから、彼には結婚後に自分を「益慕ふ様に」ならない直を「進化論」と「世間の事実」によつて批判する意図があつたと考えられる。しかし、見合い結婚をした一郎が直に「烈しい愛」を捧げていたようには思われず、そもそも彼が妻に求めていたものは目に見えぬ「愛」ではなく實際的に確かめられる「愛嬌」ではなかつたか。学者としての知見が実態とは異なる言葉を紡ぎ出し、一郎の認識を上書きする。「理窟」や「学理」と受けとめられる言葉は家族の心には届かず、一郎は更に苦惱と孤立を深めていくのである。

男の使いとして盲目になつた女性の元を訪れた父は、女性が二〇年間以上も知りたがつていた男の本心をごまかしたという。後日、一郎は「お父さんの軽薄なのに泣いたのだ。本当に情ないと思つた」(同二十一)と話し、同時に、直について何も報告しない二郎を「お父さん流だよ。少しも摯実の気質がない」(同)、「士人の交はりはお来ない男」(同二十二)、「軽薄児」(同)と、父子の関係を根柢に非難する。池上玲子の、「一郎が、盲目の女のエピソードに過敏に反応して、父の態度を非難したのは、弟二郎を非難するためであつた」との読み<sup>121</sup>通りで

あろう。また、池上は「軽薄」な父や弟を排除しようとした一郎は、自分だけは「軽薄」でないというために、結果的に、自らを長野家の血筋から排除することになってしまふ」とも述べている。一郎は「人間らしい心持」の充足や「幸福」を求めるべき家族を自ら断罪してしまふ。「学問をして、高尚になり、かつ迂濶になり過ぎた兄が、家中から変人扱ひにされるのみならず、親身の親からさへも、日に日に離れて行く」(同二十一)と伝えられていた一郎の孤立は決定的となる。

二郎は和歌山において直の涙に同情したが結局その心は解らず、他方で、その一泊の経験が「兄を裏から甘く見る結果」(「兄」四十三)になった。帰京後には「卑怯」(「帰つてから」五)と感じながらも一郎への報告を避け続けている。やがて一郎が二郎を「軽薄児」と断じたとき、実際には直と二郎との対話が交感に至ることさえなかったにもかかわらず、弟の沈黙は兄への裏切りと解釈されてしまふ。

一郎は家を出る事を決意した二郎に対して「人間の作つた夫婦といふ関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖」(同二十七)であり、「だから道德に加勢するものは一時の勝利者には違ないが、永久の敗北者だ。自然に従ふものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ」(同二十八)と語る。それは弟と妻との「恋愛」を想定しているからであり、「お前は現在も未来も永久に、勝利者として存在しやうとする積か」(同)との言葉には二郎への批判意識が明らかであろう。ただし、ここでも重要なのは一郎がパオロとフランチェスカのエピソードによって自らを語っているという点である。

そもそも一郎の望みが良好な夫婦関係(をもたせざる妻)であつて、「恋愛」ではなかったことを再度繰り返しておきたい。二郎によると、二人の対話の直後に登場した直はかつてない程の「夫人らしい愛嬌」(同二十八)を夫に見せ、一郎もまたこれまでになく和らいだ気分を眼に浮かべたという。しかし、パオロとフランチェスカの話を参照することによって自己を「永久の敗北者」と規定し、その願いを「一時の勝利者」のものとしてしまった一郎の心は、これ以降決して満たされることはなくなる。二郎が去り、妻の「愛嬌」を得たとしても疑いが晴れることはなく、苦しみ続けなくてはならないのである。水村美苗は見合い結婚が「(自然・法)」という二項対立を排除したところで成り立っている点から、「一郎の狂気とは二項対立のないところに二項対立を見いだそうとするところにある」と指摘している<sup>122</sup>。現象としては水村論の通りであるが、本質的には、一郎は自縛自縛の連鎖を繰り返し自らの願いを不可能なものにして「狂気」に陥つたのである。

直接的に「士人の交はりは出来ない男」と言われ長野家を離れた二郎は、綱から「此頃兄の神経が大分落ち付

いた」（同三十二）と聞き、「母には気の付かない特殊の点に、何だか変調がありさう」（同）と感ずてもそれを確かめる行動を起こす「勇氣は無論起し得な」（同）い。二郎にとつて敬愛すべき「見識家」（「兄」六）であつた一郎は寡黙な「思索家」（「帰つてから」二十）となり、理解の及ばぬ「感情家」（同三十六）になっている。一郎は、彼の「人間らしい心持」を満たし「幸福」にさせてくれる家庭を求めていた。しかし、そのような思いがあるにもかかわらず、言葉を重ねる度に家族との距離は広がり、最終的には語り手の二郎にも語り得ない存在になってしまうのである。

### 第三項 「塵勞」の旅

「塵勞」の冒頭部では、季節が前章末部の冬から春へと移っている。下宿生活を始め長野家から遠ざかつていた二郎は、直に一郎との夫婦関係が「自分が宅を出た後も唯好くない一方に進んで行く丈であるといふ厭な事実」（「塵勞」四）を聞かされ、テレパシーを研究する兄を「気味が悪い」（同十一）と言う重の話を聞き、父と綱には「兄一人のために宅中の空気が湿つぽくなるのを辛いと云」（同十二）われる。しかし、両親からの相談にも、既に一郎との関係が崩れた二郎には何もできず、「兄と一番親密なHさん」（同）を頼る。

Hは一郎の同僚であり、学生時代からの友人でもある。一郎に関しては「凡て学問とか研究とかいふ側」（同十五）から話題にし、思想的な「動揺」（同）は「御宅の方と関係があるかないか、そこは僕にも解らな」（同）という。現在の二人が「学問とか研究」を中心に交流し、少なくとも一郎は家庭の問題を話題としていなかったことがわかる。しかし、一郎は、具体的な原因の説明を避けながらもHに「会ふたんびに、ほとんど極り文句のやうに」（同）神経衰弱を訴えている。その兆候は二郎が「下宿する前後」（「帰つてから」三十）の大学講義中に「幾遍もあつた」（同）と伝えられているが、それは、家庭内に限られていた一郎の悩みが彼の生活全体を覆うようになったということに他ならない。「平生から家で気六づかしい癖に、外では至極穩か」（「塵勞」十五）であつたはず一郎の境界は揺らぎ、それ故に親友のHに神経衰弱を訴え、旅行中に自らの苦悩を語りだしたと考えられる。

良好な夫婦関係や「幸福」な家庭という、自己の依つて立つべき願いを自ら不可能にしてしまった一郎は、その後何を求め、どこへ向かうのか。「塵勞」の執筆を開始するに際して漱石が「左して長いものでないこの章をどのように構想していたのかは不明である。ただ、一郎と語り合えなくなった二郎に代わる語り手としてHが



見出されたとき、作者が作品内で更なる探求を行えるようになったことは確かであろう。

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、何処迄行つても休ませて呉れない。何処迄行かれて行かれるか分らない。実に恐ろしい」

「そりや恐ろしい」と私も云ひました。

兄さんは笑ひました。

「君の恐ろしいといふのは、恐ろしいといふ言葉を使つても差支ないといふ意味だらう。実際恐ろしいんぢやないだらう。つまり頭の恐ろしさに過ぎないんだらう。僕のは違ふ。僕のは心臓の恐ろしさだ。脈を打つ活きた恐ろしさだ」(「塵勞」三十一)

一郎は旅先でHに「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。(中略)実に恐ろしい」といい、自分が「人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる」(同三十二)と語る。秋山公男は「一郎の「苦痛」「不安」「恐ろしさ」の内容及び性質は、「帰つてから」までには見られなかつた種類のものであり、「塵勞」固有のもの」と指摘し、「主題の変容と相関している」と論じている<sup>123</sup>。多くの先行研究によつても作品の主題的転換による「裂け目」を示すものと読まれてきたが、果してそうなのだろうか。

一郎の言葉の前に「何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならない」(同三十一)という主旨での対話があつた点に注目したい。一郎は行動の指針を失つており、それはいうまでもなく家庭内での孤立によるものである。最大の関心事であつた夫婦関係において「永久の敗北者」となつた一郎には家庭に安らげる場所はなく、そこは「幸福」な場ではあり得ない。その立脚点を失つたからこそ、「進んで止まる事を知らない科学」に恐怖するのではないか。その翌日、一郎は自身に関して「上部から見ると、如何にも一人前の紳士らしいが、実際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろくしてゐる」(同三十三)と語っている。他人の前では「紳士の態度を崩さない、円満な好同伴」と振舞つていた一郎にとって、妻や家庭こそが「恐ろしい」社会を生きるために必要な「宿」なのであり、それを喪失したことで絶え間のない「不安」と「恐ろしさ」に曝され

ているのである。「脈を打つ活きた恐ろしき」(同三十二)は個人的な感情であるが、「人間の不安」(同)と一般化して語られることで彼に固有の側面が覆い隠されてしまう。一郎の「変調」が家庭の問題に端を発している以上、その言葉は単に抽象的な文明論ではありえない。この時点で一郎はHに家庭の悩みを打ち明けてはおらず、それ故にこのような語りになったのである。

Hは一郎が苦痛を語る姿を見て「宗教家になる為に、今は苦痛をうけつゝあるのではなからうか」(同三十三)と感ずる。一郎に「円満な神」(同三十四)について話すが、「意味のない口先丈の論理」(同)と一蹴されてしまう。一郎は「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」(同)、「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか」(同)と言い切る。Hの解釈とは異なり、一郎は「宗教」や「口先丈の論理」ではなく現実の「生きた人間」への志向を明言している。「君の心と僕の心とは一体何処迄通じてみて、何処から離れてゐるのだらう」(同三十六)という問いかけや、「自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない」(同)という言葉からは、他者との交感とその関係性の潔癖の要求が読み取れる。しかし、それらを実際に確かめる術がないにもかかわらず、Hを自分の「お守」(同)と言い、その言動が「誠を装ふ偽」(同)であり、「朋友としての僕は君から離れる丈だ」(同)と断言する。一郎の求める関係性は、わずかな不信でさえ破綻に直結する危ういものである。

また、次の場面で一郎は初めてHに「たゞに社会に立つてのみならず、家庭にあつても一様に孤独であるといふ痛ましい自白」(同三十七)をすると同時に家族への「疑念」(同)を訴え、「たゞ自分の周囲が偽で成立してゐる」(同)と話す。一郎は疑いの余地のない関係性を望みながら、そのために相手を疑うという背理を犯している。そこに家族との関係修復の可能性はなく、他者との新たな繋がりが生まれることもないだろう。

Hは「兄さんは鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、(中略)自分程進んでゐない世の中を忌むのです」(同三十八)と分析する。そして、「今日迄に養ひ上げた高い標準を、生活の中心としなければ生きていられぬ」(同四十)い点に問題を見出し、「自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もつと楽になれるよ」(同)と語りかける。一郎は、思い通りにならない世の中に働く「自分以外の意志」(同四十一)の存在を認めるが、「大概は僕のよりも不善で不美で不真だ。僕は彼等に負かされる訳がないのに負かされる。だから腹が立つのだ」(同)と語ったという。一郎が自己を中心に行っているというHの分析が妥当であることが解るが、それでは一郎が高い「標準」に依ろうとするのはなぜなのであろうか。Hは「兄さんは幸福になりたいと思

つて、たゞ幸福の研究ばかりしたのです」（同三十九）と述べている。「帰つてから」までの一郎の「幸福」は、「好い奥さん」のいる家庭であつた。その理想が潰えて「宿なし」のような心になつた一郎は、ここで新しい「幸福」を模索してゐたのではないか。しかし、「疑念」の余地のない「幸福」を求める「標準」は、真に潔癖な人間関係が不可能であつたように、現実とはかけ離れてゐる。結果的に「自分程進んでゐない世の中を忌む」ことにならざるを得ないのである。それでも一郎は自らを省みることなく、むしろ自己肯定を突き詰めていく。

「僕は絶対だ」（同四十四）と一郎は言う。「絶対」とは「天地も万有も、凡ての対象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在す」（同）る境地であり、「絶対」を経験した人は「自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らな」（同）い「絶対即相對」（同）に至れるという。しかし、一郎は同じ場面で「僕は明かに絶対の境地を認めてゐる。然し僕の世界観が明かになればなる程、絶対は僕と離れて仕舞ふ」（同四十五）と語る。一郎の「絶対」への挫折について、仲秀和は「一郎の求める絶対とは、不安定で不確かな人間存在の凝視から必然的に想起されたものであるが、その希求と魂の交流への願ひとは、止揚し難い矛盾があるようだ」と述べている<sup>124</sup>。その指摘通り、「孤独の感に堪へない」（同三十七）と訴えていた一郎には「唯自分丈が存在」するような「絶対」はそぐわない。「苦しむ必要」も「苦しめられる懸念」もないが、そこには「幸福」もないだろう。Hに、「蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と対象とがびたりと合へば、君の云ふ通りになるぢやないか」（同四十八）と言われても「心元なささうな返事」（同）しか返さないのは同様の理由であると考えられる。「孤独」に苦しむ一郎は、「人間らしい心持」を満たすような他者との関係性の構築なしに救われることはない。

手紙の結末近くで一郎は、「嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。左右さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ」（同五十二）と語る。その言葉には「加害者意識の発生」<sup>125</sup>とともに「傲慢な人生态度」<sup>126</sup>も認められる。作品はこの挿話の後に閉じられ、終局においても一郎の苦悩に解決は見られない。しかし、彼の認識が直に「好い奥さん」であることを一方的に求めていた頃とは違うものになつてゐる点は意義深く、そこから直と向き合う事ができたときに彼の苦しみの終わりの可能性も見えてくるはずである。

自身を夫婦生活の「永久の敗北者」と規定し、他の家族からも自己を疎外していった一郎は、親友のHに苦痛

に満ちた生を打ち明ける。誠実な聞き手として一郎に寄り添い、辛抱強く対話を続けたこの親友の存在によって、「塵勞」では二郎が語り得なくなつた一郎の内面がより深く照らし出されるのである。一郎が語る「人間全体の不安」の裏には、帰るべき家庭に居場所を失つた個人としての「不安」が刻み込まれている。周囲への「疑念」を抱きながら、一方で疑いのない関係性を求めるといふ矛盾の中で「孤独」に陥り苦悩している。「美的にも倫理的にも、智的にも」高すぎる「標準」は、「自分程進んでゐない世の中」への嫌悪にしかならず、苦しみのない「絶対」の境地には「幸福」を求めるべき他者もない。「塵勞」の旅における苦悩の告白は、精神的な拠り所を失い新たな立脚点の確立を模索する一郎の苦闘の表白であつた。

以上、本節では長野一郎の内面とその変化を中心に論じてきた。そこからは、「古い歴史を有つた家」の夫婦観と家族意識を継承した一郎が、自ら重ねた論理によって不信と孤独に陥る過程と、その苦しみを脱するためにより深く苦悶する姿が明らかになつた。「塵勞」における一郎の告白は「唐突」とはいえず、「作者の問題意識が移行した」ことによる作品の「裂け目」を示すものでもない。それは、立脚点を失つた一郎の自己再建の可能性の模索であつて、執筆継続による主題の展開と捉えるべきであろう。Hによつて報告されるのは「美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎ」る一郎の苦悩であり、兄を「学問をして、高尚になり、かつ迂濶になり過ぎた」と評する二郎の視点からは語り得ないものである。二郎は一郎の夫や家長としての悩みと孤独を伝え、一郎の言葉を「理窟」や「学理」としてではなく苦しみとして受け止められるHはその「鋭敏過ぎ」る知性の働きによる煩悶を語る。二人の語りが相互に補完し合うことで、家長と学者の二面性をもつ一郎の苦しみの内実が浮かび上がってくるのである。

### 第三節 『行人』の行方

#### 第一項 〈二郎説話〉と〈一郎説話〉

第一節では二郎を中心に、続く第二節では一郎を中心に、それぞれ考察を行つてきた。いずれにおいても二人に託された主題が語りの展開とともに発展的に追求されていくことを明らかにしてきた。それでは、『行人』研究における重大な課題として、この〈二郎説話〉と〈一郎説話〉の「両説話の意義を統一的に見通す、そのような〈融合点〉」はどこに求められるのであろうか。作品全体の総括を試みたい。

その一つの答えは須田喜代次の言う「明治期の「古い歴史を有つた家」崩壊のドラマ」として作品を捉えたと

きに明らかになると考える。そして、それに際して問うべきは、なぜ作者が大正の初年にそれを描いたのかということである。須田は「周囲に押し寄せる新しい時代の波」からそのことを考察しているが、本論で注目するのは各人物の内面、そのあり方や生き方の問題である。

「古い歴史を有った家」である長野家において、一郎と二郎はその家風を内面化した人物として描かれている。作品内で特にそれと確かめられるのは第二節で取り上げた夫婦観であり、夫である自分に「愛嬌」を揮わない直を疑った一郎は無論、長野家の妻として直に感じる批判意識を「平生から兄夫婦の関係を傍で見ているもの、胸には屹度起る自然のもの」として語る二郎にもそれが確かめられる。しかし、そうではありながらも直接的にはこの二人が各々に家長の夫婦関係を揺るがし、内外から〈家〉の実質的な破綻を導いたのである。

一郎は直の「本体」への疑いから二郎を巻き込み、様々な学理を駆使しながら不信を深め、やがて両親さえも見限って〈家〉から自己を疎外していった。また、二郎は和歌山での夜に直の「正体が知れないといふ簡単な事実」に思い至り、その中から兄であり家長である一郎に相対する視点を獲得し、仕掛けられた「性の争ひ」を逆手にとつて一郎を苦しめることになった。そして、それらの原因となった直自身も、長野家の妻としてよりも自らのあり方を保とうとして「魂の抜殻」になっている。三者は三様に「古い歴史を有った家」の規範を越えて思考し、行動する〈新しい時代の人間〉とも言うべき形象が与えられており、各人が自らの心性に従った結果として〈家〉が破綻に向かつていったのである。二郎と一郎はその中でも決定的な役割を果たしていた。

長野家が新時代の人々を容れることのできない〈家〉であったことは明らかである。「我儘」な一郎を頂点とした構造による関係性は、次男の二郎や家長の妻である直だけでなく、他の家族に対しても抑圧的なものであった。しかし、二郎の語りを通じて作品が問うていたことは「古い歴史を有った家」の規範そのものの是非ではなく、そこに生じた軋みに対して人々がいかに相対していくのかということではなかったか。

「二郎さん、今になって下宿するなんて、そんな馬鹿がありますか、家が淋しくなるぢやありませんか。ねえお直さん」と彼は嫂に話し掛けた。此時だけは嫂も流石変な顔をして黙つてゐた。自分も何とも云ひやうがなかつた。兄は却て冷然と凡てに取り合はない気色を見せた。岡田は既に酔つて何事にも拘泥せずへらく口を動かした。

「尤も一郎さんも善くないと僕は思ひますよ。そう貴方、書齋にばかり引つ込んで勉強してゐたつて、詰

まらないぢやありませんか。もう貴方位学問をすれば、何処へ出たつて引けを取るんぢやないんだからね。然し二郎さん始め、お直さんや叔母さんも好くないやうですね。一郎は書齋より外は嫌ひだくつて云つきながら、僕が来て斯う引つ張り出せば、訳なく二階から下りて来て、僕と面白さうに話して呉れるぢやありませんか。左右でせう一郎さん」

彼は斯う云つて兄の方を見た。兄は黙つて苦笑ひをした。(「帰つてから」三十三)

岡田による右の言葉は、長野家の人々の問題点を一面において的確に射抜いたものであると言える。しかし、本章を通じて明らかにしてきたように、二郎は誰一人として破綻を望まないままにすれ違ひばかりが極大化していく過程を語っているのである。今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない「過去として語っていることから、長野家が新しい時代に沿つた〈家〉として再構築されることはあらかじめ断念されていたと考えられる。

そうであるならば、二郎の語りでは〈家〉よりも自身のあり方を大切に生きる個人の集まりが家族としてどこまで調和し得るのかということが問題にされていたと言える。二郎は「友達」では貞の結婚に関して「どうしてお貞さんが、そんなに気に入つたものかな。まだ会つた事もないのに」(「友達」七)、「あんまりお手軽過ぎて、少し双方に対して申訳がないようだから」(同十)、「旨く行くでせうか」(同十一)と疑問を提示し、続く「兄」でも一郎と直を「同じ型に出来上つた此夫婦は、己れの要するものを、要する事の出来ないお互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反が合はずに居るのではあるまいか」と分析していた。夫婦関係を個人同士の関係性として捉えていた彼はそうした問題意識を有していたと言える。そこに巻き込まれて兄弟関係にも大きな亀裂を作つた二郎は、関係修復に動くことはできなかったが、「何うかして兄と故の通り親しい関係になりた」と心では希望してゐた(「帰つてから」三十七)のである。一郎の暴走もまた「自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人」である直を理解しようとしたが故のことであつた。「古い歴史を有つた家」の人間関係が崩壊していく過程で、二郎も一郎も各々に問題の解決を求めて苦しんでいる。各人の思いのすれ違ひが重ね合わせられたこの小説は、それを通じて単に旧弊な〈家〉の問題点を指摘しようとしているのではない。〈家〉が家族に齎す「幸福」の重みとその根源を逆説的に確かめようとしているのである。(「二郎説話」と「一郎説話」を取り結ぶ点はまさにそこにある。

「塵勞」が作者の当初の想定を超えて執筆されたものであることについては前節で論じた通りであり、旅行中

にHに打ち明けた一郎の苦闘が、その喪失したものの大きさを明瞭に物語っている。一郎だけでなく、家を出て独立した二郎もまた「自分は余程前から事務所ではもう快活な男として通用しない様になつてゐた」（「塵勞」六）という。〈家〉という立脚点を喪失した個人が、苛烈な生存競争を強いる社会に対する抛り所をどこに求めるのか。その主題は前三編を發展的に追求したものである。

『行人』は、二郎とHという二人の語り手を通じて長野家の波瀾の内実を語り出している。新しい時代を生きる二郎と一郎、そして直の存在によって「古い歴史を有つた家」はその規範の限界を見せつつ破綻状態に至る。しかし、その過程を語る二郎の喪失感や、二郎とHにより伝えられる一郎の孤独と苦悩からは、より激烈なものへと変わりゆく社会にあつてもなおそれぞれの立脚点であつた〈家〉の存在の大きさも読み取れる。明治が終わり大正が始まつたその年に、漱石は旧式の〈家〉の中に時代を越えても変わらない普遍的な意義を探り、新しい時代を生きる要件を考察しようとしていたと考えられるのである。

## 第二項 『彼岸過迄』から『心』へ

『行人』を同時期に執筆された『彼岸過迄』、『心』と併せて所謂〈後記三部作〉と捉えた場合、第二作としてこの小説はどのように位置づけられるのだろうか。二郎と一郎から考えたい。

前作『彼岸過迄』の「結末」において、視点人物である田川敬太郎は「門外漢」であり「彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪」とされていた。これに対して『行人』の長野二郎は、友人である三沢との間で「性の争ひ」を体験し、また、一郎と直の間に立つて長野家の人間関係の混迷にも当事者として関わっていく。事態の内側から「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」（「停留所」一）を目撃するだけではなく、自身の無意識の行動の中にもそうした「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」の働きを認めている。それこそ、敬太郎に「物足らない所」（「結末」）であつたものと理解してよいだろう。次作『心』でも『行人』の方法が踏襲され、前半の語りである「私」が「先生」との関わりを通じてその心の暗部に触れていった過程を回想している。また、それだけではなく、後になつて自らの「卑怯」を後悔とともに語る語り手としての二郎の姿は、「かつては其人の膝の前に跪ぎいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです」（『心』十四）、「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならぬいでせう」（同）などと話し、やがて遺書により自らの過去を語り出す「先生」とも重なっている。

一方、悩める知識人として須永市蔵と同系の人物と目される長野一郎に関して、玉井敬之は『彼岸過迄』の「松本の話」の一節を引いて「(中略)不幸を醸す目的で夫婦になつたと同様の結末に陥い」つた長野一郎とお直の関係の一つの軸にして小説が展開されていく」と述べている<sup>127</sup>。自分の希望を伝えず、相手の求めるものも解らずに疑い続ける関係はもとより危機である。一郎は様々な言説を用いて夫婦関係を語るが、一般化して捉えられる関係性は実態との誤差を含み、その積み重ねが誤解と錯覚を生む。自らの言葉で直と語り合わない一郎には円満な夫婦関係の追求は不可能であろう。そうして募った疑いが家族全体を暗く覆うのである。「僕の頭は僕の胸を抑える為に出来てゐた」(「須永の話」二十七)という須永の鋭敏な思考は感情の抑圧として機能し、その内面に疑惑や葛藤を導いていた。これと比較すると、一郎の「頭」と「胸」は互いを煽る形で作用し、疑惑と不信を深化・加速させていたと言える。その暴走とも言える思考の結果として本来求めていたものから遠ざかり、それまでに築き上げた「高い標準」に苦しんでいる。そして、『心』では「固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です」(『心』五十六)と語る「先生」の過去が一つの焦点となっている。「先生」もまた静という女性の「正体」に惑い、友人Kとの「性の争ひ」に苦しむのであるが、彼を追い詰める要因となっているのはその「倫理」性である。須永とも一郎とも異なる問題を抱えた「先生」の内面の問題がどのように追求されているのかということは次章で考察する。

一郎の立脚点と志向はいずれも自身の家庭にあったが、この一郎同様に須永と「先生」も大学を出た知識人であり、どちらも家や故郷に根ざしていながら、そこから自己を疎外している。須永は「法律など修めないで、植物理学か天文学でも遣つたらまだ性に合つた仕事か天から授かるかも知れない」(「須永の話」五)と話す。かつて「家名を揚げるのが子たるもの、第一の務」(同)という母の考えに従っていたことが窺えるが、自身の(出生の秘密)を知った後は大学を卒業しても職に就かず「退嬰主義」(「停留所」一)に陥っている。須永は「血統」(「松本の話」六)の問題で行き詰るが、「頭も身体も続かなくなるまで考へ」(同四)る彼が旅先で見出したのは「考へずに観る」(同十二)という方法であった。越智治雄は須永について、「存在の根拠」を求めて「命根の認識に至ろうとしている。(中略)しかしなお存在の根底にある不幸を脱する方向をみいだせていな」い「須永こそ漱石



の作家的営為において新しく造型された人物形象であった」と指摘している<sup>128</sup>。これに対して一郎は「永久の敗北者」となって「軽薄」と断じた家族から自己を疎外した後も旅先で自己の新たな立脚点を求めている。二人はともに自分の苦悩に根本的な解決を見出せないが、それでも一郎は自身の「存在の根拠」をより深く問い続けているといえる。そして、「先生」は学生時代に叔父の裏切りを受けて「永く故郷を離れる決心」（『心』六十三）をしている。その後、全てを語るべき親友を出し抜き、そのせいで「最も幸福に生れた人間の一对であるべき」（同十）はずの静とも「幸福」ではいられない。ここでも須永や一郎とは異なる経歴が見出されるが、前二者よりも深い孤立と絶望が与えられているのである。

このように、『行人』は『彼岸過迄』で求め切れなかった人間の内面を発展的に追求した作品として確かに三部作の第二作として位置付けることができ、そのために二郎と一郎の形象が果した意義は大きい。そして、『心』では『行人』を受けて更にどのような問題が描かれているのか、章を改めて考察する。

#### 第四章 『心』

小説『心』は一九一四（大正三）年四月二〇日から八月一七日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載され<sup>129</sup>、同年九月に単行本が刊行された。当初は短編集「心」の第一編として「先生の遺書」の題で連載されていた<sup>130</sup>が、連載の長期化に伴いこの編のみで執筆が終了し、単行本化の際に全体が「上 先生と私」、「中 両親と私」、「下 先生と遺書」に区切られて題も現在の『心』に改められた<sup>131</sup>。

先行研究に関しては各時期において多様な問題が提出されており、仲秀和によって分類がなされている<sup>132</sup>。「先生」を漱石と見なす初期の研究から、作品に踏み込んで「先生」の自殺や「明治の精神」が問題とされた時期、各登場人物の分析が行われ青年の意義が問われ、やがてその手記としての作品の位置付け等が議論されていた。現在においても作品細部の読みから全体の読みまで、多様な観点から研究が行われている。

そこで、本章での作品分析に際して問題としておきたいのが、漱石が単行本に付した序文中の「其短篇の第一に当る『先生の遺書』を書き込んでいくうちに、予想通り早く方が付かない事を発見した」、「此『先生の遺書』も自から独立したやうな又関係の深いやうな三個の姉妹篇から組み立てられてゐる」という二つの言葉である

作品の問題点として、かつて二人でKの墓に訪れたことがあるにも関わらず「自分の妻さへまだ伴れて行つた事がない」(六)と言つた「先生」の言葉や「四つ折に畳まれてあつた」(五十三)は「はずのないほど長大な「先生」の手紙などが矛盾点として引き合いに出されてきた。しかし、それらは短編として起稿された『心』が、作者の構想を越えて執筆されていったことの何よりの痕跡である。「先生の遺書」の題で書き始められていることから端的に読み取れるように、この小説は『彼岸過迄』や『行人』とは異なり〈死〉のモチーフがあらかじめ提示されている<sup>134</sup>。後半部で視点人物とは異なる語り手が登場して悩める知識人の内面を語り出すという点では共通しているといえるが、定められた自殺に収斂していく過程で「私」中心の前半と「先生」中心の後半においてそれぞれ問われている問題とは何か。作者は作中で問題を深めながら、しかし、自ら「独立」を感じるような構成も採っている。その「活動と発展」を考察しつつ、本作品の展開と内実を明らかにしたい。

### 第一節 「私」と「先生」

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つては自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。余所々しい頭文字杯はとも使ふ気にならない。(一)

本節では「私」によって語られている作品前半を対象に、主として青年期の「私」と「先生」との交流から考察を行う。

『心』は、「先生」を慕う「私」の手記として構成され、青年時代における「先生」との出会いから最後の手紙を受け取るまでの回想と、その手紙の直接引用が行われている。その語り手である「私」は、「先生」の過去を引き出した人物として<sup>135</sup>、そして後年になって手記を書く人物として<sup>136</sup>も重要な意味を持つ。短編の連作として起稿された原「心」に「先生の遺書」以後の「私」を描く構想があつたのかは知るべくもないが、ここでは語りの焦点となつている「私」と「先生」との交流を中心に、それを相対的に眺めて語る「私」の視点を加えて捉えたい。

執筆が長期化した作品としては後半の「先生」の手紙が注目されがちであるが、後に「上 先生と私」と「中 両

親と私」に区切られた「私」の回想は併せて五四回にのぼり、全百十回の作品のほぼ半分を占めている。「上先生と私」では「先生」の謎めいた言葉が「私」の関心を引く流れが繰り返されており、後半の伏線としても理解され得る<sup>137</sup>。しかし、「先生」の手紙が四つ折りに畳まれるほどのものとして書き始められた以上、前半部は周到な伏線としてではなくそれ自体に主題が込められたものとして捉えるべきではないか。全体の伏線として読めるのは、結果的にそう読み取れるだけであると考ええる。また、「中 両親と私」には二人の直接の対話はないが、「先生」に傾倒した「私」の意識がその故郷の家族との対比において照らし出されている。ここにもまた作品の「活動と発展」が見出されるはずである。

### 第一項 恋と人間不信

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。(中略)私は又軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。寧ろそれとは反対で、不安に揺かされる度に、もつと前へ進みなくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。(中略)私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけやうとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の価値のないものだから止せといふ警告を与へたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まづ自分を軽蔑してゐたものと見える。(四)

「私」は休暇中に友人とともに訪れた鎌倉で一人になり、「無聊に苦しんでゐた」(二)ときに西洋人を連れていた「先生」を見出し、その「非社交的」(三)な態度にも自ら接近していったという。その後、東京へ戻り、大ががが始まってからは「しばらく先生の事を忘れた」(四)が、「心に、一種の弛み」(同)が生じた時に再び会いたくなくてその家を訪れるようになったと回想している。当時は親しみの厚く感じられない「先生」の態度に「軽微な失望を繰り返して」いたが、現在では本質的には「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」(六)であつたと理解している。

このように、青年期の「私」は理由の判然としないまま「先生」に好意を抱いて接近している。後年になって、

当時の「先生」に向かう姿勢を「私の生活のうちで寧ろ尊むべきもの、一つ」(七)とし、無自覚であったそれのおかげで「全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう」(同)と振り返っている。ここで「愛せずにはゐられない人」であるはずの「先生」がなぜ「淋しい人間」(同)として暮らしているのかという謎が提示されている。それは、なぜ「遺書」を遺して死んでしまったのかという疑問にも直結する問いかけである。

「私は世の中で女といふものをたつた一人しか知らない。妻以外の女は殆んど女として私に訴へないので。妻の方でも、私を天下にたゞ一人しかない男と思つて呉れてゐます。そういふ意味から云つて、私達は最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」(十)

「先生」の苦悩の一つとして最初に「私」が語るのは、一見して「仲の好い夫婦の一对」(九)に見える「先生」と静との関係である。ある日「先生」の家を訪れた「私」は、玄関で夫婦の言い争う声を聞く。「先生」はその理由を「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」(九)と話し、「妻が考へてゐるやうな人間なら、私だつて斯んなに苦しんでゐやしない」(同)と告げている。妻である静を愛し、自身も愛されているという確信を持ちながら、決して「幸福」であるとは言わない「先生」の「淋しい人間」としてのあり方が示されて以降、語りはかつて「私」が感じた疑問や違和感、「先生」との対話の中から漏れる苦悩を辿っていく。

「私」は、「先生」に対する疑問として「丸で世間に名前を知られてゐない人」(十一)であることを挙げていく。その「学問や思想」(同)に敬意を払っており、「私の精神は反抗の意味といふよりも、世間が先生を知らないで平気であるのが残念だった」(同)という。これに対して「先生」自身は「私のやうなものが世の中へ出て、口を利用しては済まない」(同)、「何うしても私は世間に向つて働らき掛ける資格のない男だから仕方ありません」(同)と答えている。また、静は「矢つ張り何か遣りたいのでせう。それでゐて出来ないんです。だから気の毒ですわ」(同)と話している。

当時の「私」にとつて「先生」が、大学を卒業しているにも関わらず「世の中」(同)へ出ることなく、それで

いて家庭の中でも幸福を得られていないという謎を抱える人物であったという。しかし、自己を蔑む「先生」の言葉はそうした現状を自らも望んでいないことを匂わせており、そこに至るまでの原因を内面に抱え込んでいることが示されている。

私の仮定は果して誤らなかつた。けれども私はたゞ恋の半面丈を想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しく恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生に取つて見惨なものであるかは相手の奥さんに丸で知れてゐなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞つた。(十二)

そして、「私」は「先生」の自己卑下や自殺に深く関わる原因として、「先生」の恋に隠された「恐ろしい悲劇」を予告している。それは、「先生」自身の「恋は罪悪ですよ」(十二)、「君は私が何故毎月雑司ヶ谷の墓地に埋つてゐる友人の墓へ参るのか知つてゐますか」(十三)という言葉によつても裏付けられている。しかし、語りは「それぎり恋を口にしなかつた」(同)後の「先生」を回想する。交流を重ねることに、「先生」は徐々にその内面の深くに根差した苦しみを伝え出しており、石原千秋は「先生の執拗に繰り返す謎かけが、青年に対する先生の誘いかけ」であつたと指摘している<sup>138</sup>。ここでは静との恋に隠された悲劇だけが絶望の原因ではないことと理解してよいが、作者の視点から言い換えると、それは恋にまつわる悲劇だけでは自殺に至るには不十分であつたということである。『行人』では「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」(「塵勞」三十九)と言つた長野一郎が、果てのない狂気に向かいつつある過程が描かれていたが、『心』前半では定められた自死に至る要件が追求されていたと考えられる。「私」と「先生」との交流は、回想形式でありながら、その認識を深めるためのものであつたではないだろうか。執筆長期化の理由もそこに見出されるだろう。

「信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」(中略)

「私は私自身さへ信用してゐないので。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないのです」(中略)

「かつては其人の膝の前に跪びいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を乗せさせやうとするのです。

私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」(十四)

人間全体への不信を語る「先生」を前に「其思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれてゐるらしかった」(十五) という感想を得た当時の「私」は、「二人の恋から斯んな厭世に近い覚悟が出やう筈がなかった」(同) と考察し、「先生」が訪れる墓を「自由の往來を妨げる魔物」(同) のように思ったという。そして、静に「先生」の實際を問ひかけた場面を回想する。

静は「私は嫌はれてるとは思ひません。(中略)。然し先生は世間が嫌なんでせう。世間といふより近頃では人間が嫌になつてゐるんでせう。だから其人間の一人として、私も好かれる筈がないぢやありませんか」(十七) と語り、「段々あゝなつて来た」(十八) という「先生」に何を聞いても「御前に欠点なんかありませんか」(十七) とおれの方にある丈だ」(同) と言われるだけだったと証言している。そして、そのように「厭世的」(十九) に変わつていった原因として「思ひ中る事」(同) に大学時代の友人の「変死」(同) を挙げてゐる<sup>133</sup>のであるが、「人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか」(同) の問いかけに「私の判断は寧ろ否定の方に傾いてゐた」(同) という。「私」は、自身の見方だけではなく、静の視点からも「先生」を眺めて、絶望の根源がより奥底に秘められてゐることを予感してゐる。「私」のこの判断は、ここまでの語りに示された諸要素が「先生」の自殺の前提とするにはまだ不十分であるということを示してゐる。「厭世的」な「先生」の恋と人間不信に関わる謎を示した後に回想は「私」の帰郷へと場面を移す。やや唐突とも取れる流れではあるが、作品は「私」の視点に沿いながら「先生」の心の深奥を探求し続けていくのである。そこで何が問題とされているのか、考察を続けたい。

## 第二項 故郷と金

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になつた。私の母から受取つた手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今といふ心配もあるまいが、年が年だから、出来るなら都合して帰つて来てくれと頼むやうに付け足してあつた。(二十一)

故郷に帰った「私」は、東京の事を考えて「漲る心臓の血潮の奥に、活動々と打ちつゞける鼓動を聞いた。不思議にも其鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められてゐるやうに感じた」(二十三)という。その一方で、父との将棋では「若い私の気力は其位な刺戟で満足出来なくなつ」(同)ている。それを意識したとき、「心のうちで、父と先生とを比較」(二十三)している。二人を「両方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分らない程大人しい男」(同)として共通に見ながら、父には物足りなさを感じ、「先生」に関しては「歓楽の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を与へてゐた。たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた」(同)と述べている。また、帰省の度に東京で身に付けた「父にも母にも解らない変な所」(同)が父母の目について「面白くなくな」り、「早く東京へ帰りたい」(同)ことを伝えている。

ここで「私」は故郷との比較において感じた「先生」への傾倒を語っている。その感覚は、「先生」が「あかの他人であるといふ明白な事実を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな真理でも発見したかの如くに驚ろいた」(同)とあるように、単なる「学問や思想」への敬意を越え、その人間性への共感や血縁の絆にも似た親しみとして認識されている。江藤淳は「私」と「先生」を「精神的親族」であるとして「先生」と「私」との間の間隔は、すでに体験した者とやがて体験するであろう者との間の間隔にすぎない」と指摘している<sup>140</sup>。また、玉井敬之も「先生と私は、世代の違いと経験の違いをのぞけば、父母や肉親とのつながり、あるいは郷土へのつながり、世間とのつながりを拒否した人間として共通していた」といい<sup>141</sup>、宮澤健太郎も「先生」と「私」とは実は時間をこえ分裂している同一人物である可能性が強いのではないか。(中略)先生から速達の遺書をもらつて、両親をさしおいて先生のもとへ走る(中略)「私」とは、まさに先生と一体化し帰属しようとする自然の行為にはかなるまい」と述べている<sup>142</sup>。このように、青年期の「私」と「先生」とを近接した存在として同型に捉えた論は多い。しかし、それらは「私」からの一方的な親近感を捉えたものであつて、両者は本質的に異なっている。問題は当時の「私」が故郷に物足らなさを感じ、そこでの生活を考へていないのに対して、かつて「先生」は故郷を愛し、望まぬままにそこを離れることになつたという点である。この時点で作品はそのことを明らかにしてはいないが、上京後の展開に着目したい。

東京に戻って卒業論文を書き終えたある日、「私」は「先生」を散歩に誘い、そこで「突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」(二十七)と尋ねられている。そして、自ら「是でも元は財産家なんだがなあ」(同)と話す「先生」は「あなたのお父さんの病気は其後どうなりました」(同)とも聞いており、その時の会話を「普通の談話と思つて聞いてゐた。所が先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた」(同)と回想している。この時、手記を執筆する「私」は「先生」の言葉の中に金を巡る問題が隠されていたことを明らかに告げている。また、「万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」(二十八)と父の存命中に財産を処理すること勧める先生は、「田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです。(中略)平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」(同)と話し、「人間がいざといふ間に、誰でも悪人になるといふ言葉の意味」(二十九)については「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」(同)と断言したという。「私」の父の病状と財産に関するこれらの「先生」の言葉が、その心の深くに横たわる問題を浮かび上がらせていく。

「私は他に欺むかれたのです。しかも血のつゞいた親戚のものから欺むかれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄脊負はされてゐる。恐らく死ぬ迄脊負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出来ないんだから。然し私はまだ復讐をせずにあつてゐる。考へると私は個人に対する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」(三十)

「私は是で大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」(三十)と話す「先生」は、ここで自身が人間不信となつた原因を明らかにしている。「私」に対して「財産の問題」を強調するのは、「先生」が過去に親類から相当の「屈辱と損害」を受けたからである。「先生の性質の特色として、斯んな執着力を未だ嘗て想像した事さへなかつた。私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。さうして其弱くて高い処に、私の懐かしみの根を置いてゐた」(同)という「私」は、その時に「先生」の別の一



面を垣間見ている。

過去に親類に欺かれたことを打ち明ける「先生」の言葉は、「新潟県人」(十二)である彼が郷里でその「屈辱と損害」を受けたことを示している。「大變執念深い男」を自称してはいるが、永くその記憶を忘れることなく親類の不実を憎み、人間全体を信じなくなつたのは、「先生」が悪を憎む倫理的な人物であつたということ以上に、その時に喪失したものがあまりにも大きかつたからではなかつたか。東京においても新潟の親類を許すことなく憎み続けているのは、そこに求めるものがあつたからであらう。「先生」にとって重要なのは損害をうけた財産そのものではなく、それによつて故郷に居られなくなつたということであると考え。現に、遺書では全ての発端としてその故郷喪失の経緯から語り始めることになる。つまり、「先生」が「私」に財産のことを強調するのは、単に「金」が大事であるということではなく、それを巡つて親類同士が争い、自分と同じように故郷を喪失させないための警告であつたのだ。この点において、自身の故郷には充足できない「私」との対照が見出されるのである。そして、ここで明かされた過去の断片は、親友の死後に「段々あゝなつて来た」と証言していた静の言葉よりも遠く、その恋以前にさかのぼつて「先生」の絶望の根源を求める視座を提示するものであつた。作品が、「先生」の自殺の原点を見出したのである。

手記の語り「先生」のかつて恋や現在の夫婦関係、人間不信の関わりを巡る対話から、その帰省の場面へと移つたとき、一見してそれまでの筋からは逸れたものであるかに見える。しかし、東京の「先生」について語るべき手記において、故郷や父について言及するのは、言うまでもなくその中に「先生」の死と深く関わる問題を含み込んでいるからである。そこで「先生」の苦悩の始まりともいふべき問題が引き出されたという点で、これが「独立したやうな又関係の深いやうな」展開、そして作品の「活動と発展」であつたといえよう。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか」(三十一)

財産に関する対話はそこで終わったが、別れ際の「先生」の顔を見た「私」は「果して心の何処で、一般の人

間を憎んでゐるのだらうかと疑つた。その眼、その口、何処にも厭世的の影は射してゐなかつた(三十一)という。要領を得ないまま、ある時ついにその過去への疑問を打ち明け、そして、「先生」は「真面目に人生の教訓を受けたのです」(同)と訴える「私」に「適当の時機」に過去を明かすことを承諾する。その「適当の時期」(同)が「先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長い」(二十二) 手紙であることは言うまでもなく、「先生」の過去の開示と自殺がほぼ重なりあつてゐるということは事前に示されていたのである。しかし、「私」のここまでの語りにおいて、人間不信の中を生き続けてきた「先生」が「不自然な暴力」(二十四)を振るつて自殺をするだけのきっかけが示されていない。短編としての長さを越えてもなお回想が続けられるのは、「静、御前はおれより先へ死ぬだらうかね」(三十四)と話し、再び帰省することになつた「私」にも「また九月に」(三十五)と話し掛ける「先生」の自殺に向け、作品がその契機たり得るものを語り出さなくてはならないからである。次項では単行本で「中 両親と私」と区切られた、「私」の二度目の帰省の場面对象に考察を続ける。

### 第三項 時代

故郷へ戻つた「私」は大学卒業を喜ぶ父の前に、「口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる先生の方が、それ程にもないものを珍らしさうに嬉しがる父よりも、却つて高尚に見えた。私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した」(三十七)と振り返つてゐる。しかし、死を覚悟してゐた父の言葉を聞いて「其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにあつた私は全く愚ものであつた」(同)と自省し、床の間に卒業証書を飾る父に「何時もの私ならすぐ何とかいふ筈であつたが、其時の私は丸で平生と違つてゐた。父や母に対して少しも逆らふ気が起らなかつた。私はだまつて、父の為すが儘に任せて置いた」(同)という。

年末の帰省時の回想では故郷や家族との懸隔と、東京の先生へ傾倒を強調してゐた「私」であるが、この時の帰郷ではそれとは異なる志向が見出される。「私」はその時点で既に父親の死後に親類に欺かれて人間全体を憎むようになったという「先生」の話を聞いているのである。つまり、家に戻つて目前に迫つた父の死を実感した「私」は、父が取り返しつかない最期を迎える前に自分にとつての故郷や家族の意味を再確認し始めたのではないだろうか。「私」が「先生」ではなく自己を焦点にしたとき、彼自身が父の財産の処理を繰り返して強調した「先生」を相対化する者として立ちあらわれてくるのである。前項の末尾では作品が「私」の語りを通じて「先生」の苦悩の根源を見出し、その自殺の契機を求めていると述べた。確かに「先生」の手紙の最後で触れられることにな

る明治天皇の崩御と乃木大将夫妻の殉死も描かれている。しかし、ここではもう一つの主題が並行していたのである。

私は急に父が居なくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。此家から父一人を引き去つた後は、其儘で立ち行くだらうか。兄は何うするだらうか。母は何といふだらうか。さう考へる私は又此所の土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだらうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意――父の丈夫であるうちに、分けて貰ふものは、分けて貰つて置けといふ注意を、偶然思ひ出した。(三十八)

「私」は父の死後に残される母と家のことを心配するが、その東京で生きていく希望に変わりはない。周囲に對する「御父さんの顔」(三十九)や「陰口」(同)の恐れから盛大な卒業祝いを提案する父母に反論をするが、母からは「世間への義理立て」(同)を諭され、父からも「学問をさせると人間が兎角理窟つぽくなつて不可ない」(同)と言われてしまう。祝いは明治天皇の病気の報知により自粛となるが、「私」と両親との間に亀裂のあることが示されている。

その後、「私」は友達や「先生」に葉書や手紙を書いたことを明かしている。その際、「先生」が「私には親類はありませんよ」(四十)と話していたことと、「先生の郷里にゐる続きあひの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしてゐなかつた」(同)ことを思い出している。「私」は「先生」に親類がいることも、「先生」が彼等を憎んでいることも知っており、その孤独を理解している。「淋しかつた」(同)という「私」は、両親とも分かり合えないことに深い悲しみと孤独を覚えていたのである。やがて父は衰え、明治天皇も崩御する。かつて「先生」から「あなたの宅の構は何んな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違つてゐますかね」(四十一)と聞かれたことを思い出し、「自分の生れた此古い家を、先生に見せたくもあつた。又先生に見せるのが恥づかしくもあつた」(同)という。ここでも、家や国全体が一つの時代が終わりを迎えつつある中で居所のない思いが「淋しかつた」(同)と繰り返させているのである。

次第に「私」の卒業後の就職が問題にされるようになったという。そのことについて父は「小供に学問をさせるのも、好し悪しだね。折角修業をさせると、其小供は決して宅へ帰つて来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するため学問させるやうなものだ」(四十三)と言う。そして、その言葉を受けた「私」は次のように考えている。

学問をした結果兄は今遠国にいた。教育を受けた因果で、私は、又東京に住む覚悟を固くした。斯ういふ子を育てた父の愚痴は、もとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舎家の中に、たつた一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた。

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切つてゐた。其中に住む母も亦命のある間は、動かす事の出来ないものと信じてゐた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たつた一人伽藍堂のわが家に取り残すのも亦甚だしい不安であつた。それなのに、東京で好い地位を求めると云つて、私を強ひたがる父の頭には矛盾があつた。私は其矛盾を可笑しく思つたと同時に、其御蔭で又東京へ出られるのを喜こんだ。(四十三)

「私」も父も、ともに教育によつて親子の間が隔てられていることを知っている。「私」は既に故郷に充足できる場所のないことを実感している。だからこそ、父の「淋し」と「矛盾」を承知し、そのうえで東京に出ることを喜んでいたのである。その姿は、東京にあつても世間に出ることを望まず、静と二人で暮らしながら、故郷の親類を憎み続ける「先生」とは大きく異なっている。

乃木夫妻の死が報道され、「先生」から「一寸会ひたいが来られるか」という意味(四十八)の電報が届く。それは自殺を決意した「先生」が、その前に「私」に過去を明かすという約束を果たすためであつたことはいふまでもない。なぜそれが明治の終焉と重なっているのかという点については次節で「先生」の手紙の内容に沿つて述べることにして、ひとまずここに至つて作品が先生の自殺の契機を見出したのだということが出来る。「私」の語りは収束に向かい、ようやく「先生」の遺書が明かされることになる。

「御前此所へ帰つて来て、宅の事を監理する気はないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答へなかつた。「御母さん一人ぢや、何うする事も出来ないだらう」と兄が又云つた。兄は私を土の臭を嗅いで朽ちて行くつても惜しくないやうに見てゐた。

「本を読む丈なら、田舎でも充分出来るし、それに働らく必要もなくなるし、丁度好いだらう」  
「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私が云つた。

「おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中ではから仕事をしやう

といふ気が充ち満ちてゐた。(五十一)

父の病状が危険な程に悪化し、「私」と兄が父の死後の家の管理を押し付け合うようにして話し合っている。先の引用にある通り、この兄弟は教育を受けた結果としてそれぞれに故郷の外に居場所を求めている。この二人にとって重要なのは財産そのものではなく、自分がどこで生きるかということなのである。そこに「先生」との価値観上の決定的な相違があり、「先生」の言葉がその個人的な執着や拘りとして相対化されることになる。実際に「先生」の遺書がまず語り出すのも、その後の人生を方向付けた故郷喪失の問題なのである。しかしながら、「私」にとってそれは「先生」にとって程には重大な意味を有していない。

私は停車場の壁へ紙片を宛てがつて、其上から鉛筆で母と兄あての手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであつたが、断らないで走るよりまだ増しだらうと思つて、それを急いで宅へ届けるやうに車夫に頼んだ。さうして思ひ切つた勢で東京行の汽車に飛び乗つてしまつた。私はごうく鳴る三等列車の中で、又袂から先生の手紙を出して、漸く始から仕舞迄眼を通した。(五十四)

「私」は「先生」の手紙が遺書であることを知つて、目の前の重態の父よりも「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう」(五十四)と手紙に書いた「先生」を選んでいる。しかし、その選択は、前項で引用した宮澤健太郎の言うような「先生と一体化し帰属しようとする自然の行為」といった性質のもではない。「私」は財産よりも自らがあつたべき場所を優先し、その意志に従つて故郷を脱している。その謎めいた言葉に翻弄されるばかりであつた青年期の「私」は、無意識ではあつても「先生」の言葉を越えて生き始めたのである。

本節では作品前半部をその展開に沿つて見てきたが、それが伏線を張るための語りではなく、自殺していく人物としての「先生」の内面の追求であつたことは明らかである。最終的に連載五四回分を費やすこととなつた語りには「独立したやうな又関係の深いやうな」展開、そして作品の「活動と発展」が指摘できた。それは「私」と「先生」、静や父を含めた各人物との対話によつて齎されたものであつて、作者の構想や想定を大きく超える誤算でもあり成果でもあつたはずである。それでは、同じ様に長期化された作品後半部において「先生」が自らの

過去をどのように語り進めているのか。そこに見出される問題等を含めて節を改めて考察する。

## 第二節 「先生」の心

本節では作品後半部にあたる「先生」が「私」に送った手紙を中心に考察を行う。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可ません。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。私の暗いといふのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。然し何う間違つても、私自身のものです。間に合せて借りた損料着ではありません。だから是はから発達しやうといふ貴方には幾分か参考になるだらうと思ふのです。(五十六)

私は二人の間に出来たたつた一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、寧ろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにゐて呉れたなら、少なくとも父か母か何方か、片方で好いから生きてゐて呉れたなら、私はあの鷹揚な気分を今迄持ち続ける事ができたらうと思ひます。(五十七)

語り手である「先生」は自身の過去を明かすべき青年の「私」宛の長い手紙を自ら「倫理的」な人間であることの強調から始めており、現在の「若い人」との相違を認めつつ、自己の根本的なあり方を規定している。そのうえで両親を亡くした時点から回想を語り始めているのは、その「倫理」性と両親の死こそが最終的に自殺の決意に至る過程の発端であつたと認識しているからであると解される。

ここで問題としたのは、「先生」の自殺の理由<sup>143</sup>や「明治の精神」(百十)<sup>144</sup>ではない。漱石は作品の長期化が「書き込んでいくうちに、予想通り早く方が付かない事を発見した」からであると説明していた。そうであるならば、当初の想定を超えて執筆されたこの手紙において重要なことは、「先生」がいかに生きてきたのかということに他ならない。その死の決意に至る過程の実態を一つ一つ読み解いていきたい。

## 第一項 故郷喪失と「御嬢さん」への恋

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでみました。固より其所にはまだ自分の帰るべき家があるといふ旅人の心で望んでみたのです。休みが来れば帰らなくてはならないといふ気分は、いくら東京を恋しがつて出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思ふその故郷の家をよく夢に見ました。(五十九)

両親を亡くした後に東京の高等学校へ入学した「先生」は、遠地にあつても「帰るべき家」を思い、「学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げ」(六十一)ていたという。当時から叔父夫婦に結婚を勧められるようになり、それを断るものの「田舎の事情を知つてゐる私には、能く解ります」(五十九)と、縁談を薦められることへの理解を示している。「私も絶対にそれを嫌つてはゐなかつたのでせう」(同)と自ら語つてゐるようになり、故郷に家庭を持つことそれ自体を拒否してゐたのではない。学業に励んでゐた「先生」には生地での結婚と暮らしは「遙か先の距離に望まれる丈」(同)ではあつたが、決して否定すべき未来ではなかつたのである。

しかし、故郷を愛しそこに深く根ざしてゐたにも関わらず「先生」は故郷を喪失する。「恋の衝動」(六十)の起こらない従妹との結婚を拒否し、「厭なものは断る、断つてしまえば後には何も残らない、私は斯う信じてゐた」(六十一)が、翌年から叔父家族の態度が激変してゐたという。さらに、叔父が父の遺した「財産を誤魔化し」(六十三)ていた事を知り、仲介に入つた親戚からも「敵視」(六十三)を向けられるに至つて「永く故郷を離れる決心」(同)をし、相続した財産を全て換金してゐる。一連の語りから明らかであるのは、「先生」の「自由と独立と己れ」を基調とする個人主義的な考えやそこで要請される「倫理」が故郷の「田舎の事情」には通じなかつたということである。すなわち、「先生」は故郷を求めていながら、そこから疎外されるべき人物として成長していったのである。

「先生」は叔父の不実を批判する一方で残つた財産を受け取り訴訟は回避してゐる。その点について徳永光展は、「先生」が「他の親戚」と腹を割つて話し合い、解決策を模索していれば、「所有にかゝる一切のものを」「黙つて」「受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公け沙汰にするか、二つの方法しかなかつた」というような苦しい事態も避けられたのではないか」との疑義を提出している<sup>145</sup>が、果たして「先生」にそうする事が出来たのであろうか。事業家であり県会議員でもあつた叔父とは違い、「鷹揚に育てられ」(五十四)た「先生」は本来

的に揉め事や争い事には向かない性格であったと考えられる。父親が生前に「親から財産を譲られたものは、何うしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないから不可い」（五十八）と語り、「先生」もその言葉を「心得」として受け止め忘れないでいるのは、それが事実であるからだろう。他者との対立に向かない「先生」が「敵意」さえ向けてくる親戚達に対して一人で立ち向かえたとは考え難く、「腹を割って話し合」うことなどは不可能であったといえよう。「先生」自身は訴訟も考えたと述べているが、それを回避した理由について「学生として大切な時間を奪はれるのは非常の苦痛」（六十三）だったとしている。しかし、欺かれた屈辱や父親の遺産に手を付けられたことと学業とを秤に掛けたその説明は、現在もなお叔父の不正を批判し続けている「倫理的」な人物としては極めて不自然なものであり、むしろ自尊心を傷つけることなく叔父達を糾弾するために彼自身によって合理化された言い訳であると理解されるのである。

平岡敏夫は「先生」の内面について「静かで淋しい先生の内部には、侮辱を拒否し、受けた場合の屈辱を絶対に忘れぬものとする強烈な自己意識がある」との指摘をしている<sup>146</sup>。叔父に対して訴訟を起こすこともできない「先生」は、平岡氏の指摘通りの「自己意識」によって叔父をはじめとする親戚達との決別を決心したが、彼等と争うことの出来ないために黙って受け取った財産を全て換金し、東京でその非をいつまでも非難し続ける事になったのである。「先生」は手紙を書く現在も叔父の行為を許しておらず、「談判」の前年に勧められた従妹との縁談についても好意的な点を一切認めずに「下卑た利害心に駆られ」（六十三）たものであったと厳しく非難している。「先生」は叔父の裏切りを「普通のものが金を見て急に悪人になる例」（六十二）、あるいは「世の中に信用するに足るものが存在し得ない例」（同）として受け止めている。しかし、この時点で人間の二面性を認識したにも関わらず、その後も叔父を否定し自分の正しさを主張し続けるために、自らは「倫理的」であり続けなくてはならないという背理を抱え込んでいる。手紙の冒頭部分に記されている「矛盾な人間」（五十五）の自己認識は、過去の自分を相対的に捉えているが故のことであろう。そして、故郷とのつながりを断ったことで「強烈な自己意識」の持ち主である「先生」からは叔父の行為の再評価や相対化の機会は失われ、絶対的な悪としてのみ記憶し続けられることになった。それは同時に彼の考え方や生き方を著しく制限していくことになる。「故郷を捨てた時点で過去は過去、現在は現在と割り切ってしまったなら、救われる道もあつたであろう。従って、先生の悲劇の根源とは過去に縛られ続けた点に認められる」という徳永の指摘は当を得ているが、自己の立脚点ともいえない故郷に居場所を失くした「先生」にそれを求めるべくもない。彼に残されていた故郷とのつながりは、「倫理的



に育てられた」という思いその一点だからである。ただ、財産をめぐる一件によって凝り固まった心がそれ以降の東京での「先生」を長く苦しめ<sup>147</sup>、追い詰めていったことは確かである。その後の人生を決定づける要因ともなった故郷に対する思いこそが「私」とは決定的に異なる志向を持つ人物としての証であり、「先生」の人生を理解するうえでの大前提とすべき事項なのである。

「国を立つ時既に厭世的」（六十六）な気分になっていたという「先生」は、「他は頼りにならないものだといふ観念」（同）に囚われるようになり、常に神経を尖らせていた。それ故に落着きを求めて「静かな素人屋」（六十四）に下宿することを決め、そこに住む「奥さん」と「御嬢さん」との暮らしの中で気分は次第に静まり、「段々家族のものと接近」（六十七）ていく。

貴方は定めて変に思ふでせう。其私が其所の御嬢さんを何うして好く余裕を有つてゐるか。（中略）解釈は頭のある貴方に任せるとして、私はたゞ一言付け足して置きませう。私は金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑はなかつたのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考へて見て、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立してゐたのです。（六十六）

ここで注目したいのが、人を疑っていた「先生」が、同時に「御嬢さん」に恋心を抱いたという点である。この事は「金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑はなかつた」からであるただ説明されているが、この「矛盾」の内面はどう理解されるのか、「金」と「愛」という手がかりから考えたい。

「先生」は自分に対する叔父家族の態度の変化が従妹との縁談を断つたために起こったと考えている。先に述べたように、当初は故郷での結婚それ自体に否定的でもなく、叔父に対する疑いもなく、ただ「私が従妹を愛してゐない如く、従妹も私を愛してゐない」（六十）と感じたために縁談を断つただけであった。しかし、後に叔父夫婦の提案が「好意的に両家の便宜を計る」（六十三）よりも自分が相続することになる財産を目当てにした「下卑た利害心」（六十三）によるものという結論を下し、「金に対して人類を疑」がうようになつていた。結婚の要件として「恋の成立」（五十九）や「愛」を求める「先生」からは、「金」のために縁談を持ちかける叔父夫婦や、結婚を断られたことを「女として」（六十）ばかり悲しんでいるかに見えた従妹は、「愛」を軽視した人間として認識されている。そのため、「金」の問題においては人を疑うようになつた「先生」も、「愛」に関しては叔父達

によって絶望させられてはいなかった。「愛」に対する考え方は損なわれることなく、むしろそれこそが叔父家族の批判の根拠として強化される形で内面化されている。後から振り返ってみると叔父夫婦の提案を断ったことでその「下卑た利害心」を挫いたと「多少の愉快」(六十三)を感じるというが、「それは殆んど問題とするに足りない些細な事柄」(同)であり、他人からは「馬鹿氣た意地」(同)に見えるだろうとも述べている。それは、「先生」にとつてより重要であったのが、叔父夫婦に抵抗を加えられたという表面的な事実よりも、「愛」を重く見る自分が叔父達とは全く違う人間であることを証明することだったからである。

私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなくなるやうな心持がしました。御嬢さんの事を考へると、氣高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るやうに思ひました。もし愛といふ不可思議なものに両端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極点を捕まへたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体でした。けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考へる私の心は、全く肉の臭を帯びてゐませんでした。(六十八)

「先生」は初対面で「御嬢さん」に「異性の匂」(六十四)を感じたという。その時既に人間全体に対する不信を抱いてはいたが、「愛」の方面に道は残されており、それが叔父家族との違いを彼に保証する以上は、その心が「御嬢さん」に傾いたのは避けられないことでもあったのではないか。自身の内に「殆んど信仰に近い愛」(六十八)を確かめることによつて、「金」や体面のために「愛」を省みない叔父家族が提示した結婚生活を批判する自由を得て彼らを超えた生き方を求めることができるのである。「先生」はそのためにこそ「本當の愛は宗教心とさう違ったものでない」(六十八)と信じるまでに自分の感情を煽り立てる。それが意識的であつたのか、それとも無意識であつたのかは不明であるが、「先生」には「御嬢さん」を「好く余裕」があつたのではなく、「余裕」を得るために「御嬢さん」に恋をしたとも見えるのである。

しかし、「御嬢さん」を自分と「接近させたがってゐるらしくも見え」(六十八)た「奥さん」の態度に叔父同様の下心を疑うようになったといい、その疑いが母娘の共謀として「御嬢さん」にも向けられるようになる。 「先生」の中で「愛」への信仰と「金」への不信とが衝突し、「信念と迷ひの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつて」(六十九)しまったと回想している。「御嬢さん」への「愛」による新しい生活を求める一方で、そ

の疑いから結婚を申し込めないでいた「先生」は、身動きが取れなくなった事を告白しながらも、「断られるのが恐ろしいからではありません。(中略) 其位の勇氣は出せば出せたのです」(七十)、また、「学校を中途で已めやうが、又何処へ行つて何う暮らさうが、或いは何処の何者と結婚しやうが、誰とも相談する必要のない地位に立つてみました」(同)と、常に「自由な身体」(同)であったことを強調している。そのうえで「誘き寄せられるのが厭」(同)で、二度と「人には欺されまいと決心した」(同)からこそ躊躇していたのだと念入りに説明している。

以上のような「先生」の態度に関して竹盛天雄は、「他人に欺かれまいという警戒心と決意であるといえればそれまでであるが、これは、あまりに消極的な、いわば利子生活者の自己防禦的心性といふべきであるまいか。その心性が、若い二人の素直な結びつきを妨害し、関係を停滞させる」(傍点ママ)<sup>148</sup>ものであったと指摘している。「先生」は母娘に叔父の裏切りを明かし、「二度と国へは帰らない」(六十九)と決別を宣言したが、その記憶はわずかな疑いでも「御嬢さん」への「愛」を躊躇させるほど深く内面に沈潜し強い影響力を持っていた。その意味では、財産を抱え「他の手に乗るのは何よりの業腹」(七十)と考える「先生」は、竹盛の言う「利子生活者の自己防禦的心性」により二の足を踏んでいたと理解できる。しかしながら、故郷で叔父と争わなかった理由を「修業中からだ」(六十三)である「学生として大切な時間を奪はれるのは非常の苦痛」(同)であったからと説明する「先生」は、それを理由にすることで他者と争えない自らの性質を隠しつつ叔父や親戚から背を向ける正当性を獲得している。その点を鑑みると、ここでも彼が裏切りにより「是から先何んな事があつても、人には欺されまいと決心した」(七十)ことを盾に行動できない自分を正当化しようとしていたと考えられるのではないか。

「学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛」として故郷を離れた「先生」は、「大切な勉強の時間」であるべき時を「御嬢さん」との談笑で過ごし、「教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるやうな心持がしました。勉強も其通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底迄浸み渡らないうちに烟の如く消えて行くのです」(七十)と、学問への関心も薄れさせたことを明かしている。しかし、そのことに對する苛立ちや負い目は語られておらず、むしろ楽しんでいた様子が伝えられており、訴訟回避の理由として挙げた「学業」がその場しのぎの方便でしかなかった事が読み取れる。このように、「先生」には他者との対立や緊張状態から逃れようとする傾向があり、「自分の品格を重んじなければならぬといふ教育から来た自尊心」(同)の実態とはそのように内面を隠しながら

ら自己を正当化しようとする性質に他ならない。

「先生」は結婚の申し込みをしない理由を「断られるのが恐ろしいからではありません」(七十)と述べている。故郷を喪失した後に暗い生活を脱出する方法として「愛」を見出し、その志向に立脚しようとしている彼にとつて、それを失えば先に待つのはより深い絶望であり、その事を恐れていなかったとは考え難い。「学校を途中で已めやうが」構わない立場にあつたはずの「先生」が興味の薄れた後にも「相変わらず学校へ出席してゐる」(同)たのは、大学生という「大分世間に信用のあつた」(六十四) 身分によつて下宿に受け入れられたとの自覚があり、それが「家で充分信用されてゐる」(六十九) 要因の一つとしても認められるからである。「御嬢さん」への「愛」を確信しつつ疑いも抱く「先生」は、その疑いの真偽を確かめるために行動を起こせない。「奥さん」から「御嬢さん」の結婚の時期を急ぐべきかと聞かれた際に、「成るべく緩くなら方が可いだらう」(七十二)と答えたように、結論を先送りすることしかできない。これらは全て「先生」が「愛」の喪失を恐れ、また、疑いを解決するために母娘と向き合えなかつたからであるが、自らの内面を隠匿しつつ行動に移れなかつた自分を正当化するために二度と「人には欺されまい」という「決心」で己を説明しているのである。

しかしながら、その後自分で下宿に引き込むことになつたKの存在により「先生」の猶予期間は終わる。

## 第二項 三角関係

奥さんと御嬢さんと私の関係が斯うなつてゐる所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。其男が此家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来してゐます。もし其男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、恐らくかういふ長いものを貴方に書き残す必要も起こらなかつたでせう。

(七十二)

「奥さん」の反対にも関わらず「先生」にはKを「連れて来なければ済まない事情が充分」(同)にあつたといふ。二人は「小供の時から仲好」(七十三)であり、中学と高等学校で同じ科へ入学し、東京では同じ下宿で生活していた。Kは中学時代に養子に出され、養家からは高等学校で医者になるための勉強を要求されていたが無断で「先生」と同じ科に入つていた。しかし、「先生」が故郷を捨てる決意を固めた夏にKも事実を養家に伝えて援助が断たれ、教師として働きながら大学へ通つていた。最終的に生家に復籍するも勘当同然の宣告を受け、先

生と同時期に故郷から切り離されている。「先生」が幼馴染のKの境遇に「同情してゐた」(七十五)ことは確かだろう。養家の意向に背いても自分の望む学問を始めたKに対して「賛成の声援」(七十三)をおくり「多少の責任」(同)を感じてもいた。しかし、「理否を度外に置いてもKに味方する気」(七十五)になったのは、仲介のために送った手紙が「一言の返事さへ受けずに葬られてしまった」(七十五)からであり、「私を軽蔑したとより外に取りやうのない彼の実家や養家に対する意地」(七十六)によつてゐる。

「物質的の補助」(七十五)の申し出を断り、夜学校の教師をしながら大学に通うKが心身をすり減らしていく様を見かねた「先生」は、Kと「奥さん」を説得してKを下宿へと引き込んでゐる。それは直接的な援助を断るKを間接的に支援するためであり、自身が快活さを取り戻していった過程をKにも辿らせるためでもあったといふ。下宿を変えるに至つた経緯を語るに際して「先生」は「余裕ある私の学生々活が私を思ひも寄らない境遇に陥し入れた」(六十三)と述べていたが、ここでもまたその「金」の力が「運命に非常な変化」を齎してゐる。小森陽一はKの援助の目的が「K」の「独立」を阻み、「K」の生活を、あたかも扶養者である「父」のように支配するためであり、その経済的な支え、「食料」を支払うという一点において、あらゆる面で「先生」より「独立」してゐた「K」に対して優位に立とうとしたためである」といい<sup>149</sup>、佐藤彰も「心のうちで常にKを畏敬してゐました」、「学力になれば専門こそ違ひますが、私は無論Kの敵でないと自覚してゐました」——そんな彼よりも自分の方が「能く事理を弁へてゐる」という思いに浸りたいという劣等感の裏返し「親切」であつたといふ<sup>150</sup>。しかしながら、先に述べた通り、「先生」はKのためと言うよりは自身の自尊心や意地のためにKを支援すること決意したのであり、仲介の手紙に取り合わなかつたKの養家や生家の人々に対して、自分が独立した人間として対等な立場として扱われるべき力を有していることを示すためである。更に、親友を助けるために「金」を使うことで「金」の援助を絶つてKを苦しめる人々だけではなく、「金」に目がくらんで「悪人」になつた叔父とも違う極めて「倫理的」な自己を証明できるのである<sup>151</sup>。「先生」はKを連れ込んだ結果として「K」に対して優位に立」つてゐるかに見えるが、そもそもそれが目的であつたのではなく、Kに対する劣等感も「御嬢さん」との三角関係により生じたものではなかつたか。Kを勧誘したことがどこまでも好意に基づいてゐたからこそ、却つてそれが悲劇の発端として意識されているのだから。「もし其男が私の生活の行路を横切らなかつたならば」と振り返る「先生」は、その後起こってしまった悲劇を悔やみながら、当時の自分にはKを下宿に誘う以外の選択がなかつたであろうといふことを確かめてゐるのである。

下宿へ移って来たKの心が期待通りに「段々打ち解けて来る」（七十九）のを眺めながら、自分の行動に満足すると同時に「Kと宅のものが段々親しくなっていくのを見てゐるのが、余り好い心持ではなかつた」（八十一）という。その感情は間もなく「嫉妬心」（八十八）として明確に自覚され、それからはKの「御嬢さん」への恋を疑い出し、同時にKに対する劣等感にも悩み始めることとなる。

当初Kの下宿に反対をしていた「奥さん」が「そんな人を連れて来るのは、私の為に悪いから止せ」（七十七）と言っていたのは、Kの存在がいずれば「先生」にとつて問題となることを予見していたからであると考えられる。しかし「先生」にはKを「連れて来なければ済まない事情」があり、そのために「奥さん」の真意を汲むこともなく、強硬とも言える態度で「奥さん」を説得した。その後の見通しもないままにKを呼び寄せ、その心を落ち着けるために母娘に協力を要請した「先生」は、その必然とも言える結果としてKと「御嬢さん」の接近という問題に直面し、そこから来る疑いや嫉妬心を抱え込まざるを得なくなっている。

Kの「御嬢さん」への恋の可能性を考え始めた「先生」は、Kと旅行に出て「思ひ切つて自分の心をKに打ち明けやう」（八十三）とはするが、結局何も言い出すことができないでいた。Kの「変に高踏的な彼の態度を何うする事も出来なかつた」（同）としているが、「心のうちで常にKを畏敬」（七十三）し、自分と比較しても「凡て向ふの好い所丈が斯う一度に眼先へ散らつき出す」（八十三）ように感じる「先生」が、この友人に対して尻込んでいたことは明らかである。ここでも「先生」は問題解決のための行動を避けているが、そうさせたのは他者と争い得ない彼の性格によるものだろう。そしてその性質は「先生」にKではなく「御嬢さん」の心を疑わせていく。

徳永光展は「先生」の「御嬢さん」に関するこれまでの記述から「御嬢さんに執着した様子はよくうかがえるが、御嬢さんでなければならぬ必然性は見出せない」との見解を示している<sup>152</sup>。前項で論じたように、「先生」は人間を信用する方法として「愛」を信じ、それ実践することによって叔父に植え付けられた人間不信を超えた生活を手に入れられるのであり、そのために「御嬢さん」への好意を「愛」にまで高揚させていた。それは確かに叔父の暗い影を乗り越えるための「愛」であり、「御嬢さん」の人格に一途に向けられた感情ではなかつたという点で、これまでの論述は徳永の指摘通りに展開されているといえる。「先生」は自身の「御嬢さん」への「愛」の必然性を強調するのみでそれを突き詰めて説明していないどころか、その策略を心配するばかりで「御嬢さん」自身の感情も問題にしていない。しかし、Kに対する嫉妬を自覚することによって「先生」の「愛」は否応なし

に他者との関係性の中に引き出され、「御嬢さん」の心という問題と向き合わなくてはならなくなったのである。Kと自分を比較して、「御嬢さん」の気持ちやKの方を向いているのではないのかと疑い始めた「先生」は、その時期の回想から「御嬢さん」の態度の中に「若い女に共通な私の嫌な所」（八十八）を語り出し、それが「Kが宅へ来てから、始めて私の目に着きだした」（同）と説明している。それまで「殆んど信仰に近い愛」の対象としてしか「御嬢さん」を見ていなかった「先生」は独善的であり、Kの登場によって初めて固有の人格を備えた他者である一人の女性として認識させられたのである。そして、「御嬢さん」の心が自分に向いているように思えないことに苛立ち、再び結婚の申し込みを考え始めたという。しかし、それでも実行を日一日と遅れさせ、その理由を意志の不足ではなく「御嬢さん」が「私よりもKに心を傾けてゐるならば、此恋は口へ云ひ出す価値のないもの」と私は決心してゐた」（同）からであるとしている。水川隆夫は結婚を申し込みない「先生」について、「先生」は次々と「疑念」を作り出し、まるで結婚申し込みのできない理由を探しているかのように見える。御嬢さんがKの方を愛しているのではないかという「疑念」を晴らすためには、結婚の申し込みをしてみるのが一番たしかな方法なのだが、「先生」はそれをしない」と批判的に見ている<sup>153</sup>。「先生」の欲していたのは言うまでもなく「愛」に基づいた結婚生活である。「日本の習慣」（同）として直接気持ちを伝えることも避けていた「先生」であっても、水川の指摘する通り、「奥さん」に「御嬢さん」との結婚の申し込みをすることで気持ちを確かめるのが一番の方法であり、それ以外に望む生活を手に入れる道は無かつたはずである。これまでになされてきた結婚を申し込みない理由の説明は一応の論理性を保ったものではあつたが、ここでは破綻したものになっている。「先生」がそうしてまで求婚を避け続けた理由とは何か。

それは偏に、「先生」の、「愛」の喪失に対する恐れであると考えられる。これまでに述べてきたことを繰り返すならば、「金」を目当てに結婚まで押し付けようとしてきた叔父によって故郷を喪失し人間不信に陥ってしまった「先生」にとって、「御嬢さん」への「愛」は叔父を超えた生活を手にするために是非とも守らなくてはならないものであつた。一途に「愛」を信じ込んでいたが、それは同時に「愛」以外では人を信じられない彼には他の道が残されていなかったということでもある。自らの拠って立つべき理想としての「愛」が三角関係という現実の人間関係に晒されたことでその独善性が明らかとなり、「御嬢さん」の心は正体不明なものとして「愛」を脅かすのである。「御嬢さん」への「愛」以外に希望を見出せない「先生」にとっては、結婚の申し込みを拒否されることはごく端的な絶望を意味している。その可能性に恐怖しているからこそ、自身の「愛」を抱えたままKや「御

嬢さん」の心に怯えて問題を先送りにするしかできなかったのである。

前掲論において水川は「先生」は愛を固定的に考え、愛が求婚や交際によって変化し成長していくものだという事を知らないかのようにである」とも述べているが、「御嬢さん」への「愛」に拘る「先生」の内面とその問題を極めて的確に表していると言える。「先生」にとつて「愛」は、叔父の裏切りにより断念してしまつた故郷での生活と同等以上の暮らしを齎すものでなくてはならなかつた。しかし「極めて高尚な愛の理論家」(八十九)としての「先生」の心は理解不能な他者である「御嬢さん」の存在によつて大きく揺さぶられる。「世の中と闘う必要」がないままに育ち、他者はもとより自分自身に対しても真つ向から向き合うことができず、「尤も迂遠な愛の實際家」(同)として前に進めない自分自身の姿を発見することしかできない。そうして理想と現実の衝突に苦しむ自己の姿を取り繕うための「理由を探し」続け、破綻した論理で言い訳を繰り返すのである。

そして、Kから「御嬢さん」への恋心を打ち明けられた「先生」は、「恐ろしさ」(九十)や「苦痛」(同)、「相手は自分より強いのだといふ恐怖の念」(同)を感じたといひ、自分の気持ちについては「何も云へなかつたのです。又云ふ気にもならなかつたのです」(同)と回想する。繰り返しとなるが、「先生」は他者と正面から向き合うことを避けようとする性格の持ち主であり、争うこともできない人物である。全てが自分よりも優れて見えるKが同じ人を想う競争相手として目の前に立ち現れたときに「恐怖」したのは当然のことといえる。Kの告白を聞いた後、「先生」は自身の心の内をKに打ち明けようとしたというが、「一旦云ひそびれた私は、また向ふから働らき掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつた」(九十一)といひ、更にはその機会を自ら遠ざけるように家を飛び出している。「畏敬」の対象であつたKに立ち向かうことができず、逃避するよりほかはなかつたのである。

Kのことを考えながら町中を歩き回るうちに「先生」にはKが「一種の魔物のやうに思へた」(同)というが、その時の「先生」にはKが叔父と重なつて見えたのではないか。それは、かつて信頼していた叔父が拠つて立つべき故郷を奪つたように、次は親友であるはずのKが新しい拠り所となるべき「御嬢さん」を奪つていくように感じられたということである。「倫理的」である筈の「先生」は、Kを「魔物のやう」に感じることで「御嬢さん」との「愛」を守るために卑怯な手段を選ぶことにも積極的になれたと捉えられるのである。それは喪失の恐怖に裏打ちされた自己正当化であるが、悩める恋心を打ち明けたKに立ち向かえず嫉妬し、「御嬢さん」の喪失を恐れる「先生」は、そう思ふことによつてしか行動に移れなかつたようにも思われる。



その後の「先生」は友人としての顔を保ったまま、その恋を断念させるためにKの心を容赦なく攻め立てる。明確な答えを出さなかったKの「覚悟」(九十六)という眩きを反芻するうちに、その言葉が「御嬢さん」への恋に進む意味のものであると思うようになり、「先生」は「最後の決断」(九十八)を下す。そして、Kと「御嬢さん」の不在時に「奥さん」に結婚の申し込みを行い、そのまま「御嬢さん」との婚約を取り付けてしまう。仮病を使ってまで「奥さん」と二人だけの状況を作り出した「先生」には、自らが「倫理的」であろうとする気持ちはもとより、二度と「人には欺されまい」という「決心」も、「御嬢さん」の気持ちへの「疑念」もなかった。それまでに拘った自己のあり方すべてに自ら反し、「御嬢さん」を失う事への恐怖に突き動かされていたのである。そして、婚約について最後までKに打ち明けられなかった。「最後の決断」を下す前からその後に至っても、「先生」はKを恐れ、背を向け続けたのである。

「先生」とKについて中村三春は、「先生は、静への欲望を実体化するための触媒として、手本(モデル)かつ敵(ライヴァル)としてのKという人物を呼び込まなければならなかった」と述べ<sup>154</sup>、また、小谷野敦も「先生は始め静への結婚の申し込みをためらっていたのに、Kの恋の告白を聞いてからかえって静への欲望がはつきりした形を取る」と指摘している<sup>155</sup>。両氏のように、Kの登場が「先生」の「欲望」を増幅・顕在化させ、「御嬢さん」へ向寄せたとの指摘は多い。また、山崎正和は「先生」が「自分の内部から湧き上がる決定的な衝動がないのに、にもかかわらず、あたかも一人の女を愛するが如くに振舞ったこと、しかも、その擬似的な感情を作るために、一人の友人を利用した」と見ている<sup>156</sup>。が、このように「先生」の「御嬢さん」への「愛」そのものに疑問を投げかける説もある。「先生」自身の「御嬢さん」への「愛」については先に見てきた通りであり、それに客観的な説得力を与えているのがKへの「嫉妬心」である。そのことが「愛の裏面に此感情の働きを明らかに意識してみた」(八十八)と自認されていることから、中村や小谷の指摘通り、Kの存在が「先生」の中の「欲望」を発現させたと言える。また、「先生」の「愛」の説明を全て後付けのものとして捉えるならば山崎のように、「先生」がKへの嫉妬によって「御嬢さん」への「愛」を錯覚したと解釈することが可能である。

しかしながら、本論では「先生」の「御嬢さん」への「愛」に関して、彼がそれによって過去を乗り越えようとしたのであり、Kが下宿へ移ってくるまでには既に「宗教心とさう違ったものでない」と思うまでに高揚したものとして自覚されていたことを確かめてきた。「先生」にとつての「愛」とは、「金」の問題により失われた人間への信頼をつなぐ、新たな生き方の根拠となるべきものであった。K登場以後の「先生」の言動は、第三者か

から見れば「欲望」の発現であるが、彼にそうさせたのはKへの「嫉妬心」というよりも、むしろ「御嬢さん」という未来の象徴を失う恐怖であったという点を見逃してはならない。なぜなら、結婚の申し込みが「先生」にとつての「最後の決断」であり、それまではKにその恋を諦めさせるために行動していたからである。つまり、「御嬢さん」を手に入れること（「嫉妬心」からくる〈欲望〉の充足）よりも、「御嬢さん」を失わないこと（「恐怖」の解消）が優先されていた。仮にKが「御嬢さん」を諦めると明言していたならば、「先生」はすぐには結婚の申し込みをしなかった（できなかった）ように思われる。それ故にKの存在によって「先生」の行動が促されたといえるが、それが「欲望」ではなく「恐怖」によるものであったという点に他者と争い得なかった「先生」の「愛」の特質が認められるのである。

### 第三項 絶望と自殺

私は又あゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。（百二）

Kに全てを打ち明けられないでいた「先生」は、「奥さん」が「御嬢さん」との婚約をKに伝えていた事実を聞かされる。それから二日程の間に態度を変えずにいたKと自分とを比較し、「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」（百二）と思い、その日の晩にKは自殺した。親友の亡き骸を前にした「先生」は、自分の未来が閉ざされていくのを感じたという。Kの死体を目にした時に「先生」が感じた絶望は、Kの自殺の原因が自分にあるとの判断からきていると考えられる。Kの「覚悟」を恋に向かう決意と解釈した「先生」は、「御嬢さん」の婚約を知って二日程での自殺に自らを結びつけずにはいられず、自分がKを死へ追いやったのだという激しい罪悪感に支配されてしまったといえる。しかしながら、Kが「先生」宛に残していたのは「抽象的」（同）な手紙だけであった。

その遺書が「簡単」（同）で「抽象的」な内容であったというように、Kは自殺について「自分は薄志弱行で到底行く先の望みがないから自殺する」（同）という言葉以上の説明をしていない<sup>157</sup>。その他には「先生」への礼と死後の処理の依頼へと続き、最後に「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらふという意味の文句」によって閉じられていたという。「もつと早く死ぬべきだのに」という言葉がいつを差しているのかは不明

である。恋を感じた瞬間であるとも、自活のために神経衰弱に陥った時であるとも、養子に出されることが決まった時であるとも言える。しかし、確かなことは、Kはいつの時点においても自らが望む生活を得ることができていなかったという点であり、そうした人生を振り返って漠然と「もつと早く死ぬべきだのに」と書き残したと理解すべきであろう。

相原邦和はKの遺書について「Kの関心は全て自己へ向かっている」と読み解いている<sup>158</sup>。「精進」と「道」を求め、それでも恋をして葛藤し、「薄志弱行」の意識から自殺を決意したKは、確かに自己のために生きて自己のために死んだと言えよう。しかし、「先生」には強烈な罪悪感があり、全ての非が自分にあると信じて疑わない。Kの遺書が「簡単」であるのは、Kにとって全ては自分の「薄志弱行」が原因であってそれ以上の理由がないからであり、「先生」が「むしろ抽象的」であると感じたのは、彼の加害者意識がその行間にKの恨み言を幻視させたからである。

御嬢さんは泣いてみました。奥さんも眼を赤くしてみました。事件が起つてからそれ迄泣く事を忘れてゐた私は、其時漸やく悲しい気分には誘はれる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、何の位寛ろいだか知れませんが。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与へてくれたものは、其時の悲しさでした。(百四)

Kの死後、その実家に電報を送って帰宅した「先生」は、Kのために悲しむ「御嬢さん」と「奥さん」を目にした時に悲しみを感じ、同時に寛ぎを得ている。この時、「先生」は親友を死へ追いやった(と思ひ込んだ)自らの身の処し方を見出したのである。これ以降、「先生」は定期的にKの墓を訪れ謝罪を繰り返すことで自身の罪悪感を保ち、その心の痛みを確かめ続けることになる。自己の「倫理」を責めることで充足させてもいるのであるが、それは同時に自らKの記憶に呪縛され続ける選択であった。

死者への謝罪の一方で、「先生」は生者との対話を避けるようになっていった。Kに知らせないまま「御嬢さん」との婚約を取り付けた「先生」は、その行為を恥じて誰にも明かさなかった。「御嬢さん」との「愛」による新しい生活が最優先であり、「未来の信用」(百一)や「世間体」(百二)を失う恐れのある選択はできない。Kの遺書の内容に安堵したのもそのためであり、罪悪感に耐え切れずに「奥さん」に手を突いて頭を下げた時にも謝罪の

言葉を口にするだけで具体的な事は何も話していない。Kの自殺について尋ねられると、「早く御前が殺したと白状してしまへ」（百五）という内なる声を聞きながらも、機械的に同じ答えを繰り返すだけであったという。罪の意識に染まった「先生」の心は固く閉ざされてしまい、誰にも開かれなかった。沈黙によって自分の「未来の信用」と「世間体」を守りぬいた「先生」に訪れた結婚後の新生活は、しかしながら、彼が望んでいたものとは大きく異なっていたはずである。

「先生」は「一年経つてもKを忘れる事の出来なかつた」（百六）というが、他者との接触を避け続け、毎月の墓参りを欠かさない生活の中ではKを忘れられる訳もなく、むしろその記憶を強化するだけであったことは想像に難くない。利子生活者として職を求める必要もなかった「先生」の心は未来を向くことはなく、罪悪感に囚われて過去を眺め続け、やがて「自分もあの叔父と同じ人間だと意識」（百六）する。かつて人間について「善人がいざといふ場合に突然悪人になるのだから油断しては不可ない」という認識を得たにも関わらず、自身を例外に置いたことの矛盾がこの時に自覚され、「世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念」（同）は打ち砕かれ、「他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつた」（同）のである。

Kの死因を繰り返し考えるうちに「失恋のため」（百七）、「現実と理想の衝突」（同）、そして最終的には「Kが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に処決したのではならうか」（同）と考え、同時に「私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚」（同）をしている。「先生」は自らが理想として求めた自画像や結婚生活が、他ならぬ自分自身の言動や実際の結婚生活という現実によって否定されていく体験を繰り返している。そして、現実の生活に活路を見出せなくなつてからはその生活の改善を諦め、Kの死と自分の辿ってきた道とを重ね合わせることで自ら死に傾き、その必然性を見出そうとしていたのではないか。

「先生」は自らも死ぬ事を意識し始め、実際に二三次自殺しようとした事があつたというが、その度ごとに「何時でも妻に心を惹かされ」（百九）て思い止まつたという。現実に絶望して生きる意味を失つた彼にとつて、「妻」の存在だけが死なない理由になつていた。

ここで「御嬢さん」という呼称に注目したい。「先生」は手紙の中で静を「御嬢さん」と「妻」という二通りの方法で書き表している。静の登場時からは一貫して「御嬢さん」とだけ表記し、結婚後に二人でKの墓参りをした時のことを語る場面で呼称を「妻」に改めている。

卒業して半年も経たないうちに、私はとう／＼御嬢さんと結婚しました。(中略)奥さんも御嬢さんも如何にも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いてみました。私は此幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうと思ひました。

結婚した時御嬢さんが、——もう御嬢さんではありませんから、妻と云ひます。——妻が、何を思ひ出したのか、二人でKの墓参りをしやうと云ひ出しました。私は意味もなく唯ぎよつとしました。(中略)妻は二人揃つて御参りをしたら、Kが嘸喜ぶだらうと云ふのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ眺めてゐましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問はれて始めて気が付きました。(百五)

「妻」にとつての墓参りと、「先生」にとつての墓参りの意味は大きく異なっている。しかし「先生」は自分にとつての墓参りの意味を「妻」に語らず、「妻」は「先生」の墓参りに深い意味があるとは思ひも寄らないのである。その言葉から「妻」との精神的な隔たりを感じた「先生」は、それからの墓参りに彼女を連れて行くことがなかった。「御嬢さん」が「妻」に変わってから後に語られている夫婦生活は、少なくとも「先生」には幸福なものではなかった。それを決定付ける場面として、Kの墓参りは機能している。「先生」が勉強に打ち込み、あるいは酒に浸つた理由も「妻」には解らず、「世の中で自分が最も信愛してゐるたった一人の人間ですら、自分を理解してゐないのかと思ふと、悲しかった」(百七)という。Kの命と引き換えに得た「妻」という意識によって、顔を合わせる度に罪悪感を新たにし、その事が「妻の何処にも不足を感じない私は、たゞ此一点に於て彼女を遠ざけたが」(百六)らせることになるのである。

「先生」は「有の儘を妻に打ち明けやうとした事が何度もあ」(同)つたというが、実際には何も打ち明けなかった。全てを打ち明けることで夫婦ともに幸福に生き続ける未来も切り拓けたのではないのかといった趣旨の批判は多いが、そうした批判に対して越智治雄は「自己救済のために妻を少しでも傷つけることにエゴイズムを見出さざるをえず、それゆえにこうした方途をがえんじないのではないか。そしてさらに重要なのは、かりに妻が許したにせよ、実はこれがこの意識家にとつて何の解決にもならぬことを先生が正確に知っていたからである」と述べている<sup>159</sup>。「先生」は「妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違ない」(同)と予感してはいても「たゞ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつた」(同)と説明している。しかし、「嬉し涙」を見せるのであればその記憶に「暗黒な一点」など残るはずは

なく、告白し得なかつた真の理由は他にあると考えざるを得ない。

そもそも「先生」の亡友への謝罪の目的が己を責めてその倫理性を確かめるためのものであつて、許しを求めているものではないことは明らかである。自らを叔父と同類と見做しながら叔父を許さないことで「倫理的」であらうとしている「先生」は、決して自分を許してはならないのである。例え他の者から許しを得たとしても、それは「何の解決にもならぬ」どころか自ら「倫理的」でなくなることにしかならない。「妻」に許されることは救いにはならないのである。また、「妻」に許されなかつた場合にも己を責め続ける自分の倫理性を確かめることはできるが、親友を犠牲にしても守り抜いた「愛」と「妻」を失つてしまう。かつて故郷での一件を打ち明けたとき、「御嬢さん」は涙を流して「先生」に同情し、彼はそれを喜んだ。しかし、時が流れて彼が自分の罪を「妻」に告白したとしても、あらゆる反応が自分を苦しめる結果にしかならない。「先生」は越智の指摘以上のあらゆる意味において告白をなしえなかつたと考えられるのである。

「男の心と女の心は何うしてもびたりと一つになれないものだらうか」（百八）と問われ、「先生」は「若い時ならなれるだらう」（同）と答えたという。既に「妻」との完全な理解を諦めていた事は明らかであつたが、夫婦の間で交わされたこの短いやり取りの中には「先生」の過去への視線がはっきりと現れている。しかしながら、それは「愛」という生き方への絶望を意味するものではない。彼は「妻」と心を通わせることができなかつた状況を嘆きつつも、「愛」を求めた自分自身を否定していない。「先生」にとつて自分と「妻」との間を隔てているのはKであり、Kが間に入ってくるまでに「御嬢さん」に気持ちを打ち明けられていたのならこのような事にはならなかつたとの後悔が強くあるのではないだろうか。だからこそ「妻」の問いに完全否定の答えを返さなかつたのである。「先生」は自身の記憶の中の「御嬢さん」に理想と希望と「愛」の可能性の全てを託し、「妻」と区別することで現実の結婚生活では満たされなかつた「愛」をそれでも信じていることができるのである。

それ故に「御嬢さん」として回想される静は「愛」による明るい未来を約束する女性として、「妻」としての静は彼のつまづきによつてもたらされた淋しい結婚生活を象徴する女性として、それぞれ語られているのである。

私の後には何時でも黒い影が括ッ付いてゐました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなものです。（百九）

「先生」は、母親を亡くして「是から世の中で頼りにするものは一人しかなくなつた」(百八)と言う「妻」のために生きていた。その罪の意識故に幸福な結婚生活を望めず、目の前に開かれた「死の道」(百九)に惹かれつつも生に踏み留まつていた。自殺を二、三度考えた事もあるという「先生」には「妻を一所に連れて行く勇氣は無論な」(同)く、「自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪ふなど、いふ手荒な所作」(同)を嫌っている。また、「私だけが居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫」(同)であつたともいう。「先生」には既に新しい時代を生きる気力は残っていなかったが、それでも「妻」のためには生きなければならぬという思いがあつたことが読み取れる。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調笑ひました。(百九)

佐藤彰は天皇崩御についての夫婦のやり取りに注目して「先生を生きながらえさせた妻であるが、自殺に向かうための大切な一言を手渡すのも彼女なのである」との指摘を行っている<sup>160</sup>。氏は、静の「大切な一言」を「殉死でもしたら」という言葉であるとし、「自殺を阻む唯一の障害である当の本人から初めて与えられた死の許諾」によつて「先生」は死を決意したのだとしている。その指摘通り、「妻」の存在だけが死なない理由となつていた「先生」が、例え「笑談」であつたとしても「殉死でもしたら」と言われたことが自殺の決意のうえで「大切な一言」となつてゐることは疑えない。しかしながら、その点に加えて静が「先生」の死の提案とも言える言葉に「笑つて」取り合わなかつたという点も極めて重要であると考ええる。

「先生」は「妻」に対して生き続ける事が時勢遅れであると「明白さま」に告げたが、しかし彼女は「笑つて」取り合わなかつたのである。それは、「時勢遅れ」の念に激しく胸を打たれた「先生」の言葉が「妻」にとつては「笑談」(百十)と同じ程度のものに過ぎず、次の時代を生きる意志とそれが可能な精神が備わつていたという現実を突きつけるものであつたということである。「先生」は「私ども」が、其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れであると感じたというが、「妻」の笑いによつて「私ども」は「私」に訂正させられたのである。それは「先生」

にとつて「妻」から受けた拒否に他ならず、自分がいなくても生きていけるのだということを確認した瞬間でもあった。その精神的な決別を経たからこそ後の憂いも無く死んでいく決意ができたのである。「妻」の笑いこそが彼の生を支えていた最後の根拠を断つものであったといえる。見方を変えたとそれは、「妻」との相違を思い知つた結果、「先生」が「たつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた出来事であったとも見做せる。いずれにしても死に傾いた「先生」が生を見つめる「妻」との間に決定的な相違を認めたことに違いはない。

「先生」が「妻」に「殉死する」(百十)と言つた「明治の精神」が具体的に何を指しているのかは不明である。しかし、それは「妻」が「笑つて」取り合わなかつた「先生」の精神性と広く重なつていたということは確かであり、「金」のために人を裏切つた人間を許さない倫理性であるとも、「本当の愛は宗教心とさう違つたものではない」(六十八)という固い信念であるとも、友人への裏切りを犯した己を責め続ける心であるとも、また、先に自殺したKの生き様でもあると言える。言葉を換えて言えばそれは、「先生」がその手紙の中で語つてきた様々な精神やあり方の総称として解される。「明治の精神」とは、一つにはそのような「妻」に笑つて取り合われなかつたような「古い不要な言葉」(同)によつて示されるものであつて、「先生」はそうした精神の一つのあり方として自己を葬つたのである。「先生」の自殺の決意に至る過去の語りは、彼の両親の死を起点に語られ始めたが、次の時代を向いた静の笑いによつてその結末を迎えるのである。「私は妻を残して行きます」(同)の言葉の後に「妻」を心配する文言は綴られていない。「妻」の生への志向を確信した「先生」には思い残すことはなく、最後の仕事として「私」との約束であつた、自らの過去の告白のために長い手紙を書き始めたのである。

本節では「先生」の手紙に書かれた過去から、その自殺の決意に至る過程を考察してきた。次節ではここまでの二節を踏まえて作品全体を捉えたい。

### 第三節 「先生の遺書」から『心』へ

前二節では、作品前後半の二つの回想が自殺をした「先生」の心をそれぞれに突き詰めるべく語り進められていった過程を分析考察してきた。前半の「私」の手記からは、「厭世的」な生活を送つていた「先生」の内面に秘められていた問題が段階的に明るみに出されていく過程が析出された。それと同時に、「私」の語りの終盤では、親類に裏切られたことで故郷を喪失し人間不信に陥つた「先生」とは異なる人生を生き始め、その言葉を相対化し得る人物となりつつある「私」の姿が描かれてもいる。前半に語られる「私」と「先生」との交流を通じて、



両者がそれぞれ生と死に向かう必然性が浮かび上がってくるのである。

これに対して後半の「先生」の遺書からは、「倫理的に生れた男」である「先生」が叔父の裏切りを機に自己の立脚点である故郷を喪失して人間不信に陥り、そこから新しい生き方を求めて繰り返した葛藤を読み取ってきた。それは、「倫理的」であり続けることを自らに強いたが故に行き詰まり、自分自身にも絶望するまでの過程であった。あらゆる希望を失い、明治が終わった後を生きることに感じられた「時勢遅れ」の実感は、学問をする者の言葉を「空っぽな理窟」(十六)と断じる静によって相対化され、その人生とともに「明治の精神」の中に回収されていく。自殺を決意した「先生」は、その過去を両親の死の時点から回想している。自らの苦悩の根源であると自覚しながら、それでも捨てきれないその故郷への思いを前時代の精神とともに青年の「私」に向かって語り掛けているのである。

それでは、短編として書き始められ、その執筆の長期化により長編となって閉じられたこの作品全体はどのように位置づけられるのか。まずは作品後半における「活動と発展」について確認しておきたい。

其上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私丈の経験だから、私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に与へないで死ぬのは、惜しいとも云はれるでせう。私にも多少そんな心持があります。たゞし受け入れる事の出来ない人に与へる位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思ひます。

実際こゝに貴方といふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでせう。私は何千万とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから

(五十八)

私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものではないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。(中略)

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。

私は妻に何にも知らせたくないのです。(中略)私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい(百十)

「先生」の最後の手紙は「私」に宛てて書かれおり、それは遺書として受け取られている。手紙の冒頭ではそれが「貴方丈に、私の過去を物語りたい」からとされているが、その結末部分では「外の参考に供する積です」と対象が拡大され、「然し妻だけはたった一人の例外」で決して知らせないようにとの注意が付されている。このような手紙の中で、辻褃の合わない記述に関しては、先行研究では作者の誤りであるか、「先生」ではなく作者漱石の聲が響いたということ<sup>161</sup>とされる傾向にある。しかしながら、「先生」が手紙を書き始めてからそれを書き終えるまでの間に心境に変化があったとは考えられないか。その結末において「先生」自身が「書いて見ると、却つて其方が自分を判然描き出す事が出来たやうな心持がして嬉しい」(百十)と述べているように、「自分を判然」とさせる過程においてその手紙の目的も変化していったと考えられる。それこそが作品の「活動と発展」に他ならない。作者の視点からも、作品の展開がそうさせたと思つた方が自然であると考ええる。

「先生」は、手紙の中で過去を打ち明けるの前に「真面目に人生から教訓を受けたい」と言つた時の「私」について「其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです」(五十六)と述べている。そのうえで「其時私はまだ生きてゐた。死ぬのが厭であつた。(中略)私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」(同)とも前置きをしている。「受け入れる事の出来ない人に与へる位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬つた方が好いと思」うとまで書いている。「先生」は、手紙を書き出した時点では「私」に「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる」と話した時のままの気持ちでいたと言へる。すなわち、死の前に失つた人間への信頼を回復したいという最後の願いによつて手紙が書き始められたのである。

「先生」は「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れません」(百十)といい、その原因は「時勢の推移から来る人間の相違」(同)や「性格の相違」(同)であると述べるだけで、直接的な言葉で説明していない。しかし、それは「私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己を尽した積です」(同)とあるように、両親を失つてから死を

決断するに至るまでの過程の全てが自分を死に導いたのだという思いがあるからだろう。「先生」は自殺の動機の説明を放棄したのではなく、少しずつ、しかし確実に死へと傾いていった己の姿を誠実に伝えようとしたのだと解釈するべきである。そして、これまでに明らかにしてきたように、その過程や結末は、「倫理的」であることに拘った「先生」にとつて不可避のものであったように思われる。全てを残すことなく伝えようとする「先生」の手紙として執筆されていたからこそ、作品としても想定以上の長さになるまで語りが継続したのだといえる。

そして、そのように自分を克明に表現しようとする事は、Kがその遺書においてなさなかったことである。「先生」はKの遺書が「簡単」で「抽象的」な内容であったために死の理由を理解できずに苦しみ、その責任を一身に背負い込むこととなった。また、遺書に自分を責める言葉が一言も書かれていなかったことに引け目も感じている。それに加えてKの遺書の末尾には「もっと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらふ」という意味の文句」が添えられていた。そうであったからこそ、「先生」は自身の自殺に至る経緯と「罪」の内容を詳細に告白することで最後に「畏敬」と懺悔の対象であり続けたKを乗り越えようとしたのではないだろうか。

「先生」の手紙は明治が終わって間もなく「私」の元に届けられており、「先生」が一つの時代の終わりを機に自らの命を絶つことを決めたことはあらかじめ定められていた。しかし、「死ぬのが厭であった」という「先生」の自殺の決意のきっかけが「明治の精神」への「殉死」をめぐる静との対話であったことは手紙の最後になって明かされている。この事実は、「先生」が「私」だけに宛てた手紙を「他の人」にも向けたものとして書き終わったことと密接に関わっている。すなわち、世の中に背を向けて生きていた「先生」は、最後に他者を信じるためにその孤独や苦悩の内実を語り出したのであるが、やがてそれらを「明治の精神」と位置付けてそこに殉じることで時代に相対する自己を打ち立てようとしたのである。そうすることで「私」個人だけではなく人間全体に対する希望を繋ごうとしたのではないだろうか。

「先生」は静だけは「たった一人の例外」であるとして何も知らせないようにと希望を綴っていて、その理由を「妻が己の過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望」(同)だからと説明している。彼は自分の死に至る経緯を伝えないでいようとしている点でKと同じ轍を踏んでいるといえるのだが、それはむしろ「明治の精神」への殉死を語る「先生」の、次代を生きる静に対するある種の限界を表していると考ええる。「先生」は遂に学問をする者の言葉を「空っぽな理窟」と捉える静の視点に立つことができなかったのである。

過去の告白を終えた「先生」は、その手紙を終えるにあたり「私の努力も単に貴方に対する約束を果すためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです」(同)としている。その「要求」もまた作品中で「活動と発展」をしていたのである。「もう何にもする事はありません」(同)とは、成すべきことを果たした人間の言葉である。

その後、作品は「先生」の遺書の結末をもって閉じられており、語りが再び「私」に戻ることも、その評価が与えられることもなかった。大学を卒業し、東京での生活を望んでいた「私」がその後どのように生きたのかは明らかではない。わずかに「子供を持った事のない其時の私」(八)との記述が後に子供を持ったことを伝えており、「先生」とは違う人生を生きたことが暗示されている。無論そこからは小森陽一が示した静との将来までを読むことはできないが、少なくとも「過去の「私」は、たしかに未熟で純真な青年だが、手記を記述する主体としての私は、すでに「先生」の思想的な枠組みを脱し、新たな運動としての「生」を生き始めている」ことは指摘できよう<sup>162</sup>。そのことが早期に示されていることから、作品はあらかじめ手記を書く時点の「私」が「先生」とは異なる人生を生きている人物として示されていることが分かる。青年の「私」が「先生」の手紙から「人生の教訓」を得られたと考えられるのであるが、あらかじめ決定されていたことであるので作品の「活動と発展」の影響はなかったといえる。しかし、遂に自分が望んだ生活を手に入れることができず、罪悪感を抱えて孤独に生きていた「先生」は、最後に書いた手紙の語りにより人間全体に再び目を向けられた点でKとは大きく異なる心境で死を迎えることができたはずである。そして、その意味において「私」による相対化を受けつつも「明治の精神」を体現する者として過ぎ去った時代の証言者たり得たのである。

漱石が短編連作としての「心」をどう構想していたのかは明らかではない。しかし、その第一編として書き始められた「先生の遺書」が、これまでに論じてきたような「活動と発展」を見せたとき、一編の長編小説としての展開と主題を備えた『心』が成立した。それもやはり「予想通り早く方が付かない事を発見した」という「不定」の中で行われた執筆の一つの成果であったといえよう。

所謂〈後期三部作〉の第三作とされる『心』は、『彼岸過迄』の敬太郎と『行人』の二郎と同系列の人物と目される「私」が、同じく須永や一郎系列と考えられる「先生」の苦悩に触れていくという大筋の展開において共通している。しかし、「先生」が自殺した人物として初めに設定されており、前二作とは異なる視点から問題追求がなされている。その詳細についてはこれまでに論じてきた通りである。敬太郎や二郎の視点から照射された須永

や一郎の心は、「内へとぐるを捲き込む」（「松本の話」一）か、「宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ留められさうだ。なればまあ氣違だな」（「塵勞」三十九）と、それぞれに着地点の見えない苦悩を繰り返すものであった。いずれもそれぞれの〈家〉に居場所を得られず、どこにも立脚し得ない彼等の、過剰なまでの知性や倫理によるものであったが、それらの「理」には幸福と他者を希求する切実な心が底流していた。『心』においても同様の人物として「先生」が形象されているが、しかし、その終着点は明治の終焉に設定されていた。作品が「先生」の遺書を「私」に託し、その中で「明治の精神」への「殉死」の内実を明らかにしたとき、それは「私」や静といった次代を生きる人々による相対化の可能性を示す一方で、人の生死に一定の「理」が与えられたということにもなってしまう。作者はそこから次の課題を見出せたのだろうか。

漱石は「先生」の自殺について疑問を呈した江口渙に「自分ぢや、一寸も不自然だとは思はないね」と答えたという<sup>163</sup>。そして、詳しくは次章の冒頭で述べるが、連載を終えた後の秋ごろからは自己の死について度々話題にしており、年末に書いた書簡には「歳は行き詰る私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」とも書いて<sup>164</sup>。無論、この時期の漱石に付きまとっていた〈死〉の観念と「気分も行きづまる」という閉塞感の要因をすべて『心』執筆に求められるとは考えていない。それでも、彼が次作に向かう気力の湧かなかったことは確かであり、その意味で『心』が創作上の分節点となったと考えられる。それでは、そのような状態から漱石がいかに脱し得たのだろうか。彼の文学の最後の転換点ともいえる『硝子戸の中』を次章で考察する。

## 第五章 『硝子戸の中』

随想『硝子戸の中』は一九一五（大正四）年の一月一三日から二月二三日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に掲載され、同年三月に単行本として岩波書店より刊行された<sup>165</sup>。作品は全三九章から成り、筆者の書齋で起こった出来事や幼時の回想などを題材にした述懐が行われている。

本作は自殺に向かう「先生」を描いた『心』と、結末で「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」と語る健三を描いた『道草』との間に執筆されており、先行研究では多くの論者がこの時期の漱石の思想について論じてきた。とりわけ注目されてきたのが最終章の「微笑」であり、江藤淳は筆者がその「一時の幸福な安息」の中に『愛』の神話が信じられなくなった時、『悟達』の神話を信じようとしたと評している<sup>166</sup>。これに対

して越智治雄は「近代を超脱しようとしているのではけっしてない。ただ、その時代と人とを包括的な小説の世界に定着する視点を予覚しようとしているかにも見える」と述べている<sup>167</sup>。また、重松泰雄は過去の回想による「自己救済の効用」を重視し、『微笑』を絶やさぬ彼の境地によつて、すでに超克の方向は示唆されている」として作者の思想的転回を認めている<sup>168</sup>。しかしながら、それは柴市郎が「テキストの目的論的進行に従つて最終的にそこに到達しテキストを鎖ざす」結末<sup>169</sup>や、テキスト全体がその一点へと収斂させられる「主題」ではありえない<sup>169</sup>と指摘する通りであつて、「微笑」するまでの過程をより重視すべきであると考ええる。

硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い実の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立たた電信柱だのがすぐ眼に着くが、其他に是と云つて数へ立てる程のものは殆ど視線に入つて来ない。書齋にゐる私の眼界は極めて単調でさうして又極めて狭いのである。(一)

作品冒頭で伝えられる「私」は「殆ど表へ出ず」に書齋で過ごすことが多く、「世間の様子はちつとも分らない」という。一般の「忙しい人」たちと異なる生活を営む彼は「世の中は大変多事」であることを知るだけで、その意識は社会から隔たつてゐる。わずかに外界とつながる硝子戸からの視界は冬を伝えてくるが単調で狭い。第一章で語られているのは寒い冬に書齋の中で停滞した日々を過ごす「私」自身の姿であるが、その「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中」を訪ねて来た「思ひ掛けない人」や、そこで起こつた「思ひ掛けない事」について書き綴るのだと述べられている。「さうした種類の文字が、忙しい人の眼に、どれ程つまらなく映るだらうかと懸念してゐる」としながらも、「たゞ春に何か書いて見ると云はれたから、自分以外にあまり関係のない話らぬ事を書く」という。読者につまらないものとして読まれる危険を冒してまであえて書齋の中で起きた出来事について書き続けると宣言したのは、何よりも「私」自身が現状に閉塞感を感じ、そこからの脱却を図つていたからではないだろうか。

そこで、本章でも作品の展開に重きを置いて分析考察を行う。様々な人物や話題を取り上げながら進められる語りにおいて何が問題とされそれらがどのように語られていったのか。「心持が悪」く、「たゞ坐つたり寐たりして其日其日を送つてゐる文」の状況から始められた語りの中に「微笑」に至る契機を見出したい。

## 第一節 〈生〉と〈死〉をめぐって

『硝子戸の中』は元日からの連載を期して大阪朝日新聞社より執筆依頼がなされたが、漱石が期日に間に合わせられなかったために一三日からの掲載となった<sup>170</sup>。

漱石は、一九一四（大正三）年一月一日付林原耕三宛書簡に「私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない夫から私の死を扱ぶのは悲観ではない厭世観なのである」と書いていた。また、松浦嘉一の回想によると同年の一月二六日に行われた木曜会で「死は只意識の滅亡で、魂がいよく絶対境に入る目出度い状態である」と発言している<sup>171</sup>。そして、一月二七日付の木村恒宛書簡には「歳は行き詰る私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」とあり、年末になっても何も手につかなかった様子が窺える。そして、何よりもこの年の一月から二月の間には、『硝子戸の中』において〈生〉と〈死〉をめぐる葛藤が主題となる第六章から第八章までの挿話の素材となった吉永秀子との面会<sup>172</sup>が行われているのである。漱石は「気分」の「行きづま」りの原因については何も言及していないが、その一つには〈生〉と〈死〉の問題があったと言えるのではないか。以下、それが作品内でどのように語られているのかを見て行きたい。

第六章と第七章において、過去の「深い恋愛に根ざしてある熱烈な記憶」が薄れることを恐れ、「もし先生が小説を御書きになる場合には、其女の始末を何うなさいますか」と尋ねてきた女性との対話が描かれている。「私」はその生きるべきか死ぬべきかの問いに明確な回答ができず、別れ際に「死なずに生きて居らつしやい」と伝えたとという。続く第八章ではそれによって生じた自身の内心の揺らぎについて述べられている。「私」は常に「死は生よりも尊とい」と考えるようになったにも関わらず「解脱する事が出来ない」で「生に執着」し、苦しむ女性に対して〈生〉を前提に「凡てを癒す「時」の流れに従つて下れ」と生き続けることを勧める方が「適當」であるように思えたと言う。「常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた」と語る「私」は、この女性との出会いによって自らの死生観によって解決のつかない〈生〉と〈死〉の問題に直面しているのである。そして、「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐる」。

「私」の「死は生よりも尊とい」という考えは、「死といふものを生よりは楽なもの」と信じ、「人間として達し得る最上至福の状態」と思うところから来ている。ただし、それは〈死〉そのものに対する深い洞察というよ

りはむしろ「不愉快に充ちた生」に対する反感に由来している。(生)の嫌悪による(死)の肯定こそが彼の「希望」の実態であった。依然として「解脱する事が出来」ずに「生に執着してゐる理由もここにあり、すなわちそこに(死)を志向する積極的な根拠がないからである。「私」には元より「生の許す範囲内」での助言しか為し得なかつたように思われる。

また、「私」は(生)への「執着」を認める以上は「互いの根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釈するのが当り前」であり、「何ういふ風に生きて行くかといふ狭い区域のなか」で相手に向き合うしかないと述べている。「死は生よりも尊とい」という考えから(生)と(死)を捉えていた彼にとっては、辛い(生)を「何ういふ風に生きて行くか」ということは「狭い区域のなか」の問題であつた。しかしながら、「不愉快に充ちた生」の認識から「生よりは楽なもの」として(死)を位置付けている「私」にこそ、「何ういふ風に生きて行くか」という観点から(生)の改善を求めることが必要だつたのではないか。ただし、そのことは「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐる」と語る時点の「私」には自覚されていないと考えられる。

漱石は木村恒宛書簡に「歳は行き詰る私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」と記した同日に吉永秀子に対しても「私の力ではあなたをどうして上げる訳にも行かない(中略)どうぞ教師として永く生きて居て下さい」と書いた手紙を送っている。その「気分」の「行きづま」りの一要因として、これまでに見てきたような死生観の問題があつたことは間違いないだろう。そしてそれは「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐる」という第八章執筆の時点においても継続したものであつたと考えられる。彼はまさに現在抱えている問題をありのままに描出したのである。

第八章以降に(生)と(死)の問題について直接的に触れられている場面は多くない。第二章では寿命の不思議を考えた時の煩悶が主題となつている。周囲の人が死んでいく中で病気がちの自分が何故生き残つているのか。朝日新聞社の「佐藤君」<sup>173</sup>を思い出しながら、「彼が死んで私が生残つてゐるのを、別段の不思議とも思はずにゐる時の方が多い。然し折々考へると、自分の生きてゐる方が不自然なやうな心持ちにもなる」という。彼はその時々考えに翻弄されて「運命がわざと私を愚弄するのではないかしら」と感じるばかりであり、誰にも予測することのできない人間の(生)と(死)の運命に思いを馳せている。また、第三三章では「世の中に住む人間の一人として、私は全く孤立して生存する訳には行かない(三三)との書き出しから、他者に対する際の悩みが語られている。「馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出来ないか、此両方だけしかない



様な気がする」という「私」は、「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる〈生〉の多重の苦しみの中であつて疑う余地のない誠実な人間関係を切望し続けている。

この第二章と第三章において注目すべきは、他者との関わりにおいて〈生〉の苦しみが語られているという点である。すなわち、「死は生よりも尊とい」として〈生〉か〈死〉かを択一しようとするのではなく、「不愉快に充ちた生」そのものに目を向けているのである。その立場から問われることになるのは「何ういふ風に生きて行くか」という問題を置いて他にない。自らの苦しい〈生〉の改善こそが、「私」の望みとなっていたのではないだろうか。

生きるべきか死ぬべきかを問いかけてきた女性との出会いによって「私」の「死は生よりも尊とい」という自足的な死生観は揺らいでいる。他者との関係性の中に自身の〈生〉の現実を認識したことで、彼は新しい死生観の構築に向かい始めたと言えよう。ただし、依然として〈生〉が「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」と感じることに変わりはない。その解決は最終章にも示されることなく作品は閉じられているが、それでは「不愉快に充ち」ている〈生〉の改善はいかにして求められるのか。別の観点から作品を捉える必要があるだろう。

## 第二節 「時」の力の諸相

『硝子戸の中』の大きな特徴としては越智治雄が早くから着目した「章数にして全体の約半数に達する過去があり、それが『私』の現在に自由にはいり込んでくる点」<sup>174</sup>が挙げられる。越智は作品の構想と見られる「断片」<sup>175</sup>と作品とを比較して「ノートの段階では、これほど過去の比重について漱石は意図的であつたとは思えない」と指摘している。漱石が執筆を進めるうちに元の構想には見られなかった幼時の回想をするようになった点については重松泰雄も注目しており、特に第一章以降に「回想部分と非回想部分とがほぼ整然と交互に並べられている」のはそれが「現在から過去へ、過去から現在への振り子運動のうちに、現実の苦渋を浄化し、中和し、且つまた相対化せんとする試みだったのでないか」と述べている<sup>176</sup>。先行研究では過去の回想という点から論じられることも多いが、本節では「私」の語りの中に数多く見出される時間の流れに対する意識に着目したい。

作中から「時」として鉤括弧に括られたものだけを列挙すると、「全てを癒す「時」の流れ」(八)、「公平な「時」」(同)、「恐ろしい「時」の威力」(一〇)、「「時」は力であつた」(二三)の四例が挙げられる。それらを見てみて

も時間に対して多様な捉え方がなされていることが分かるが、これらの他にも時間の流れに対する多様な意識が読み取れる。そこで、これ以降、「硝子戸の中」を読み解くうえでの鍵になっていると考えられる「時」の力の諸相に焦点をあてて作品の展開に沿って考察を進めたい。

第四章では病気を患い床に就いていた「私」が一ヶ月振りに犬のヘクトーと会った時に、ヘクトーが呼びかけに反応しなくなっていたことが語られている。「私」は「彼がもう主人の声を忘れてしまったものと思つて、微かな悲哀を感じずには居られなかつた」といい、続く第五章では、猫の古い墓標と、死んでしまったヘクトーの新しい墓標とを眺め、「ヘクトーのはまだ生々しく光つてゐる。然し間もなく二つとも同じ色に古びて、人の眼に付かなくなるだらう」と感慨している。第八章では恋愛の記憶を抱えて苦しむ女性に「凡てを癒す「時」の流れに従つて下れ」と助言を与えたことについて語られている。第一〇章では友人〇との久し振りの再会時に「恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再び故の姿に返る事は、二人に取つてもう不可能であつた」と感じたことが、第七章ではかつて芸者であつた御作が「品の好い奥様」となつた姿を見かけたことを思い出し、更に彼女が死んでしまつているということを聞いて驚いている。

「私」は第八章で「時」が「公平」であると述べていたが、作品の前半部分に見られる「時」の力は癒しを含みながらも忘却や老いなどの変化、あるいは郷愁をもたらし淋しさや悲しみを引き起こすものとして捉えられている。

ここで第八章における「時」の認識を取り上げたい。「私」は悲痛な記憶を抱えて苦しむ女性に、「凡てを癒す「時」の流れに従つて下れ」との助言を与えた。「死は生よりも尊い」という思いに反して与えられたこの言葉は、「公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪ふ代りに、其傷口も次第に療治して呉れる」という考えによるものであつた。ただし、「いくら平凡でも生きていく方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だった」とも述べているように、彼は「凡てを癒す「時」の流れに従う」という方法を、辛い〈生〉の苦しみに対する積極的な手段としては捉えていなかった。それは、前章に述べたように、この時点で「死は生よりも尊い」と考えていた彼が〈生〉に対して消極的であり、「何ういふ風に生きて行くか」を「狭い区域」の問題と見ていたからである。作品前半における「時」の力への視線の暗さは、「不愉快に充ちた〈生〉の現状にその原因を求めることができないだろうか。

第二〇章では、かつて住んでいた町の豆腐屋の隣に寄席があつたことを覚えているが、そんな所に寄席がある

はずがないという現在の疑いが「記憶に霞を掛け」ているようで、思い出す度に「奇異な感じ」がすると書かれている。第二三章では、子供の頃には嫌っていた父の「虚栄心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる丈である」と述べ、「崩れて仕舞へば好いのに」と思っていた生家についても、「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散歩した序に、何気なく其所を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝあつた」と伝えている。第二五章の大塚楠緒子の回想では、会話の内容は「遠い過去になつて、もう呼び出す事の出来ない程、記憶の底に沈んでしまつた」とする一方で、「美しい人」であつたという印象が強調されている。第二八章では一見して助からなと思うほどの皮膚病を患っていた猫が回復し、病気前よりも太りだした様子が語られている。第二九章では子供の頃に下女から受けた親切を思い出し、「不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覚えてゐるのはたゞ其人の親切丈である」と述べている。

作品の中頃では、まず過去の記憶が現在の認識によつて疑わしく思えることが語られる。しかし、時間の経過によつて嫌悪が許しに変わり、美しい記憶や嬉しかった思い出が純化されることも確認されている。また、「時」の流れの中で衰えていったものが同じ「時」の流れの中で回復し、以前よりも力強くなることもあるということを観察されている。第二三章以降からは「時」の力が肯定的な影響をもたらす側面が読み取れるが、殊に第二五章ではその事が明瞭である。

第二五章で大塚楠緒子に関して語られているのは、「私」が「心を腐蝕するやうな不愉快の塊」を抱えた雨の日の散歩中に見かけたその美しい姿に「見惚れてゐ」たことと、彼の勘違いに対しても「顔を赧らめ」ず「不愉快な表情も見せなかつ」たことと、夫婦喧嘩後の「厭な顔」を見せないために自宅訪問に応えなかつた非礼を詫びに訪ねたことである。詳細は「もう呼び出す事の出来ない程、記憶の底に沈ん」でいるものの、「私」は楠緒子によつて「不愉快」な気分が晴れたかのように当時を回想しており、彼の誠実な対応からも故人に対する好意が窺い知れる。その死に際しては「ある程の菊投げ入れよ棺の中」<sup>177</sup>という句を作っていたが、在りし日の姿を伝える彼の語りからは、手向けの一七字に込められているような激しい嘆きは読み取り難い。ここにおいて「私」は「凡てを癒す「時」の流れ」の力を実感したと言えるのであつて、静かに回想する彼はそのことを悔いてもいない。「凡てを癒す「時」の流れ」の力が、かつてそれを女性に勧めた時点で考へていた以上に〈生〉を改善していけるものであることを自ら確かめているのだと言える。それは第二三章における過去から、第二八章のような

現在に近い時点においても確かめられている。特に第二八章では皮膚病から回復し、「以前より肥え始め」た猫と自分の病気の経過とを比較して「其所に何かの因縁があるやうな暗示を受ける」という。「すぐ其後から馬鹿らしいと思つて微笑する」というが、彼が猫に「因縁」を感じるのは、自ら回復以上のものを実感しているからに他ならない。「私」は「硝子戸の中」の語りを進める過程で自らの中に「時」の力のより良い側面を見出したのである。そして、このような認識の変化は、同時に〈生〉への希望にもなつたはずである。

作品の構想を記した「断片」は何度か書き直されたと考えられている<sup>178</sup>が、漱石はその中に三度、大塚楠緒子の名を記しており、それぞれ「<sup>(22)</sup>楠緒子 妾ヲ撃退ス」、「楠緒子さん」、「<sup>30</sup>大塚婦人の事、妾撃退」である。「妾」や「撃退」の意味するところは不明であるが、楠緒子の行動を伝える構想が作品化されなかつた事は確かである。実際に書かれたのは、楠緒子の美しい姿を思い浮かべながら「ある程の菊投げ入れよ棺の中」の句を手向けた過去を遠く回想している自己の姿である。無論意識されているのは「時」による慰めであろう。先に引用した通り、重松泰雄は「現在から過去へ、過去から現在への振り子運動のうちに、現実の苦渋を浄化し、中和し、且つまた相対化せんとする試み」であつたと述べているが、ここでの漱石はただ楠緒子の回想に浸っているのではなく、そこから現在をも見つけている。構想と実作との相違の中に、漱石が過去から現在にわたる「時」の力に関心を寄せるようになったことが裏付けられるだろう。彼はその時々に関心の在り方に応じて構想を変えながら、柔軟な執筆を行つていたのである。

第三〇章には、「継続中」という言葉を聞かされた時に「好い事を教へられたやうな気がし」て、その言葉を積極的に使用している様子が報告されている。第三五章では、昔よく聞いていたという講釈家の講釈を近年になつて再び聞いた感想として「全く昔の通りであつた、進歩もしない代わりに、退歩もしてゐなかつた」と感じ、「廿世紀の此の急激な変化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想に耽つてゐた」という。第三六章では、若くして亡くなつた兄と恋仲にあつたと思われる女を思い出してまた会つてみたいと思うが、「彼女が今になつて兄の弟の私に会ふのは、彼女にとつて却つて辛い悲しい事かも知れない」と考え直している。そして、第三七章で「私」は「母の記念の為に此所で何か書いて置きたい」として過去の思い出を綴り、続く第三八章には夢とも現実とも判断のつかない母の記憶に対して、「何うしても私は実際大きな声を出して母に救を求め、母は又実際の姿を現はして私に慰藉の言葉を与へて呉れたとしか考へられない」と書いている。

作品の終盤には「私」がその流れの中でより良い〈生〉の方向に目を向けていこうとする態度が新たに見て取れる。それまでには「時」があらゆるものを変化させてしまうことが確かめられてきたが、かつて聞いた講釈のように、「時」の流れによっても変らないものがあつたのだということを書いて出している。また、失われつつある「大変嬉かつた」記憶や曖昧な記憶を永く「時」に固定するために、彼は「母の記念」としてこの文章を書き残しているのだという。そして、これまでに「時」の力の諸相を知り、その大きな流れの中でも自分ができることを実践した「私」は、次章で『硝子戸の中』の語りを閉じる。

ここで特に注目したいのが、第三〇章の「継続中」という言葉である。「私」は当初病気の状態を表すために用いていたその言葉を広く一般化して人生にも適用し、「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか」という考えを導いている。ここでは〈生〉と〈死〉が「時」の流れの中で連続したものと捉えられるようになっていく。第八章において「自分の何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地」という言葉が用いられていたが、その時点での死生の意識は「不愉快に充ち」た〈生〉か「尊と」い〈死〉かという二者択一であつた。しかし、「時」が「継続中」の〈生〉をより良くし得るものであることを認識している第三〇章で強く意識されているのは今後「何ういふ風に生きていくか」という問題であろう。

漱石は、『硝子戸の中』の執筆を終えた後<sup>179</sup>の一九一五（大正四）年四月から五月頃にかけて書かれたとみられる「断片」<sup>180</sup>に、「〇生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、（もしくは超越）、すると現象即実在、相対即絶対でなくては不可になる。「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」と書き込んでいる。この「断片」が実際に交わされた会話の一部を記したものであるのか、それとも創作上のメモであるのかは明らかではない。ただし、ここでは〈生〉を厭う態度から〈死〉を志向する考え方が否定され、双方を「一貫」あるいは「超越」する視点の必要性が記されている。そして、それが「理窟」に過ぎないという事を疑われながら、それでもその境地に「たゞ行きたいと思ふ」のだという。「生死を一貫」という点については第三〇章の「継続中」の考え方に近いと考えられる。前年の書簡に「私の死を扱ぶのは悲観ではない厭世観なのである」、「私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」などと書いていた漱石は、他者と共有することのできない自分自身の死生観に「半信半疑の眼」を向けながら『硝子戸の中』を書き続け、その語りの中から得られ

た新しい方法で〈生〉と〈死〉を捉えようとするようになったと言えるのではないだろうか。この転換に関して作品内では直接的には触れられていないが、後に書かれた「断片」からは〈生〉と〈死〉に対する視線に大きな変化が確認されるのである。

作品の前半から「時」の持つ力を様々に語ってきた「私」は、次第にそれを〈生〉に肯定的な側面から捉えるようになり、やがて「継続中」の認識のもとに〈生〉と〈死〉を連続する視点から考えはじめた。この変化は、彼が〈生〉を積極的な「時」の流れの中に見出したからであると考えられるが、「継続中」の言葉を得たことよって〈生〉を無批判的に肯定したとは言いがたい。第三三章に語られている通り、人生は「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」のである。しかしながら、「継続中」の〈生〉において「何ういふ風に生きていくか」という問題を考えるようになったということは、自己変革の機会を得たということである。それはまさに第一章で「私」が停滞した自己に求めていたものであった。「時」の力の諸相を様々に捉え、それらを語っていくことで彼はその中に現状打開の手掛かりを得たのである。

### 第三節 「硝子戸の中」の他者

「私」は第一章で「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入って来る。それが又私にとっては思ひ掛けない人で、私の思ひがけない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫達の人を迎へたり送つたりした事さへある」といい、「私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ」と述べている。その言葉通り、作品内では彼の書齋を訪ねて来た様々な人物が登場する。雑誌社の男（第二章）、辛い恋愛の記憶を抱えた女性（第六、七、八章）、原稿を持ってきた女性（第一章）、数学に熱心な女性（第八章）、質問に来た三人の青年（第三四章）である。この他にも、直接の来客ではないが、書簡にて漢詩や俳句創作の要望をしてくる人々（第一二、一三章）についても語られている。

これらの他者との交流において、相手が約束を守らなかつた時や、後になって当初の約束以上の要求を出されたとき、あるいはこちらの都合を考えない人を相手にした時の不快感が伝えられる一方で、第六章と第七章の女性の悲痛な告白には「人間らしい好い心持」を感じ、古くからの友人〇の悪口にも気分を害することなく「透明な好い心持」になっている。「私」は他者の偽りや下心に対しては敏感に反応し、相手の好意やありのままの心に触れられたと感じた時に満足する潔癖な人物である。面会希望者には可能な限り会うようにし、その他の要望に

もできる範囲で応えようとしている。それが見返りを求めるものではない「好意」であるというように、彼は他者に対して誠実であろうとしている。

第一二章では、富士登山の画をめぐる坂越の岩崎とのやり取りにおいて自らの過失に気付いた時に「恐縮し」て「丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝し」た<sup>181</sup>ことが語られ、続く第一三章では岩崎の執拗な句作の要求に多大な不愉快を感じて「非紳士的な挨拶」までしてしまったが、年始に届いた普通の年賀状に「感心」して句を書き付けた短冊を送ったことを明かしている。このように、「私」は人間関係において潔癖と言えるほどに誠実であろうとしている。彼がそのようなようになってしまった理由は明らかではないが、第三一章と第三二章に語られている幼時の回想は特に重要である。

小学生であった頃に仲の良かった「喜いちちゃん」がある日、「私」に買い取るようにと友達から預った二冊の書籍を勧めてきた。「私」は値切ったうえでそれを買ったが、翌日になると「喜いちちゃん」が友達の父親に頼まれて本を取り戻しに来た。その時に自己の「不善の行為から起る不快」を感じ、「喜いちちゃん」に対しては「怒った」のだと分析している。それらは、内容も理解できない本を利益のためだけに値切って手に入れたことに対する自己嫌悪と、自分のものではない本の値切りに独断で応じ、先方に言われるがままに取り戻しに来た「喜いちちゃん」の不誠実に対する反感であろう。結局、「私」は損得勘定で動いた自分の「狡猾」さをごまかすかのように本を「遣る」と言って二五銭は受け取らなかった。注意すべきは、「私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるやうなもの、其場合の私には殆ど解らなかつた」という点であり、当時の「私」は「苦い顔をしたといふ結果だけしか自覚し得なかつた」のである。過去においては認識されていなかった「不快」と「怒」りの感覚は、時間を隔てた現在においても苦い記憶として回想されるほどに強烈な印象を少年時代の彼に植え付けていた。当時すでに自他の不誠実を嫌っていた「私」は、それよって「不善の行為」や不誠実な行いを極度に嫌うようになり、人間関係上の潔癖を無自覚のまま強固に求めるようになったと考えられるのではないだろうか。

続く第三三章では、他者との関わりを避けられない現実生活において、疑いのない人間関係を築き得ない苦しみ<sup>182</sup>が吐露されている。疑いは自己の他者理解の能力と、他者の誠実との双方に向けられており、「もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪びいて、私に毫髪<sup>183</sup>の疑を挟む余地もない程明らかな直覚を与へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、此不明な私の前に出て来る凡ての人を玲瓏透徹な正直もの

に変化して、私と其人との魂がびたりと合ふやうな幸福を授け給はん事を祈る」とまで書いてある。しかし、「私」の苦悩は言うまでもなく彼が求める理想と現実との懸隔によるものであって、「神」という言葉を持ち出さなくてはならない程に両者が隔たっていると認識していることが窺える。「不愉快に充ちた生」の根拠をここに求めることができよう。しかし、「不明な私」による「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」という実感は、決して人間関係に対する絶望を語っているわけではない。

ここで見落としてならないのは、「私」が「喜いちやん」の回想を開始する直前の第三〇章で「継続中」について語っていたということである。彼はその中で「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないのです、仕合せなんだらう」と述べている。「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」という人間関係上の苦しみは「私」の人間関係における高い理想ゆえであり、彼は第一章と第二章の回想を通じて幼時から無自覚のうちに作り上げてきたそれを「夢の間に製造した爆裂弾」として見出したのではないだろうか。第三三章の語りは、第八章と同様に自己の中にある問題を認めて自らの限界を乗り越えようとする試みであつたと言えるだろう。この点もまた未解決のまま語りは閉じられる。しかし、第三三章の語りを終えた「私」は、その後も「継続中」の他者の問題と向き合いながら、「何ういふ風に生きていくか」を問い続けることになるだろう。

第八章の執筆時点において「私」は「不愉快に充ちた人生」を過ごす中で「何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地に就いて常に考へてゐ」たといい、「死は生よりも尊とい」という言葉が「絶えず胸を往来」していた。彼がその人生を「不愉快」に感じていた大きな要因として他者の問題が挙げられる。人は社会から完全に孤立して生きることができず、不可避である他者との関係性は常に「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」。そして、他者との関係に不満を抱くのは、彼が疑う余地のない程の「正直」さを相手の中に確かめる術を持たないからである。幼少時の「不快」と「怒」りの記憶に起源を持つ人間関係上の拘りが彼を頑なにしていたと考えられる。「私」は「殆ど表へ出」ずに書齋に一人で過ごし、時折来客がある程度であつた。苦しい〈生〉の中で「死といふものを生よりは楽なものだ」とばかり信じ「るようになり、「死は生よりも尊とい」という他者とは共有し得ない死生観に自足していた。「私」は「小さな私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中」で死生と「時」と他者の、それぞれの問題の複雑な絡み合いの中で鬱屈としていたのである。



書齋での停滞した日常からの脱却を求めて始められた『硝子戸の中』の語りの中で、「私」は〈生〉と〈死〉の間で迷う女性との出会いによって自己変革のきっかけを得ている。「死は生よりも尊とい」という自己の死生観からではなく「互いの根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釈」し、「何ういふ風に生きていくか」という観点から「凡てを癒す「時」の流れに従つて下れ」と助言した。第八章を語る時点においても「半信半疑」であつたが、やがて「時」の力が〈生〉を改善し得ることを確かめる。そして、あらゆる問題に対する「継続中」の認識を得て〈生〉と〈死〉を一貫した視点で捉えられるようになり、「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる〈生〉の苦しみの原因を自身の過去のの中に見出したのである。このように、「私」は多様な語りの中に自らの問題をさらけ出して自己変革を求め、その可能性を模索し続けたのである。

#### 第四節 硝子戸の外へ

まだ鶯が庭で時々鳴く。春風が折々思ひ出したやうに九花蘭の葉を揺かす。猫が何処かで痛く噛まれた米嚙を日に曝して、あたたかさうに眠つてゐる。先刻迄庭で護謨風船を揚げて騒いでゐた小供連は、みんな連れ立つて活動写真へ行つてしまつた。家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸を開け放つて、静かな春の光のなかで、恍惚と此稿を書き終るのである。さうした後で、私は一寸肱を曲げて、此縁側に一眠り眠る積である。(三十九)

第一章では「硝子戸の中にばかり坐つてゐた「私」が、最終の第三十九章では「しばらく出た事のない裏庭」へ出ている。縁側に出て春の陽を受けながら、風に揺られる九花蘭の葉を眺め、鶯の声を聞く。「毎日硝子戸の中に坐つてゐた私は、まだ冬だ冬だと思つてゐるうちに、春は何時しか私の心を蕩揺し始めたのである」と述べているように、硝子戸の中で停滞していた自分自身の心が気付かぬ間に動き始めていたことを自覚する。春の暖かな日差しを受けながら「私」は現在の心境を書き綴っている。

この随想作品の執筆について、「筆をとつて書かうとすれば、書く種は無尽蔵にあるやうな心持もするし、彼にしようか、是にしようかと迷ひ出すと、もう何を書いても詰らないのだといふ呑気な考も起つてきた」と語っている。書くことはいくらでもあるように思うが、書いてもつまらない気もするという。それは、彼がこれまでに書き続けてきたことによつて執筆開始時に抱いていた精神的な停滞感を解消する手がかりを得ていたからである

う。だからこそ「書く種は無尽蔵にあるやうな心持もする」と、依然として未解決の問題や語りの余地を残しながらも自身の心が「蕩揺し始めた」ことで『硝子戸の中』が閉じられたのである。それに加えて、「今度は今迄書いた事が全く無意味のやうに思はれ出した。何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が私を嘲弄し始めた」が、「此嘲弄の上に乗つて上に乗つてふわ〜と高い瞑想の領分に上つて行くのが自分には大変な愉快になつた」という。「私」は一連の心的な閉塞感の打開だけでなく、それまでの自己を相対化する視点を獲得しているのである。

また、「嘘を吐いて世間を欺く程の銜気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずに仕舞つた」と振り返っている。それによつて「不快」を感じる人がいるかもしれないが、「私自身は今其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながらかつて、」で、「今迄自分詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐる」のだという。そもそも「私」の執筆は多忙な読者の興を引くやうな「懺悔」ではなく、自己の停滞感の解消を大きな目的としていた。それが果たされたことに「微笑」し、「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる」「硝子戸を開け放つ」たのである。彼は消極的な〈死〉への傾倒から脱して他者に満ちた「継続中」の〈生〉と向き合う姿勢とそのため視点を獲得したと言える。

一九一四（大正三）年末、「厭世観」に囚われて自らの〈死〉について考えていた漱石の気分は鬱屈としていた。年が明けてからも状況が変わることはなく、彼は「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる〈生〉を厭い、自らに「半信半疑」しながら『硝子戸の中』を構想・起稿した。それら心的な閉塞感は、これまでに見てきたやうな多様な語りの過程で次第に拭かれていったのである。

『硝子戸の中』の執筆終了後、漱石は小説『道草』<sup>182</sup>の執筆に取り掛かつた。この作品はとりわけ自伝的要素が強く、自身の体験を素材としている。その冒頭に「彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた」とあるように、主人公の健三は三人称の語り手によつて無意識に抱え込んでいた問題を指摘されている。このような描写は作中に散見され、妻やかつての養父母、親類との関わりによつて苛立つ健三の内面が立体的に語り出されている。作品の自伝的側面に着目するならば、語り手による健三の批評は、漱石による自省であつたと捉えられる。『硝子戸の中』で「所詮我々は自分で夢の間

に製造した爆裂弾を、思ひく／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑し、歩いて行くのではないだろうか」と語ったとき、漱石は自らの過去に現在の自己を苦しめる要因を見出す必要性を認めたのではないだろうか。『道草』において自らの経験素材とし、その生い立ちや他者との関わりの中にそれらを見出そうとしたと言えるのである。そうした問題意識を生み出していったのが『硝子戸の中』の語りの中で展開された思考や見出された視点であることは言うまでもないだろう。

執筆中に何度も構想を変えながら柔軟に展開されたこの作品にはその時々々の漱石の関心や思考が映されていると言え、幼少期から現在までを題材とした語りからは〈生〉と〈死〉、「時」、他者の主題が見いだされる。筆者が現在時点において抱えている問題とともに書き進められたこの随想は、彼にとつて単なる身辺雑記ではなく閉塞した自己の内面の変革を求める場であった。その過程において得られたものこそが彼にとつては重要であり、次の創作に向かう動機たり得たのである。

## 結章

本論では夏目漱石が一九一〇（明治四三）年から一九一五（大正四）年にかけて執筆した五作品を対象に、それぞれ「不定」の中で書き進められた作品がいかにか「活動と発展」をしたのかという観点から考察を行ってきた。

第一章では、〈修善寺の大患〉後に最初に連載された随想「思ひ出す事など」における「余」の「長さも内容も不定」語りが「閑適の境界」にある喜び伝えるものから〈死〉の考察、そして快復後の社会生活に向けた述懐へと移り変わる過程の内実を明らかにしてきた。転換の契機となったのはそれぞれ「ヂスイリユージョン」と「命根」の不可知性の認識であり、そうした知的不安ともいえる状態が「払底な趣」のある「平凡で低調な個人の病中に於ける述懐と叙事」を変えていったのである。「三十分の死」を経験し、その後様々な人から受けた喜びの記憶、「好意の干乾びた社会」において「始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じ」が消えていく実感とその不安を背景に、〈死〉、〈生〉、自己、他者、社会といった各対象への確かな認識を求めて行われた語りの展開を論じた。

第二章から第四章にかけては、「思ひ出す事など」の後に執筆された『彼岸過迄』、『行人』、『心』を取り上げた。作品構成の類似等から〈後期三部作〉と一括されることの多いこの三作品は、先行研究において視点人物・語り

手の言動が中心となる前半から知識人の苦悩が焦点化されていく後半への移行が問題とされてきた。短編連作による長編として構想・執筆された作品がどのような「活動と発展」をしていったのかという問題意識からそれぞれの作品を分析考察した。

第二章では、『彼岸過迄』について、田川敬太郎と須永市蔵の二名の視点から考察した。敬太郎と彼が中心となる前半部は一定の意義を認められつつも軽く評価されがちであるが、彼は、開化が強い生存競争が人々を孤立させる社会にあつて他者の心の内の「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」を求める「遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年」であり、その形象自体が作者の強い問題意識によるものであつた。後半の須永の過去があらかじめ主題として用意されていたのではなく、敬太郎が自らの「浪漫趣味」を修正しながら、田川や松本の「理」に落ちることのない「人間の異常なる機関」に触れていく、その延長上に〈家〉にも「世の中」にも千代子にも向かうことのできない須永のそれが立ちあらわれてきたのであつた。しかし、作品が鋭敏すぎる知性に抑圧され続ける須永の苦しみを予感したとき、敬太郎の「浪漫趣味」の視点・関心ではそれを捉えきれなくなつていた。そうした主題の「活動と発展」によつて、語りが須永と松本に託されていったのであつた。作品は、自己の生活に埋没した「實際家」や「高等遊民」、「退嬰主義」者が各々に抱えていた「人間の異常なる機関」に光を当てていく敬太郎を通じて、同時代を生きる人々に共通の「孤立」的状况を多元的に描き出していた。

第三章では『行人』を取り上げ、長野二郎とその兄の一郎に焦点を当てた。語り手でもある二郎が「あの女」や「美しい看護婦」をめぐつて友達の三沢との間に「性の争ひ」を見出し、「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」と自己の「卑怯」を自覚するが、一郎と直との夫婦関係の問題に引き込まれる中で「性の争ひ」さえ無意識的に利用してしまう。一方、一郎は直の「本体」を求めて様々な「理窟」や「学理」を弄したせいで自ら疑惑を抱え深めることになり、家族関係までも揺るがしていった。「古い歴史を有つた家」が崩壊してゆく過程において、それぞれに自己のあり方を求める人々のすれ違いが描かれ、〈家〉が家族に齎すべき「幸福」の重みとその根源が逆説的に問われていたのであつた。連載が一時中断された後に起稿された「塵勞」では、新たに家庭に居場所を失つた一郎の苦しみが同僚のHの証言を通じて報告されていた。先行研究では唐突と評されることの多い一郎の文明語りであるが、その本質は〈家〉を喪失した彼の立脚点模索の苦闘であつて、それも作品主題の展開として捉えられるのである。

第四章では三部作最後の『心』に関して、「私」と「先生」を取り上げた。作品は短編集「心」の第一編「先生

の遺書」として書き始められたが、作者が「書き込んでいくうちに、予想通り早く方が付かない事を発見した」という。前半の「私」の手記では、当時の二人の交流が次第に「厭世的」な「先生」を形成することになった要因として、「恋」や人間不信、死んだ友達存在だけでなく、より遠い過去の「金」や故郷の問題にまで掘り下げてられていく過程が分析された。自身の生地に物足りなさを感じ、東京での暮らしと「先生」に強い親しみを覚える「私」に対して、作品後半の遺書で明らかになる過去の「先生」は両親の死後に叔父の裏切りに遭って人間不信となり、愛した故郷も捨てることになった人物である。以後、「倫理的」であることに拘りながら、新たに「御嬢さん」への「愛」により新しい生活を得ようとしながらそれが出来ず、親友のKを裏切り、最終的にはKの自殺を以て自らにも絶望していく過程が詳細に語られている。このように、作品は、「私」と「先生」の語りによって内外から「先生」の心を突き詰めるものであった。そして、自殺の決意に至る論理が徹底して追求され、それが「明治の精神」への「殉死」に託されたことで「先生」は自己の死を時代の中に位置づけられ、「私」個人のみに向けられた告白を、かつて背を向けた「他の参考」と拡大することができたのであった。しかし、その「先生」の「殉死」は、新時代を生きる「私」や静による相対化を受け一方で、人の生死に時代性という「理」を与えてしまうものでもあった。

そして、第五章では『心』連載終了後の漱石が〈死〉の問題を抱えて「気分も行きづまる何をすることも厭」という状態から構想・執筆されることになった随想『硝子戸の中』を論じた。「不愉快に充ちた生」という認識から「死は生よりも尊とい」と考えていた「私」は「生に執着してゐる自己を見出して「半信半疑」となるが、様々な話題を語り進めて最終的に矛盾した自己にも「微笑」できる視点を獲得するまでの過程を考察した。それには自らが発したという「凡てを癒す「時」の流れ」が重大な要因として関わっており、筆者は構想になかった幼時の回想などを積極的に取り入れることで「時」の力の諸相を確かめていたことを明らかにした。やがてあらゆるものを「継続中」の認識から眺めることで自己を長い時間の流れの中で相対的に捉えるだけでなく、それまで二者択一で考えていた〈生〉と〈死〉が一貫したものと見直されていった。以上のような新たな認識の方法と、そこに見出された過去やこの後に「何ういふ風に生きていくか」という課題を得たことで「私」は「微笑」することができたのであった。

それでは、以上のことをふまえて最後に「思ひ出す事など」から〈後記三部作〉を経て『硝子戸の中』に至るまでの過程と、作品執筆における「不定」とその「活動と発展」の意義について考えたい。

〈修善寺の大患〉が漱石の人生において重大な転換点であったことは従来言われてきた通りであり、本論においても異論はない。「思ひ出す事など」には「住み悪いとのみ観じた世界に忽ち暖かな風が吹いた」、「病に生き還ると共に、心に生き還つた」<sup>183</sup>とあり、妻鏡子も漱石が「たいへん温かくおだやか」で「人情的」になったと振り返っている<sup>184</sup>。しかし、その文学上の直接的な転機となったのは「思ひ出す事など」執筆中に陥った「ヂスリユージョン」であったと考える。

第二章で論じたように、喜ぶべき人間の〈生〉と〈死〉の営みが様々な理論や学説によって無機的に説明され相対化されるのだと認識した時に生じたそれは、「内容も長さも不定」のまま語り始められた「思ひ出す事など」に死生の考察という新たな方向性を与える要因ともなった。しかし、記憶することのできない〈死〉は不可知なものと結論され、「命根」の不明性も確かめられている。残されたのはそれらから断絶された〈生〉の現実だけであり、問題は、「苦しい実生活」を強いる「好意の干乾びた社会」においていかにそれを「生き甲斐」のあるものと為し得るのかということではなかったか。「思ひ出す事など」脱稿以降の創作においても問われ続けたのはまさにそのことなのであった。漱石は『彼岸過迄』の執筆前に「要するに皆自分対社会の関係を研究したもの」<sup>185</sup>として近畿各地で「道楽と職業」、「現代日本の開化」、「中味と形式」、「文芸と道徳」の四講演を行っている<sup>186</sup>。そこでは開化の苛烈さと人間の孤立状況が指摘されているが、「道楽と職業」の中で「かたまつて生きて居ても内部の生活は寧ろバラ／＼で何の連鎖もない」状態から回復するために「元来文学上の書物は専門的の述作ではない多く一般の人間に共通な点について批評なり叙述なり試みたものであるから、職業の如何に拘はらず、階級の如何に拘はらず赤裸々の人間を赤裸々に結び付けて、さうして凡ての他の墻壁を打破するもの」として読書を勧めている。ここに示されている文学観もふまえて考える必要があるだろう。

『彼岸過迄』において、「平凡を忌む浪漫趣味」を有した敬太郎は当初「冒険」を欲していたが「人間の異常な機関が闇夜に運転する有様」を眺めることを求めるようになり、日常に埋没する田口の「悪戯」、松本の「親子の情愛」、須永の「退嬰主義」の内実を照射していった。そして、繰り返しとなるが、須永が抱えていた苦しみとは、自身の〈出生の秘密〉への疑いにはじまり、過剰な知性の働きに抑圧され〈家〉にも「世の中」にも千代子にも向かえないことであった。それぞれに孤独であると言える近代人のそれぞれの内面を描きながら、どこにも依拠できない須永のそれは、幸福の要件とでもいうべきものを逆説的に提示しているのだといえる。敬太郎の「世間」を聴く一種の探訪は、「不定」の「活動と発展」の中からそれらを炙りだしていったのである。

続く『行人』では、話を聞くだけであった敬太郎とは異なり、二郎やHが一郎との直接の関わりの中で起こった出来事を伝えている。一郎も須永とは対照的に、家長であり大学教員であり既婚者でもある。『彼岸過迄』が示した問題を受けて、『行人』では具体的な関係性の中で幸福が求められている。しかし、一郎は鋭敏すぎる知性からさまざまな「学理」や「理窟」を用いるが直にも家族にも絶望し、「進んで止まる事を知らない科学」の発展に恐怖する。そうした疑念と不信の深まりが二郎の回想とHの報告によって伝えられている。また、『心』では、「倫理的に生れ」、「倫理的に育てられ」た「先生」が明治の終焉とともに自殺するまでの過去を焦点に、次第にその苦悩の根源に接近していった様子を回想する「私」の手記と、故郷を捨て新しい生き方を模索する「先生」が頑ななまでの「倫理」への拘りから自らを追い詰めていく中で苦しみが告白された遺書の二面から語られている。そして、このように三作を並べた時に、それぞれの人物の共通点と相違点が浮かび上がってくる。

『彼岸過迄』、『行人』、『心』の所謂（後期三部作）の特質として度々指摘されてきたのは、「文明批評の眼がひっこみ陥没したあとに、個人としての人間の存在がかかえこむ闇があらわれ、作品の焦点はそこに結ばれるようになる」<sup>187</sup>、あるいは「後期の三部作になれば、いっそうの内面化が進み、重点は自我の確立と挫折の問題から、エゴイズムと罪の問題に移行する」<sup>188</sup>といったことである。殊に各作品の後半で前景化される須永、一郎、「先生」が内面に抱えた問題を指したそれらの指摘、あるいはより狭義に「近代知識人の典型としての漱石の不安と絶望と孤独」<sup>189</sup>ともされるそれが三小説において追求された問題であったのだろうか。

須永、一郎、「先生」はいずれも自己の拠って立つべきものを求めて苦しみ続けていた。しかし、須永は自身の〈出生の秘密〉への疑いから身についた「物を誇大に考へ過したり、要らぬ僻みを起して見たりする弊」によってどこにも向かえず、一郎は知性の暴走ともいえる働きから直や家族への疑いを深め、「先生」はその強固な「倫理」から最終的には自殺に向かうことになる。このようにして三者は三様に不幸に陥っているのであるが、彼等に共通しているのは、各々の疑念や不信の中で疑う余地のない確かな〈生〉の立脚点を求めているという点である。「学理」や「理窟」、「倫理」等の「理」によって保障されたそれを見出すことこそ、漱石が「ヂスイリユージョン」に抗し得る人間の〈生〉への確信としてまだ見ぬ「不定」の「活動と発展」の先に期待していたもののひとつではなかったか。周囲からは「異常なる人間の機関が闇夜に運転する有様」であるかに見える知識人たちの言動は、その内に切実な希求を秘めている。

しかしながら、それだけが作品において模索されていたことではない。須永の話を聞くだけであった敬太郎、

自ら兄に相對しようとした二郎、「先生」の死後を生きる「私」と、それぞれに果たした役割は違っているが、いずれも悩める知識人の内面を照らしだす人物達として異なる〈生〉を生きている。それぞれが相手の苦悩と絶望の深まりからどのような「参考」を受けられるのか。そのように〈生〉の両面から否定の余地のない幸福への希望を見出すこと、それが〈後期三部作〉を通じて志向されていたように思われる。

しかし、『心』を終えた時点で明らかになったのは、「学理」や「理窟」、「倫理」では捉えきれない人間存在であり、そこに「理」が保証する静的な〈生〉の平穩が見出されることはなかった。「不愉快に充ちた生」とは、その人間探究の結果としてもたらされた認識であったと考えられる。病後の「始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じ」への憧憬と「ヂスイリユージョン」への解答追求として続けられた模索は、「先生」の「時勢遅れ」の実感と時代精神への殉死を以て閉じられた。「自分ぢや、一寸も不自然だとは思はないね」という作者の言葉<sup>10</sup>は、その自殺が「理」に適ったものとして描かれていたことを意味しており、奇しくも作品が導いた〈生〉の「行きづまり」であった。そして、『硝子戸の中』はそこから出発していた。

「不愉快に充ちた生」の実感と「死は生よりも貴い」という思いにとらわれていたという漱石は、書齋を訪ねてくる「私」に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり為たりする。(中略)そんなものを少し書きつけて見やうかと思ふ」として『硝子戸の中』を書き始めた。その構想が、自己の死生観への「半信半疑」と「時」の認識のために「不定」なものとなって作品に「活動と発達」を生じさせていたことは先にまとめた通りである。「私」による語りの中にその力の諸相を確かめ、「継続中」という認識方法を得た漱石は、「理」とは別に「時」という視点からも人間を捉える視点を獲得する。各々に強固な「理」を強いて自閉する須永や一郎、「先生」は、「凡てを癒す「時」の流れ」によつては救われなかった人々であった。「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひくくに抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか」というとき、三人がそれぞれに拘った自己のあり方こそが自らを破滅に至らしめる「爆裂弾」として見出される。そうであるならば、問題は〈死〉へと向かう〈生〉においていかにそれらから自由にあり続けるのかということであろう。次作『道草』は漱石の自伝的小説であり、その問いの実践と考えられる

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。



彼の身体には新らしく後に見捨てゐた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。(『道草』一)

作品は、洋行帰りの健三が妻や親族、かつての養父母達との関わりの中で苛立ち、孤独を深めていく姿を捉えるだけではなく、その内面の問題点も厳格に語り出している。右の冒頭部の引用で早くも健三の「遠い国」への嫌悪の裏に「誇りと満足」という死角が指摘されており、その後も「親類から変人扱い」(『道草』三)されていた健三の「教育が違ふんだから仕方がない」(同)という開き直りと妻の「やつぱり手前味噌よ」(同)という返答、そして、「氣の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかつた」(同)という限界が示されている。(後期三部作)で突き詰められていた知識人の「理」が、この作品においては他の人々と言葉と同じ地平で用いられている。その事實は、漱石がより広い視点から人間の(生)と捉え、描き出していったことを示している。ここに夏目漱石晩期文学の始まりが確かめられるのである。その転換の契機ともなった『硝子戸の中』執筆は、その分節点として位置付けられるだろう。

「思ひ出す事など」から『硝子戸の中』までの五作品は、いずれも始まりの構想や内容が「不定」であるか、当初の構想を越えた「不定」の中を書き進められた。随想においては自己の認識を更新しながら取り組むべき課題を見出し、小説では知識人とそれを眼差す人物達を通じて広く近代を生きる人間の問題として孤立した状況における(生)のあり方を追求していった。その過程で一作品としての構成上の問題や大小の齟齬、矛盾が残されていたが、それらは作品の「活動と発展」の何よりの証である。そのようにして齎された夏目漱石後期文学の展開は、その「不定」の軌跡の内に作者の試行と苦闘の内実をとどめているのである。

註

1 一九一〇（明治四三）年三月一日から六月一二日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載された。単行本は翌年一月に春陽堂から刊行されている。

2 一九一〇（明治四三）年三月二九日付鈴木三重吉宛書簡には「小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲労する故大抵毎日一回位で故魔化し居り候」とある。

3 一九一四年（大正三）三月二二日に「大阪朝日新聞」に掲載された談話「文士の生活」で「執筆する時間にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回づゝ書く。書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来さうに思ふ。一気呵成と云ふやうな書方はしない」と語っている。

4 執筆の途中で漱石が死去したため未完に終わった。一九一六（大正五）年五月二六日から十二月一四日にかけて「東京朝日新聞」へ、五月二五日から十二月二六日にかけては「大阪朝日新聞」の夕刊へ、それぞれ掲載された。単行本は翌年一月に岩波書店より刊行された。

5 高木文雄は『漱石文学の支柱』（審美社、一九七一年二月）で「思ひ出す事など」の「随想の連作」という形式は、『彼岸過迄』『行人』『心』に於いて実行乃至計画された、短篇を連作して一長編を構成する手法の出発点となっている」（傍点原文）といい、水川景三も「夏目漱石『思ひ出す事など』論——精神と肉体に於けるアイロニー——」（『日本文藝研究』第五五巻第二号、二〇〇三年三月）で「過去へと遡及する中で、現在がより鮮明に捉えられ、過去に経験したものの意味が明らかになるという構成上の特徴」が『彼岸過迄』以後の長篇小説の基本的なスタイルであると述べている。

6 漱石は一九一〇（明治四三）年一月二〇日に「思ひ出す事など」第一章の原稿を森田草平に送っている。引用は同日付の森田宛葉書。

7 一九一三（大正二）年一月一日付大谷繞石宛書簡

8 一九一三（大正二）年二月一六日付山本笑月宛書簡に「小生小説「帰つてから」と申す分済み次第あとの掲載せねばならず候」とあり、『行人』が「帰つてから」からで終了することが当初の構想であったことが示される。しかし、漱石の病気が悪化したために作品は中絶し、単行本化の際に書き添えるつもりであった残部が「塵勞」として新聞掲載されることになり、結果的にそれが作中で最長の編となった。

9 「東京朝日新聞」へは四日後の一九一一（明治四四）年四月一三日に掲載された。

10 この編集の意図は明らかにされていない。

<sup>1</sup><sub>1</sub> 入院日は一九一〇（明治四三）年六月一日である。「門」の執筆中に胃の症状が悪化し、脱稿後の六月六日より長与胃腸病院への通院を始め、一六日に入院が決定した。

<sup>1</sup><sub>2</sub> 脱稿日は不明である。

<sup>1</sup><sub>3</sub> 小宮豊隆『漱石の藝術』岩波書店、一九四二年一二月

<sup>1</sup><sub>4</sub> 小宮豊隆『夏目漱石』岩波書店、一九三八年七月

<sup>1</sup><sub>5</sub> 瀧澤克己『夏目漱石』三笠書房、一九四三年一月。引用は『瀧澤克己著作集』（法蔵館、一九七四年十二月）の本文から行った。

<sup>1</sup><sub>6</sub> 漱石門下生の中でも森田草平は『続夏目漱石』（養徳社、一九四三年一月）の中で「小宮君の云ふやうに、この大患を契機として、先生の心に『一大転機』が起つたなぞとは、何うしても考へられなかつた」と述べて小宮の説に賛同しなかつた。

<sup>1</sup><sub>7</sub> 江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、一九七四年一月。引用は江藤淳『夏目漱石』（東京ライフ社、一九五六年一月）の本文から行った。

<sup>1</sup><sub>8</sub> いわゆる（漱石神話）。漱石が修善寺の大患をきっかけに悟りの境地（「則天去私」の境地とも言われた）へと向かつたとする説。小宮豊隆を中心に、主に漱石と直接交流のあつた門下生等によって打ち立てられ、多くの論者がこれ従つた。

<sup>1</sup><sub>9</sub> 高木文雄『漱石文学の支柱』審美社、一九七一年一二月

<sup>2</sup><sub>0</sub> 佐藤泰正「（修善寺の大患）の意味―『思ひ出す事など』の語るもの」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三巻第六号、一九七八年五月）

<sup>2</sup><sub>1</sub> 一〇月二〇日の日記に『『思ひ出す事など』一を書き草平に送る』とある。

<sup>2</sup><sub>2</sub> 佐藤泰正「（修善寺の大患）の意味―『思ひ出す事など』の語るもの」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三巻第六号、一九七八年五月）

<sup>2</sup><sub>3</sub> 書簡の追伸に「病氣療養中執筆無用の御叱り敬承候然し医者許諾を得て時々寄稿は退屈凌ぎの一種の平生の娯楽位の処と御認めの上後勘弁にあづかり度候」とある。

<sup>2</sup><sub>4</sub> 書簡中に「原稿に就ての御注意難有候。他の人からも叱られ申候。然し無理は不致候。御案じ被下間敷候」と書

かかれている。

<sup>25</sup> 夏目鏡子述・松岡謙 筆録『漱石の思ひ出』（改造社、一九二八年三月）の中で妻の鏡子が当時の回想を行っている。

<sup>26</sup> 第九章には漢詩も俳句も添えられていない。

<sup>27</sup> 漱石が倒れた八月二日から九月七日までは妻鏡子が病状と来客の記録をつけていた。九月八日からは漱石自身が日記を再開し、初日には「別るゝや夢一筋の天の川」を初めとした三句を書き付けている。

<sup>28</sup> 「棺には菊抛げ入れよ有らん程」、「有る程の菊抛げ入れよ棺の中」、「ひたすらに石を除くれば春の水」の三句。

<sup>29</sup> 「思ひ出す事など」において、第四章の漢詩以外の詩は全て日記中の初案が推敲されたものである。

<sup>30</sup> Ward (L. F.). *Dynamic Sociology, or Applied Social Science*. 2 vols, New York: D. Appleton & Co. 1907.

<sup>31</sup> 「後記」（『漱石全集 第十二巻』岩波書店、一九九四年一月）によると、通常は一章分の文章量は原稿用紙七枚から九枚分であるが、第七章は一五枚分であった。そのため、欄外に上下回に区切るようにとの指示が書き込まれているという。

<sup>32</sup> 小宮豊隆『漱石の藝術』岩波書店、一九四二年一月

<sup>33</sup> 高木文雄『漱石文学の支柱』審美社、一九七一年一月

<sup>34</sup> 丹羽章『『思ひ出す事など』論』（『日本文藝研究』第三二巻第三号、一九八〇年九月）

<sup>35</sup> 一〇月一二日の日記にはその日の朝に妻鏡子から院長の死を知らされたということが書かれており、「驚くべし」の言葉の後ろに「逝く人に留まる人に来る雁」の一句が詠まれている。

<sup>36</sup> 『漱石俳句評釈』（明治書院、一九八三年一月）

<sup>37</sup> 一〇月二一日の日記に「〇妻来。昨夜よりウオードのダイナミック ソシオロジーを読む。」とある。

<sup>38</sup> 奥野政元『『思ひ出す事など』について（上）』（『活水日文』第三十三号一九九六年九月）

<sup>39</sup> 漱石が修善寺に出発したのは明治四三年八月六日である。「十一時の汽車で修善寺に向ふ」など、詳細が書き込まれている。

<sup>40</sup> 佐古純一郎『漱石詩集全釈』（明德出版、一九八三年一月）による読み下し文は以下の通りである。「縹緲たる玄黄の外／死生 交謝の時／寄託 冥然として去り／我が心 何所にか之く／帰来して 命根を覓むれど／杳窅と

して 竟に知り難し／孤愁 空しく夢を遶り／宛も簫瑟の悲しみを動かす／江山 秋已に老い／粥葉 髯將に衰えんとす／廓寥 天尚在り／高樹 独り技を余す／晚懷 此の如く澹く／風露 詩に入るに遅し」。

<sup>4 1</sup> 佐古純一郎『漱石詩集全釈』（明德出版、一九八三年一〇月）による通釈は以下の通りである。「遠くはるかな天地の果てにいたのは、生と死の間を行き来していた時である。その間、我が身をゆだねるところもなく、わたしの心の行き場もない。九死に一生を得て死の淵から生き返って、生命の根源のよって来たるところをさがし求めてみたが、はるかに奥深く結局わからずじまいであった。孤独な愁いは、虚しく夢につきまとい、まるで秋の物悲しさを募らせるように、わたしの心を動かすのである。山や河にも秋の気配は深まり、病の床にある私の髯は、さらに白さを加え、衰えるばかりである。広大な空はいつもと変わらないが、木木はその葉を落し枝を残すだけである。晩年の懐いはこのように淡く、秋の自然の趣をおもむろに詩に詠じられるようになった」。

<sup>4 2</sup> 吉川幸次郎『漱石詩注』岩波書店、一九六七年。引用は岩波文庫『漱石詩注』（二〇〇二年九月）の本文によった。

<sup>4 3</sup> 九月二六日の日記には「妻から失心中の事をきく。失心中にも血を吐いて妻の肩へ送れる由。其時間は三十分位注射十六筒といふ」、「余の見たる吐血は僅かに一部分なりしなり。成程夫では危険な筈である。余は今日迄あれ程の吐血で死ぬのは不思議と思ふてゐた」などと書かれている。

<sup>4 4</sup> 矢本貞幹は『夏目漱石—その英文学的側面—』（研究社、一九七一年九月）の中で漱石の経験主義の限界を指摘している。

<sup>4 5</sup> 一九一四（大正三）年一月一日付林原（当時岡田）耕三宛書簡

<sup>4 6</sup> 一九一二（明治四五）年三月二一日付中村古峽宛書簡。「小生一人感懐深き事あり」ともある。

<sup>4 7</sup> 「前週より一キロ四百増加ス」とある。

<sup>4 8</sup> 四八キロ五二五グラム（一貫Ⅱ一〇〇〇㉗3，75キログラム）。

<sup>4 9</sup> 漱石は一九一一（明治四四）年二月二六日に長与胃腸病院を退院した。なお、「思ひ出す事など」の連載終了は二月二〇日である。

<sup>5 0</sup> 夏目漱石『切抜帖より』春陽堂、明治四四年八月一六日

<sup>5 1</sup> 伊豆利彦「思ひ出す事など」論「『日本文学』第一九卷第五号、一九七〇年五月」

<sup>5 2</sup> 奥野政元「思ひ出す事など」について（上）「『活水日文』第三三三号一九九六年九月」

<sup>5 3</sup> 伊豆利彦「思ひ出す事など」論「『日本文学』第一九卷第五号、一九七〇年五月」

<sup>54</sup> 「大阪朝日新聞」は毎週日曜日に本紙とは別に「日曜附録」を発行していた。テーマは毎回変り、それに準じた文芸作品や報道記事、写真等が掲載された。

<sup>55</sup> 「病院の春」の他に、散文では如是閑の「春外春」や青々の「春」などが、また、短歌では花田比露思の「春」を題にした五首が掲載されている。その他にも英詩(Swinburne's chorus in Atalanta.)や作者未詳の漢詩と絵画も掲載された。なお、四月二日は「神戸共進會號」として、神戸市湊川埋立地で開催されていた貿易製品の共進会の様子が伝えられている。その開催期間は三月一五日から五月一三日までの六〇日間であった。また、四月一六日は「吉野」をテーマとした散文と韻文、写真や絵などが掲載された。

<sup>56</sup> 一九一一(明治四四)年一月二八日付長谷川是閑宛書簡に「愈々小説をかく事と相成候へども健康を氣遣ひ日に一日位の割にて亀の子の如く進行する積に候」とある。また、「彼岸過迄に就て」(「東京朝日新聞」一九一二(明治四五)年一月一日。「大阪朝日新聞」にも同日に掲載された)では、本来ならば「八月頃既に自分の小説を紙上に連載すべき筈だった」が、「大患後の身体を打通しに使ふのは何んなものだらうといふ親切な心配をして呉れる人が出て来たので、それを好い機会に、尚二ヶ月の暇を貪ぼることに取極めて貰ったのが原で、とう／＼其二ヶ月が過ぎ去った十月にも筆を採らず、十一十二もつい紙上へは杳たる有様で暮して仕舞った」と説明されている。なお、脱稿は同年四月二五日であり、同日付の橋口五葉宛書簡に「本日漸く小説を書き上げ候」と記されている。

<sup>57</sup> 「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に発表された。ともに一九一二(明治四五)年一月一日。

<sup>58</sup> 片岡良一『『彼岸過迄』の意義』(「文学」第五卷第一号、一九三七年一月)。

<sup>59</sup> 例えば小宮豊隆は『夏目漱石』(岩波書店、一九三八年七月)で『『彼岸過迄』が『須永の話』に来て初めて本筋に這入った感じを與え、且つ『須永の話』がある為に『彼岸過迄』が、初めて漱石の名に値ひする小説になつてゐる』と言ひ、宮井一郎も『漱石の世界』(講談社、一九六七年一〇月)の中で「全篇の半分を費して、敬太郎の探訪を描きながら、ほとんど何のためにそれほどの量をさいたのか判らない、という不毛な結果をもたらしている」と作品前半部を酷評している。一方で、山本芳明は『『彼岸過迄』から『須永の話』まで——漱石評価の転換期の分析』(「漱石研究」第一一号、一九九八年)で、同時代において敬太郎を中心とする作品前半も好評を得ていたことに着目し、その新聞小説的な通俗性や娯楽性が作者死後の門下生たちによる〈漱石神話〉生成の為に軽視されていたことを指摘している。

<sup>60</sup> 越智治雄「「彼岸過迄」のころ——一つのイメージ」（『文学』第三六卷第六号、一九六八年六月）。この時期に発表された代表的な論文として、都市性に着目した前田愛「謎としての都市——『彼岸過迄』をめぐる」（『現代詩手帖』第二〇巻第五号、一九七七年五月）や、洋杖の働きを考察した荒正人の「「彼岸過迄」論——妙な洋杖」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三三号第六号、一九七八年五月）が挙げられる。

<sup>61</sup> 秋山公男「『彼岸過迄』の方法（一）——読者本位と作者本位の共存——」（『立命館文学』第四一五—四一七号、一九八〇年三月）、「『彼岸過迄』の方法（二）——読者本位と作者本位の共存——」（『論究日本文学』第四三三号、一九八〇年五月）、「『彼岸過迄』の方法（三）——読者本位と作者本位の共存——」（『立命館文学』第四二二—四二三号、一九八〇年九月）

<sup>62</sup> 工藤京子「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」（『日本近代文学』第四六号、一九九二年五月）

<sup>63</sup> 佐藤泉「『彼岸過迄』——物語の物語批判——」（『青山学院女子短期大学紀要』第五〇号、一九九六年十二月）

<sup>64</sup> 玉井敬之「『彼岸過迄』論——空想から現実へ——」（『帝塚山学院短期大学研究年報』第二三三号、一九七五年—二月）

<sup>65</sup> 山田有策「「彼岸過迄」敬太郎をめぐる」（『別冊国文学 夏目漱石必携』一九八二年五月）

<sup>66</sup> 玉井敬之「『彼岸過迄』論——空想から現実へ——」（『帝塚山学院短期大学研究年報』第二三三号、一九七五年—二月）

<sup>67</sup> 作品内時間については高木文雄が「「ルナパークの後から」の読み方——夏目漱石『彼岸過迄』——」（『金城国文』第五四号、一九七八年二月）において、当時の路面電車の開通状況の調査から「停留所」（二十五）で敬太郎が巢鴨行の電車に乗った時点が一九一一年（明治四四）年一月二日以降であることを明らかにしている。ここから各編の時間を割り出すことができる。また、〈高等遊民〉の問題に関しては町田祐一『近代日本と「高等遊民」——社会問題化する知識青年層——』（吉川弘文館、二〇一〇年十二月）に詳しい。『日本帝国文部省第三十九年報』（文部省、一九一三年一〇月）によると、敬太郎と須永が卒業した東京大学法科の一九一一年の卒業生三八四名の中で「職業未定又は不詳の者」が一四八名とほぼ四割を占めている。

<sup>68</sup> しかし、先行研究においては、作品連載中に書かれた笹川臨風宛書簡（一九一二（明治四五）年二月一—三日付）での「小説をやめて高等遊民として存在する工夫色々勘考中に候へども名案もなく苦しがり居候」という言葉への注目から、漱石の内的な問題として取り扱われ、敬太郎の形象としてよりはむしろ須永や松本のそれとして論じられてきた。代表的なものとして伊豆利彦の「漱石は「高等遊民」が流行語のようになったのを機会に、この言葉を使って、漱石自身の主題である「時代閉塞の現状」における知識人の問題を「高等遊民」の問題として展開した」という指摘（「夏目漱石「彼岸過迄」の「高等遊民」」（『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第四一巻第一—三号、一九九〇年三月））があるが、その前後にも高木文雄『漱石の道程』（審美社、一九六六年十二月）、熊坂敦子『夏目漱石の研究』（桜楓社、一九七三年三月）、長島裕子『夏目漱石の文学』（桜楓社、一九八四年一月）、山下航正「「彼岸

過迄」論——〈導入〉としての高等遊民——」（近代文学試論）第三九号、二〇〇一年二月）などがある。

<sup>6</sup> 米田利昭「高等遊民とは何か——『彼岸過迄』を読む」（『日本文学』三八卷二号、一九八九年二月）

<sup>7</sup> 藤澤るり「『彼岸過迄』論——対象化する領域、された領域」（『国語と国文学』第八七卷第七号、二〇一〇年七月）

<sup>7</sup> 工藤京子「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」（『日本近代文学』第四六号、一九九二年五月）

<sup>7</sup> 玉井敬之「『彼岸過迄』論——空想から現実へ——」（『帝塚山学院短期大学研究年報』第二三号、一九七五年一月）。玉井は敬太郎が「遠眼鏡」を捨てて「洋杖」を持つことの象徴的な意味を、空想から現実への転換と捉えている。

<sup>7</sup> 前田愛「謎としての都市——『彼岸過迄』をめぐる——」（『現代詩手帖』第二〇巻第五号、一九七七年五月）。前田の指摘は最終的に「都市空間が作り出す変幻きわまりない仮象性」として結論されている。

<sup>7</sup> 越智治雄「『彼岸過迄』のころ——一つのイメージ」（『文学』第三六巻第六号、一九六八年六月）

<sup>7</sup> 安藤恭子「『東京朝日新聞』から見た『彼岸過迄』」（『漱石研究』第一号、一九九八年一月）

<sup>7</sup> 勝田和學「『彼岸過迄』の構造」（『文学論藻』第六二号、一九八八年二月）

<sup>7</sup> 「断片五六A」には「不思議（ひな）子ノ死」、「子供ノ死、夫婦ノ和解」、「子供ノ死 freethinkerノsuperstitiousニナル」とあり、「五六B」にも「子供ノ死」、「葬、火葬場、骨拾」の記載がある。

<sup>7</sup> 「断片五六A」に「子供ノ死 freethinkerノsuperstitiousニナル」とある。

<sup>7</sup> 深江浩「『彼岸過迄』について」（『日本文学』第一九巻第五号、一九七〇年五月）

<sup>8</sup> 辰野隆「作品論」（『漱石全集 第九巻』角川書店、一九六一年四月）

<sup>8</sup> 片岡良一「『彼岸過迄』の意義」（『文学』第五巻第一号、一九三七年一月）

<sup>8</sup> 平岡敏夫「『彼岸過迄』論——青年と運命——」（『文学』第三九巻第一二号、一九七一年一月）

<sup>8</sup> 町田祐一「『近代日本と「高等遊民」——社会問題化する知識青年層——』吉川弘文館、二〇一〇年一月。なお、官吏任用の制度的変遷と法科との関係は『東京大学百年史 通史一』（東京大学出版会、一九八四年三月）の「官吏任用制と法科大学」（第三編—第三章—第三節）に詳しい。

<sup>8</sup> 一九一一（明治四四）年八月一三日に明石公会堂で開催された朝日講演会の演題の一つとして行われた。その筆録が同時期の朝日講演会を集めた『朝日講演集』（朝日新聞合資会社、一九一一年一月）へ収められ、後に漱石名義の講演集『社会と自分』（実業之日本社、一九一三年五月）に再録された。『社会と自分』には、同時期に行われた三講演（「現代日本の開化」、「中味と形式」、「文芸と道徳」）のほかに「作家の態度」（一九〇八（明治四一）年二月一五日、第一回朝日講演会、青年会館）と「文芸の哲学的基础」（一九〇七（明治四〇）年四月二〇日、東京美術学校文学会）が収められている。

<sup>8</sup> 赤羽学「歪められた親子関係の超克——漱石の『彼岸過迄』の提示する問題——」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』合冊八号、二〇〇二年三月）

<sup>8</sup> 高木文雄「須永市蔵」（『国文学 解釈と教材の研究』第一三巻第三巻、一九六八年二月）。須永の「改良」を一



時的なものであったとする見方に対して、秋山公男は「『彼岸過迄』試論―「松本の話」の機能と時間構造」（『国語と国文学』第五八巻第二号、一九八一年二月）の中で小説内時間を越えた作者の「須永の救出」の意図を読み取っている。

<sup>87</sup> 敬太郎によると須永と千代子とは「五つか六つ違」（「須永の話」一）である。

<sup>88</sup> 工藤京子「変容する聴き手―「彼岸過迄」の敬太郎」（『日本近代文学』第四二巻第九号、一九九三年九月）

<sup>89</sup> 玉井敬之「『彼岸過迄』論―空想から現実へ―」（『研究年報』帝塚山学院短期大学、第二三号、一九七五年一月）。

本論でもたびたび引用している工藤京子の論考のほか、山田有策「『彼岸過迄』敬太郎をめぐる」（『別冊 夏目漱石必携』学燈社、一九八二年五月）等も敬太郎の成長について論じている。

<sup>90</sup> 荻原桂子『彼岸過迄』論（『日本文藝研究』第四五巻第一号一九九三年四月）。荻原は「上滑りな冒険譚や探偵に夢中になっていた敬太郎は、「雨の降る日」で、人間存在の根源に横たわる真実に目覚め」て、「人間の、真の魂の救済の物語に関わろうとするのである。これは、取りも直さず敬太郎の内面的深化の現れである」と述べている。

<sup>91</sup> 工藤京子「変容する聴き手―「彼岸過迄」の敬太郎」（『日本近代文学』第四二巻第九号、一九九三年九月）

<sup>92</sup> その中でも金戸清高は「夏目漱石『彼岸過迄』論―短編連鎖の意義―」（『九州ルーテル学院大学紀要』第二七号、二〇〇〇年七月）で作品がむしろ「脈絡のない無数の断片」によって「人間というものが如何様にでも見れる」という、いわば人間存在の「不把握性」を示していると積極的な評価を与えている。

<sup>93</sup> 『社会と自分』（実業之日本社、一九一三年五月）

<sup>94</sup> 講演ではこのような状態を解決すべく読書が推奨されている。「元来文学上の書物は専門的の述作ではない多く一般の人間に共通な点について批評なり叙述なり試みたものであるから、職業の如何に拘はらず、階級の如何に拘はらず赤裸々の人間を赤裸々に結び付けて、さうして凡ての他の墻壁を打破するものでありますから、吾人が人間として相互に結び付くためには最も立派で又最も弊の少ない機関だと思はれるのです」。また、「道楽と職業」は漱石が同年六月二日に長野県高島小学校で行った講演「我輩の観た「職業」」をもとにしてるとみられ、内容的に酷似している。

<sup>95</sup> 休載日の違いから「東京朝日新聞」は一九一三（大正二）年一月一日に連載が終了した。

<sup>96</sup> 『行人』の構成に関する漱石の言及は現存していないが、次作『心』の予告で漱石は「今度は」と書いている。この「今度は」を『行人』を排する意味で捉えるのか否かで論者により見解が異なる。

<sup>97</sup> 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年十一月

<sup>98</sup> 伊豆利彦「『行人』論の前提」（『日本文学』第一八巻第三号、一九六九年三月）

<sup>99</sup> 重松泰雄「『行人』における（二郎の愛）——伊豆説の検討を通して——」（『解釈と鑑賞』第三五巻第九号、一九七〇年九月）

100 柄谷行人は「漱石のアレゴリー」（「群像」臨時増刊号、一九九二年五月）において「『行人』は「日からの手紙」の部分と明らかに断絶している」とし、「一方に、個々人の意志を超えた諸関係（構造）があり、他方に、そうした諸関係に還元できない実存がある。私は、そのどちらも認めないわけにはいかない。しかも、それらをつなぐ道はない」と述べている。

101 「行人続稿に就て」（「東京朝日新聞」一九一三（大正二年九月一日）、「大阪朝日新聞」同一七日）

102 一九一（明治四四）年に書き始められたとみられる「断片五六A」には「結婚——表慶館」、「断片五六B」にも「婚礼」、「明石、和歌山」、「大阪 病院」などの記述がある。

103 瀬沼茂樹『夏目漱石』東大出版会、一九六二年三月

104 千石七郎『漱石の病跡——病氣と作品から——』勁草書房、一九六三年八月

105 橋本佳「『行人』について」（「国語と国文学」第四四卷第七号、一九六七年六月）

106 片岡良一『夏目漱石の作品』八厚文社、一九五五年八月

107 「報告」（三十七）では「下女だか仲働きだか分らない地位に甘んじた」とされる。

108 勝田和學「『行人』覚え書」（「文学論藻」第六八号、一九九四年二月）

109 勝田は「帰つてから」で岡田が「実は伴われて来ようと思つたのですかね」と言いつつも兼を貞の結婚式に連れて来なかつた理由を「お兼と二郎が共有した秘密を岡田が知つたから」と推測し、「お兼を二郎に近づけないこと、これが岡田の真意ではないのか」と述べている。

110 越智治雄「長野一郎・二郎」（「国文学 鑑賞と教材の研究」第一三卷第三号、一九六八年二月）

111 飯田祐子「『行人』論——「次男」であること、「子供」であること——」（「日本近代文学」第四六号、一九九二年五月）

112 石原千秋「次男坊の記号学」（「国文学 解釈と鑑賞」第五三卷第八号、一九八八年八月）

113 藤沢るり「『行人』論・言葉の変容」（「国語と国文学」第五九卷第一〇号、一九八二年一〇月）

114 藤澤るりの指摘以降、二郎は基本的に長野家による〈家〉や〈家族〉の抑圧構造に無自覚な人物と捉えられてきた。これに対して飯田祐子は「『行人』論——「次男」であること——」（「日本近代文学」第四六号、一九九二年五月）で二郎を「家」の抑圧性に十二分に意識的な語り手」として捉え、〈家〉や〈家族〉の要請を「私の都合」へとずらしながら「長野家という「家」そのものを崩壊させ」るまでの過程を論じている。

115 例えば木村功の「『行人』論——一郎・お直の形象と二郎のへ語りについて——」（「国語と国文学」第七四卷第二号、一九九七年二月）では端的に「一郎とお直の夫婦関係は、対等な人間関係ではなく、慣習と明治民法（明治三十一年七月施行）によって支配／被支配の関係が構造化されたものとして考えなければならぬ」と述べられている。

116 戸田善久「『行人』論——「信」と「疑」の葛藤」（『宇大国語論究』第一三三号、二〇〇二年二月）  
117 須田喜代次「『行人』論（1）——新時代と「長野家」——」（『大妻国文』第二〇号一九八九年三月）。論中には「明治の世にあつて、一つの理想的な夢を実現しえた家であつたはずの「長野家」は、こうして今、周囲に押し寄せる新しい時代の波のなかで次第にその存在基盤を見失ひ、崩壊の危機に瀕している。二郎はその明治期の「古い歴史を有つた家」崩壊のドラマを、新しい時代を生きようとする聞き手に語ろうとするのだ」とまとめられている。

118 山田晃「『行人』異議」（『講座夏目漱石』3『有斐閣、一九八一年一月』）

119 松下浩幸「狂気と恋愛の技術——『行人』論——」（『漱石研究』第一五号、二〇〇二年一〇月）

120 三浦雅士「恋愛と家父長制——『行人』ノート」（『漱石研究』第一五号、二〇〇二年一〇月）

121 池上玲子「正統ゆえの異端——『行人』論」（『成城国文学』第二〇号、二〇〇四年三月）

122 水村美苗「見合いか恋愛か——夏目漱石『行人』論【上】」（『批評空間』第一号、一九九一年四月）

123 秋山公男「『行人』——その主題と構造——（二）」（『立命館文学』第四三七、四三八合併号、一九八一年二月）

124 仲秀和「『行人論』——一郎を巡って——」（『大阪音楽大学研究紀要』第一五号、一九七七年二月）

125 小泉浩一郎「相對世界の発見——『行人』を起点として——」（『国文学』解釈と教材の研究』第二三卷第六号、一九七八年五月）

126 坂本育雄「『行人』論」（『鶴見大学紀要』第一部『国語国文学編』第二三号一九八六年三月）

127 玉井敬之『漱石研究への道』桜楓社、一九八八年六月

128 越智治雄「『彼岸過迄』のころ——一つのイメージ」（『文学』第三六卷第六号、一九六八年六月）

129 二紙での休載日の違いから「東京朝日新聞」は八月一日に連載を終了している。

130 「東京朝日新聞」（一九一四（大正三）年四月一六日）と「大阪朝日新聞」（同一七日）に掲載された「『心』予告」には、「今度は短篇をいくつか書いて見たいと思ひます。その一つ一つには違つた名をつけて行く積ですが予告の必要上全体の題が御入用かとも存じます故それを「心」と致して置きます」とある。第一編は後に「『心』と改められた「先生の遺書」であるが、第二編以降の題名や構想については不明である。

131 単行本の「序」（『心』岩波書店、一九一四（大正三）年三月）にその経緯が説明されている。作品名については単行本の函・表表紙・扉では「心」、背表紙・本文冒頭・本文末尾・柱では「こゝろ」と表記されており、統一されていない。自序文には「箱、表紙、見返し、扉及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた」とあるが、ここでの表記が「心」とされているため、本論でもこれを採用した。

132 仲秀和『『こゝろ』研究史』和泉書院、二〇〇七年三月

133 「序」(『心』岩波書店、一九一四(大正三)年三月)

134 玉井敬之「『こゝろ』をめぐって」(『夏目漱石必携』学燈社、一九六七年四月)では「厳密にいつて五つの死がえがかれている。明治天皇の死、乃木大将の死、父の死、Kの死、先生の死。(中略)これらの死は、それぞれ時と所において別々におこりながら、あるかたちをそなえていることで共通し、またある一時代の刻印をおびていることで共通している。つまり『こゝろ』の世界では、この五つの死が分かちがたく結ばれているのである」とされている。

135 松本寛の「『こゝろ』論——(自分の世界)と(他者の世界)のはざままで——」(「歯車」第三四号、一九八二年八月)には「私」という青年は、単に「先生」の物語の語り手というだけでなく、無意識のうちに「先生」の自殺を促した重要な作用者であった」という指摘がある。石原千秋も「『こゝろ』のオイディプス——反転する語り——」(「成城国文」第一号、一九八五年三月)で「青年から見れば二人の関係は期待と失望の繰り返しであったが、先生から見れば、誘いと拒否の繰り返しなのである。……先生の執拗に繰り返し謎かけが、青年に対する先生の誘いかけに他ならない」という見方を示している。

136 先行研究では「先生」の手紙が「妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞って置いて下さい」(百十)と結ばれており、静が「其悲劇の何んなに先生に取つて見惨なものであるか(中略)今でもそれを知らずにゐる」(十二)にも関わらず手記を執筆・公表している問題に関する言及も見られる。また、その「私」について静とともに生きていると読み取った小森陽一の「『こゝろ』を生成する『心臓』」(「成城国文」第一号、一九八五年三月)の論もあるが、それら作品外部の空白を積極的に埋めることは本論の趣旨に沿わないので特に言及しない。

137 片岡良一は「先生と私」と「両親と私」の二章にせつかく複線を伏せながら、こうしてそれを十分生かしきれなかったことが、はじめに書いたようにこの後になお「私」を中心とした一・二章を予定していたのではないかなどと想像させることにもなるのである」と述べている。(『夏目漱石の作品』厚文社、一九五五年八月)

138 石原千秋「『こゝろ』のオイディプス——反転する語り——」(「成城国文」第一号、一九八五年三月)

139 静が先生との婚約とKの自殺に関係があることにどれだけ気づいていたのか。しかし、この点については作中から確定することは困難であり、むしろ伏線のまま発展しなかった問題と捉えた方が良いと考える。少なくとも、現在の形からは、水川隆夫の「関係があることにうすうす気づいていたと考えるのが自然である。しかし、夫との間にあるわだかまりを解消するために、事の真相を知りたいという気持ちとともに、真相を知ることが恐ろしいという矛盾した気持ちがあり、自分に対しても、すべてに気が付かないふりをし続けた」という説(『漱石「こゝろ」の謎』彩流社、一九八九年十月)を越えて解釈することは難しく思われる。

140 江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、一九七四年一月

141 玉井敬之「『こゝろ』をめぐって」(『夏目漱石論』桜楓社、一九七六年一〇月)

142 宮澤健太郎『漱石の文体』洋々社、一九九七年九月

143 江口渙は「モデル小説 漱石山房の人々」(「人物評論」第一巻第五号、一九三三年七月)で漱石に対して「自殺そのものが不自然ですわね」と伝えたところ、「自分ぢや、一寸も不自然だとは思はないね。無論、もう一ぺん読み返へして見なけりやはつきりしたこといへないけど……」と返答されたと回想している。「先生」の死が作者には自然なものであったことが読み取れるが、猪野謙二(「漱石における自我の自覚と崩壊——『心』を中心として」(「世界」第三六号、一九四八年一月))が「われわれの現実喪失の孤独感といふものは、それだけで決して、一つの積極的な行為としての自殺の要因にはなり得ない」と述べ、正宗白鳥(「漱石とイブセン」(「人間」第五巻第一二号、一九五〇年一月))もまた「漱石の描いた『先生』の自殺には現実味の乏しさを覚えるのである。まさか、こんな事で人間は自殺の決行はすまいと思はれる」と述べるなど、「先生」の自殺を巡る疑義は早期の研究から提出されている。荒正人は『漱石文学全集 第七巻』(集英社、一九七一年一月)の解説で「親友を策略によって自殺に追い詰めたという認識にもとづく贖罪と明治天皇の死去、乃木大将夫妻の殉死に触発され、明治の精神に殉死するという願望が入り混じっている。(中略)両者はまったく関係がない。関係のない行為を強いて関係づけたところに、『ころ』は、文学的な実験があった」と捉え、柄谷行人(『畏怖する人間』冬樹社、一九八二年四月)はその原因の不可解性を「先生がなぜ死ななければならぬのか」ということは、恐らく作品そのものからは理解できないはずだ。(中略)先生の自殺が作品の構成的必然としてでなく、作者の願望のあらわれとしてあるということである」としている。

144 「先生」の自殺の理由に深く関わっていると目される「明治の精神」であるが、「自己の行為に関わる一切の責任に対して、たとえそれがどのような状況の下で成されようと、あくまで「己れの責任」をとるという心のあり方」とする三浦泰正(「漱石の『心』における一つの問題」(「日本文学」一九六九年五月))の説から「ついに実体をもつて呼びうるなものでもあるまい。ただ彼がそこに歩み来った「深い背景」と「根底」のいつさいを、死を賭けて誠実に語りつくすという行為そのものこそが、「明治の精神」の名にたるかをわずかにあかししうるものではなかったか」とする佐藤泰正(「夏目漱石『ころ』」(「国文学 解釈と鑑賞」第三七巻第四—七巻、一九七二年四月—七月))の説まで、大きな振り幅を持って論じられ得る言葉とされている。石崎等は「編年史・夏目漱石」(「国文学 解釈と教材の研究」第一六巻第一二号、一九七一年九月)は「作品そのものから帰納してみようとするとなかなか解明できない」と述べ、「シンポジウム『ころ』をめぐって」(「国文学 解釈と鑑賞」第四七巻第一号、一九八二年

一二月)ではシンポジウム内での谷沢永一の発言として「明治の精神」、あるいは乃木大将の殉死とか、ああいう最後の結びのセリフというもの、これは私はいっさい信用したくありません」とある。作品や作者にどのような見方で向かうのかにより解釈が変貌する語であり、統一された見解は見られない。また、内田道雄は『夏目漱石事典』(学燈社、一九九二年四月)の用語解説において静や「私」の視点をふまえて「作者漱石の明治の終焉に向けた感慨はやはり多角的であったと考えなければならぬ。少なくとも「明治の精神」はそれに殉ずる底の単一的な理念ではなく、それぞれに時代を生きる人々の批判の眼にさらされるべき一つの仮説であったとすべきだろう」と警句している。

145 徳永光展『夏目漱石『心』論』風間書房、二〇〇八年三月

146 平岡敏夫『漱石序説』塙書房、一九七六年一〇月

147 作品内時間については「奥さん」が日清戦争で夫を喪った「未亡人」(六十四)であるとの記述や、当時の教育制度などからある程度の推測が可能である。『心』における年代確定の研究としては、例えば近藤八重子の説(「己に充ちた生——『こゝろ』——」(『漱石を“読む”——私を探す旅——』鏡の会、一九九六年九月)では、「先生」が故郷を離れて下宿を始めたのが一八九六(明治二九)年で、そこから手紙を書いた一九一二(大正元)年までには一六年間の時間的な空白があった事になる。

148 竹盛天雄「故郷」を清算した男と「故郷」から追放された男の運命——初出稿『心 先生の遺書』(一〇百十)を読む・第三稿——」(『国文学 解釈と教材の研究』第四二巻第六号、一九九七年五月)

149 小森陽一『世紀末の預言者・夏目漱石』講談社、一九九九年三月

150 佐藤彰『漱石はどうやって先生を殺したか?』新風舎、一九九八年二月

151 漱石は連載終了後の一九一四(大正三)年一月二五日学習院で行った講演「私の個人主義」の中で権力や金力の乱用によって他者の自由を抑圧する事のないように説いている。

152 徳永光展『夏目漱石『心』論』風間書房、二〇〇八年三月

153 水川隆夫『夏目漱石「こゝろ」を読みなおす』平凡社、二〇〇五年八月)

154 中村三春『係争中の主体——漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月

155 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む——新しい女と古い男——』中央公論社、一九九五年三月

156 山崎正和「淋しい人間」(『ユリイカ』第九巻第一二号、一九七七年一月)

157 熊坂敦子「こころ」(『国文学 解釈と教材の研究』第一五巻第四号、一九七〇年四月)にはKの自殺の原因として「第一は、精神的に精進する事を第一義に考えていたのに、心に隙が入ったことによる自己への絶望、第二は、

お嬢さんへの愛が全くひとりよがりなものであったことを実証されたことによる自信喪失、第三は、先生との友情

が裏切られたことによる人間不信等が考えられる」とまとめている。

158 相原邦和『漱石文学 その表現と思想』塙書房、一九八〇年七月

159 越智治雄『漱石試論』角川書店、一九七一年六月

160 佐藤彰『漱石はどうやって先生を殺したか?』、新風舎、一九九八年二月

161 仲秀和『『こゝろ』研究史』和泉書院、二〇〇七年三月

162 小森陽一「『こころ』を生成する「心臓」」(『成城国文』第一号、一九八五年三月)

163 江口渙「モデル小説 漱石山房の人々」(『人物評論』第一卷第五号、一九三三年七月)

164 一九一四(大正三)年一月二七日付木村恒宛書簡

165 この時に第三章の末尾に新聞掲載後に寄せられた読者の反応に対する礼文が添えられた

166 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年一月。引用は『決定版 夏目漱石』(新潮社、一九七九年一月)の本文から行った。

167 越智治雄「硝子戸の内外」『漱石私論』角川書店、一九七一年六月

168 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」(『文学』一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月)

169 柴市郎『硝子戸の中』、その可能性」(『漱石研究』第四号、一九九五年五月)

170 一九一五(大正四)年一月九日付の山本松之助宛書簡に「去冬阪朝から新年に何かといふ注文があつたのを七草過迄延はして貰ふ事に相談が出来ました」とある。

171 「木曜会の思ひ出」(『漱石全集月報』第一三三号、岩波書店、一九二九年三月)

172 早坂禮吾「漱石研究の一資料——『硝子戸の中』の「女性」」(『文学』第一二卷第一〇号、一九四四年一〇月)に詳しい。

173 佐藤真一。朝日新聞社編集局長。漱石の一九一三(大正三)年一〇月三十一日の日記によると、葬式は一月一日であった。

174 越智治雄「硝子戸の内外」『漱石私論』角川書店、一九七一年六月

175 「断片六三A」、「断片六三B」(『漱石全集 第二十卷』岩波書店、一九九六年七月)

176 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」(『文学』一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月)

177 漱石の日記(一九一〇(明治四三)年一月一日)および「思ひ出す事など」(七の下)では「有る程の菊抛

げ入れよ棺の中」。

178 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」(「文学」一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月)に詳しい。

179 一九一四(大正三)年二月一五日付の畔柳芥舟宛書簡に『硝子戸の中』を昨日切り上げた」とある。

180 「断片六五」(『漱石全集 第二十巻』岩波書店、一九九六年七月)

181 一九一三(大正二)年一二月三〇日付岩崎太郎次宛書簡

182 一九一五(大正四)年六月三日から九月一四日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に掲載され、同年一〇月に岩波書店より単行本として刊行された。

183 一九一〇(明治四三)年九月二一日の日記には「生き返るわれ嬉しさよ菊の秋」の俳句が書きつけられている。

184 夏目鏡子述・松岡譲筆『漱石の思ひ出』改造社、一九二八年三月

185 『社会と自分』(実業之日本社、一九一三年五月)

186 一九一一(明治四四)年八月一三日「道楽と職業」(明石公会堂)、一五日「現代日本の開化」(和歌山県会議事堂)、一七日「中味と形式」(堺市立高等女学校講堂)、一八日「文芸と道徳」(大阪中之島公会堂)。

187 『増補版 夏目漱石論』河出書房、一九八三年六月

188 高橋和巳「夏目漱石と近代文学の確立」(「中央公論」第八〇巻第一〇号、一九六五年一〇月)

189 瀬沼茂樹『夏目漱石』東大出版会、一九六二年三月

190 江口渙「モデル小説 漱石山房の人々」(「人物評論」第一巻第五号、一九三三年七月)

## 参考文献

『朝日講演集』朝日新聞合資会社、一九一一年一月

『日本帝国文部省第三十九年報』文部省、一九一三年一〇月

寺田寅彦・松根豊次郎・小宮豊隆『漱石俳句研究』岩波書店、一九二四年七月

夏目鏡子述・松岡譲筆『漱石の思ひ出』改造社、一九二八年三月

正宗白鳥「夏目漱石論」(「中央公論」第四三巻第六号、一九二八年六月)

江口渙「モデル小説 漱石山房の人々」(「人物評論」第一巻第五号、一九三三年七月)

片岡良一『彼岸過迄』の意義」(「文学」第五巻第一号、一九三七年一月)



- 小宮豊隆『夏目漱石』岩波書店、一九三八年七月
- 森田草平『夏目漱石』甲鳥書林、一九四二年九月
- 小宮豊隆『漱石の藝術』岩波書店、一九四二年一月
- 瀧澤克己『夏目漱石』三笠書房、一九四三年一月
- 森田草平『続夏目漱石』養徳社、一九四三年一月
- 早坂禮吾「漱石研究の一資料―『硝子戸の中』の一女性」(『文学』第一二卷第一〇号、一九四四年一〇月)
- 岡崎義恵『漱石と微笑』生活社、一九四六年三月
- 猪野謙二「漱石における自我の自覚と崩壊―『心』を中心として―」(『世界』第三六号、一九四八年一二月)
- 荒正人『『思い出す事など』』(『文学』第一八卷第一号、一九五〇年一月)
- 正宗白鳥(『漱石とイプセン』(『人間』第五卷第一二号、一九五〇年一二月))
- 片岡良一『夏目漱石の作品』八厚文社、一九五五年八月
- 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年一月
- 辰野隆「作品論」(『漱石全集 第九卷』角川書店、一九六一年四月)
- 瀬沼茂樹『夏目漱石』東大出版会、一九六二年三月
- 熊坂敦子『『硝子戸の中』試論』(『日本女子大学紀要』第一二号、一九六三年三月)
- 実方清「『彼岸過迄』の世界」(『日本文藝研究』第一四卷第三号、一九六三年五月)
- 千石七郎『漱石の病跡―病氣と作品から―』勁草書房、一九六三年八月
- 高橋和巳「夏目漱石と近代文学の確立」(『中央公論』第八〇卷第一〇号、一九六五年一〇月)
- 玉井敬之『『こゝろ』をめぐって』(『夏目漱石必携』学燈社、一九六七年四月)
- 高木文雄「須永市蔵」(『国文学 解釈と教材の研究』第一三卷第三卷、一九六八年二月)
- 高木文雄『漱石の道程』審美社、一九六六年一二月
- 橋本佳『『行人』について』(『国語と国文学』第四四卷第七号、一九六七年六月)
- 岡崎義恵『漱石と則天去私』宝文館出版、一九六八年一二月
- 伊豆利彦『『行人』論の前提』(『日本文学』第一八卷第三号、一九六九年三月)

佐藤泰正「漱石と神——その序説・「硝子戸の中」をめぐって——」

（『国文学 解釈と教材の研究』第一四巻第五号、一九六九年四月）

橋浦兵一「彼岸過迄」（『国文学 解釈と教材の研究』第一四巻第五号、一九六九年四月）

遠藤祐「行人」（『国文学 解釈と教材の研究』第一四巻第五号、一九六九年四月）

三浦泰正「漱石の『心』における一つの問題」（『日本文学』第一三巻五号、一九六九年五月）

佐々木雅発「夏目漱石——「行人」をめぐって——」（『国文学 解釈と鑑賞』第三四巻第一二号、一九六九年一月）

熊坂敦子「こころ」（『国文学 解釈と教材の研究』第一五巻第四号、一九七〇年四月）

山本勝正「漱石の「行人」の世界」（『日本文藝研究』第二二巻第一—二号、一九七〇年四月）

伊豆利彦「思ひ出す事など」論」（『日本文学』第一九巻第五号、一九七〇年五月）

深江浩「彼岸過迄」について」（『日本文学』第一九巻第五号、一九七〇年五月）

荒正人『評伝夏目漱石』実業之日本社、一九七〇年七月

瀬沼茂樹『夏目漱石』東京大学出版会、一九七〇年七月

重松泰雄『『行人』における〈二郎の愛〉——伊豆説の検討を通して——』

（『解釈と鑑賞』第三五巻第九号、一九七〇年九月）

高木文雄『漱石文学の支柱』審美社、一九七一年一月

越智治雄『漱石私論』角川書店、一九七一年六月

石崎等「編年史・夏目漱石」（『国文学 解釈と教材の研究』第一六巻第一二号、一九七一年九月）

中野新治「漱石「彼岸過迄」の世界——モノロ・グ的生存の世界——」

「日本文藝研究」第二三巻第三号、一九七一年九月）

水谷昭夫「「行人」論」（『日本文藝研究』第二三巻第三号、一九七一年九月）

高橋美智子「漱石「行人」のテーマ」（『文芸研究』第六八号、一九七一年一月）

平岡敏夫「「彼岸過迄」論——青年と運命——」（『文学』第三九巻第一二号、一九七一年一月）

高木文雄『漱石文学の支柱』審美社、一九七一年一月

平岡敏夫「「彼岸過迄」論——青年と運命——」（『文学』第三九巻第一二号、一九七一年一月）

- 佐野金之助「大患と漱石——『思ひ出す事など』『彼岸過迄』——」（『国文学攷』第五九号、一九七二年四月）
- 平岡敏夫「『行人』その周辺」（『国語と国文学』第四九卷第四号、一九七二年四月）
- 佐藤泰正（『夏目漱石』こゝろ）（『国文学 解釈と鑑賞』第三七卷第四—七卷、一九七二年四—七月）
- 吉沢伝三郎「『彼岸過迄』と『行人』——通心の不可能性と想像的視点——」（『実存主義』第六〇号、一九七二年六月）
- 熊坂敦子『夏目漱石の研究』桜楓社、一九七三年三月
- 北山正迪「漱石と禅——『行人』と『こゝろ』を中心に——」（『国文学 解釈と教材の研究』第一八卷第五号、一九七三年四月）
- 佐野金之助「『行人』論——『漱石的』なものとはなにか——」（『近代文学試論』第一一号、一九七三年六月）
- 小坂晋『漱石の愛と文学』講談社、一九七四年三月
- 大岡昇平「『彼岸過迄』をめぐって」（『展望』第一八八号、一九七四年八月）
- 江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、一九七四年一月
- 佐藤泰正「^自然Vのなかの漱石」（『国文学 解釈と教材の研究』第一九卷第三卷、一九七四年一月）
- 佐藤泰正「『思ひ出す事など』一面——漱石・修善寺大患の意味を巡って——」（『日本文学研究』第一〇号、一九七四年一月）
- 佐々木雅発「アイロニーの回廊——『思ひ出す事など』」（『国文学 解釈と教材の研究』第十九卷第十三号、一九七四年一月）
- 樋野憲子「硝子戸の中の世界」（『国文学 解釈と教材の研究』第一九卷第一三三号、一九七四年一月）
- 和田謹吾「ひな子抄」（『国文学 解釈と教材の研究』第一九卷第一三三号、一九七四年一月）
- 大久保純一郎『漱石とその思想』荒竹出版、一九七四年一月
- 瀧澤克己『瀧澤克己著作集』法蔵館、一九七四年一月
- 米田利昭「『彼岸過迄』をめぐって」（『宇都宮大学教育学部紀要 第一〇部』第二四号、一九七四年一月）
- 和田利男『漱石の詩と俳句』めるまーく社、一九七四年一月

- 佐藤正英 「漱石における自我の様態——「行人」の場合——」（『実存主義』第七二号、一九七五年六月）
- 佐藤泰正 『思ひ出す事など』から『彼岸過迄』へ——漱石後期文学の出發——」（『文学』第四三卷第一二号、一九七五年一二月）
- 玉井敬之 『『彼岸過迄』論——空想から現実へ——』（『帝塚山学院短期大学研究年報』第二三三号、一九七五年一二月）
- 伊沢元美 「漱石「行人」の構成」（『鶴見大学紀要』第一部 国語国文学編』第一三三号、一九七六年一月）
- 駒尺喜美 『硝子戸の中』にみる矛盾の併呑——一体二様の態度について——」（内田道雄・久保田芳太郎 編『作品論 夏目漱石』双文社、一九七六年九月）
- 平岡敏夫 『漱石序説』塙書房、一九七六年一〇月
- 玉井敬之 『夏目漱石論』、桜楓社、一九七六年一〇月
- 石崎等 「行人」（『国文学 解釈と教材の研究』第二二卷第一四号、一九七六年一月）
- 石崎等 「彼岸過迄」（『国文学 解釈と教材の研究』第二二卷第一四号、一九七六年一月）
- 佐藤勝 「作家の論理と小説の論理——「行人」論——」（『国文学 解釈と教材の研究』第二二卷第一四号、一九七六年一月）
- 仲秀和 『『行人論』——一郎を巡って——』（『大阪音楽大学研究紀要』第一五号、一九七七年二月）
- 志保みはる 「漱石「行人」の世界」（『日本文藝研究』第二九卷第一号、一九七七年三月）
- 前田愛 「謎としての都市——『彼岸過迄』をめぐる——」（『現代詩手帖』第二〇巻第五号、一九七七年五月）
- 崎正和 「淋しい人間」（『ユリイカ』第九卷第一二号、一九七七年一月）
- 荒正人 「『彼岸過迄』論——妙な洋杖——」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三三号第六号、一九七八年五月）
- 佐藤泰正 「『修善寺の大患』の意味——『思ひ出す事など』の語るもの」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三三卷第六号、一九七八年五月）
- 高木文雄 「ルナパークの後から」の読み方——夏目漱石『彼岸過迄』——」（『金城国文』第五四号、一九七八年二月）
- 小泉浩一郎 「相対世界の発見——『行人』を起点として——」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三三卷第六号、一九七八年五月）

- 小泉浩一郎「相對世界の發見——「行人」を起点として——」  
（『国文学 解釈と教材の研究』第二三卷第六号、一九七八年五月）
- 江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、一九七九年一月  
山田輝彦「彼岸過迄」論——敬太郎の冒険——」  
（『福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編』第二九号、一九七九年一月）
- 秋山公男『彼岸過迄』の方法（一）——読者本位と作者本位の共存——」  
（『立命館文学』第四一五—四一七号、一九八〇年三月）
- 秋山公男『彼岸過迄』の方法（二）——読者本位と作者本位の共存——」  
（『論究日本文学』第四三号、一九八〇年五月）
- 相原邦和『漱石文学 その表現と思想』塙書房、一九八〇年七月
- 秋山公男『彼岸過迄』の方法（三）——読者本位と作者本位の共存——」  
（『立命館文学』第四二二—四二三号、一九八〇年九月）
- 丹羽章『思ひ出す事など』論（『日本文藝研究』第三二卷第三号、一九八〇年九月）
- 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」  
（『文学』一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月）
- 佐藤泰正『彼岸過迄』——その主題と方法（『日本文学研究』第一六号、一九八〇年一月）
- 秋山公男『彼岸過迄』試論——「松本の話」の機能と時間構造」  
（『国語と国文学』第五八卷第二号、一九八一年二月）
- 橋浦洋志「彼岸過迄」考——須永の視座——」  
（『茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術』第三〇号、一九八一年三月）
- 佐々木充『彼岸過迄』質疑（『日本近代文学』第二八号、一九八一年九月）
- 富岡信子「行人」から「道草」へ——後期漱石の人間認識を追う——」  
（『女子大國文』第九〇号、一九八一年一月）
- 仲秀和『硝子戸の中』論——『道草』とのかかわりを巡って——」

- (「日本文藝研究」第三一号第一卷、一九八一年三月)
- 助川徳是 「行人」「こころ」「道草」「明暗」の連続と非連続——作品内世界の明暗について——  
(「国文学 解釈と鑑賞」第四六卷第六号、一九八一年六月)
- 安藤久美子 「彼岸過迄」の構造——須永の意識構造と作品構造」(「文学・語学」第九二号、一九八一年一〇月)
- 上出恵子 「漱石「行人」論」(「日本文芸学」第一七号、一九八一年一〇月)
- 酒井英行 「彼岸過迄」の構成」(「国文学研究」第七五号、一九八一年一〇月)
- 水谷昭夫 「硝子戸の中」の憂愁」『講座 夏目漱石 第三卷』有斐閣、一九八一年一月
- 山田晃 『行人』異議」(『講座 夏目漱石 3』有斐閣、一九八一年一月)
- 秋山公男 『行人』——その主題と構造——(二)  
(「立命館文学」第四三七、四三八合併号、一九八一年一二月)
- 上出恵子 「夏目漱石『彼岸過迄』序論」(「活水論文集 日本文学科編」第二五号、一九八二年三月)
- 坂本浩 「彼岸過迄」の世界」(「日本文芸学」第一八号、一九八二年三月)
- 柄谷行人 『畏怖する人間』冬樹社、一九八二年四月
- 『別冊 夏目漱石必携』学燈社、一九八二年五月
- 山田有策 「彼岸過迄」敬太郎をめぐって」(「別冊 国文学 夏目漱石必携」一九八二年五月)
- 藤沢るり 「行人」論・言葉の変容」(「国語と国文学」第五九卷第一〇号、一九八二年一〇月)
- 「シンポジウム『こころ』をめぐって」(「国文学 解釈と鑑賞」第四七卷第一号、一九八二年一月)
- 松本寛 『こころ』論——〈自分の世界〉と〈他者の世界〉のはざままで——  
(「歯車」第三四号、一九八二年八月)
- 坂本浩 「彼岸過迄」の位置——後期作品への序曲——」(「成城文藝」第一〇一号、一九八二年九月)
- 山本勝正 「漱石「彼岸過迄」論——運命のアイロニ・と愛の不透明性をめぐって——」  
(「広島女学院大学論集」第三二号、一九八二年一二月)
- 桶谷秀昭 『増補版 夏目漱石論』河出書房、一九八三年六月
- 小室善弘 『漱石俳句評釈』明治書院、一九八三年一月

- 村上嘉隆『漱石文学の人間像』哲書房、一九八三年四月
- 堀井哲夫「漱石小品考(二)」——『思ひ出す事など』——(「女子大國文」第九三号一九八三年六月)
- 戸田由美「僧籍後期文芸の内的世界——『硝子戸の中』を中心として」  
(「日本文藝研究」第三五卷第二号、一九八三年六月)
- 中村宏『漱石漢詩の世界』第一書房、一九八三年九月
- 佐古純一郎『漱石詩集全釈』二本松学舎大学出版、一九八三年一〇月
- 立川昭二郎「彼岸過迄」私論(「広島修大論集 人文編」第二四卷第二号、一九八三年一二月)
- 立川昭二郎「彼岸過迄」の市蔵——近代知識人の自我像——(「日本文芸学」第二〇号、一九八三年一二月)
- 堀井哲夫「漱石小品考(三)」——『硝子戸の中』——(「女子大國文」第九四号、一九八三年一二月)
- 『東京大学百年史 通史一』東京大学出版会、一九八四年三月
- 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』集英社、一九八四年六月
- 中井康行「漱石「行人」再論」(「日本文藝研究」第三六卷第三号、一九八四年九月)
- 西脇良三「思ひ出す事など」『硝子戸の中』の世界(「愛知学院大学論叢」第三二卷第一号、一九八四年九月)
- 武蔵野次郎『夏目漱石 物語と史蹟をたずねて』成美堂出版、一九八四年一月
- 石原千秋『こゝろ』のオイディプス——反転する語り——(「成城國文」第一号、一九八五年三月)
- 今西順吉「漱石と仏教『思ひ出す事など』を中心に」(「理想」第六二二号、一九八五年三月)
- 小森陽一『こゝろ』を生成する『心臓』(「成城國文」第一号、一九八五年三月)
- 赤井恵子「彼岸過迄」考(「熊本短大論集」第三五卷第三号、一九八五年五月)
- 佐藤裕子「夏目漱石「行人」の世界」(「日本文藝研究」第三七卷第二号、一九八五年七月)
- 井出大『漱石漢詩の研究』銀河書房、一九八五年一月
- 大竹雅則『硝子戸の中』の微笑(「論及」第八号、一九八六年二月)
- 坂本育雄「「行人」論」(「鶴見大学紀要 第一部 国語国文学編」第二三号一九八六年三月)
- 荻原桂子「漱石「行人」の世界」(「日本文藝研究」第三八卷第二号、一九八六年七月)
- 岡三郎『夏目漱石研究 第二卷』国文社、一九八六年一二月

- 大野淳一「岸過迄」(『国文学 解釈と教材の研究』第三二卷第六号、一九八七年五月)
- 蓮實重彦『夏目漱石論』青土社、一九八七年五月
- 山田輝彦「行人」(『国文学 解釈と教材の研究』第三二卷第六号、一九八七年五月)
- 秋山公男『漱石文学論考 後期作品の方法と構造』桜楓社、一九八七年一月
- 秦恒平『『先生』はコキユではない』(『ちくま』第一八九号、一九八七年一月)
- 相原和邦『漱石文学の研究 ―表現を軸として―』明治書院、一九八八年二月
- 武田充啓「夏目漱石『行人』」の独身者」(『研究紀要』第二四号、一九八八年三月)
- 宮崎隆広「漱石『こゝろ』論―(命根)の病」(『活水論文集』第三一号、一九八八年三月)
- 勝田和學『『彼岸過迄』の構造』(『文学論藻』第六二号、一九八八年二月)
- 小林一郎『夏目漱石の研究』至文堂、一九八八年三月
- 福井慎二「漱石『行人』論―関係性としての自己と絶対の境地Vの構造―」  
(『弘前大学近代文学研究誌』第二号、一九八八年三月)
- 萩原佳子『『硝子戸の中』の世界』(『日本文藝研究』第四〇号第一卷、一九八八年四月)
- 大竹雅則『夏目漱石論攷』桜楓社、一九八八年五月
- 大岡昇平『小説夏目漱石』筑摩書房一九八八年五月
- 玉井敬之『漱石研究への道』桜楓社、一九八八年六月
- 石原千秋「次男坊の記号学」(『国文学 解釈と鑑賞』第五三卷第八号、一九八八年八月)
- 大野淳一『『硝子戸の中』覚書』(『国文学 解釈と鑑賞』第五八卷第三号、一九八八年八月)
- 石崎等『夏目漱石・作家とその時代』有精堂出版、一九八八年一月
- 重松泰雄「^趣向Vとしての須永市蔵―『彼岸過迄』管見―」(『文学』第五七卷第一号、一九八九年一月)
- 米田利昭「高等遊民とは何か―『彼岸過迄』を読む」(『日本文学』三八卷二号、一九八九年二月)
- 浅田隆「夏目漱石『行人』論ノート」(『奈良大学紀要』第一七号、一九八九年三月)
- 須田喜代次「『行人』論(1)―新時代と「長野家」―」(『大妻国文』第二〇号一九八九年三月)
- 武田充啓「夏目漱石『彼岸過迄』論の前提」(『研究紀要』第二五号、一九八九年三月)



- 金戸清高「漱石「行人」の世界」(『日本文藝研究』第四一卷第一号、一九八九年四月)
- 福井慎二「漱石『彼岸過迄』論——時間と自己の構造」(『弘前大学近代文学研究誌』第三号、一九八九年六月)
- 川隆夫『「こゝろ」の謎』彩流社、一九八九年一〇月
- 志保みはる『『思ひ出す事など』論』(『日本文藝研究』第四一卷第三、四号、一九九〇年一月(合併号))
- 伊豆利彦「夏目漱石「彼岸過迄」の「高等遊民」」
- (『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第四一卷第一—三号、一九九〇年三月)
- 加藤富一『『彼岸過迄』の構想と愛の姿』(『古屋女子大学紀要 人文・社会編』第三六号、一九九〇年三月)
- 三好行雄 編『別冊國文學 夏目漱石事典』學燈社、一九九〇年七月
- 相原和邦『『硝子戸の中』』(『国文学 解釈と鑑賞』第五五卷第九号、一九九〇年九月)
- 安藤久美子『『彼岸過迄』』(『国文学 解釈と鑑賞』第五五卷第九号、一九九〇年九月)
- 渡部芳紀『『行人』に描かれた「男」と「女」』(『国文学 解釈と鑑賞』第五五卷第九号、一九九〇年九月)
- 中村直子「彼岸過迄——その関係性の物語——」(『東京女子大学紀要論集』第四一卷第二号、一九九一年三月)
- 石原千秋「語ることの物語——夏目漱石「彼岸過迄」——」
- (『国文学 解釈と鑑賞』第五六卷第四号、一九九一年四月)
- 水村美苗「見合いか恋愛か 夏目漱石『行人』論[上]」(『批評空間』第一号、一九九一年四月)
- 『漱石作品論集成 第一〇巻 こゝろ』桜楓社、一九九一年四月
- 藤田健治『漱石 その軌跡と系譜』紀伊国屋書店、一九九一年六月
- 『漱石作品論集成 第八巻 彼岸過迄』桜楓社、一九九一年八月
- 中村完「『彼岸過迄』——言葉と意識——」(『成城文藝』第一三六号、一九九一年九月)
- 三好行雄 編『夏目漱石事典』學燈社、一九九二年四月
- 須田喜代次「『彼岸過迄』論——聴き手としての敬太郎——」(『言語と文芸』第一〇八号、一九九二年四月)
- 飯田祐子『『行人』論——「次男」であること、「子供」であること——」
- (『日本近代文学』第四六号、一九九二年五月)
- 工藤京子「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」(『日本近代文学』第四六号、一九九二年五月)

- 柄谷行人「漱石のアレゴリー」(「群像」臨時増刊号、一九九二年五月)
- 石原千秋「『行人』：階級のある言葉」(「国文学 解釈と教材の研究」第三七巻第五号、一九九二年五月)
- 稲垣政行「夏目漱石『行人』——その全体像——」(「稿本近代文学」第一七号、一九九二年七月)
- 柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、一九九二年九月
- 姜熙鈴『『硝子戸の中』論——(時)をめぐって——』(「日本文学研究」第二八号、一九九二年一月)
- 平川祐弘・鶴田欣也編『漱石の『こゝろ』——どう読むか、どう読まれてきたか——』、新曜社、一九九二年一月
- 山尾仁子「夏目漱石『行人』論——構想の変化について」(「叙説」第一九号、一九九二年一月)
- 海老井英次「『彼岸過迄』年立考——「雨の降る日」の位置付けの試論——」  
(「文学論輯」第三八号、一九九三年三月)
- 佐藤裕子『『彼岸過迄』論——苦悩の果てに立ち現われてくるもの——』  
(「フェリス女学院大学文学部紀要」第二八号、一九九三年三月)
- 荻原桂子『『彼岸過迄』論(「日本文藝研究」第四五巻第一号一九九三年四月)
- 山下浩『本文の生態学——漱石・鷗外・芥川——』日本エディタースクール出版、一九九三年六月
- 関谷由美子『『彼岸過迄』論——ダンディズムの構造——』(「日本文学」第四二巻第九号、一九九三年一月)
- 勝田和學『『行人』覚え書』(「文学論藻」第六八号、一九九四年二月)
- 山極圭司「漱石文学における友——『彼岸過迄』と『行人』——」(「国文白百合」第二五号、一九九四年三月)
- 宇佐美毅「夏目漱石『行人』」(「国文学 解釈と鑑賞」第五八巻第四号、一九九三年四月)
- 佐々木啓「『門』と『彼岸過迄』——その創作方法——」(「北見大学論集」第三二号、一九九四年一月)
- 浜田志保子「漱石の「オリーフィア」・逆転の構図——『行人』・悲哀、狂、濛のテーマ」  
(「経営情報学部論集」第七巻第一号、一九九四年一月)
- 戸田由美「漱石『行人』試論：人をかえるエッセンスとは何か」(「日本文芸学」第三一号、一九九四年一月)
- 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む——新しい女と古い男——』中央公論社、一九九五年三月
- 松下浩幸「『彼岸過迄』論——三角関係と「男」らしさ——」(「文芸研究」第七三号、一九九五年三月)

「漱石研究」第四号、一九九五年五月

小森陽一『漱石を読みなおす』、筑摩書房、一九九五年六月

熊田真由美「『片付け』られた〈子供〉・夏目漱石『行人』論」（「論樹」第九号、一九九五年九月）

青柳達雄「漱石『彼岸過迄』を読む——構造と素材と名前の迷宮——」（「言語と文芸」第一一二号、一九九五年九月）

「漱石研究」第五号、一九九五年一一月

奥野政元『思ひ出す事など』について（上）（「活水日文」第三三号一九九六年九月）

近藤八重子「己に充ちた生——『こゝろ』——」

（『漱石を“読む”——私を探す旅——』鏡の会、一九九六年九月）

佐藤泉『彼岸過迄』——物語の物語批判——」（青山学院女子短期大学紀要」第五〇号、一九九六年一一月）

木村功「『行人』論——一郎・お直の形象と二郎のへ語りについて——」

（「国語と国文学」第七四卷第二号、一九九七年二月）

奥野政元『思ひ出す事など』について（下）（「活水日文」第三四号一九九七年三月）

石原千秋『反転する漱石』、青土社、一九九七年一一月

「漱石研究」第六号、一九九六年五月

近藤八重子「己に充ちた生——『こゝろ』——」（鏡の会『漱石を“読む”——私を探す旅——』、一九九六年九月）

増満圭子「『須永』の怯え——夏目漱石『彼岸過迄』における一考察」（「語文論叢」第二四号、一九九七年一月）

木村功「『行人』論：一郎・お直の形象と二郎のへ語りについて」

（「国語と国文学」第七四卷第二号、一九九七年二月）

忠田真祈子「夏目漱石における自己治癒・自己実現の過程——創造における女性との関わりを中心に——」

（「障害児教育研究紀要」第一九号、一九九七年二月）

重松泰雄『漱石 その新たな地平』おうふう、一九九七年五月

竹盛天雄「『故郷』を清算した男と『故郷』から追放された男の運命——初出稿『心 先生の遺書』（一〇百十）を

読む・第三稿——」（「国文学 解釈と教材の研究」第四二卷第六号、一九九七年五月）

崔明淑『硝子戸の中』論——『戸の外』から眺める漱石像と『母の声』——

(『国文学 解釈と鑑賞』第六二巻第六号、一九九七年六月)

宮澤健太郎『漱石の文体』洋々社、一九九七年九月

中山和子『行人』論：家族の解体から浮上するもの(『漱石研究』第九号、一九九七年十一月)

武田勝彦『漱石の東京——彼岸過迄』を中心に——(『教養諸学研究』第一〇三号、一九九七年十二月)

佐藤彰『漱石はどうやって先生を殺したか?』新風舎、一九九八年二月

小田乗子『夏目漱石論——行人』についての一考察——(『樟蔭国文学』第三五号、一九九八年三月)

水川景三『夏目漱石『行人』論——自我と愛のリアリズム——』

(『日本文藝研究』第四九巻第四号、一九九八年三月) 『漱石研究』第四号、一九九八年十一月

安藤恭子『東京朝日新聞』から見た『彼岸過迄』(『漱石研究』第一一号、一九九八年十一月)

山本芳明『彼岸過迄』から『須永の話』まで：漱石評価の転換期の分析(『漱石研究』第一一号、一九九八年十一月)

小森陽一『世紀末の預言者・夏目漱石』、講談社、一九九九年三月

半藤一利『漱石俳句探偵帖』角川書店、一九九九年一月

江藤淳『漱石とその時代 第五部』新潮社、一九九九年十二月

宮澤健太郎『硝子戸の中』の文体論的考察——一人称を軸にして——

(『白百合女子大学研究紀要』第三五号、一九九九年十二月)

大内和子『彼岸過迄』における中断する物語——短篇サイクル志向の長篇小説(二)——

(『いわき明星大学人文学部研究紀要』第一三号、二〇〇〇年三月)

武田勝彦『漱石の東京——行人』と『硝子戸の中』を中心に——

「教養諸学研究」第一〇八号、二〇〇〇年三月)

李相福『夏目漱石『行人』論——お直の内面の苦悩を巡って——』

(『日本文学論集』第二四号、二〇〇〇年三月)

槐島知明『硝子戸の中』——構造の解釈から——(『国文学 解釈と鑑賞』第六六巻第三号、二〇〇一年三月)

- 佐藤裕子『漱石解説―（語り）の構造』和泉書院、二〇〇〇年五月
- 金戸清高「夏目漱石『彼岸過迄』論―短編連鎖の意義―」  
 （「九州ルーテル学院大学紀要」第二十七号、二〇〇〇年七月）
- 金戸清高「夏目漱石『彼岸過迄』論―短編連鎖の意義―」  
 （「紀要 visio : research reports」第二十七号、二〇〇〇年七月）
- 岡村あいこ「夏目漱石『行人』論―一郎の存在の曖昧さについて―」  
 （「広島女学院大学国語国文学誌」第三〇号、二〇〇〇年十二月）
- 吉川仁子「夏目漱石『彼岸過迄』論―敬太郎の位置について―」（「叙説」第二八号、二〇〇〇年十二月）
- 上田正行「『彼岸過迄』―一つの可能性―」（「国文学 解釈と鑑賞」第六六卷第三号、二〇〇一年三月）
- 関谷一郎「『行人』―（二）対（一）の物語」（「国文学 解釈と鑑賞」第六六卷第三号、二〇〇一年三月）
- 佐藤泰正『漱石を読む』、笠間書院、二〇〇一年、四月
- 上田博・國末泰平・田邊匡・瀧本和成 編『大正文学史』二〇〇一年十一月
- 山下航正「『彼岸過迄』論―（導入）としての高等遊民―」  
 （「近代文学試論」第三九号、二〇〇一年十二月）
- 佐藤泉『漱石 片付かない（近代）』日本放送出版協会、二〇〇二年一月
- 戸田善久「『行人』論―「信」と「疑」の葛藤」（「宇大国語論究」第一三三号、二〇〇二年二月）
- 山口洋子「夏目漱石『彼岸過迄』論―子どもの死を手掛りにして―」  
 （「日本文学研究」第三六号、二〇〇一年二月）
- 花崎育代「『行人』を語る作家たち―芥川と大岡昇平―」（「創造と思考」第一〇号、二〇〇〇年三月）
- 赤羽学「歪められた親子関係の超克―漱石の『彼岸過迄』の提示する問題―」  
 （「安田女子大学大学院文学研究科紀要」合冊八号、二〇〇二年三月）
- 金戸清高『『彼岸過迄』の人間関係―「不思議」を起点として―』（「山口国文」第二四号、二〇〇一年三月）
- 「漱石研究」第一五号、二〇〇二年一月
- 細川正義「夏目漱石『こゝろ』論―漱石文芸における『こゝろ』の意義」

- (「人文論究」第五二卷第三号、二〇〇二年一〇月)
- 江頭肇「夏目漱石『行人』論——権力と愛——」(「比較文化研究」第三〇号、二〇〇二年一二月)
- 水川景三「夏目漱石『思ひ出す事など』論——精神と肉体に於けるアイロニー——」
- (「日本文藝研究」第五五卷第二号、二〇〇三年三月)
- 佐藤泰正「漱石探究——『こゝろ』から何が見えて来るか」(「日本文学研究」第三八号、二〇〇三年一〇月)
- 市川浩昭「『銀の匙』(初出稿)から「硝子戸の中」へ——自己を語るといふ行為——」
- (「學苑」第七五九号、二〇〇三年一二月)
- 池上玲子「正統ゆえの異端——『行人』論」(「成城国文学」第二〇号、二〇〇四年三月)
- 野網摩利子「夏目漱石『行人』における、心理の時間形式」(「言語文化学会論集」第二二号、二〇〇四年六月)
- 増満圭子『夏目漱石論——漱石文学における「意識」——』和泉書院、二〇〇四年六月
- 荻原桂子「絶対という狂気——漱石『行人』——」
- (「九州女子大学紀要 人文・社会科学編」第四一卷第一号、二〇〇四年九月)
- 吉田達志「知識人の自己証明：夏目漱石『こゝろ』論」(「静岡近代文学」第一九号、二〇〇四年一二月)
- 廣瀬裕作『彼岸過迄』における偶然性の問題」(「九大日文」第五号、二〇〇四年一二月)
- 仲秀和「漱石の「超自然」(その二)神秘家としての一面」(「阪神近代文学研究」第六号、二〇〇五年三月)
- 中山知子『硝子戸の中』——ジェンダーと女の救済力」
- (「国文学 解釈と鑑賞」第七〇卷第六号、二〇〇五年六月)
- 中村三春「物語は、終わらない——」反小説」としての『彼岸過迄』——」
- (「国文学 解釈と鑑賞」第七〇号第六号、二〇〇五年六月)
- 赤井恵子『『行人』の二郎：まず耳から始まる』(「国文学 解釈と鑑賞」第七〇卷第六号、二〇〇五年六月)
- 水川隆夫『夏目漱石「こゝろ」を読みなおす』、平凡社、二〇〇五年八月
- 窪川真紀子「絶対の境地」をめぐる時間——夏目漱石『行人』最終章「塵勞」に着目して——」
- (「文藝と批評」第一〇巻第二号、二〇〇五年一二月)
- 諸岡知徳「遅延された結末……新聞連載小説としての『彼岸過迄』」

- (「神戸山手短期大学紀要」第四八号、二〇〇五年十二月)
- 山口洋子 『硝子戸の中』論——生と死の葛藤をめぐって——  
(「日本文学研究」第四一号、二〇〇六年一月)
- 中村三春 『係争中の主体——漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月
- 長山靖生 「見られる探偵、欲望する告白者——『彼岸過迄』における「謎」の在処——」  
(「国文学 解釈と教材の研究」第五一卷第三号、二〇〇六年三月)
- 荻原桂子 「夏目漱石と西田幾多郎における東洋と西洋——『行人』と『善の研究』——」  
(「九州女子大学紀要・人文・社会科学編」第四三卷第一号、二〇〇六年九月)
- 松本常彦 「漱石と禅——『行人』の場合——」(「語文研究」第一〇二号、二〇〇六年十二月)
- 仲秀和 『『こゝろ』研究史』和泉書房、二〇〇七年三月
- 亀山佳明 『夏目漱石と個人主義』新曜社、二〇〇八年二月
- 徳永光展 『夏目漱石『心』論』風間書房、二〇〇八年三月
- 大坪利彦 「夏目漱石と小説の「植民地」——『彼岸過迄』を中心に——」  
(「熊本大学社会文化研究」第七号、二〇〇九年三月)
- 伊藤徹 「『砂の中で狂う泥鰌』——夏目漱石『行人』の語り——」  
(「関西大学東西学術研究所紀要」第四二二号、二〇〇九年四月)
- 伊藤徹 「過去への眼差——『硝子戸の中』の頃の夏目漱石——」(「日本哲学史研究」第六号二〇〇九年一月)
- 井内美由起 「『白い襟巻き』と『白いフラ子ル』——『彼岸過迄』論——」  
(「日本近代文学」第八一号、二〇〇九年一月)
- 瀬崎圭二 「海辺のホモソーシャリティ、あるいはその亀裂について——夏目漱石「行人」を中心に——」  
(「近代文学試論」第四七号、二〇〇九年十二月)
- 瀬崎圭二 「海辺を「考へずに観る」ということ——夏目漱石「彼岸過迄」をめぐって——」  
(「国文学攷」二〇五号、二〇一〇年三月)
- 仲秀和 「漱石の「超自然」(その②)『彼岸過迄』から『明暗』まで」(「日本文藝学」第四六号二〇一〇年三月)

清真人「漱石とニーチェ——『行人』における「所有」の問題を手掛かりに——」

（『渾沌』第七号、二〇一〇年六月）

藤澤るり『『彼岸過迄』論——対象化する領域、された領域』（『国語と国文学』第八七卷第七号、二〇一〇年七月）

町田祐一『近代日本と「高等遊民」——社会問題化する知識青年層——』吉川弘文館、二〇一〇年一二月

北島咲江『『硝子張の箱』の外へ——『彼岸過迄』論』

（『近代文学 第二次 研究と資料』第五号、二〇一一年三月）

後藤彩「夏目漱石『行人』論——結婚をめぐる三世代の幻想——」

（『フェリス女学院大学日文学院紀要』第一八号、二〇一一年三月）

土屋慶文「欲望の接合点——『彼岸過迄』論」（『近代文学 第二次 研究と資料』第五号、二〇一一年三月）

橋元志保「夏目漱石『行人』論：貞操の内実」（『教養・文化論集』第六卷第二号、二〇一一年三月）

林未織「探偵のディスクール——『彼岸過迄』における青年たちの物語——」

（『奈良教育大学国文 研究と教育』第三四号、二〇一一年三月）

小森陽一「3・11と夏目漱石——『現代日本の開化』から一〇〇年——」

（『すばる』第三三卷第一号、二〇一一年一月）

橋元志保「夏目漱石『硝子戸の中』を読む——死生観を視座として——」

（『教養・文化論集』第七卷第一号、二〇一二年三月）

吉田詩織「語り手の資格——夏目漱石『彼岸過迄』論——」

（『近代文学 第二次 研究と資料』第六号、二〇一二年三月）

井内美由起「洋杖（ステッキ）」と「傘」——『彼岸過迄』論——」

（『文学・語学』第二〇三号、二〇一二年七月）

橋元志保「夏目漱石『こゝろ』論……遺書を視座として」（『教養・文化論集』第八卷第一号、二〇一三年三月）

佐藤良太「夏目漱石『行人』論——一郎の〈救い〉と〈神〉——」

（『キリスト教文藝』第二九号、二〇一三年七月）

伊藤かおり「期待される男たち——夏目漱石『彼岸過迄』論——」



〔日本近代文学〕第八九号、二〇一三年一月

佐藤深雪 『彼岸過迄』論——短編連作小説の枠について——〔広島国際研究〕第一九号、二〇一三年一月

夏目漱石 『行人』論——愛とエゴイズム——〔富大比較文学〕第六号、二〇一三年一月

伊藤かおり 「侵食する語りの起源——夏目漱石『彼岸過迄』論」

〔学術研究：人文科学・社会科学編〕第六二号、二〇一四年三月

夏目漱石 『こころ』をどう読むか』河出書房新社、二〇一四年五月

参考文献と併せて、本論文の元となった拙論を左に挙げておく。

### 第三章第二節

「夏目漱石『行人』論——長野一郎の軌跡——」〔日本文藝学〕第四九号、二〇一三年三月

### 第五章

「夏目漱石『硝子戸の中』論」〔立命館文学〕第六四〇号、二〇一四年一月

## 後記

本論文を閉じるに際して、これまでお世話になった方々への謝辞を述べさせて頂きます。

まず、日本文学研究の背景のない私を大学院で受け入れて頂き、博士課程前期課程から長くご指導して下さいました立命館大学の瀧本和成教授に心よりの感謝を申し上げます。偏屈で学びが遅く、つまらないミスを繰り返す私にも辛抱強く指導して下さいたからこそ今の私があるのだと思います。先生と、先生の元集まる大学院生たちと一緒に切磋琢磨できたことがこの上もない喜びでした。先生のように、おおらかでいて鋭さも併せ持つ研究ができるよう、これからも堅実に歩んで参ります。

また、入学以来、花崎育代教授にも多くを学ばせて頂きました。先生から教えられた精緻な読みの追求は、この論文を書き上げるうえではなくてはならないものであったと実感しています。中川成美教授は、自分の関心だけに閉じこもりがちであった私に、より広い視野での研究の必要性を自覚させて下さいました。そして、田口道昭教授は、韻文という私にとっては新しく未知の領域での研究の手がかりを与えて頂きました。

私にとって、学会参加も非常に刺激的なものであり、そこで研究の喜びと厳しさとを実感できました。殊に日本文芸学会と国際啄木学会では多くの人と出会い、様々な教えを受け、励まされたことが大きな財産となりました。とりわけ日本文芸学会現会長の細川正義先生と国際啄木学会第六代会長の望月善次先生からはいつも力強い激励の言葉を頂き、その研究に向かう純粋な態度の中から多くを学ばせて頂きました。

大学では多くの大学院生との出会いがありました。それぞれに研究に対する強い思いを持った人たちとの語らいはとても有意義なものであり、研究に押しつぶされてしまいそうな自分を救ってくれました。留学生たちは私に世界への目を開かせてくれました。これまでに出会えたすべての先輩・同輩・後輩に感謝しています。

そして、大学院へ入学し、それまでのつながりがいくつも途切れていく中で、今でも関係を継いでくれている三人、親しみを込めて「地震研究所」、「システムエンジニア」、「介護士」と呼ばせて頂く彼等にも感謝しきれません。

最後に、いつも寡黙に私を見守り続けてくれた父と、何があっても笑って許してくれた母に万感の思いを捧げます。

二〇一五年一月二〇日

深町博史